

KUMAKUBO SHISEI

熊久保遺跡第10次発掘調査報告書  
—松本平西山山麓における縄文時代中期の集落址—



2003. 3

長野県東筑摩郡朝日村教育委員会

朝日村文化財調査報告書第1集

## 熊久保遺跡第10次発掘調査報告書

—松本平西山山麓における縄文時代中期の集落址—

2003年3月

長野県東筑摩郡朝日村教育委員会

## 図版2



3. 人面装飾付土器（把手部）出土状況（上面より）

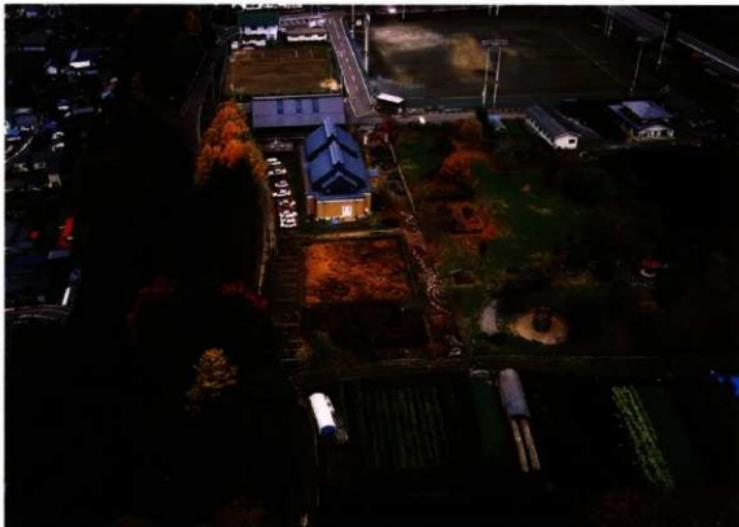
第6号住居址覆土中から出土した人面装飾付土器把手の部分。口縁上の装飾部分のみ残存し、胴部以下は欠損している。顔面部の形態は、中期中葉における他の人面装飾と大きな違いはないが、顔が外向きに造られ、その直下に巻が表現される点は珍しく稀少な事例である。

本住居から出土した土器群よりも数段階古く、おそらく人面装飾部のみ意図的に伝世されたものと思われる。



4. 赤色塗彩浅鉢形土器片（左一外面、右一内面）

第5・6号住居址の比較的浅い覆土中から出土した。浅鉢の内・外面に赤色塗彩した曲線文が描かれている。なお、赤色塗彩の下地に黒色顔料（漆か？）を用いているとの見方もある。器全面に赤色塗彩したものと違い、こうした雲形様の文様を描く例は縄文中期としては長野県下初見である。近く塗彩についての化学分析を予定している。



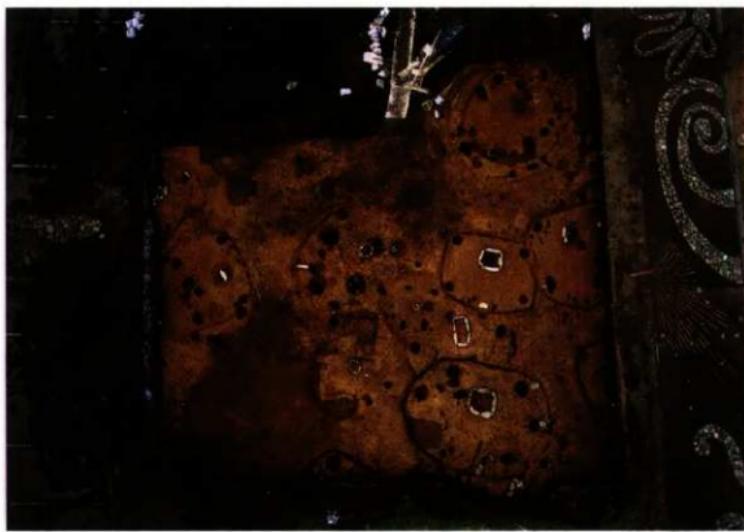
5. 熊久保遺跡遠景（東より望む）

熊久保遺跡は銀川左岸の第二段丘面上に、東西約300～400m、南北約100～150mの範囲に拡がっている。写真中央が第10次調査地点であり、その西隣（写真上側）の歴史民俗資料館が第3・4次調査地点、さらに奥の屋内ゲートボール場が第5次調査地点である。このように東西方向に長く、河川の段丘崖に面した遺跡のあり方は、松本平西山山麓における縄文時代集落の特徴である。



6. 基本土層層序

遺跡のある第2段丘面は、ほとんど畠地となっており、各層序の厚さは一定でない。10次調査面は、公園整備による客土で平坦化されており、以下が黒色土・暗褐色土の腐食土層が積み、遺物包含層となっている。公園造成による多少の擾乱も部分的にあったが、層位的な出土土器の区分はできなかった。以下波田ローム層が2～3mの厚さで堆積し、ソフト・ハードの区分ができる。その下部は基盤となる礫層が続く。



7. 遺構検出状況（上段：A地区 下段：B地区 写真右が北）

## 発刊にあたって

「遺跡」は長い年月の間に土中に埋もれてしまっていて、後の世に農地の耕うんや工事等による掘削によりその姿を現します。朝日村内の遺跡は縄文時代から中世までの遺物が村内一円から採集されており、その数は現在までに23ヶ所が確認されております。

そのほとんどが小規模なものです、熊久保遺跡は昭和3年の道路工事で多量の土器が出土したこと、昭和24年に試掘調査がなされ、規模の大きな縄文中期集落であったことが確認されております。この地で農業をした人誰もが農作業中に土器の破片等を数多く拾った話、また、子供の頃にグラウンドで矢尻等の採集をされたと聞かされており、広く住民に周知された遺跡であります。

この度、朝日美術館の建設にともなって、工事による遺跡破壊が避けられないので事前に詳細な発掘調査を行い記録保存することになりました。調査面積は約1,000m<sup>2</sup>で、調査結果は4,500から4,000年前（縄文中期）の竪穴住居跡31軒のほか多数の土器・石器が出土し、この遺跡が松本平にあって最大級の規模をもつ縄文時代中期の拠点的集落であることがわかりました。

この熊久保遺跡は、今回発掘で10回を数えておりますが、昭和39年『信濃』に「熊久保遺跡概報」として発表されただけで、発掘調査報告書を刊行するのは今回が初めてです。この調査報告書は、今までの発掘調査したものを載せますと大変膨大なものになりますので、主に、今回発掘をした第10次調査分を発刊することにしました。これにより朝日村の歴史解明に大変役立つ資料になり、貴重な文化財の保護とその施策へのご理解を深めていただければと願うものです。

調査実施にあたった寒風の中、現場作業にあたった皆さまや、土器の洗浄・復元などまた理化学的分析など、細かく慎重を要する整理作業をしていただいた皆さまのご尽力により、調査を完遂することができました。最後になりましたが、ご協力、ご指導いただきました皆さんに衷心よりお礼申し上げます。

平成15(2003)年3月

(前) 朝日村教育委員会

教育長 清澤勝男

## 例　　言

1. 本書は朝日村美術館建設に伴う熊久保遺跡第10次発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は長野県東筑摩郡朝日村古見1320番地に所在する。
3. 発掘調査は平成12(2000)年10月2日～同年12月15日、整理作業は平成12年12月16日～平成15(2003)年3月31日に実施した。
4. 発掘調査面積は約1,000m<sup>2</sup>である。
5. 熊久保遺跡は昭和37(1962)年の第1次調査を皮切りに現在まで10次にわたる調査が行われている。第2次調査～第9次調査の正式報告は未刊であり、第2次～第4次調査までの概要是『朝日村誌下巻』で記述されている。したがって、遺構番号等が統一されていない点をお断りする。
6. 第10次調査の概要については、平成13(2001)年12月9日開催長野県考古学会秋季大会、平成14(2002)年八十二文化財団・財長野県埋蔵文化財センター・長野県立歴史館主催「長野県の遺跡発掘2001」において紹介しているが、本報告書の刊行を以って正式報告とする。
7. 本書で使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図「塩尻」(1:50000)、「古見」(1:25000)、朝日村役場発行の朝日村図(1:10000)を使用している。
8. 航空写真は、㈱ジャステックに撮影を依頼した。
9. 現地調査での撮影は、柄口昇一・今村 克が行い、遺物写真は宮嶋洋一氏に依頼した。
10. 遺跡より出土した石器類および焼礫・炉石等の石材鑑定は塩尻市教育委員会鳥羽嘉彦氏に依頼した。また、英文抄訳は㈱岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター八木勝枝氏にお願いしている。
11. 発掘調査には以下の諸氏が参加した(敬称略・五十音順)。

荒井留美子	内川初雄	小沢甲子郎	上條文江	北沢清隆	熊谷昭吾	小泉忠行
小林芳子	小松幸美	齊藤朝男	白木金人	武井秀男	田部力雄	中村友幸
原 和明	丸山恵子	道浦久美子	宮坂昭久	宮下幸子	村山牧枝	山田通夫
山口仲司						
12. 整理作業には以下の諸氏が参加した。

遺物復元	荒井留美子	市川三三夫	大槻よしみ	上條和子	武田むつみ	二茅祥子
	水口尚子	道浦久美子	山本紀之			
遺物拓影	小口英一郎	上條和子	武田むつみ	道浦久美子		
遺構トレス	今村 克	荒井留美子	道浦久美子			
遺物トレス	小口英一郎	上條信彦	道浦久美子			
石器観察表作成	上條信彦					
版組み	今村 克	小口英一郎				
13. 本報告書をまとめるにあたり次の方々から玉稿を賜った。記して謝意を表する。

第II章第1節：塩尻市教育委員会	小口達志
第IV章第2節：長野県立歴史館	水沢教子
第IV章第4節：名古屋大学大学院博士前期課程	上條信彦

第IV章第5節：国立沼津工業高等専門学校

望月明彦

第IV章第6節：パリノ・サーヴェイ株式会社

14. 本書の執筆は調査団の討議を経て決定し、第I章から第III章は文末に、第IV章は文頭に執筆者名を明記した。

15. 本書の編集は、樋口昇一監修のもと、今村 克、小口英一郎が行った。

16. 本書で報告した記録及び出土遺物は、朝日村歴史民俗資料館が保管している。

17. 本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々・諸機関から貴重なご助言・ご配慮を得た。ご芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である（順不同・敬称略）。

会田 進 青沼博之 上田典男 大木正夫 太田圭郁 小坂英文 長田友也

神村 透 桐原 健 繁顕 茂 小林康男 小松 学 島田哲男 高橋健太郎

寺内隆夫 徳永哲秀 野口 淳 長谷川豊 平林 彰 藤森英二 古谷 渉

百瀬長秀 柳沢 充 八木勝枝 山田瑞穂 綿田弘実

長野県教育委員会 助長野県埋蔵文化財センター 長野県立歴史館 岡谷市教育委員会

塩尻市教育委員会 松本市教育委員会 稲高町教育委員会 松本土建株式会社

## 凡 例

1. 遺構挿図の縮尺は下記の通りで、それぞれスケールを添付した。

○住居址……1/40、1/60 ○土坑・集石……1/40

※ 遺構挿図中に使用したスクリーントーンは、下記の通りである。

被熱範囲…… 、硬くたたき締められた範囲……

2. 遺物挿図の縮尺は下記の通りで、それぞれスケールを添付した。

○土 器……土器実測図（完形個体）……1/4、土器拓影図・破片……1/3

土製品……1/2、2/3

○石 器……小形剥片石器・石核……2/3、大形剥片石器・原石……1/3、原石・磨製石斧・石錐・磨石・叩石……1/3、石皿・台石・砥石・多孔石……1/4

※ 小形刃器では、実測図中の実線は微細な剥離痕がみられた範囲を示す。

※ 磨石・石皿・敲石では、実測図中の平面図における使用部分は白抜きとし、原礫面は点描とした。さらに一点破線は、特に使用されたあと後を形成している範囲を示す。また、断面図における実線は磨耗面、破線は敲打面の範囲を示す。

※ 砥石では、実測図中の矢印は擦痕の方向を示す。

3. なお、上記縮尺に該当しないものはスケールのみ示した。

# 本文目次

口絵

発刊にあたって ..... 前教育長 清澤 勝男

例言・凡例

本文目次

口絵・挿図・表目次

図版目次

## 第Ⅰ章 熊久保遺跡の歴史的景観と概要 ..... 1

- 第1節 遺跡の立地と環境 ..... 今村 克 ..... 1  
1 地理的環境 (1)、2 遺跡の位置 (2)  
第2節 村内遺跡の概要 (2) ..... 今村 克 ..... 2

## 第Ⅱ章 調査分析の経過と概要 ..... 5

- 第1節 過去における調査概要 ..... 樋口 昇一・小口 達志 ..... 5  
第1次調査 (5)、第2次調査 (7)、第3次調査 (7)、第4次調査 (8)  
第5次調査 (9)、第6次調査 (9)、第7次調査 (9)、第8次調査 (10)  
第9次調査 (10)  
第2節 第10次発掘調査の経緯と経過 ..... 樋口 昇一・今村 克・小口英一郎 ..... 11  
1 調査の経緯 (11)、2 調査・整理作業の経過 (11)  
第3節 分析計画と調査成果の普及活動 ..... 小口英一郎 ..... 15  
(付) 屋外展示施設(復元住居)の復元経過 ..... 樋口 昇一 ..... 16

## 第Ⅲ章 第10次調査の成果と記録 ..... 19

- 第1節 縄文中期土器の分類 ..... 小口英一郎 ..... 19  
第I群：中期前葉の土器、第II群：中期中葉の土器、第III群：中期後葉の土器  
第2節 調査区の基本的層序 ..... 今村 克 ..... 20  
第3節 縄文時代の遺構と遺物 ..... 今村 克・小口英一郎 ..... 20  
1 第1号住居址 (21)、2 第2号住居址 (22)、3 第3号住居址 (32)  
4 第4号住居址 (32)、5 第5号住居址 (37)、6 第6号住居址 (41)  
7 第7号住居址 (53)、8 第8号住居址 (62)、9 第9号住居址 (65)  
10 第10号住居址 (81)、11 第11号住居址 (86)、12 第12号住居址 (90)  
13 第13号住居址 (93)、14 第14号住居址 (103)、15 第15号住居址 (108)  
16 第16号住居址 (110)、17 第17号住居址 (112)、18 第18号住居址 (112)  
19 第19号住居址 (121)、20 第20号住居址 (128)、21 第21号住居址 (136)  
22 第22号住居址 (143)、23 第23号住居址 (145)、24 第24号住居址 (149)  
25 第25号住居址 (149)、26 第26号住居址 (152)、27 第27号住居址 (152)

28 第28号住居址 (157)、 29 第29号住居址 (158)、 30 第30号住居址 (160)	
31 第31号住居址 (162)、 32 中期前葉土器集中部 (163)	
33 土坑・集石 (166)、 34 検出面 (覆土) と出土遺物 (171)	
第4節 時期不明の小ピット群	樋口 昇一… 175
<b>第IV章 調査成果の分析研究—松本平西山山麓における縄文中期文化の研究</b> ————— 179	
第1節 2号住出土土器の型式学的検討—松本盆地における中期前葉期の様相—… 小口英一郎… 179	
はじめに (179)、 1 2号住出土土器の構成と生成過程 (179)、	
2 松本・諏訪・八ヶ岳山麓・甲府盆地の様相 (181)、	
3 2号住出土土器の型式学的位相 (187)、 おわりに (192)	
第2節 熊久保遺跡出土土器の光学顕微鏡による胎土分析	水沢 教子… 193
はじめに (193)、 1 分析の目的 (193)、 2 分析の方法 (194)、	
3 光学顕微鏡による分析の結果 (194)、 4 胎土のグルーピング (197)	
5 胎土分析から導かれる土器の動き (197)、 おわりに (199)	
第3節 第Ⅲ群1・2類土器の型式学的検討—熊久保式土器の構成と変遷—…小口英一郎… 203	
はじめに (203)、 1 第Ⅲ群1・2類土器の器種構成 (203)、	
2 第Ⅲ群土器の構成と変遷 (204)、 3 熊久保式土器の分布と動態 (212)	
おわりに (212)	
第4節 出土石器群の研究	上條 信彦… 215
1 石器群の個別の検討 (215)、 2 石器群の総体的検討 (222)、	
3 まとめ (227)	
第5節 熊久保遺跡出土の黒曜石産地推定	望月 明彦… 249
はじめに (249)、 1 分析法 (249)、 2 産地推定法 (249)、	
3 判別図法 (250)、 4 判別分析 (252)、 5 産地推定結果 (252)	
第6節 熊久保遺跡出土炭化材の年代と樹種	（翻）パリノ・サーヴェイ… 259
はじめに (259)、 1 炭化材の放射性炭素年代測定 (259)	
2 炭化材の樹種 (260)	
第7節 熊久保遺跡における集落の構成と変遷	小口英一郎… 263
1 遺跡の景観と立地 (263)、 2 住居址の構成と変遷 (263)	
3 各ブロック変遷と集團構成 (264)、 4 周辺集落との関係 (265)	
第8節 分析研究成果のまとめ	小口英一郎… 268
1 縄文土器の型式学的・理化学的分析からの地域的特性 (268)	
2 熊久保遺跡の年代的位置付け (268)、 3 資源の利用と獲得領域 (268)	
4 熊久保遺跡の集落景観 (269)	
総括	樋口 昇一… 271

写真図版

報告書抄録 (邦文・英文)

あとがき

# 口絵・挿図・表目次

## 口絵目次

- 口 絵
- 1 遺跡付近の景観
  - 2 熊久保式土器
  - 3 人面装飾付土器（把手部）出土状況
  - 4 赤色塗彩浅鉢形土器片
  - 5 熊久保遺跡遠景
  - 6 基本土層順序
  - 7 遺構検出状況

## 第Ⅰ章～第Ⅲ章

- 第1図 熊久保遺跡位置図(1:250,000) ..... 1  
 第2図 村内遺跡分布図(1:25,000) ..... 3  
 第3図 第1次～第10次の調査範囲 ..... 5  
 第4図 第10次調査遺構配図と土層図 ..... 17-18  
 第5図 調査区の基本的順序 ..... 20  
 第6図 第1号住居址 ..... 21  
 第7図 第2号住居址 ..... 23  
 第8図 第2号住居址遺物出土図 ..... 24  
 第9図 第2号住居址出土土器(1～4) ..... 25  
 第10図 第2号住居址出土土器(5～7) ..... 26  
 第11図 第2号住居址出土土器(8～14) ..... 27  
 第12図 第2号住居址出土土器(15～19) ..... 28  
 第13図 第2号住居址出土土器(20～58) ..... 29  
 第14図 第2号住居址出土石器(1～22) ..... 30  
 第15図 第3号住居址 ..... 33  
 第16図 第3号住居址出土土器(1～16)・石器(1～3) ..... 34  
 第17図 第4号住居址 ..... 35  
 第18図 第4号住居址出土土器(1～23)・石器(1～2) ..... 36  
 第19図 第5号住居址 ..... 38  
 第20図 第5号住居址出土土器(1～7)・土偶(8) ..... 39  
 第21図 第5号住居址出土土器(1～13) ..... 40  
 第22図 第6号住居址 ..... 42  
 第23図 第6号住居址遺物出土図 ..... 43  
 第24図 第6号住居址出土土器(1～8) ..... 44  
 第25図 第6号住居址出土土器(9～17) ..... 45  
 第26図 第6号住居址出土土器(18～24) ..... 46  
 第27図 第6号住居址出土土器(25～32) ..... 47  
 第28図 第6号住居址出土土器(33～46) ..... 48  
 第29図 第6号住居址出土土器(47) ..... 49  
 第30図 第6号住居址出土石器(1～24) ..... 51  
 第31図 第6号住居址出土土器(25～32) ..... 52  
 第32図 第7号住居址 ..... 54

- 第33図 第7号住居址遺物出土図 ..... 55  
 第34図 第7号住居址出土土器(1～10) ..... 56  
 第35図 第7号住居址出土土器(11～35) ..... 57  
 第36図 第7号住居址出土土器(36～63) ..... 58  
 第37図 第7号住居址出土土器(64～78)・石器(1～12) ..... 59  
 第38図 第7号住居址出土土器(13～22) ..... 60  
 第39図 第8号住居址 ..... 62  
 第40図 第8号住居址出土土器(1～7)・石器(1～3) ..... 63  
 第41図 第8号住居址出土土器(8) ..... 64  
 第42図 第9号住居址 ..... 66  
 第43図 第9号住居址遺物出土図 ..... 67-68  
 第44図 第9号住居址出土土器(1～9) ..... 69  
 第45図 第9号住居址出土土器(10～13) ..... 70  
 第46図 第9号住居址出土土器(14～19) ..... 71  
 第47図 第9号住居址出土土器(20～21) ..... 72  
 第48図 第9号住居址出土土器(22～23) ..... 73  
 第49図 第9号住居址出土土器(24～30) ..... 74  
 第50図 第9号住居址出土土器(31～39) ..... 75  
 第51図 第9号住居址出土土器(40～46) ..... 76  
 第52図 第9号住居址出土土器(47～61)・石器(1～17) ..... 77  
 第53図 第9号住居址出土石器(18～29) ..... 78  
 第54図 第9号住居址出土土器(30～31) ..... 79  
 第55図 第10号住居址 ..... 82  
 第56図 第10号住居址出土土器(1～4) ..... 83  
 第57図 第10号住居址出土土器(5～26) ..... 84  
 第58図 第10号住居址出土土器(27～34)・石器(1～8) ..... 85  
 第59図 第11号住居址 ..... 87  
 第60図 第11号住居址出土土器(1～8) ..... 88  
 第61図 第11号住居址出土土器(9～24) ..... 89  
 第62図 第11号住居址出土石器(1～4) ..... 90  
 第63図 第12号住居址 ..... 91  
 第64図 第12号住居址出土土器(1～11)・石器(1～5) ..... 92  
 第65図 第13号住居址 ..... 94  
 第66図 第13号住居址遺物出土図 ..... 95  
 第67図 第13号住居址炉・石壙 ..... 96  
 第68図 第13号住居址出土土器(1～3) ..... 97  
 第69図 第13号住居址出土土器(4～11) ..... 98  
 第70図 第13号住居址出土土器(12～24) ..... 99  
 第71図 第13号住居址出土土器(25～39)・石器(1～10) ..... 100  
 第72図 第13号住居址出土石器(11～28) ..... 101  
 第73図 第13号住居址出土土器(40) ..... 102  
 第74図 第14号住居址 ..... 104

第75回	第14号住居址出土土器(1~9).....	105
第76回	第14号住居址出土土器(10~24).....	106
第77回	第14号住居址出土土器(25~33)・石器(1~6).....	107
第78回	第15号住居址.....	109
第79回	第15号住居址出土土器(1~14)・石器(1).....	110
第80回	第16号住居址.....	111
第81回	第16号住居址出土土器(1~10)・石器(1~2).....	111
第82回	第17号住居址.....	113
第83回	第17号住居址出土土器(1~7)・石器(1~6).....	114
第84回	第18号住居址.....	115
第85回	第18号住居址遺物・炭化材出土図.....	116
第86回	第18号住居址出土土器(1~12).....	117
第87回	第18号住居址出土土器(13~27).....	118
第88回	第18号住居址出土土器(28~57).....	119
第89回	第18号住居址出土石器(1~8).....	120
第90回	第19号住居址.....	122
第91回	第19号住居址遺物・炭化材出土図.....	123
第92回	第19号住居址出土土器(1~7).....	124
第93回	第19号住居址出土土器(8~24).....	125
第94回	第19号住居址出土土器(25~33)・石器(1~8).....	126
第95回	第19号住居址出土石器(9~14).....	127
第96回	第20号住居址.....	129
第97回	第20号住居址遺物出土図.....	130
第98回	第20号住居址出土土器(1~10).....	131
第99回	第20号住居址出土土器(11~16).....	132
第100回	第20号住居址出土土器(17~27).....	133
第101回	第20号住居址出土土器(28~38)・土偶(39).....	134
第102回	第20号住居址出土石器(1~18).....	135
第103回	第21号住居址.....	137
第104回	第21号住居址遺物出土図.....	138
第105回	第21号住居址出土土器(1~8).....	139
第106回	第21号住居址出土土器(9~25).....	140
第107回	第21号住居址出土土器(26~28)・石器(1~17).....	141
第108回	第22号住居址.....	143
第109回	第22号住居址出土土器(1~10)・石器(1~8).....	144
第110回	第23号住居址.....	146
第111回	第23号住居址出土土器(1~8).....	147
第112回	第23号住居址出土土器(9~27)・石器(1~5).....	148
第113回	第24号住居址.....	150
第114回	第24号住居址出土土器(1~10)・石器(1~4).....	150
第115回	第25号住居址.....	151
第116回	第25号住居址出土土器(1~16)・石器(1~2).....	152
第117回	第26号住居址.....	153
第118回	第27号住居址.....	154
第119回	第27号住居址出土土器(1~7).....	155
第120回	第27号住居址出土土器(8~50).....	156
第121回	第28号住居址.....	158
第122回	第28号住居址出土土器(1~17)・石器(1).....	159
第123回	第29号住居址.....	160
第124回	第29号住居址出土土器(1~49).....	161
第125回	第30号住居址.....	162
第126回	第31号住居址・出土土器.....	163
第127回	縄文中期前葉土器集中部出土土器(1~49).....	164
第128回	縄文中期前葉土器集中部出土土器(50~95).....	165
第129回	土坑(1).....	167
第130回	土坑(2).....	168
第131回	土坑(3)・集石.....	169
第132回	土坑内出土遺物.....	170
第133回	検出面出土土器(1~25).....	172
第134回	検出面出土土器(26~44).....	173
第135回	検出面出土土器(45~47)・土偶(48~49)・赤色塗彩土器(50).....	174
第136回	時期不明のピット群.....	175
第1表 土坑一覧表.....		177
<b>第IV章第1節</b>		
図1	松本盆地出土土器.....	182
図2	松本盆地出土土器.....	183
図3	松本・諏訪盆地出土土器.....	185
図4	諏訪盆地出土土器.....	186
図5	諏訪盆地・八ヶ岳山麓・甲府盆地出土土器.....	188
図6	甲府盆地出土土器.....	189
図7	甲府盆地出土土器.....	190
図8	岡谷市船塚社跡11号住居址出土土器.....	191
表1	熊久保塚跡2号住居址出土土器構成一覧表.....	190
表2	中期前葉縄年案の対比表.....	192
<b>第IV章第2節</b>		
図1	胎土分析試料.....	193
図2	全体組成.....	196
図3	岩石組成.....	196
図4	鉱物組成.....	196
表1	分析試料の属性.....	194
表2	カウント基礎データ.....	195
<b>カラー写真図版</b>		
1	1類 No.1 (平出Ⅲ類A土器) .....	201
2	1類 No.4 (平出Ⅲ類A土器) .....	201
3	1類 No.3 (平出Ⅲ類A土器) .....	201
4	1類 No.3 (平出Ⅲ類A土器) .....	201
5	1類 No.4 (平出Ⅲ類A土器) .....	201
6	1類 No.6 (北陸系土器) .....	201
7	1類 No.9 (西日本系土器) .....	202
8	2類 No.8 (角押文・指頭圧痕の鋳式) .....	202

9	3類 No.5 (北陸系土器) .....	202
10	4類 No.7 (指頭圧痕を残す猪沢式) .....	202
11	4類 No.7 (指頭圧痕を残す猪沢式) .....	202
12	4類 No.7 (指頭圧痕を残す猪沢式) .....	202

#### 第IV章第3節

図1	第6・10号住出土土器 .....	204
図2	第Ⅲ群土器の構成と変遷 (その1) .....	206
図3	第Ⅲ群土器の構成と変遷 (その2) .....	207
図4	第Ⅲ群土器の構成と変遷 (その3) .....	208
図5	松本盆地における第IV・V段階の土器 .....	209
図6	山形村三夜塚遺跡SK099出土土器 .....	210
図7	県外出土第Ⅲ群1・2類土器 .....	211
図8	熊久保式の西方伝播と併行型式群の分布概念図 .....	212

#### 第IV章第4節

図1	器種別・編年別石器個数組成図 .....	224
図2	松本平主要縄文中期5遺跡における器種別・ 遺跡別石器個数組成図 .....	225
表1	個数・重量組成表 .....	215
表2	遺構・器種別石器個数組成表 .....	216・217
表3	石材・器種別個数組成表 .....	222
表4	石材・器種別重量組成表 .....	222
表5	松本平主要縄文中期5遺跡における器種別・ 遺跡別石器個数組成表 .....	226
表6	熊久保遺跡第10次発掘調査出土石器観察一覧表 .....	229

#### 第IV章第5節

図1	原石を採取・分析した黒曜石産地 .....	250
図2	黒曜石産地の判別図 (1) .....	253
図3	黒曜石産地の判別図 (2) .....	253
表1	産地原石判別群 .....	251
表2	山の神遺跡産地試料一覧 .....	252
表3	熊久保遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果一覧表 .....	254

#### 第IV章第6節

図1	炭化材 (クリ) の実体・走査型電子顕微鏡写真 .....	260
表1	放射性炭素年代測定結果 .....	259
表2	樹種同定結果 .....	260

#### 第IV章第7節

図1	熊久保遺跡住居変遷図 .....	265
図2	松本盆地西山山麓における縄文中期集落 .....	266
表1	住居址出土遺物の時期別一覧表 .....	263
表2	各時期における住居址一覧表 .....	264

#### 第IV章第8節

図1	熊久保遺跡における道具の構成と変遷 .....	270
<b>総括</b>		
図1	松本平における縄文中期遺跡の中心分布想定 .....	274
図2	松本平南半における縄文中期遺跡の分布 .....	275
図3	八ヶ岳西南麓の集団領域 .....	276
図4	縄文中期における拠点集落の分布と領域モデル .....	277

## 図版目次

P.L. 1	1号住居址全景 (西より) (上)、同炉址 (中)、 同埋甕 (下)	状況 (中)、同埋甕 (下)
P.L. 2	2号住居址全景 (東より) (上)、同遺物出土状 況 (下)	8号住居址全景 (南より) (上)、同全景 (北よ り) (中)、同埋甕 (下)
P.L. 3	3号住居址全景 (東より) (上)、同遺物出土状 況 (中)、同炉址 (下左)、同遺物出土状況 (拡 大) (下右)	9号住居址全景 (東より) (上)、同遺物出土状 況 (中)、同炉址 (下左)、同遺物出土状況 (部 分) (下右)
P.L. 4	4号住居址全景 (東より) (上)、同遺物出土状 況 (中)、同炉址 (下)	10号住居址全景 (南東より) (上)、同炉址 (下)
P.L. 5	5号住居址全景 (西より) (上)、同炉址 (中)、 同埋甕 (下)	11号住居址全景 (南東より) (上)、同炉址 (下)
P.L. 6	6号住居址全景 (南より) (上)、同遺物出土状 況 (中)、同炉址 (下左)、同遺物出土状況 (拡 大)	12号住居址全景 (南東より) (上)、同遺物出土 状況 (中)、同埋甕 (下)
P.L. 7	7号住居址全景 (南東より) (上)、同遺物出土	13号住居址全景 (南東より) (上)、同石棺 (中)、 同埋甕 (下左)、同石室 (下右)
		15号住居址全景 (南より) (上)、16号住居址 (北より) (中)、同炉址 (下)
		18号住居址全景 (東より) (上)、同炭化材・遺

	物出土状況（北より）、同炉址（下左）、同炭化材（部分）（下右）	土器（1～3）
P L. 16	19号住居址全景（東より）（上）、同炭化材・遺物出土状況（西より）（中）、同炉址（下左）、同埋甕（下右）	P L. 28 7号住居址出土土器（4～6）、8号住居址出土土器（1～3）
P L. 17	20号住居址全景（南東より）（上）、同遺物出土状況（中）、同埋甕（下）	P L. 29 9号住居址出土土器（1～8）
P L. 18	21号住居址全景（東より）（上）、同遺物出土状況（部分）（中）、同埋甕（下）	P L. 30 9号住居址出土土器（9～12）
P L. 19	17号住居址全景（北より）（上）、22号住居址全景（南より）（中）、24号住居址全景（西より）（下）	P L. 31 9号住居址出土土器（13～18）
P L. 20	23号住居址全景（南東より）（上）、同全景（東より）（下）	P L. 32 9号住居址出土土器（19～25）
P L. 21	25号住居址全景（南より）（上）、27号住居址全景（東より）（中）、28号住居址全景（西より）（下）	P L. 33 11号住居址出土土器（1～2）、12号住居址出土土器（左1）、13号住居址出土状况（右1～3）
P L. 22	30号住居址全景（北より）（上）、31号住居址（部分）（東より）（中）、同埋甕（下）	P L. 34 13号住居址出土土器（4）、13号住出土鉢（5）、14号住出土土器（1～2）、18号住出土土器（1～2）
P L. 23	集石1（1段右）、集石2（1段左）、土坑8（2段右）、土坑15（2段左）、土坑22（3段左）、土坑45（3段右）、土坑49（3段左）、土坑50（3段右）	P L. 35 20号住居址出土土器（1～6）
P L. 24	1号住居址出土土器（1）、2号住居址出土土器（1～5）	P L. 36 21号住居址出土土器（1～5）
P L. 25	5号住居址出土土器（1～2）、5号住居址出土土偶（3）、6号住居址出土土器（1～3）	P L. 37 22号住居址出土土器（1）、検出面出土土偶頭部（1）、9号住出土土製品（1左）、検出面出土鉢（1～2）
P L. 26	6号住居址出土土器（4～10）	P L. 38 打製石斧（1～25）
P L. 27	6号住居址出土土器（11～12）、7号住居址出土	P L. 39 打製石斧（26～35）、磨製石斧（1～4）、叩石（1～6）
		P L. 40 砕石（1～20）
		P L. 41 砕石（21～25）、石匙（1～4）、石鍤（1～4）、磨石（1～4）
		P L. 42 大形刃器（1～12）、石皿（1～3）、多凹石（1）
		P L. 43 砥石（1）、台石（1～6）
		P L. 44 石鍤、石鍤、石核

# 第Ⅰ章 熊久保遺跡の歴史的景観と概要

## 第1節 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境 (第1図、図版1-1)

朝日村は松本盆地の南西部に位置している。地形的には飛騨山脈に属する山地と平坦地の地域に分けることができる。山地は松本・塩尻・東筑摩群内の最高峰である鉢盛山(2446.4m)から北方ハト峰(1970m)を経て横出ヶ崎に至る、長い尾根と東方鳥帽子岳(1952m)を経て伸びる山塊とに分かれる。北方の山塊は波田町・山形村との境をなし、東方の山稜は木祖村・橋川村・塩尻市との境界となっている。これらの山地は山林に覆われ村の総面積7093km<sup>2</sup>の88%(6158km<sup>2</sup>)にあたる。次に平坦地だがすべて鎮川の流域にあることから、鎮川の概要を先に述べる。

鎮川は鉢盛山から流れ出す野俣沢の三つの河川が三俣で合流し、更に舟ヶ沢を併せて東流、山野沢部落付近から流路を北にかえ、流下して松本市下二子付近で奈良井川に合流する。この総延長は、24km、高差1500mである。鎮川の形成する扇状地は地形的には針尾付近を扇頂とし、左岸は山形村の子間沢川まで、右岸は小曾部川・奈良井川まで、中央は松本市神林・笠賀まで達する広大なものである。朝日村内では左岸の古見原、右岸の西洗馬の平坦面がこの扇状地に当たり、厚いローム層に覆われているのが特徴である。古見原・西洗馬に広く分布するローム層は波田ロームと呼ばれ、起源は乗鞍岳火山や、御岳火山で今から1~3万年前の間にあった何回かの噴灰と考えられている。この平坦地には、古見原に1段(延長約2km)、西洗馬原に3段(延長約0.8・2.5・1.8km)の段丘崖が見られる。いずれもローム層の堆積前に作ら

れたもので、当時の鎮川の流れの侵食と移動を示している。更に現河床へ続く両岸の段丘崖(高さ10cm以上)を加えると、左岸に2段、右岸に4段の段丘崖が観察される。現状は古見原・西洗馬の多くは畑地で、河床に近い所には水田も営まれている。

気候は、本州中央の内陸盆地に位置するため、寒暖の差の大きいわゆる内陸性気候を示す。小気候的には松本盆地の南西隅にあたるため、背面の北アルプスや鉢盛山地などの背倚山脈の影響を大きく受ける。特に冬季の強風や荒天・降雪にそれが目立つ。また村の中央を貫流する鎮川の谷は、鉢盛山地を越えた季節風や低気圧に伴う風を更に強い地形風に変えて吹送させる。この強風は地元で鉢盛下ろしと呼ばれている。



第1図 熊久保遺跡位置図 (1:250000)

## 2 遺跡の位置（第2図）

熊久保遺跡は前述した鎮川左岸段丘の中段に位置する。扇頂部の針尾から下流へ約1km、標高は822m、現河床からの比高差10mを測る。

遺跡の範囲はまだ未確定であるが、中段の段丘崖に沿って東西約300~400m、南北約100~150mあまりの広い範囲に展開すると考えられている。

遺跡全体は、また西から東へ向かって傾斜し、な

おかつかれ跡の中央に向かって両側からゆるく傾斜するといった特徴を持つ。一説には、この中央部には昔は川が流れていると言う話もあり、集落の景観や構造を考える上で興味がもたれる。調査区の都合から、この部分は未調査であるが今後の調査が行われれば貴重な情報を得られることがあるだろう。

参考文献 『朝日村誌上・下巻』(1987・91)

(今村)

## 第2節 村内遺跡の概要

村史刊行時（1989・91）における朝日村で確認されている遺跡は23ヶ所ある。しかし、その後の確認調査で地点や範囲が不明・不確実なものを一応保留扱いとし、県遺跡台帳へは7+1(24)の8遺跡とした。No.の次の（ ）内の数字は台帳No.である。

そのほとんどが鎮川の左右段丘上か大小の沢沿いに立地している。人々が生活しやすい平坦地と水の確保が容易であるという両面からこうした場所が選ばれたものと考えられよう（第2図）。

次に、各遺跡について簡単に述べる。

- 1(1). 曾倉沢遺跡 過去工事中に多量の土器が採取されたと聞くが位置が不明確。
- 2(2). 駒込遺跡 舟沢が鎮川に合流する地点の段丘上に立地。縄文時代中期後半の土器片・石器、平安時代の壺、中世の内耳鍋片などが出土。
3. 穴沢原遺跡 駒込遺跡に續く段丘上に立地。縄文時代中期の土器片出土。
4. 宮前遺跡 御馬越の八幡神社南東に立地。縄文時代早期の土器片、平安時代の灰釉陶器、中世の内耳鍋・双雀蓬萊鏡が出土。
5. 中俣沢遺跡 鎮川の最上流に位置する。畠地から縄文時代早期押型文土器・黒曜石製石匙が出土。
6. 横俣沢遺跡 横俣沢合流点南東の小段丘上に

位置。縄文時代中期の土器片・石器出土。

7. 御園間渡遺跡 大舟沢と鎮川合流点より下流の段丘上に位置。黒曜石片出土。
- 8(3). 熊久保遺跡
9. 犬が原遺跡 中央公民館西の段丘上に位置。打製石斧、中世の常滑系壺片・鉄製釘、炭化米が工事中に出土。
10. 本郷遺跡 本郷集落があるせまい段丘上に位置。平安時代の灰釉陶器片出土。
11. 一の沢遺跡 一の沢集落南に形成された段丘上に位置。石器・黒曜石片が出土。
12. 芦ノ久保遺跡 芦ノ池南一帯に広がり、村内で最も長期にわたって営まれた遺跡である。縄文時代草創期の有舌尖頭器・中期の土器片・弥生時代の土器片・磨製石器、中世の内耳鍋片が出土。縄文中期の大遺跡らしいが開発で不明。
13. 芦ノ久保遺跡の南に位置。縄文時代の土器片が採集されている。
14. 麦ヶ窪遺跡 横出ヶ崎に位置。縄文時代中期の土器片が出土。
15. 城西遺跡 東京電力変電所東に位置。縄文時代中期の土器片が出土。
- 16(4). 山鳥場遺跡 中組集落の県道北に位置。縄文時代後期の石剣・耳栓が出土。
- 17(5). 氏神遺跡 向原遺跡の北に位置。縄文時



第2図 村内遺跡分布図(1:25000)

- 代草創期の有舌尖頭器が出土。
- 18(6). 大日遺跡 氏神遺跡の東に位置。縄文時代中期後半から後期の土器片・石器が出土。
- 19(7). 三ヶ組遺跡 鎮川右岸西洗馬最大の遺跡。縄文時代中期の土器・石器が多数出土。
20. 中村遺跡 鎮川右岸西洗馬地区に位置。縄文時代中期の土器・ヒスイの垂れ飾り、弥生時代、平安時代の土器片出土。
21. 向原遺跡 内山沢が形成した扇状地の扇頂部西に位置。昭和60年に試掘調査が行われた。縄文時代草期・前期・中期後半の土器片、平安時代の土器片が出土。
22. 社宮司遺跡 原新田集落の南西に位置。縄文時代の打製石斧が出土。
23. 東電南遺跡 東京電力変電所の南側に位置。縄文時代中期の土器片が出土。
- 24(8). 三ヶ組北西遺跡 平成10年秋工場倉庫建設に先立つ試掘調査で、平安時代住居址のカマド部分周辺のみ調査。この期に多い小規模集落の一部か。  
(今村)



裏面



人面彫大



裏面

熊久保遺跡第2次調査出土人面付深鉢形土器

## 第Ⅱ章 調査分析の経過と概要

### 第1節 過去における調査概要

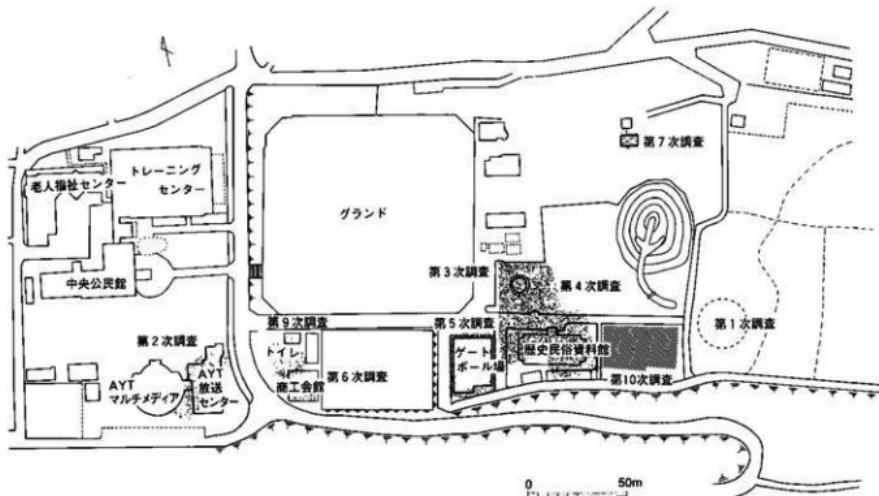
熊久保遺跡の存在は古くから縄文土器片や石鎚などが拾える場所として村民に知られ、採集品を所蔵していた方も多いという。たまたま、昭和3(1928)年小野沢から古身へ通ずる道路工事の際、多数の遺物が出土し、注目を集め、周辺一帯が縄文時代の遺跡として認識された。

戦後の昭和26(1951)年、松本市・東筑摩郡全域の市郡誌編纂の気運が生じ、教育会主体の委員会が各市町村に設置され、歴史以下12部会の活動が開始された。朝日村でもこれに呼応し歴史部会が発足し、村内遺跡の確認調査が実施された。その折、国学院大学教授大場磐雄、県文化財専門委員会一志茂樹両先生を招き村内を踏査し、熊久保

(古見)・氏神・大日・山鳥場(西洗馬)遺跡の巡視と、学校や個人所蔵の遺物を調査した。この時、熊久保地籍で小試掘が行われ、住居址の一部を検出したというが詳細は定かでない。いずれにしろ本遺跡が研究者によって初めてその存在が認識された時といえよう。その後約10年経って本格調査がはじまる。(第3図)

#### 第1次調査(昭和37(1962)年3月)

現美術館東側畠地(512-2番地)で、曾根八百人氏が耕作中に縄文中期の甕を掘り当てたのが端緒となり、横山正・三村邦雄両氏の招きで小松慶氏が現場を視察し、縄文中期住居址であることが



第3図 第1次～第10次の調査範囲(第8次調査地点は誌面の都合上割合した。今回調査地より約400m東に位置する。)

判明した。そこで両氏の強いすすめで村教育委員会主催による調査団が結成され、農閑期と学年度末休暇を利用して6日間にわたる発掘調査となる。

調査は松本深志高・松本県ヶ丘高・桔梗ヶ原（現塙尻志学館）高・木曾西（現木曾）高・朝日中学校のクラブ員とその先輩らを中心に、横山・小松両氏と樋口が指導に当たった。寒さに震えながら小学校の家庭科教室で合宿した日々は、参加者に懐かしい想い出となり今も語りつがれている。

トレンチ調査のため遺構部分のみ拡張したので、正確にはわからないが約250m<sup>2</sup>程度の調査面積だろう。その結果（11月の補充確認調査も含めて）、縄文中期住居址9軒と小堅穴4基からなる特殊遺構と独立した小堅穴1基が確認された。住居址は吹上パターンの土器廃棄をみせた中期中葉Ⅲ～V<sup>(1)</sup>期の4号住以外、後葉I～Ⅲ期に属する8軒が重複して検出された。後葉期は大形石囲炉や埋甕など伴い、中でも5号住は大形石棒片が偏平な河原石6ヶとともに奥壁にあり、祭壇を想定させた。一方、住居址群から5～6m離れた地点で、径1～2m、深さ80cm前後の大形土坑4基が近接して発見され「特殊遺構」（I～V号址）と呼ばれた。その中のIV号址は、底に縄文後期初頭土器一箇体分が押しつぶされた状態で検出され、他の3基は出土遺物なく時期の決定はできない。V号址はやや離れて単独にあり、径1.3m、深さ65cmですり鉢状を呈し内部に入頭大から拳大の角礫が充満し、底面には偏平な河原石5ヶが敷石され、木炭と灰が混じった土が残っていた。これも時期決定できないが、興味のある遺構であった。

出土遺物の大半は土器である。中でもほほ完形に復元できた中期土器は当地方の優品ともいえる。石器は、石鏃が以外に多く表採を加えると30点以上となる。その他打製石斧・横刃形刃器・大形石匙・凹石・磨石・石皿などがある。土製品は土偶片3点と少なかった。

発掘概要是昭和39（1964）年4・7月に、『信濃』16卷4・7号に分載発表されている。この報



第1次4号住の“吹上バターン”



第1次5号住（左）と3号住（右）



第1次特殊遺構IV号址内の土器



第1次発掘調査団スナップ（第1次）

文で、“吹上パターン”がまだ普遍的でなかったので、松本平の類例とあわせて“熊久保パターン”を提案し、それがしばらく学界内で通用した点、本遺跡の名を衆知させることになった。また「まとめ」の項で、松本平における縄文中期遺跡の分布を論じ、その撲点集落的性格をもつ大きな遺跡（塩尻市平出・山形村三夜塚・波田町葦原・穗高町離山遺跡など）が、半径約4kmの間隔をもって分布しており、それが当時の「領域」でないかとの仮説を発表したが、その後の集落・領域論の中で度々取り上げられた点も付記しておきたい。

#### 第2次調査（昭和60〈1985〉年8月）

中央公民館南のテニスコート周辺へ多目的研修施設を建設するために、緊急発掘が青沼博之氏の指導で行われた。調査面積約800m<sup>2</sup>。この結果、縄文中期中葉IV期を主体とした住居址2軒、同後葉I～III期5軒と土坑約30基が検出された。後葉住居址は5軒が半円を描くように分布し、中葉2軒はやや離れて位置し、半円内側に土坑が集中していた。中葉住居址は遺物が少なく、後葉5軒のうち3軒に埋甕があった。中でも興味のあるのは3号住で、一辺40cmの偏平な河原石が蓋石として置かれていたが、その下の穴に埋甕がなかった点である。なお、土坑27号（径1.5cm深さ1.1m）はわずか袋状を呈するが、底部から大形平石2ヶと縄文早期末の土器2箇体分が出土して注目された。

第2次調査によって、県道西側一帯にも遺跡が広がっており、熊久保遺跡は段丘崖に沿って約400m以上が遺跡範囲となることが判明した。

（樋口）

#### 第3次調査（平成1〈1989〉年7～9月）

公園の造成地に該当し、全調査の中で最も広い1400m<sup>2</sup>を調査した。その結果、縄文時代中期と平安時代の遺構・遺物を確認した。

縄文時代中期は、初頭から後葉までの住居址27軒と土坑60基があり、これらに伴い多くの遺物が出土している。以下、時期ごとに概観する。

中期初頭は、調査区北側で2軒、南側で1軒の



第3次調査区全景



第3次7号住石窯床と石棒



第3次9号住土器出土状況



第3次ピット内土器出土状況

住居址とその周辺で土坑を検出した。住居址から多くの土器が出土しており、その中の人に面付き土器は注目される。調査区から外れる北側では、水道管敷設の際に隣接地で多量の土器が確認されたので、付近に遺構が集中していると考えられる。

中期中葉は、ほぼ全域にわたって15軒の住居址を検出したが、ほとんど重複することなく存在していた。中葉I・II期の住居址は調査区西側に2軒並んで検出している。中葉III～IV期はほぼ全域に拡がり最多で遺物の出土量も多い。土器・石器のほか炉などに使用した砂岩の大きな礫等が覆土から多量に出土している。中でも第13号住居址は150個体以上の土器が足の踏み場もないような状態で出土した。

中期後葉はI・II期の住居址が6軒検出された。第7号住居址の石囲炉には、入口寄り両隅に石棒を埋め込んでいた。

調査区東端で興味深い遺構が検出されている。単独の石囲炉の周囲の扁平な石を敷いた遺構で、周囲からは柱穴等が確認できなかったことから屋外炉として機能したものだろうか。炉の形状から後葉III期と考えられる。

後葉III期以降は、住居址が大幅に減少し集落の終焉を迎える。

縄文時代以降、熊久保遺跡において人の痕跡が確認できるのは、平安時代になってからである。遺構検出作業時に調査区のほぼ中央から土師器と墨書のある灰釉陶器が出土した。付近で縄文中期の住居址に掘り込まれた黒色土の際立つピットを検出しておらず、該期の遺構と考えられる。

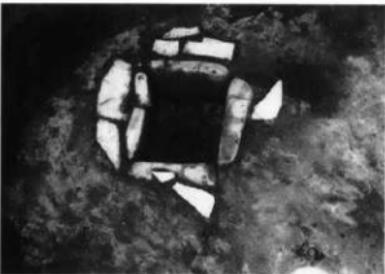
#### 第4次調査(平成2(1990)年6月)

歴史民俗資料館建設に先立ち560m調査した。第3次調査の南側に接し、河岸段丘の縁にあたる部分である。耕作土が浅く、直下はローム層であったが縄文時代中期中葉から後葉の住居址6軒と土坑を検出している。

第31号住居址から集積した黒曜石と小型のノミ状磨製石斧がまとめて出土した。石器の製作場



第3次集石土坑



第3次屋外炉



第3次調査スナップ



第4次調査区全景

所であろうか。第29号住居址は中葉Ⅳ期の土器が良好な状態で出土した。

#### 第5次調査（平成2〈1990〉年8～9月）

屋内ゲートボール場建設に先立ち190m<sup>2</sup>を調査した。予算的な問題もあり建物の基礎部分のみを対象とした方形のトレンチ状の調査となった。3、4次調査の西側に接しており、既調査の住居址と整合した部分もある。

縄文時代中期初頭から後葉の住居址18軒と土坑を検出した。住居址は完掘できなかったので、時期とプランを確認するにとどまった。

中期初頭は、東と南のトレンチで4軒の住居址を検出した。このうち、35号住居址覆土から大型の打製石斧6点が並んで出土した。

中葉は、前半の住居址がなかったが後葉にかけての移行期に見られるようになる。特筆すべき遺物は、第17号住居址の床面から出土した3匹の動物をあしらった釣手土器がある。

後葉は、Ⅱ期までの住居址は多いが、Ⅲ期以降減少する。第1号住居址からトロフィー形土器がほぼ完形で出土している。

#### 第6次調査（平成2〈1990〉年9月）

第5次調査の開始後まもなく、村商工会館建設に先立ち210m<sup>2</sup>を調査した。第2次調査とは道路を挟んだ東側に該当する。駐車場として利用されていたが、アスファルトを除去すると良好な包含層が深く堆積していた。

調査区のほぼ全域から13軒の住居址と土坑を検出したが、縄文時代中期中葉末から後葉Ⅱ期にかけての短期間に集中する。

中葉Ⅱ期の住居址は、いずれも方形の大形石圓炉と埋甕を備えていた。このうちの1軒から床面に密着した石皿が出土したが、その下部から炭化したクルミがまとまって確認された。当時を彷彿とさせるような出土状態であった。

#### 第7次調査（平成6〈1994〉年10～11月）

縄文公園北側の畑地内に個人住宅を建設することになったため、これに先立ち90m<sup>2</sup>を調査した。



第4次31号住黒曜石ブロック



第5次17号住釣手土器（左下）出土状況



第5次1号住台付土器出土状況



第5次5号住出土打製石斧ブロック出土状況



第6次調査区全景



第7次1号住居出土状況



第6次石皿下面の炭化クルミ出土状況



第7次発掘調査団スナップ

遺跡の北端に位置すると推定される場所で、比高5mの河岸段丘下部にある。

縄文時代中期中葉から後葉の住居址5軒と土坑を検出した。調査範囲が限られていたために完掘できた住居址は少ないが、第1号住居址は良好な状態で残っていた。入口と推定される場所に扁平な石が据えられており、移動させると床下に空洞が現れ、土が流れ込んでいない埋葬と判明した。

#### 第8次調査（平成9〈1997〉年8月）

河岸段丘下から本遺跡のある平坦面を横断して北に延びるバイパス道路を建設することになったため、800mを調査した。付近は遺物の散布が少量であったが、遺跡の拡がりを確認する目的もあって道路予定地に3本のトレンチを開けた。

西側のトレンチにおいて落とし穴と推定される土坑を1基検出したのみであった。遺物は調査区のはば全城からわずかながら出土している。

#### 第9次調査（平成10〈1998〉年10月）

商工会館とテニスコートの間にトイレを建設することになったため、これに先立ち約60mを調査した。第6次調査の北側にある。

調査区のはば全城から4軒の住居址と土坑を検出し、第6次調査と同様に縄文時代中期中葉末から後葉Ⅱ期にかけての短期間に集中する。

調査区が狭く完掘できた住居址はないが、第2号住居址は覆土の上に焼土層が厚く堆積した状態で検出している。

（小口達志）

#### 註

（1）本節の細別時期は『長野県史－考古資料編 全1巻4 遺構・遺物』（1988）に基づく。

## 第2節 第10次発掘調査の経緯と経過

### 1 調査の経緯

平成14（2002）年開館を目指し「美術館」建設が村当局より発議され、その場所が現「縄文むら」にある歴史民俗資料館の東側と決定した。予定地は資料館建設に先立つ緊急発掘調査（第4次）でも熊久保遺跡の中心部分であることが予想されていたので、事前の調査に関する協議が平成12（2000）年春から始まった。

当初、相談を受けた樋口は、第2～9次調査の整理作業も終了しておらず、当然報告書の刊行も見通しが立たない点を考慮し辞退した。一方、村当局も今回の調査を期限内に終了するための方策を強く求めたので、複数の発掘事業会社を紹介した。しかし、その見積りはすべて村当局の予算を遥かにこえる額だったため、再び筆者へ調査の依頼があった。第1次調査以来の関連もあり、引き受けることになった。

そこで、調査全般に関する協議が9月中旬から行われ、準備に入った。調査面積は約1000m<sup>2</sup>。第5次調査の結果をふまえ、20～50cmの表土は公園造成時の盛土も一部あるので重機によって調査開始日までに排土すること、その結果、日程は10月初めから11月末までの2ヶ月間とするが、遺構・遺物の出土状況に応じて延長も考慮すること。発掘作業員は村内のシルバー人材センター登録者を優先するが、未経験者なので松本・塙尻両市の経験者の応援を受け、更に団取り要員の確保も確認する。また文化財保護思想の普及に資するため、期間中に地元小学校高学年児童や一般者のための「発掘体験会」の開催、遺構などがほぼ検出された時期の「現地説明会」の実施などを決める。

調査開始に先だっての用具一式などは調査主任今村と事務局の上条恵子が担当し、周辺市町村の県考古学会員の応援もえて、全体を团长の樋口が総括する体制が整った。

(樋口)

### 2 調査・整理作業の経過

平成12（2000）年度

9月29日（金） 本日より作業開始。調査区内で排土処



表土削平開始



遺構検出状況



作業風景



遺構実測

理を行わなければならないので、まず調査区西半分を開け東半分を土置き場とし、終了後土を半転し残りを調査することにした。重機を使用し西半分の表土を除去する。

- 9月30日(土) 前日に続き表土除去を行う。
- 10月2日(月) 作業員10名にて周辺整備。その後検出作業に入る。
- 10月3日(火) 雨、作業中止。
- 10月4日(水) 検出作業
- 10月5日(木) 検出作業
- 10月6日(金) 検出作業。図面測量用の基準杭を設定。
- 10月10日(火) 検出作業。測量用BMを調査区に設定。
- 10月11日(水) 2号住居址掘り下げ。
- 10月12日(木) 2号・4号・8号住居址掘り下げ。
- 10月13日(金) 2号・4号住居址掘り下げ。
- 10月14日(土) 2号・4号住居址掘り下げ。
- 10月16日(月) 2号・3号・4号住居址掘り下げ。
- 10月17日(火) 2号・3号・4号・7号住居址掘り下げ。
- 10月18日(水) 2号・3号・4号・7号・9号住居址掘り下げ。
- 10月19日(木) 2号・3号・4号・7号・9号住居址掘り下げ。雨、作業中止。
- 10月20日(金) 雨、作業中止。
- 10月23日(月) 雨、作業中止。
- 10月24日(火) 1号住居址完掘、3号住居址遺物出土状況、4号・5号・6号・7号・9号・10号・11号・12号住居址掘り下げ。
- 10月25日(水) 雨、作業中止。
- 10月26日(木) 3号・5号・6号・9号・10号・11号住居址掘り下げ。
- 10月27日(金) 3号住居址完掘。5号・6号・9号・10号・11号住居址掘り下げ。現地説明会準備。
- 10月28日(土) 現地説明会。4号住居址完掘。5号・6号・9号・10号・11号住居址掘り下げ。
- 10月29日(日) 5号・6号住居址掘り下げ。7号住居址遺物取り上げ。



遺構検出状況



現地説明会



朝日小5年生発掘体験



発掘参加者

- 10月30日(月) 5号・6号・13号住居址掘り下げ。7号住居址遺物取り上げ。SK完掘。
- 10月31日(火) 5号・6号・13号・14号住居址掘り下げ。7号・9号住居址遺物取り上げ。
- 11月1日(水) 雨、作業中止。
- 11月2日(木) 雨、作業中止。
- 11月3日(金) 7号・9号住居址遺物取り上げ。
- 11月4日(土) 7号・9号住居址遺物取り上げ。
- 11月5日(日) 遺構の土層図、レベル入れ。
- 11月6日(月) 5号・6号・9号・10号・13号・14号住居址掘り下げ。
- 11月7日(火) 5号・6号・13号・14号住居址掘り下げ。
- 11月8日(水) 5号・6号・13号・14号住居址掘り下げ。
- 11月9日(木) 7号・8号・10号住居址完掘。13号住居址。石壇遺構出現。6号住居址、有孔鉢付土器、人面把手付土器など出土。
- 11月10日(金) 5号・6号・9号・13号・14号住居址掘り下げ。
- 11月11日(土) 10号住居址完掘。5号・6号・9号・13号住居址遺物出土写真。
- 11月13日(月) 5号・6号・9号・13号住居址遺物取り上げ。
- 11月14日(火) 5号・6号・9号・13号住居址遺物取り上げ。
- 11月15日(水) 図面・測量。
- 11月16日(木) 調査区をラジコンヘリで空撮。1号・7号・13号住居址の埋甕調査。2号住居址の埋甕炉調査。
- 11月17日(金) 雨、作業中止。
- 11月18日(土) 1号・7号・13号住居址の埋甕調査。2号住居址の埋甕炉調査。西半分の調査、一部残して終了。
- 11月19日(日) 東半分の表土を重機を使用して除去する。
- 11月20日(月) 東半分の表土を重機を使用して除去する。
- 11月21日(火) 東半分の検出作業。西半分の残りの調査を継続。



拓本作業



土器復元



土器実測



調査団会議メンバー

- 11月22日(水) 検出作業。
- 11月24日(金) 検出作業。鉢盛小学校5年生、発掘作業体験学習。
- 11月27日(月) 検出作業。16号・17号住居址掘り下げ。
- 11月28日(火) 16号・17号・24号・25号住居址掘り下げ。
- 11月29日(水) 東半分の測量用基準杭設定。16号・17号・21号住居址掘り下げ。
- 11月30日(木) 19号・20号・21号住居址掘り下げ。
- 12月1日(金) 16号・17号・20号・21号・24号住居址掘り下げ。
- 12月2日(土) 18号・19号住居址焼失住居と思われ、慎重に作業行う。21号・22号住居址遺物取り上げ、掘り下げ。
- 12月4日(月) 16号・17号住居址完掘。18号・19号住居址炭化材を残し掘り下げ。21号・22号住居址図面・測量。
- 12月5日(火) 18号・19号・20号・23号住居址掘り下げ。
- 12月6日(水) 19号遺物取り上げ。18号・20号・21号・23号・24号・25号掘り下げ。
- 12月7日(木) 18号・19号・20号・23号・25号・27号住居址調査。
- 12月8日(金) 19号住居址炭化材取り上げ。18号・21号・27号・29号住居址調査。
- 12月9日(土) 18号住居址遺物取り上げ。19号・20号・24号・25号住居址完掘。
- 12月11日(月) 雪がちらつく。18号住居址炭化材取り上げ。18号・21号・23号住居址完掘。
- 12月12日(火) 東半分の調査区をラジコンヘリで空撮。7号住居址完掘。19号・20号・21号住居址の埋甃調査。
- 12月13日(水) 16号・17号・18号・19号・25号住居址図面・測量。
- 12月14日(木) 18号・19号住居址完掘。調査区東壁土層。
- 12月15日(金) 調査区北壁土層。整理・片付け。調査・測量・写真終了。
- 12月17日(日) 重機を使用して埋め戻し。
- 12月18日(月) 図面・遺物等の整理、片付け。  
|  
12月25日(月) 次年度へ続く。
- 平成13(2001) 年度
- 1月～7月 報告書刊行に向けた整理作業再開。  
水洗・注記作業開始。
- 8月～12月 接合・復元・図化作業開始。
- 平成14(2002) 年度
- 1月7日 接合・復元・図化作業開始。
- 2月2日 第1回調査団会議。
- 3月16日 第2回調査団会議。
- 4月～12月 拓本・トレース作業開始。
- 5月6日 県立歴史館開催の速報展見学。
- 5月12日 水沢教子先生来館。分析の打ち合わせ。
- 6月7日 第4回調査団会議。
- 7月13日 望月明彦先生来館。分析の打ち合わせ。
- 7月19日 第5回調査団会議。
- 9月20日 第6回調査団会議。
- 10月25日 第7回調査団会議。
- 12月6日 第8回調査団会議。
- 12月25日 報告書入札。
- 平成15(2003) 年度
- 1月10日 原稿完成。
- 3月31日 報告書刊行。 (今村・小口)



「縄文の音が聞こえますか」(イスに座る清沢芳郎先生と三村大八郎先生(左))

### 第3節 分析計画と調査成果の普及活動

#### 1 分析計画の方針

2000年12月に調査が終了し、翌年1月より水洗・注記の基礎整理および図化作業を開始した。そして、2002年3月以降、分析計画と分析進捗状況を検討するための調査会議を、樋口昇一、今村克、小口英一郎、上條恵子により約月1回ペースで開催している。その討議の中で、発掘調査終了後の整理分析計画として、本遺跡が松本平西山山麓における縄文中期の拠点集落であるという特質を明らかにするため、従来の考古学的手法に加え理化学的分析を積極的に援用することに決定した。その概要は下記の通りである。

- A. 本調査では、中期初頭から中葉期の移行期における多系統の土器が2号住から良好な一括資料として出土している。これらの土器の肉眼を中心とした型式学的手法と胎土分析による在地・非在地の推定を試みる。
  - B. 18・19号住の2軒の焼失家屋が検出され、良好な炭化材が抽出できた。2軒の樹種同定を行い、建築材の復元を試みるとともに、中期中葉から後葉期前半に該当する18号住の実年代を最新の年代測定法であるAMS法によって明らかにする。
  - C. 当該地域の主要石材の1つである黒曜石が、近年明らかにされつつある露頭単位の原産地のどこにあたるのか、またその結果に基づく流通ルートの解明を試みる。
- 以上の分析計画に加え、本遺跡で出土した土器

群の型式学的検討、さらに西山山麓の遺跡群の成り立ちと地域社会の構造といったテーマを基軸として、「松本平西山山麓における縄文中期文化の研究」という全体テーマを設定し分析を進めた。

#### 2 調査成果の普及と活用

2002年10月の朝日美術館開館に伴い、歴史民俗資料館では新たに考古資料を中心とした展示変更がなされた。そこでは、10次調査以前の発掘調査によって出土した資料について、これまで行われてきた整理作業による成果に基づいた展示が行われ、さらに本調査による出土品も一部展示を行っている。松本平における縄文中期文化の特色が分かり易いかたちで理解されるために、出土品も露出展示方法を取り入れ新たに作り直され、また屋外展示施設では、本遺跡や他遺跡の成果を踏まえ、当該地域の中期後葉期を想定した屋内埋蔵、石壇や掘炬燵状の大型石周炉、天井の網棚などの諸施設を復元している（次頁参照）。

普及活動では、整理期間中に朝日村公民館活動の一環として村内の親子を対象とした土器の復元作業の体験や勾玉作り、朝日小学校5～6年生による整理作業の体験授業などを実施した。

このような活動によって、熊久保遺跡が村民および地域住民において強く認識されることを痛感するとともに、今後、熊久保遺跡出土資料を通じた縄文時代の地域社会のさらなる解明のために本報告資料を積極的に展示・普及活動に活用していく必要があろう。

（小口）



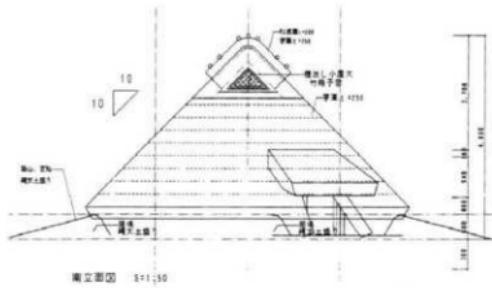
熊久保遺跡出土品展示状況



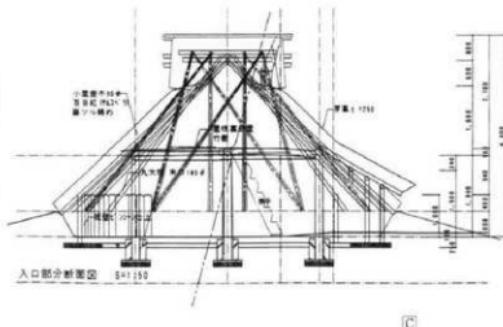
普及活動の実践



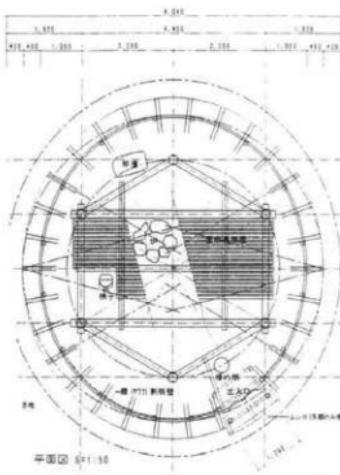
A



3



C



D

### 〈付〉 桶文中期の復元家屋について

この復元家屋は、発掘した特定の住居址を選んで、その上に作ったものでなく、かつ公園全体の景観を考えて任意の場を選んだ。復元家屋は柵文中期住居址（特に後葉）の典型的構造を備えるモデルを目指した。すなわち、幅60cm、高さ30cmの周堤をつくり、家屋には、入口に埋壠（ガラス厚板で覆う）、中央に大きな石囲炉（焚口両隅に石棒）、奥壁に祭壇（大形盤状石に土偶・有孔鶴付土器・釣手土器などと堅果類や魚肉類）と貯蔵穴、竹敷の中棚を炉上に架し屋根裏部屋とし、周壁はサワラ材の腰割板壁を巡らし、屋根との間を物置とした。屋根は他と同じ仕様で、土葺きでなく茅葺きとした。（樋口）

(插口)

## A 復元家屋の現況

[B]～[D] 復元家屋設計図

C 818.40m



A

D'

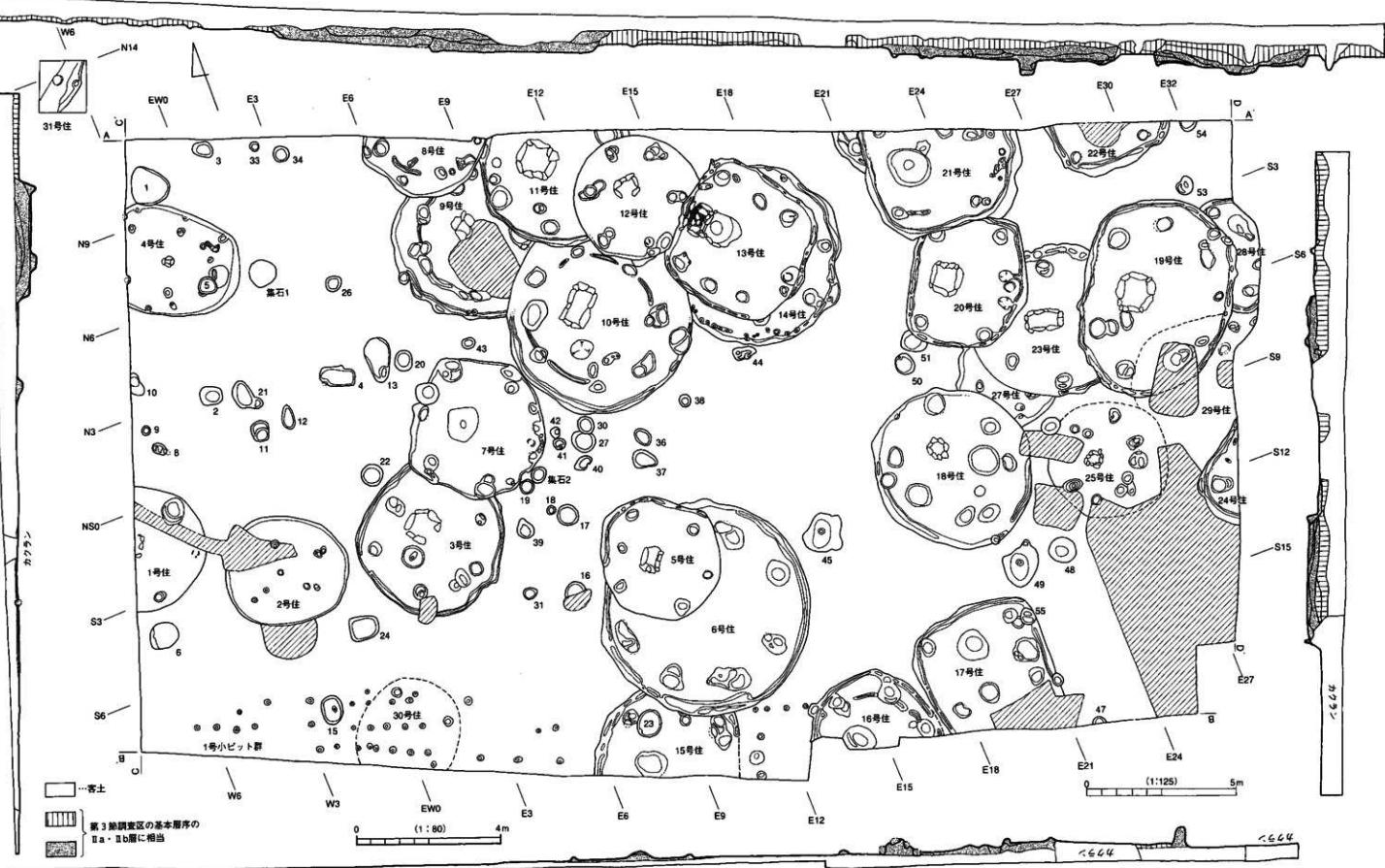
D

C

B

W0 818.40m

B



第4図 熊久保遺跡第10次調査 遺構配置図と土層図



## 第Ⅲ章 第10次調査の成果と記録

### 第1節 繩文中期土器の分類

今回の調査では、31軒の住居址（と土器集中部）より縩文中期土器が大量に出土している。本書では事実記載の便宜をはかるために、中期を前葉、中葉、後葉の3期に分け、それぞれを第I～Ⅲ群の土器に該当させた。さらに各群については、類・種の細分を行い、既存型式・類型の明らかなものは分類項目に対応させている。

#### 第Ⅰ群：中期前葉の土器

1類：平行沈線を多用する。平出第Ⅲ類A土器に比定される。

a種：地文に縩文を有する。

b種：地文の無いもの。

2類：B字文、バネル状文様など半截竹管工具によって施文される。新崎式もしくはその影響による土器に比定される。

a種：地文に縩文を有する。

b種：地文に細密沈線を有する。

3類：指頭圧痕文（輪積み痕）を残す一群。

a種：角押文を伴い、梢円区画文やクランク文が施文される。広義の猪沢式に比定される。

b種：角押文を伴わないもの。

4類：いわゆる五領ヶ台式（梨久保式）土器に相当する一群。

a種：縩文系土器

b種：沈線文系土器

5類：口縁部が肥厚し、縩文が施された東海系もしくは西日本系と想定されるもの。

#### 第Ⅱ群：中期中葉の土器

1類：胴下半に連続弧線文がめぐり、区画内に

沈線文が施された樹形文土器。

a種：波状口縁を呈し、波頂下にタマゴ状区画文を有するもの。

b種：口縁部に方形・梢円・弧線区画文を有するもの。

c種：口縁部に人體文を有するもの。

2類：無文口縁を有し、胴部に条線文・横位綴蒂沈線文が描かれるもの。梨久保B式に比定される。

a種：頸部に文様帶を有する3帶構成。

b種：口縁部・体部の2帶構成。

3類：口縁部に褶曲文・重弧文を描かれるもの。梨久保B式に比定される。

a種：隆線によって描かれるもの。

b種：沈線によって描かれるもの。

4類：口縁部が無文で、胴部に条線文を有するもの。曾利式に比定される。

5類：隆線による波状区画文と、綴位沈線や三叉文などが充填される一群。井戸尻I式に比定される。

6類：縩文施文による素文系土器。

a種：頸部に波状隆線がめぐるもの。

b種：縩文のみ施文。

#### 第Ⅲ群：中期後葉の土器

1類：地文に綾杉状沈線文を有し、腕骨文や渦巻文が施文されるもの。

a種：キャリバー形を呈し、2単位もしくは4単位の把手を有するもの。いわゆる腕骨文土器に比定される。

b種：タル形器形を呈するもの。

c種：4類との折衷型。

2類：地文に櫛歯状条線文を有し、腕骨文や渦巻文が施文されるもの。

3類：地文に条線文を有し、渦巻文や蛇行沈線が施文されるもの。曾利式に比定される。

a種：口縁部が肥厚し、窓枠状区画を有するもの。

b種：口縁部に連弧文を有するもの。

c種：両耳鉢。もしくは鉢形土器。

4類：地文に縄文を有し、口縁部に渦巻つなぎ弧文を描くもの。加曾利E 2～3式に比定される。

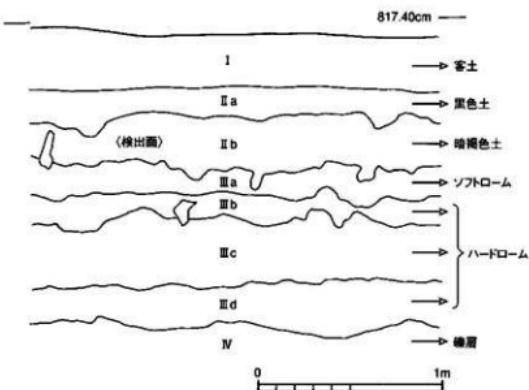
(小口)

## 第2節 調査区の基本的層序

本遺跡が立地する河岸段丘は、波田疊層とよばれる今から4万～2.7万年前に堆積した疊層を基盤としている。IV層以下が相当している。(第5図)

次にこの疊層の上部に波田ローム層が2～3mの厚さで堆積している。これは今から1万～3万年前に御岳火山・乗鞍火山が数回噴火した時の降灰とされている。(IIIa～IIIc層が相当)

IIa～IIb層は腐食土層で土器片を含む。遺構の覆土と考えるが黒色～黒褐色を呈しているためどの高さから遺構が掘りこまれているか、すなわち当時の生面を把握することは困難であった。従って今回



第5図 調査区の基本的層序

の調査ではIIIa層上面を遺構検出面とした。

(今村)

## 第3節 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で縄文時代の住居址とした31軒には、以下のものが含まれる。

- ①いわゆる竪穴住居址とされる、地面を掘り込んで作られ、炉址や柱穴などの施設を持つもの(2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・15・16・17・18・19・20・21・22・23・27・28号住居址)
- ②工事で上部が削平され、床面の一部と炉址が確

認されたもの(1・25号住居址)

- ③調査区以外に遺構がかかったり、住居址に切られる事から全体の形状は不明だが、壁と考えられる掘り込みや周溝などから住居址としたもの(14・22・24・26・29・31号住居址)

- ④柱穴や遺物などから住居址としたもの(30号住居址)

- ⑤については、住居址の可能性はあるものの豊

穴状遺構あるいは、不明遺構にする慎重な考え方もあるが、あえて住居址としてカウントした。特に、14・22・24・31号住居址について炉址はないものの、今回の調査では長径1m以上の土坑は確認されていないことや、住居址と切り合う土坑もほとんどない点から、土坑に区分される可能性の方が低いと判断した。しかし、26・29号住居址については慎重に扱った方が良かったかもしれません、今後の検討課題としたい。

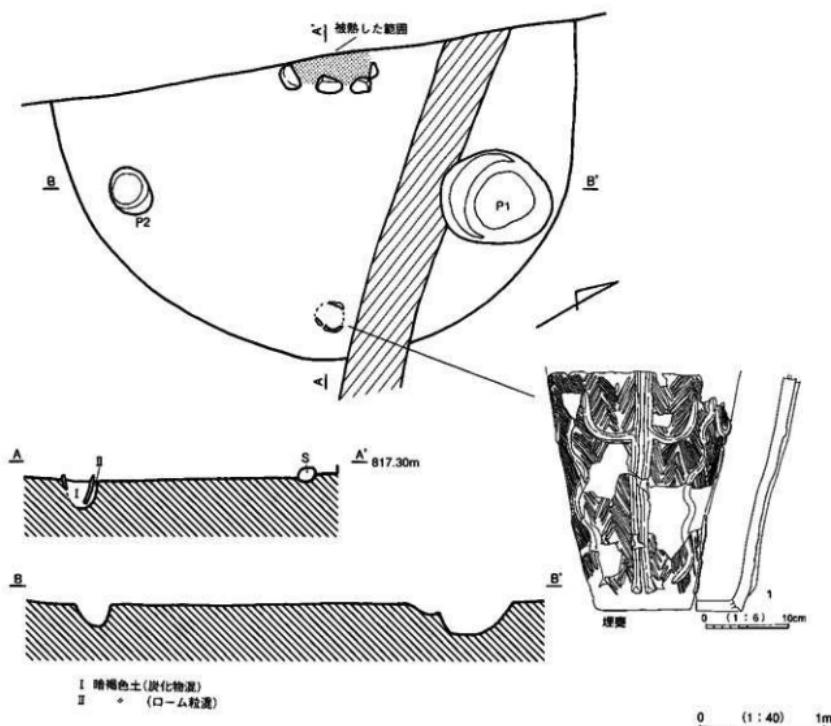
次に住居址の記述について、規模は主軸とそれに直交する軸を測り長軸×短軸の順に表した。炉址については、石囲い炉は内法ではなく外側で測り、長軸×短軸で示した。それ以外の形態につい

ては各項で述べてある。住居址内ピットについての記述では、主柱穴あるいは建て替えや拡張に伴う柱穴と考えられるものを主に図示した。紙数の都合からピット番号、土層図を示していないものがある。  
(今村)

### 1 第1号住居址（第6図、図版1・24）

**位置** 調査区西壁際に位置する。切り合いはない。  
**規模・形状** 遺構の半分程度が調査区外にあるため推定値となるが、 $4.8m \times 4.4m$  や縦長の円形と思われる。

**検出・調査状況** 重機で表土剥ぎした後、検出作業で固くたたきしめられた床面と、炉址と思われ



第6図 第1号住居址

る石組みを確認した。調査区南西部は過去の造成工事で大きく削平されていたため、住居址の上部はすでに失われてしまったと考えられる。その後の調査過程で埋甕が発見されたことから、残った床面などを参考に住居址の範囲を想定した。埋甕と炉址中央を結ぶ線が主軸になろう。

**柱穴** P1、P2が柱穴と思われる。深さはP1・26cm、P2・20cmを測る。

**炉址** 規模は不明だが調査区内に残った部分から石囲炉と考える。内面は赤く焼けて固くしまってある。  
(今村)

#### 遺物

**a 土器** 1は口縁部が欠損した埋甕である。胴部には、大柄渦巻文が退化したサボテン状の主モチーフと蛇行隆線が垂下し、地文には綾状沈線が施文されている。

**所属時期** 第Ⅲ期  
(小口)

### 2 第2号住居址 (第7~14回、図版2・24)

**位置** 調査区南西に位置する。切り合いはない。規模・形状 4.2m×3.8m。やや縦長の円形。

**検出・調査状況** 単独に存在しているので平面形は明瞭に把握できた。北側の一部は工事によるカクランを受け、南側は同じく工事による削平を受けている。壁は東側10cm、西側11cm、南側14cm、北側35cmが残る。調査は土層観察用のベルトを残して掘り進めた。覆土Ⅰ層(黒褐色土)中に10~50cmの礫・土器片が多数検出された。下層のⅡ~Ⅲ層中からは遺物・礫などがほとんど出土していない。ある程度自然埋没した段階で礫・土器が廃棄されたと考えられる。

**柱穴** P1~P3が主柱穴と思われる。深さは、P1・36cm、P2・37cm、P3・51cmを測る。4本主柱の北角にあたる柱穴は工事で失われた可能性が高い。内側のP4~P7は拡張前の柱穴と思われる。深さは、P4・43cm、P5・47cm、P6・20cm、P7・30cmを測る。

**炉址** 住居址ほぼ中央にある。小型の深鉢胴部を

正位に埋め込んで炉としている。内部には焼土粒、炭化物を含む暗褐色土がつまる。炉址南東側の床面は、赤く被熱している。  
(今村)

#### 遺物 (第9~14回)

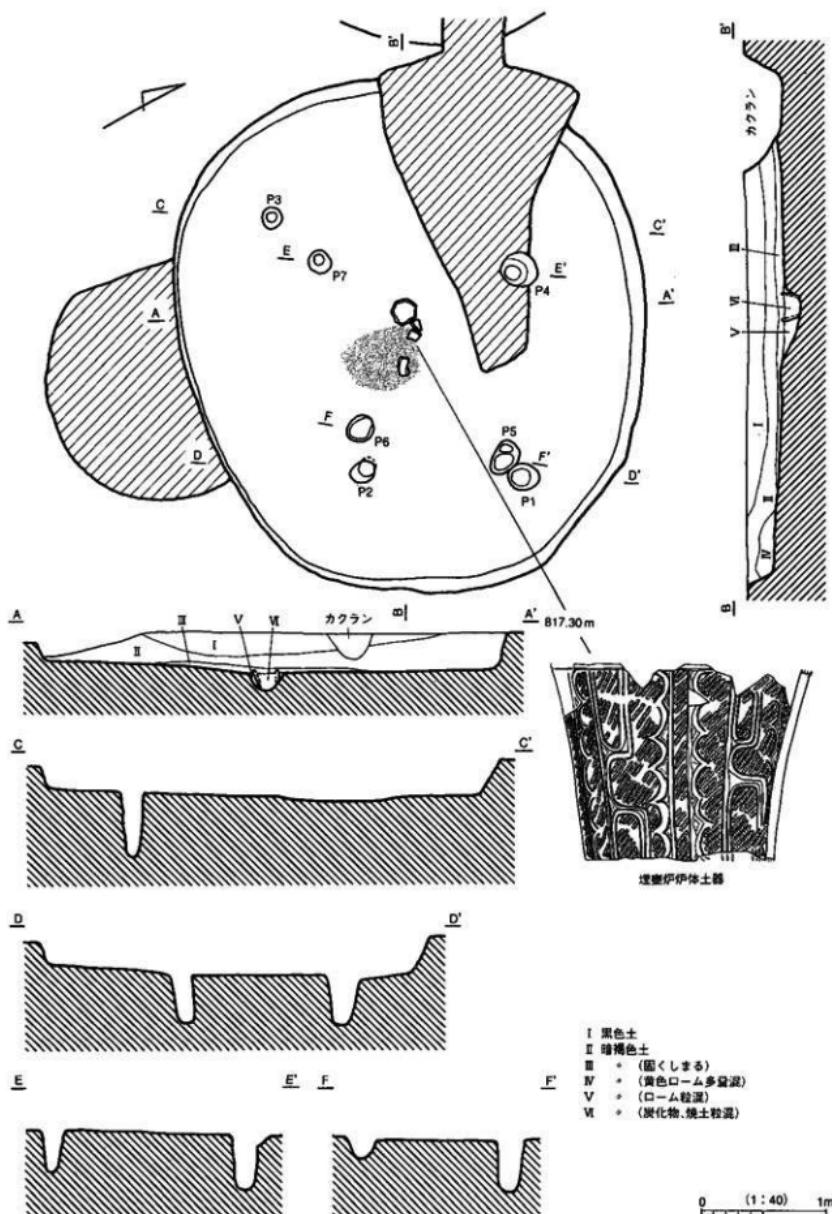
**a 土器** 2号住からは中期前葉から中葉にかけての数系統の土器群が一括して帶びて出土している。

1は炉体土器であり、口縁部と胴部において意図的に打ち欠きが行われ欠損している。また、炉体として被熱を受けているため、胴部全体が赤味を帯びている。文様は、頸部に1条の平行沈線がめぐり、体部との区画がなされている。そこから2本の平行沈線と継位の連続弧線文が組み合わさった、いわゆるB字文とクラシク文が垂下している。これらのモチーフは、地文繩文が施文された後、半截竹管工具によって描かれている。

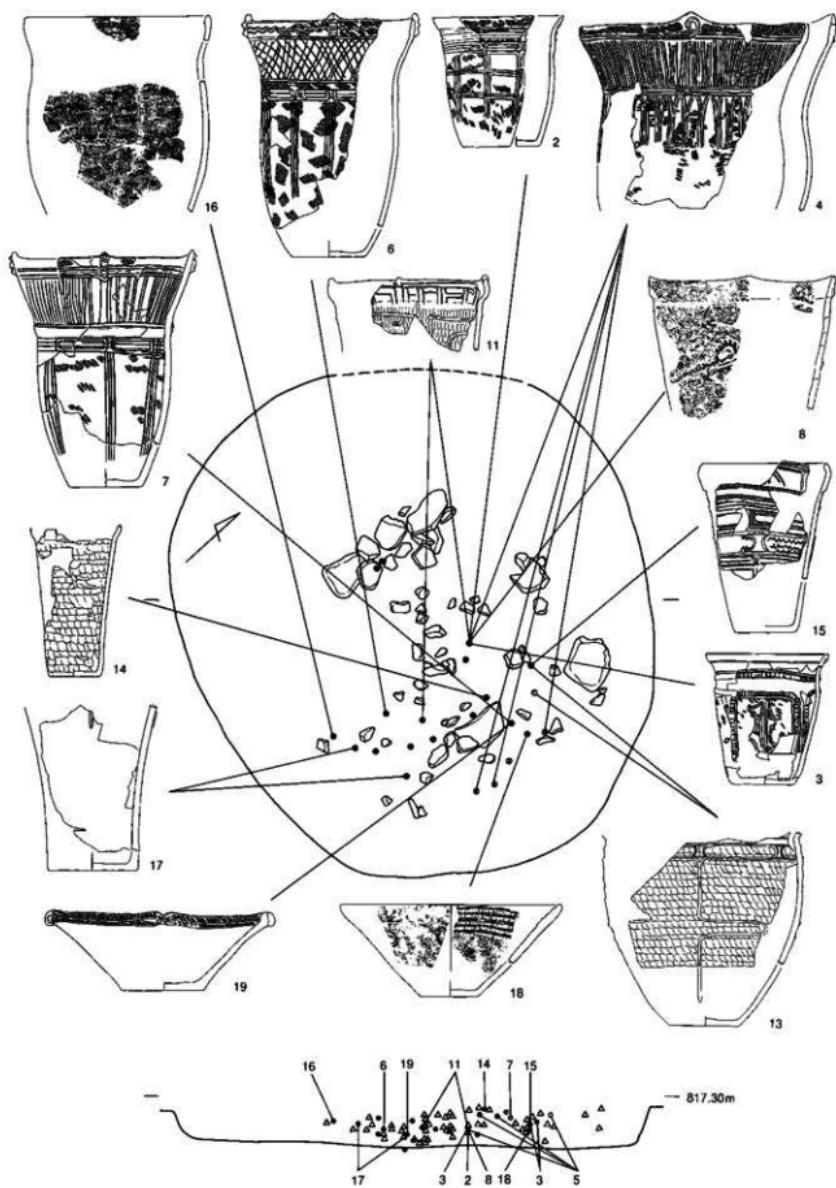
2は口縁が緩やかに外反し、胴部が筒状の器形を呈している。折り返し口縁上にはRL繩文が施され、頸部には2条の帯状隆線と平行沈線が重疊化し横走する。頸部と胴部の境には、楕円状の平行沈線文が施文され、平出第Ⅲ類A土器との共通性が窺える。胴部には地文繩文施文後、半截竹管工具によって、パネル状の方形区画文が描かれている。

3は口縁が緩やかに外反し、頸部がやや括れる短胴のキャリバー形深鉢である。口縁部は折り返され肥厚し、頸部に1条の隆線がめぐって文様帶が区画されている。胴部の逆U字区画文とともに隆線上は半截竹管工具によって直角方向から刺突を行っている。区画内はLR繩文が施文された後B字文や重弧文が描かれている。1~3は北陸地方に分布する新崎式の影響を受け在地で製作された土器と考えられる。

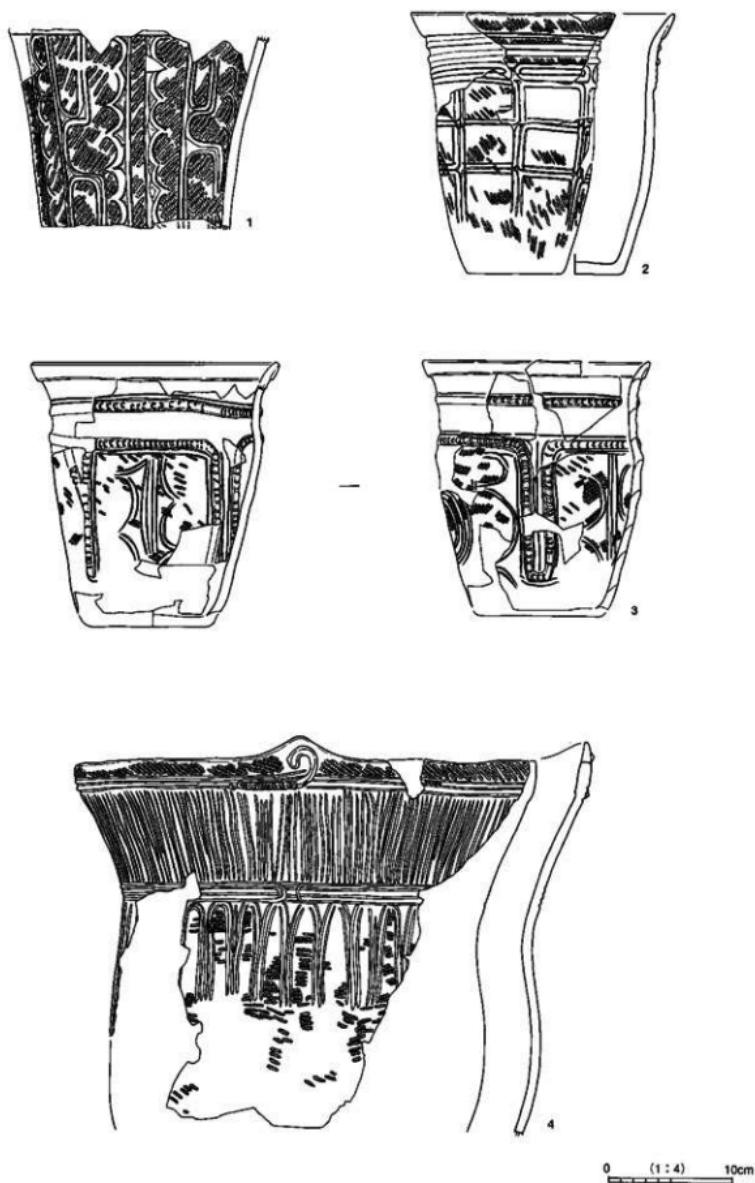
4~7は中期前葉沈線文系土器(三上1987)の系譜を辿ることができる広義の「平出第Ⅲ類A土器」(以下「平出ⅢA」に省略、永峯1955・塙田1963・鶴岡1977)に該当する。器形は口縁部が「く」の字状に屈曲して直立、頸部が括れるキャリバー



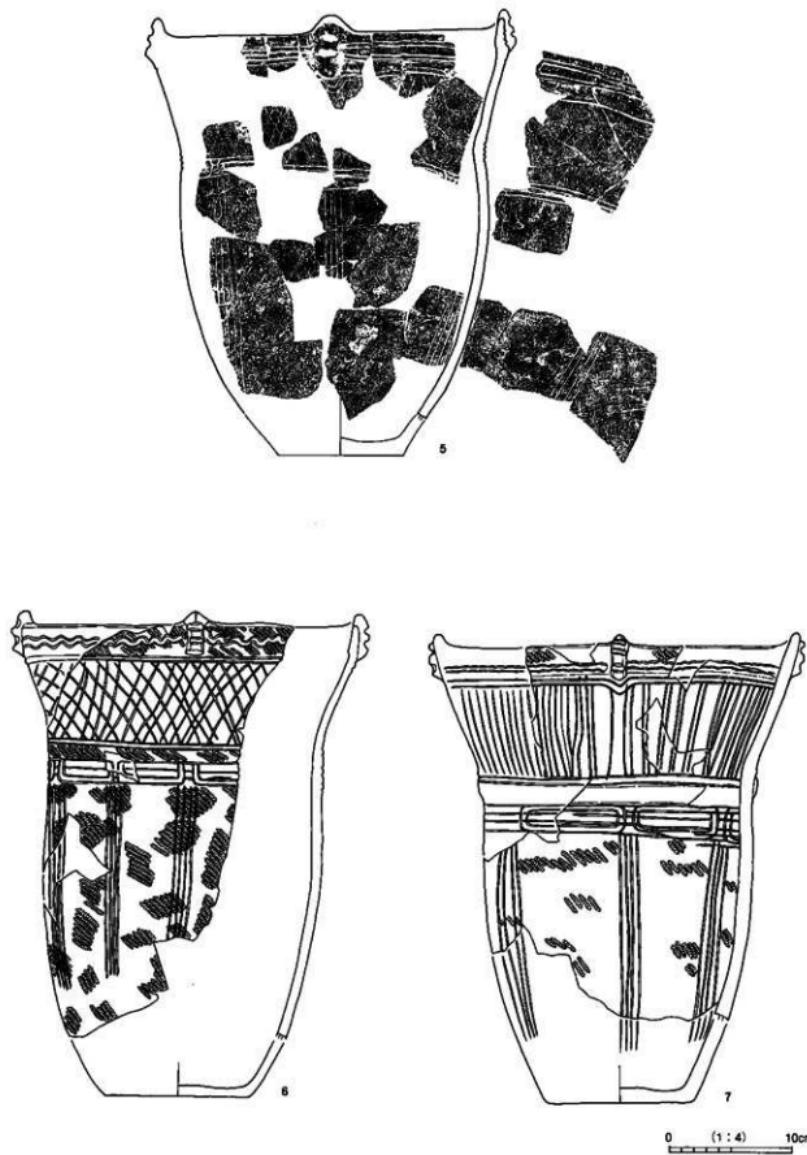
第7図 第2号住居址



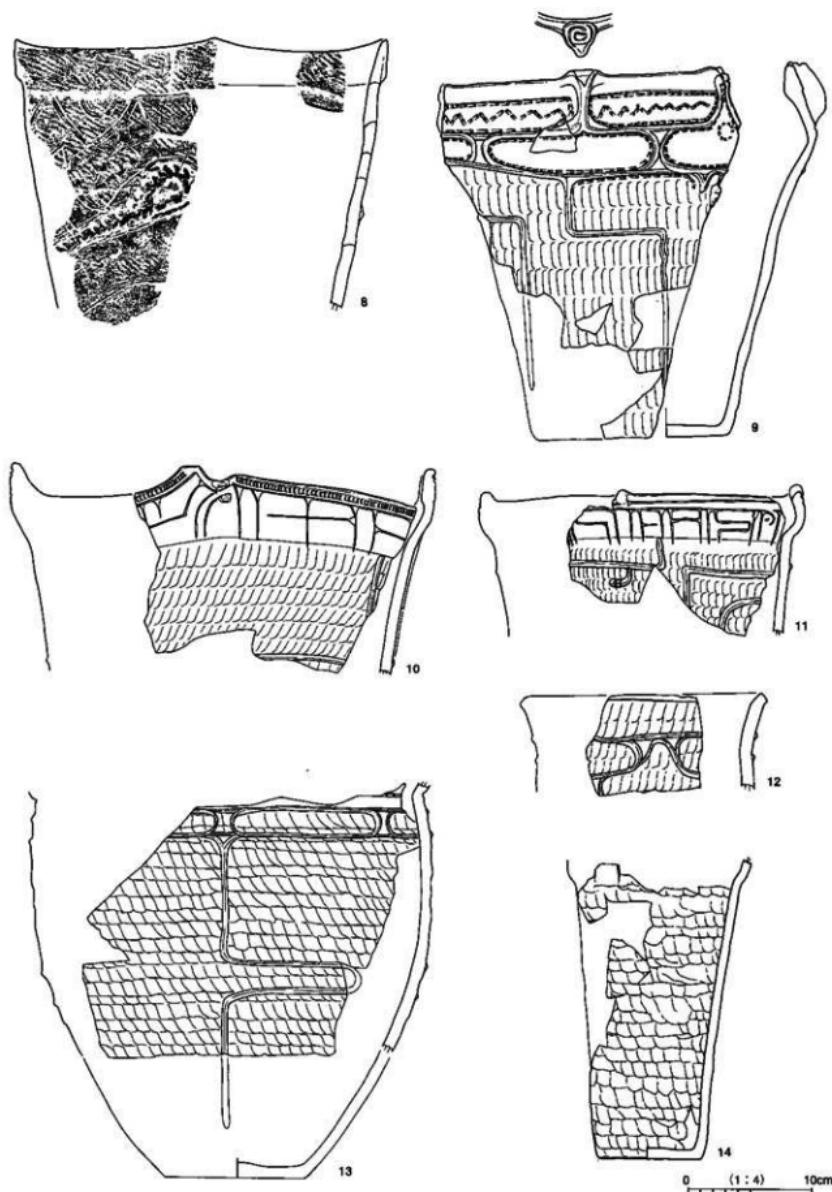
第8図 第2号住居址遺物出土図



第9図 第2号住居址出土土器（1～4）



第10図 第2号住居址出土土器（5～7）

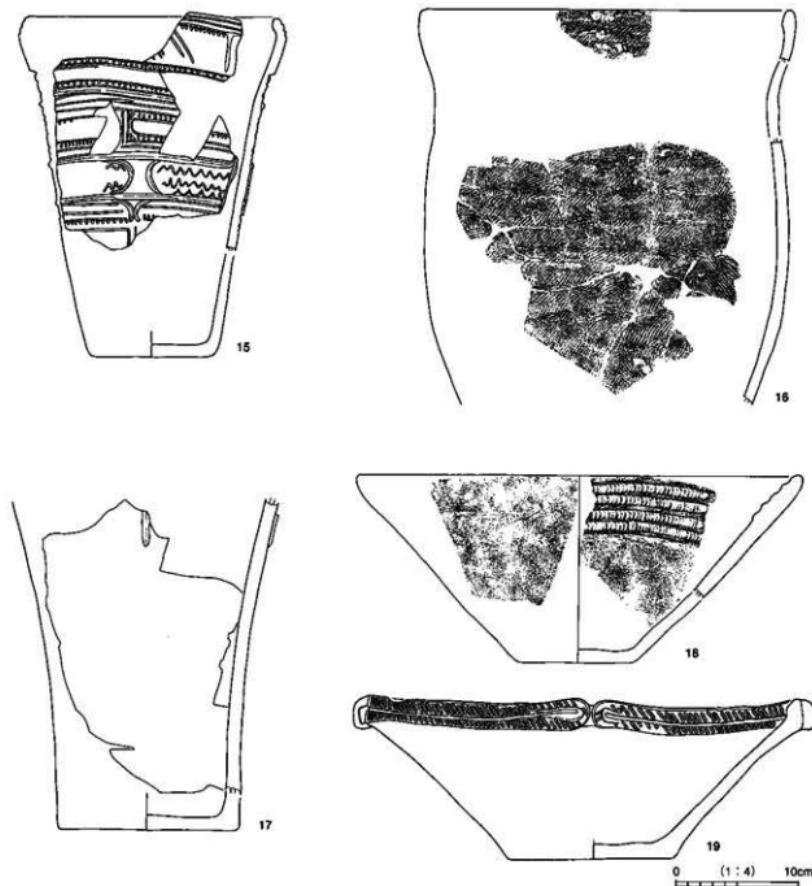


第11図 第2号住居址出土土器（8～14）

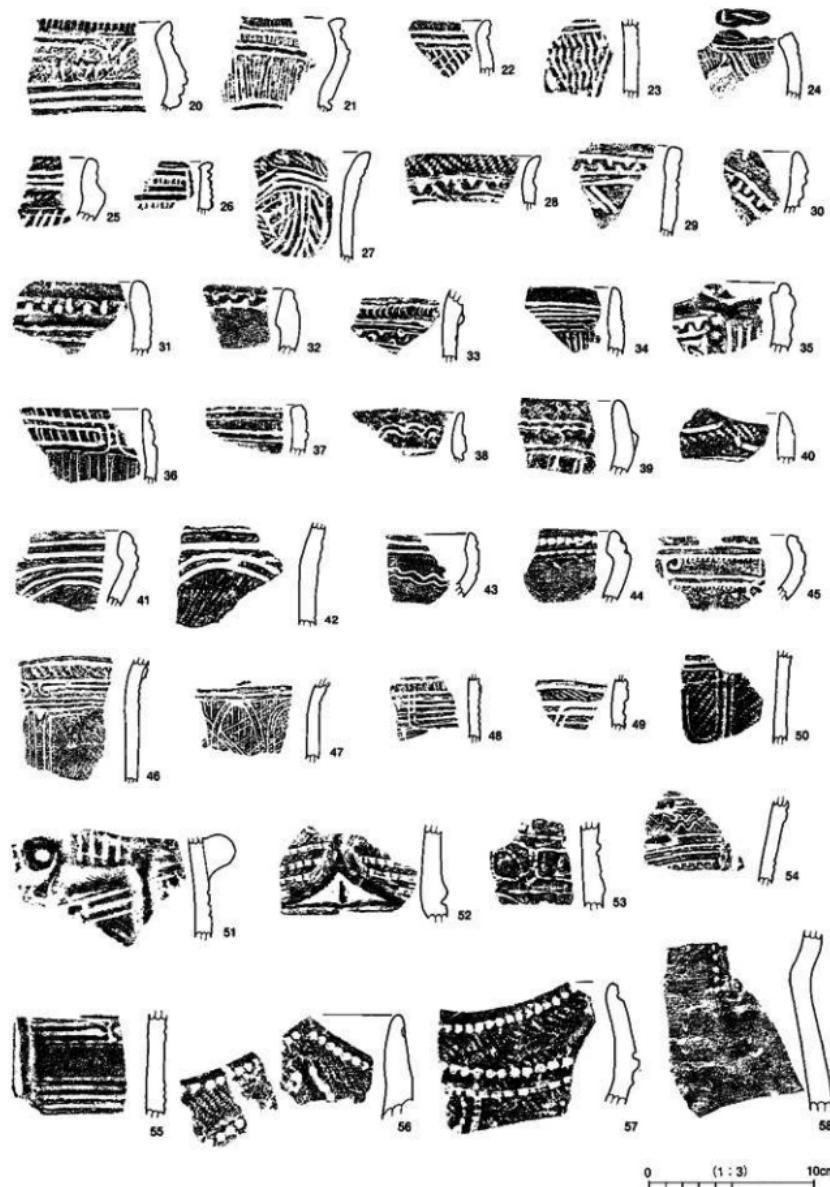
形である。4は最も大型で口縁部の中心に刺突が施された渦巻文が付き、幅狭の文様帯にRL繩文が施され、頸部文様帯との境に平行沈線がめぐって区画されている。頸部には継位の集合沈線、胴部との間には梢円帯状文がめぐって体部の逆U字状文が描かれている。繩文を地文として施文する本例と6・7、モチーフのみの5の二者が認められるが、本段階では繩文を施文されたものが多い傾

向にある。逆に体部の意匠については5・6・7にみられるような直線状態垂文が一般的であり、逆U字文はむしろ少ない。

5～7は小波状線を呈し、波頂下に短隆線を貼付して上下2段の凹線を施す典型的な平出III Aである。口縁部文様帯は半截竹管のハラ側によって並行沈線もしくは波状沈線がめぐらされ、頸部には斜格子目文や平行沈線が施されている。いずれ



第12図 第2号住居址出土土器(15~19)



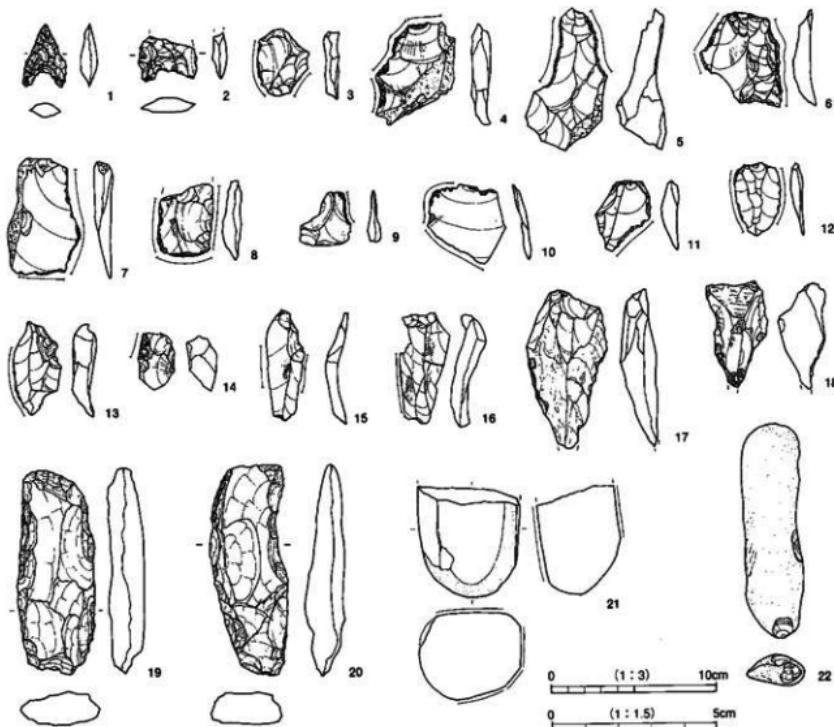
第13図 第2号住居址出土土器 (20~58)

も、胎土には大型の長石や砂粒が混入され、黒褐色～暗灰褐色の色調であることも特徴となっている。これは、後段で述べるが指頭圧痕を有する一群の土器群と際立った違いをみせる要素であり、型式学的分析に加え胎土を通した理化学的な分析が必要と考え分析を試みた（水沢論考参照）。

8は緩やかに外反した器形で、おそらく4単位の波状折り返し口縁を有する土器である。折り返し部が2、3よりも幅広で、内面整形が粗く指頭圧痕が残り平滑化していない。地文は器面全体にRL繩文が施され、半截竹管のハラ側による弧線文と断面三角状隆線によって「L」字状モチーフ

が描かれている。この隆線モチーフ上面に半截竹管による刺突文が連続的に施されるが、おそらく東海地方の影響を受けた在地的な土器であり松本盆地周辺には類例が少ない。

9～14は指頭圧痕文（輪積痕）を有する一群である。9は口縁部が内湾し、中心部に橋状把手が付くことが特色である。把手頂部には渦巻文がみられ、そこを基点として2段の横帯区画文が形成され、波状文や区画に沿って角押文が充填される。同時に把手下段から胴部に向かってクランク文が垂下し、主モチーフとなっている。胴部は輪積成形と連動しながら指頭圧痕が全面を覆って装飾効



第14図 第2号住居址出土石器（1～22）

果を上げている。以上の特徴から、本例は猪沢式に比定されよう。12・13は隆線による楕円区画やクランク文、地文の指頭圧痕文を有している点で9に共通する。12は胴部が円筒形で外剥ぎ状の口唇部が外反する。胴部の横帯区画はおそらく2段構成と思われる。13は胴部が大きく張るキャリバー形深鉢で、口縁と頸部の間に角押文がめぐっている。胴上半の横帯楕円区画からクランク文が派生している。

10・11・14は口縁が開きながらやや内湾した器形を有している。頸部以下は指頭圧痕文が展開することは共通するものの横帯楕円区画文がみられない点が12・13と異なる。10は波状線を呈し波頂部中心が窪んでいる。口唇部に沿って、やや幅広の角押文が引かれ、ヘラ状工具によってT字文・Y字文が細深く施文される。11は口縁部に沿って沈線がめぐり、その下部に丁字文・H字文、さらに玉抱文、胴部の小クランク文先端に2対の刻みが施されている。14は細長い円筒形を呈した胴部を有するが、口縁部が欠損しているため詳細は不明である。ただし、頸部においてわずかに丁字文の下半がみられるため、10・11と同類と考えられる。以上の指頭圧痕文系土器は、いずれも赤褐色を帯び内面整形が丁寧であり、焼成がやや不良であることが特色として指摘できる。

胴部が開きながら口縁部が緩く内湾している15は本住居址からはまとまった状況で出土していない。口唇は2条の平行沈線がめぐり、その下部に浅いT字文が描かれる。また、頸部にも2本の沈線がみられ、上段の線にかかるように連続刺突文が施文されている。この特徴は胴部にも共通する要素である。胴部は多段区画がなされ、区画内に波状沈線・平行沈線・楕円文等が充填されるが、いずれも棒状工具による浅い沈線でありこの点が9とは異なる。文様要素や整形・色調等の特色は指頭圧痕文系と共に通している。

16はキャリバー形を呈する縄文施文のみの素文系深鉢である。LR縄文が施されるが器面の劣化

が著しい。17は口縁部が欠損し不明であるが、断面三角状の隆線が口縁から頸部にかけて垂下している。器面はヨコナデ整形であり、文様は施されていない。18・19は浅鉢で、19は口縁部が屈曲して立ち上がり、隆線が楕円状に貼り付けられている。隆線上には縄文が施文される。一方、18は直線的に外反した口縁下内面に、4条の押引文が施された中期初頭に伴う典型的な浅鉢である。

20～23・25～27は沈線文系の破片資料であり、「く」字状に内折する口縁部上端に押引文がめぐり、継位沈線や格子目状の細沈線が引かれている。24は暗褐色の色調を呈し、小突起が付き平行沈線区画内に細沈線が充填されている。28～33・35は口縁部に交互刺突による波状文が施文される一群であり、口縁部に縄文が施される28、突起を有する35、隆線上に押引文が引かれる33が認められる。この交互刺突による波状文が簡略化して平出III A系統の38・39の波状文と37の平行沈線文へと変化していくことがこれらの資料によって確認できよう。46～49はこれらの胴部破片であり、帯状隆線上に縄文が施され、懸垂文がみられる。B字文が描かれる50は北陸系土器であろう。一方、41・43～45は縄文が施されず、波状文や弧線文が施文される一群である。45は内湾した口縁部に丁字文と小渦巻文を組み合わせた文様が描かれ、沈線直下に刺突が連続的になされている。54は横帯楕円区画内に波状沈線が充填されている15と同一個体であろう。55は平行沈線による半隆起線が重複化し、隆線が垂下している。52～53は角押文が引かれる一群、56・57は波状口縁で口縁部が肥厚し、口唇部に沿って円形刺突文が施されている。地文がRL縄文であるが、西日本系の土器が在地化したものと想定される。

**b 石器** 1・2は凹茎式の石鎌であり、2は先端部が欠損している。3～16は小形刃器であり、多くが二側縁に微細な剥離痕を残している。17・18は石錐であり、表面に環面を一部残した状態で、先端部を作り出す加工が施される。19・20は打製

石斧であり、19は短冊形、20は一側縁が外湾している。21は磨石ではほぼ全面にわたって使用痕が認められる。22は叩石で、先端部に剥落痕を残す。

**所属時期 第Ⅱ期** (小口)

### 3 第3号住居址 (第15・16図、図版3)

**位置** 調査区中央西寄りに位置する。7号住居址に切られる。

**規模・形状** 5.04m×5.0m。方形に近いが、南西、北西、北東方向の壁がやや丸みを帯びる。南東側は外に張り出す。

**検出・調査状況** 7号住居址と重なる部分にサブトレンチを設定して、切り合い関係を確認した。7号住居址が本址の床を一部壊して掘り込んでいることから、本址が古ないと判断し掘り進めた。工事による削平を受け、東壁5cm、西壁7cm、南壁3cmが残るだけであった。P5と炉址中央を結ぶ線を主軸と考える。

**周溝** 壁際に9~16cmの深さで一条巡る。

**柱穴** P1~P6が主柱穴と考える。深さは、P1・31cm、P2・53cm、P3・37cm、P4・40cm、P5・50cm、P6・36cmを測る。P7は浅い皿状のピット。

**炉址** 住居址中央奥壁よりにある。規模は、116cm×98cm、深さ30cmを測る。深く掘りこまれた内部は赤橙色に焼け固くしまっている。平らな石をたてて五角形に組んだ石圍炉である。

**遺物出土状況** 削平が著しく、遺物は少ない。炉の西側床面上に、破片ではあるが1が出土し、炉の覆土上面から3が出土している。 (今村)  
遺物 (第16図)

**a 土器** 1は4単位の大型把手を有する第Ⅲ群1類a種(米田1980)である。キャリバー形の深鉢で、把手部下端から渦巻つなぎ弧文が展開し、さらに口縁部文様帶の下端区画を隆線によって行っている。区画内には縦線沈線が充填される。胴部に主モチーフとしての腕骨文と綾杉沈線が描かれている本例は、松本盆地を中心に北信地方の窓遺跡(森嶋1991)、さらに新潟県の笠山遺跡(十

日町教育委員会1998)等に類例が認められることから、かねてから想定されたように越後方面との強い繋がりが指摘できよう。

3・5・6は地文に櫛歯状工具による細沈線を有する同2類で、3は直線・蛇行沈線が、5はY字文、6は弧線文が描かれている。いずれも、地文条線→モチーフといった施文順序をとる。7~9は内湾した口縁部破片であり、隆線による渦巻文と縦位沈線が施されている。大木8b式、もしくは加曾利E2式との関連が想定される。10・11は垂下隆線と綾杉文がみられ、在地の沈線文系土器に該当しよう。12~14・16は縄文系土器であり、波状口縁に横状把手が貼付された12、扁平隆線による渦巻文を有する13、頸部の平行隆線間にジグザク文がめぐる14、そして3本の懸垂文と蛇行沈線が描かれている16があり、16は加曾利E2式に比定されよう。山形突起の正面と頂部に渦巻文が描かれる15は沈線文系土器に属される。

**b 石器** 1は円盤状の素材剥片の周縁部に加工を施した大形刃器である。礫面を残した素材を用いるものが本遺跡では多い。2・3は小形の剥片に微細な剥離痕を残した小形刃器である。

**所属時期 第Ⅵ期** (小口)

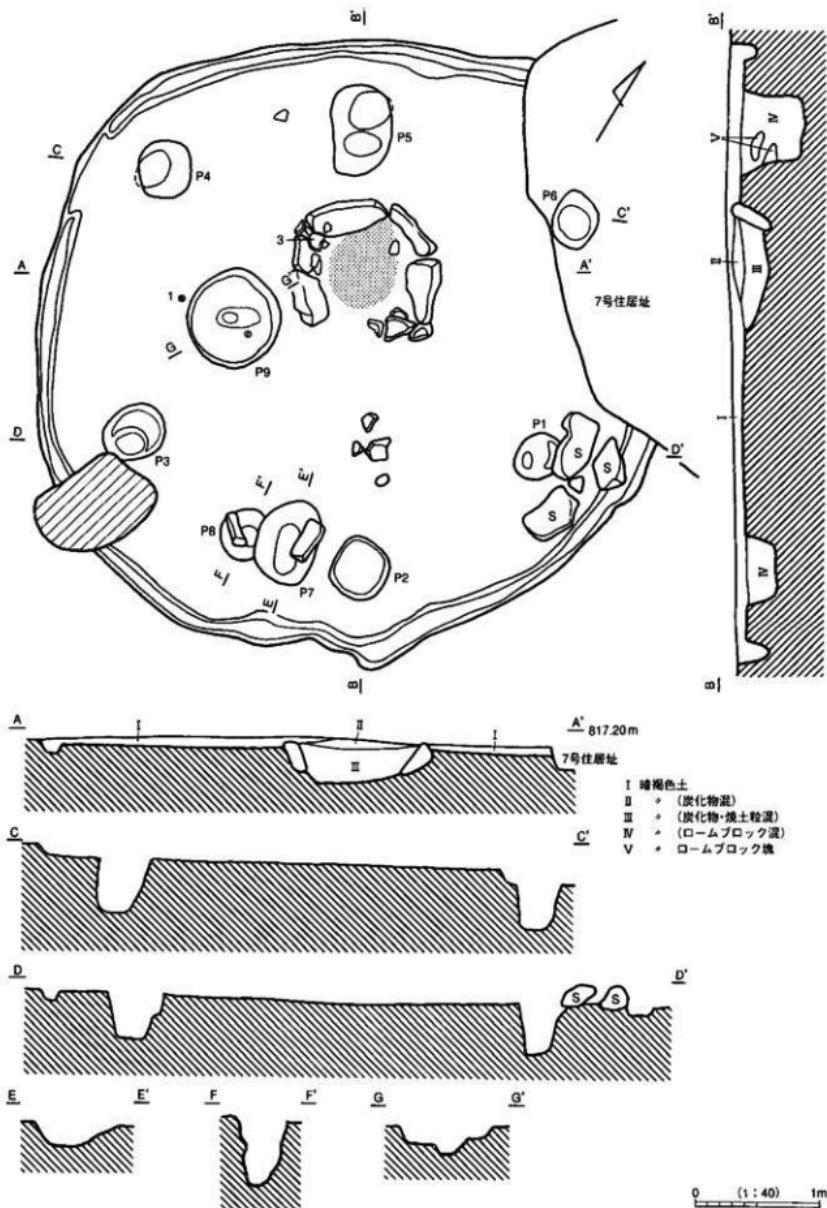
### 4 第4号住居址 (第17・18図、図版4)

**位置** 調査区北西に位置する。土坑5が切り、土坑1が接する。

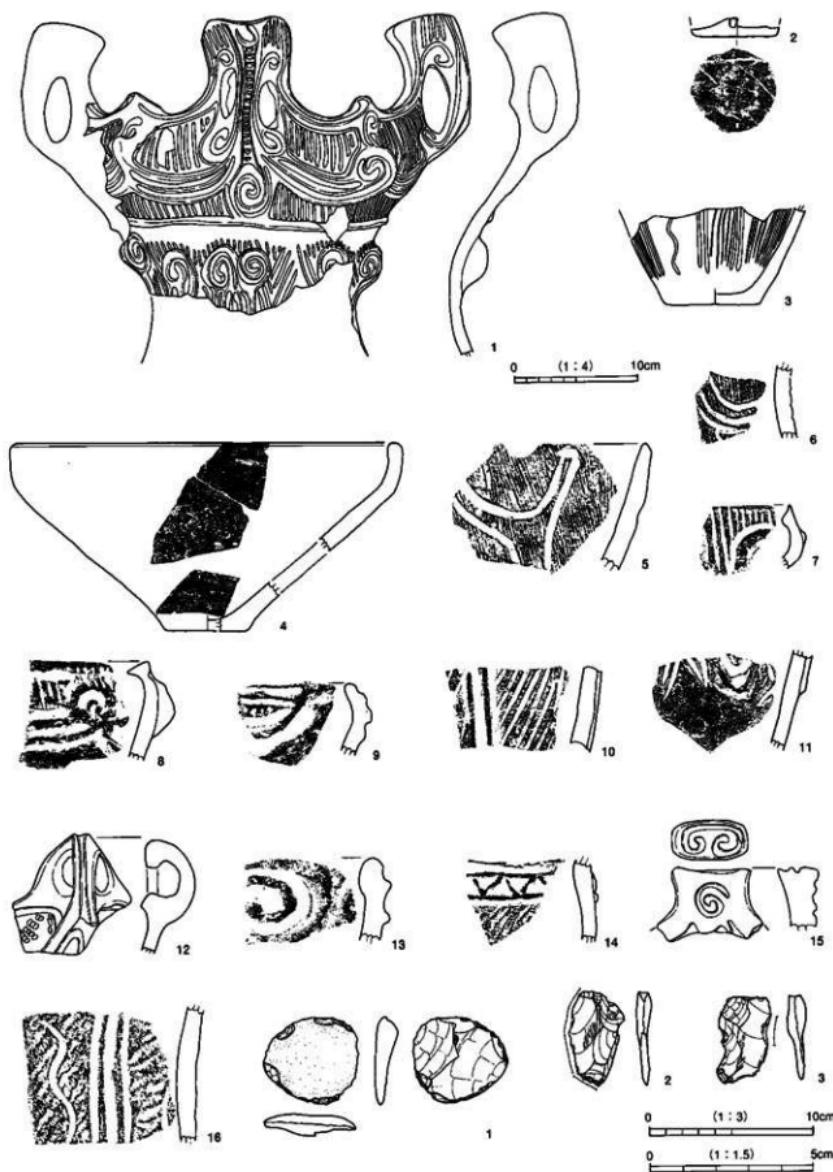
**規模・形状** 住居址北西部が調査区外になるため、長軸は推定値になるが5.0m×3.6mの長円形と思われる。壁は、東36cm、南38cm、北30cmが残る。

**検出・調査状況** 単独に存在するため検出は容易であった。覆土は大きく4層に分けられ、I'層からは土器片や、拳大~人頭大の礫が出土しているが量的に多くない。下層のII~IV層中からは遺物の出土がほとんどない。自然埋没と考えられる。床は黄色ロームを固くたたきしめてある。

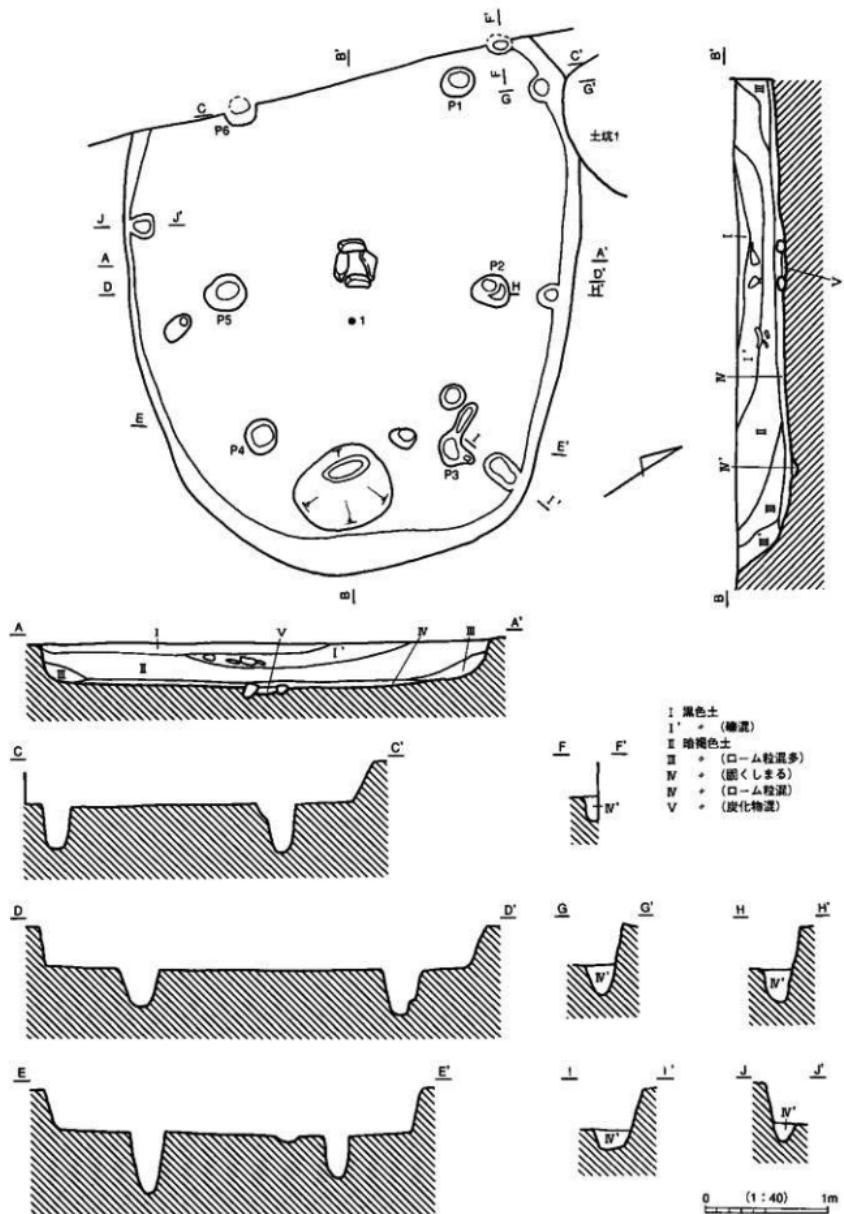
**柱穴** P1~P6が主柱穴と考える。深さは、P1・40cm、P2・38cm、P3・35cm、P4・48cm、P5・32cm、



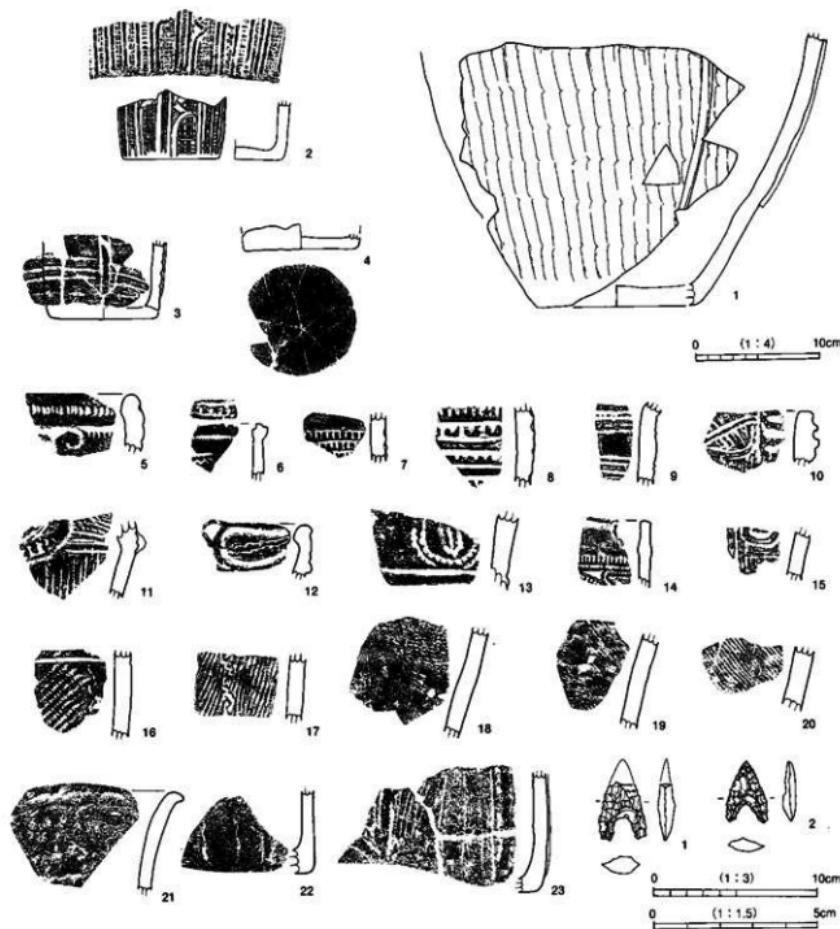
第15図 第3号住居址



第16図 第3号住居址出土土器 (1~16)・石器 (1~3)



第17図 第4号住居址



第18図 第4号住居址出土土器（1～23）・石器（1・2）

P6・34cmを測る。北壁際にP1～P3と同じ間隔で直

径18～20cmと一回り小さいビットが3ヶ所並ぶ。

南壁中央壁際にも同様のビットが1ヶ所あり、上屋を支える補助的な柱が考えられる。

**炉址** 住居址中央にあり、石囲炉である。規模は、36cm×32cmと小さく深さ10cmを測る。焼土混じりの暗褐色土が入っているが、内部は焼けていな

い。

（今村）

遺物（第18図）

**a 土器** 1は円筒形深鉢の底部である。半截竹管によって縱位区画がなされ、B字文が施されている。その間隙には、細沈線による格子目文が充填され、15の破片資料と合わせ北陸系新崎式と考えられる。2は胴が大きく膨らんだ器形を呈す

る指頭圧痕文を有する土器であり、クランク文が垂下している。3は円筒形の胴下半部である。1本の隆線が垂下し、その間際に2~3本の沈線が横走している。5~8は横位の平行沈線上に連続刺突文が施された一群であり、5には小渦巻文が施文される。6は口唇部に刺突文が施されている。10は口縁部破片であり、継位の短隆線上に3段の凹線がみられる。11も同類型と考えられる。12は格円区画内に波状沈線が描かれた口縁部破片である。13・14は押引文が施文された一群で、前者は弧線モチーフが、後者は口縁部の無文帯を挟んで三角形区画文が展開して、連続押引文が充填されている。焼成が良好で器面整形も丁寧であることが特色である。16~20は繩文施文がなされた胴部破片である。16・17は結節繩文がみられることから、やや古い様相を帯びる。21は無文の外反した口縁部破片、22・23は下開きの底部であり、23には垂下隆線と擦痕が認められる。

**b 石器** 本住居址から1・2の2点の石鎚が出土している。いずれも凹基式であり、長身で抉りが深いことが特徴であろう。

所属時期 第II期 (小口)

### 5 第5号住居址 (第19~21図、図版5・25)

位置 中央南寄りに位置する。6号住居址に床を貼る。

規模・形状 5・6号住居址を通すサブトレントを設定し、断面を観察したところ6号住居址覆土中に、黄色土ロームを5~10cmの厚さに敷いた本址の床面が確認できた。時間的制約もあり、2軒の新旧関係だけ把握して、同時に掘り進めた。本址東側壁の立ち上がりは、検出困難であったので貼り床の範囲を参考に住居址の平面形を想定した。壁は北側で20cm残る。

検出・調査状況 炉址と埋甕の間に人頭大~拳大の角礫十数個が散在して検出された。11号住居址などにも類例がある。1は埋甕で蓋石が乗る。正面で埋めてある。4は住居址北西床面上に口縁を

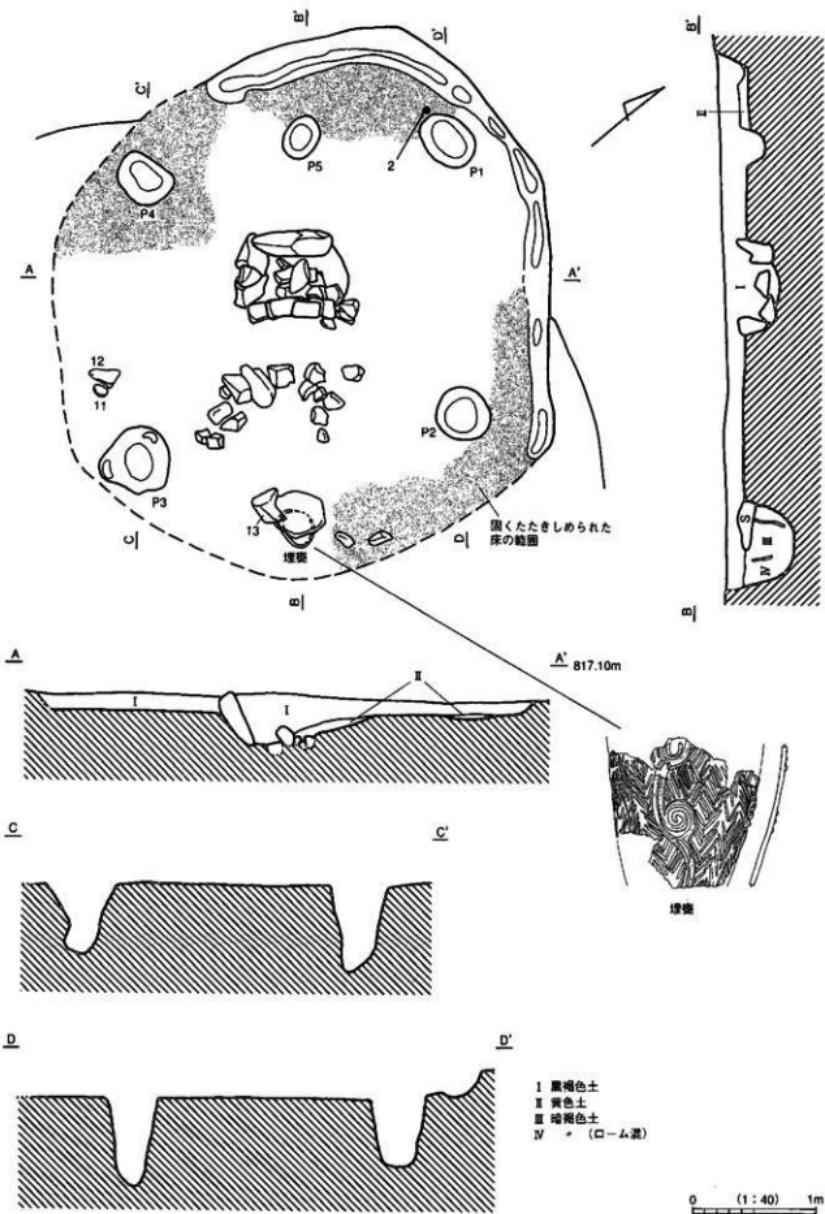
下にして出土した。

**柱穴** P1~P4を主柱穴と考える。深さは、P1・53cm、P2・46cm、P3・37cm、P4・54cmを測る。P5は深さ16cmと他のピットに比べ浅く、柱穴としなかった。

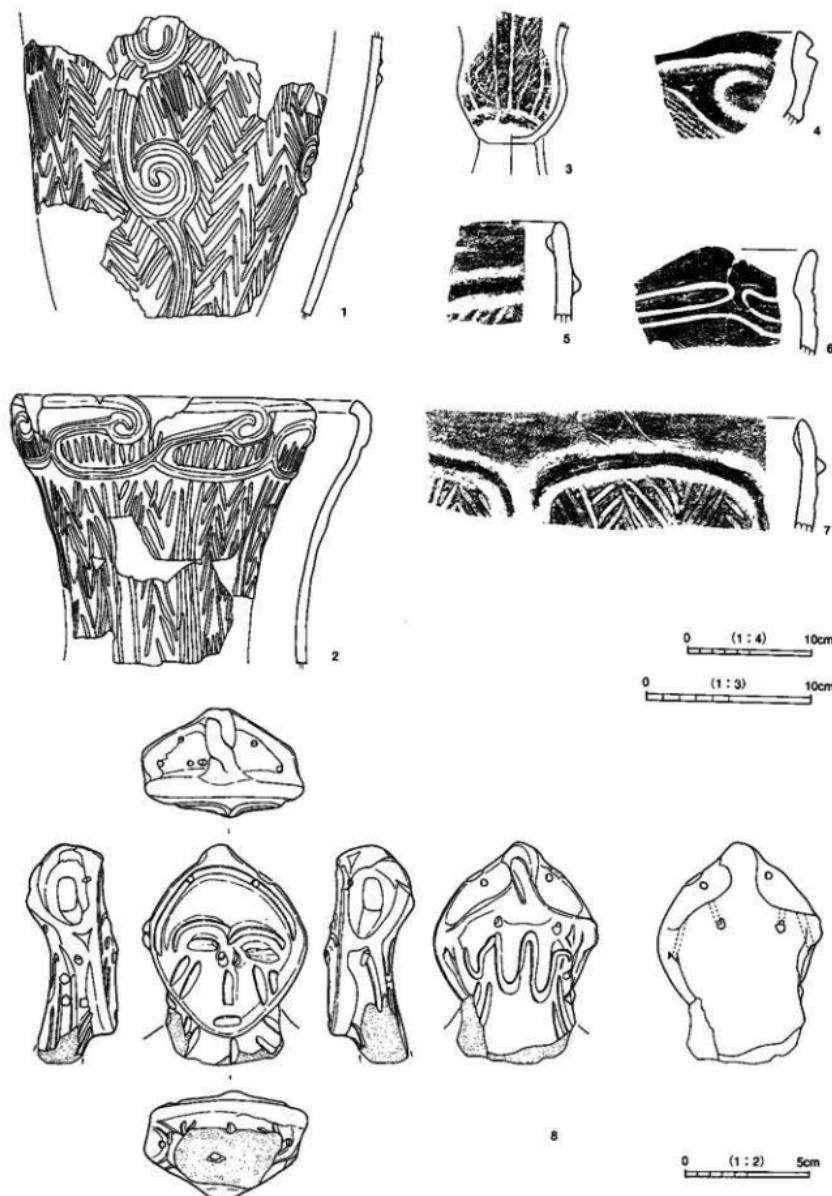
**炉址** 中央やや奥寄りにある。規模は、84cm×68cm、深さ20cm。長方形の石囲炉である。北側の石は内部へ崩れ落ちているが、Ⅱ層とした黄色土が炉址内側下方へ落ち込んでいることから、人為的なものでなく自然に陥没したと考えられる。内面は赤く焼けている。  
(今村)

### 遺物 (第20・21図)

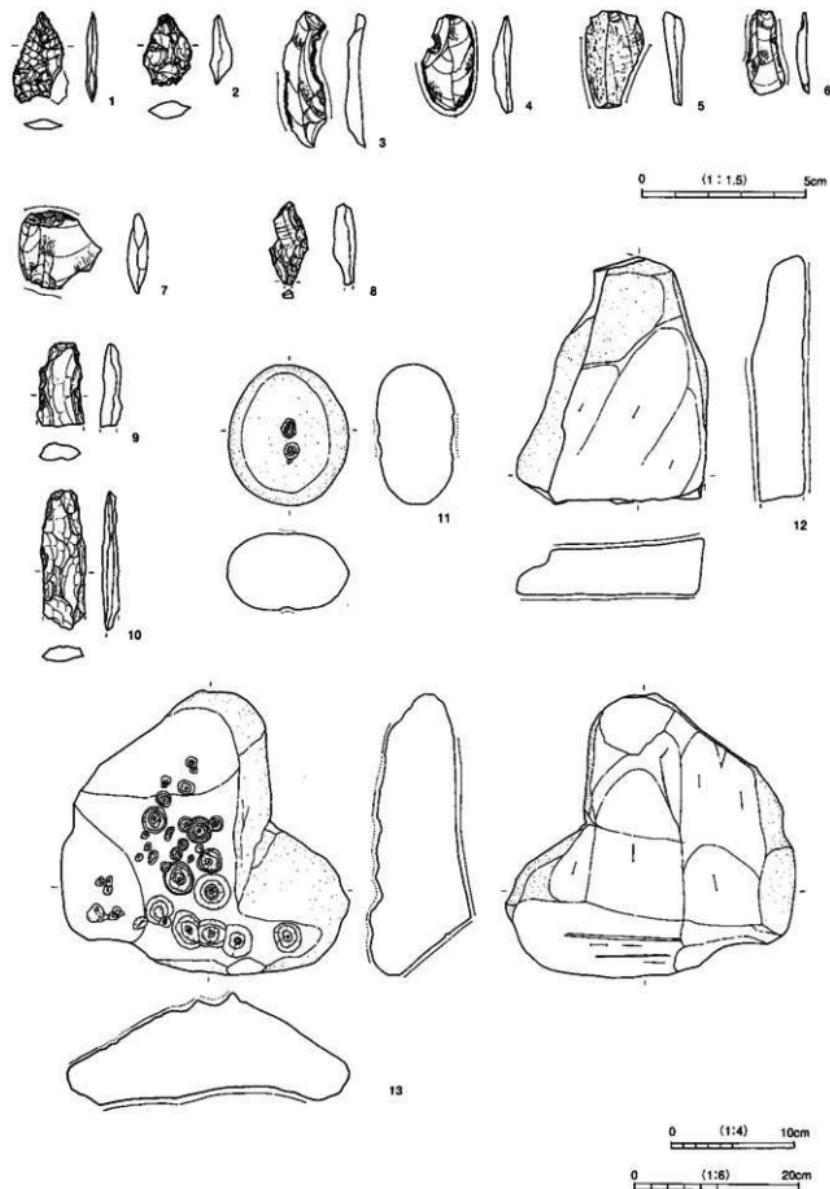
**a 土器** 1・2・5・7の沈線文系 (第III群1類)、3・4の繩文系 (同4類)、6の条線文系 (同3類) の3群に分かれる。1は埋甕で、口縁部と底部が打ち欠きによって欠損している。胴が張るタル形深鉢で、隆線による渦巻文によって胴部を4分割して、地文に綾杉沈線文が充填されている。2はキャリバー形深鉢で、口縁部は扁平隆線によって渦巻つなぎ弧文が展開し、継位沈線が施文される。胴部は3本1組の沈線が垂下し、地文に綾杉沈線文が描かれるが、これらの文様構成は加曾利E3式の折衷型といえよう。5・7はタル形器形の口縁部破片であり、口縁部内側に蓋受け状の突帯1条めぐる。胴部は逆U字状区画文を形成し、区画内に綾杉状沈線が充填されている。既に渦巻文が消失した新しい段階に位置づけられる。3は小型の台付キャリバー形土器であり、口縁部は欠損している。胴部の沈線文間は幅広の磨消帯がみられ、蛇行懸垂文が描かれていることから加曾利E3式に比定されよう。4も緩やかな波状口縁を呈し、渦巻つなぎ弧文がめぐっている。隆線とその脇の沈線がやや幅広であることから、同じく加曾利E3式と考えられる。6は焼成が良好でミガキ整形が丁寧に行われ平滑化した波状口縁である。橢円沈線区画文と1本の沈線がめぐって文様帯が区画され、胴部には櫛齒状工具による弧線文が描かれている。曾利IV式に比定される。



第19図 第5号住居址



第20図 第5号住居址出土土器（1～7）・土偶（8）



第21図 第5号住居址出土石器（1～13）

**b 土製品** 覆土中から1点の土偶頭部（8）が出土している。顔面部はイチョウ形を呈し、平面的に仕上げられている。目および口は太沈線によって表現され、眉が弧線状に描かれている。鼻はやや突出し、鼻孔が刺突によってブタ鼻状になっている。頬には2本ずつの斜線がみられるが、入墨を表現したものであろうか。側面は、耳孔が上下に貫通して、首筋から沈線が抉入している。後頭部は前頭部から燃り繩がアーチ状に連結し、結髪が表現されている。また、その両側に2対の孔が穿たれ、前頭部の2対の孔と対応している。この孔は装飾というよりも、紐などを通すための実用的な孔と考えられ、想像をたくましくすれば吊るすという機能を有するためのものだったかもしれない。

後頭部中心には波状文が描かれ、髪際を示したものと思われる。破損面には、その中心部に貫通孔が観察され、その内面の色調が黒化していることから、各部位を串によって連結して製作したものであろう。以上の特徴から、本例はいわゆる出土土偶=唐草文土偶（神村1984・新谷1995）として捉えることができる。

**c 石器** 1・2は黒曜石製の石鏃および未製品である。1は脚部の片方が欠損し、凹みが浅い。3～6は小形刃器であり、両側縁に微細な剥離痕が観察される。5は疊面を残した素材を用いている。7は上下端部に剥離痕が残るくさび形石器、8は石錐であり、先端部が欠損している。9・10は撥形の打製石斧であるが細身を帯び、両者とも刃部が欠損している。11は敲石、12は砥石、13は大形の多凹石である。

所属時期 第Ⅲ期 (小口)

## 6 第6号住居址 (第22~31図、図版6・25~27)

位置 中央南寄りに位置する。5号住居址が床を貼る。15号住居址を切る。

規模・形状 7.4m×7.2m。南北方向に若干長い円形。

**検出・調査状況** 東西のプランは明瞭であったが、南北方向に2・3軒住居址が重なると予想されたので、サブトレントを設定し新旧関係の確認作業を行った。その結果、5号住居址は本址に一部床を貼って築かれていることから新しいと判断した。また、15号住居址は本址が同住居址の一部を掘り込んで作られていることから、15号住居址が古いとして調査を始めた。P7と炉址を結んだ線を主軸と考える。壁は東15cm、南30cm、北20cmが残り、ほぼ垂直に立ち上がる。

**柱穴** P1～P6が主柱穴と考えられる。深さは、P1・50cm、P2・56cm、P3・68cm、P4・60cm、P5・58cm、P6・70cmを測る。これ以外に多くの柱穴と思われるビットが検出されている。本址は少なくとも2～3回立て替えや、拡張がされたと考える。例えば、石壺炉の西側に焼土が詰まり、内部も赤橙色で焼けた土坑が床面調査段階で確認できたが、P8～P13とこの土坑を組み合わせて替え前の配置を想定したものを、第22図-②に示した。

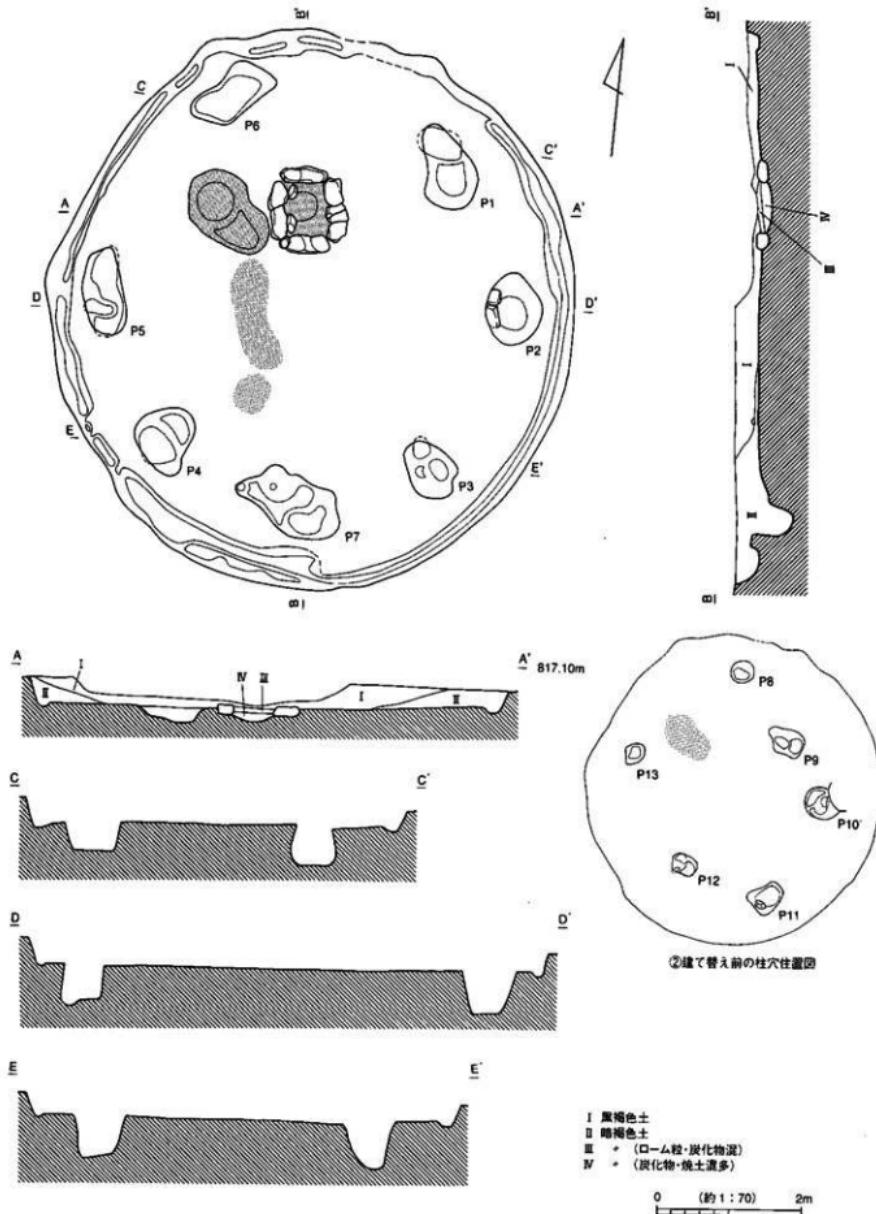
**周溝** 壁際に沿って幅20～40cm、深さ10cmの溝が一条全周する。

**炉址** 石壺炉である。規模は、114cm×106cmの方形で深さ15cmを測る。浅く掘り込まれた内部は赤橙色で焼け固くしまる。

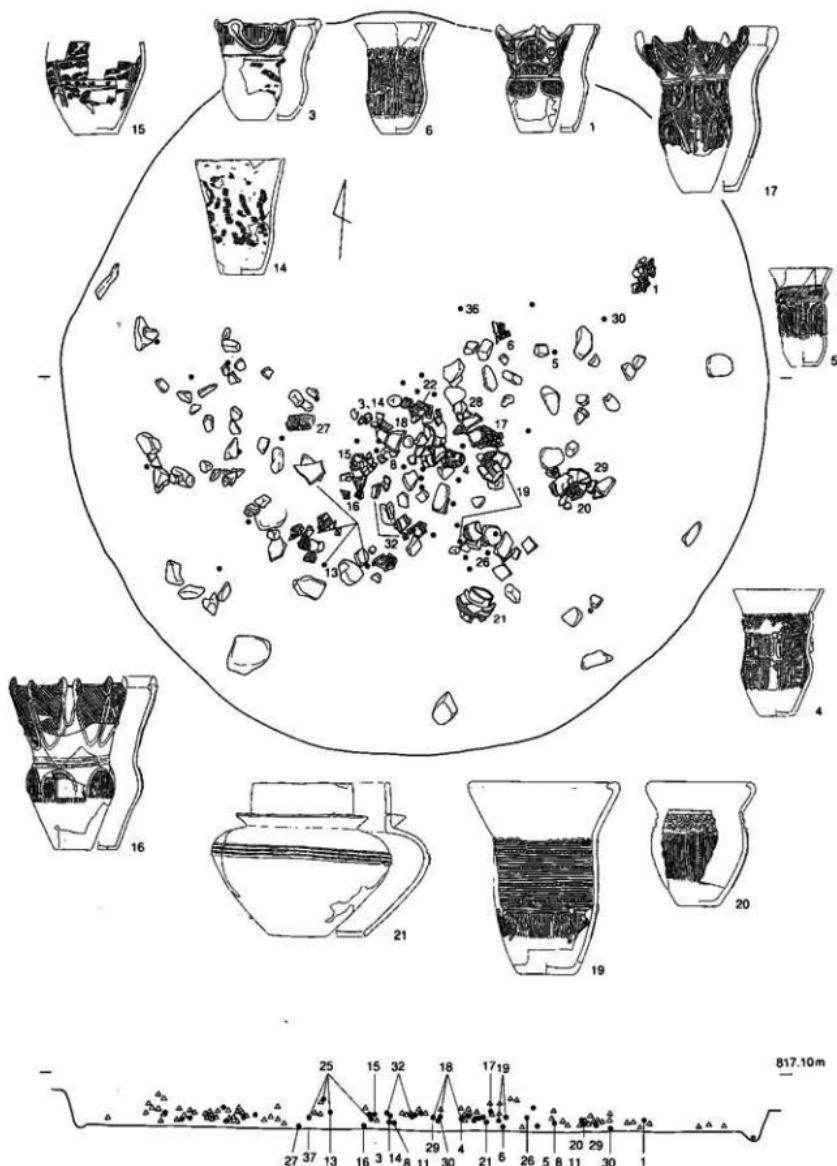
**遺物出土状況** 遺物は今回調査住居址中では多い方である。15号住との重複関係のためだろう。第I層下部から遺物が出土しはじめ、同じ程度に小児頭大～拳大の礫が多い。II・III層の区分はむづかしく、レベルに記録して取り上げた。完形に復元されたものや圓上復元土器も20～30個に及ぶ。床面付近は少ないが、直上5～10cmから上に平均的に出土した。「吹上パターン」的とはいえないがそれに近い。

### 遺物 (第24~31図)

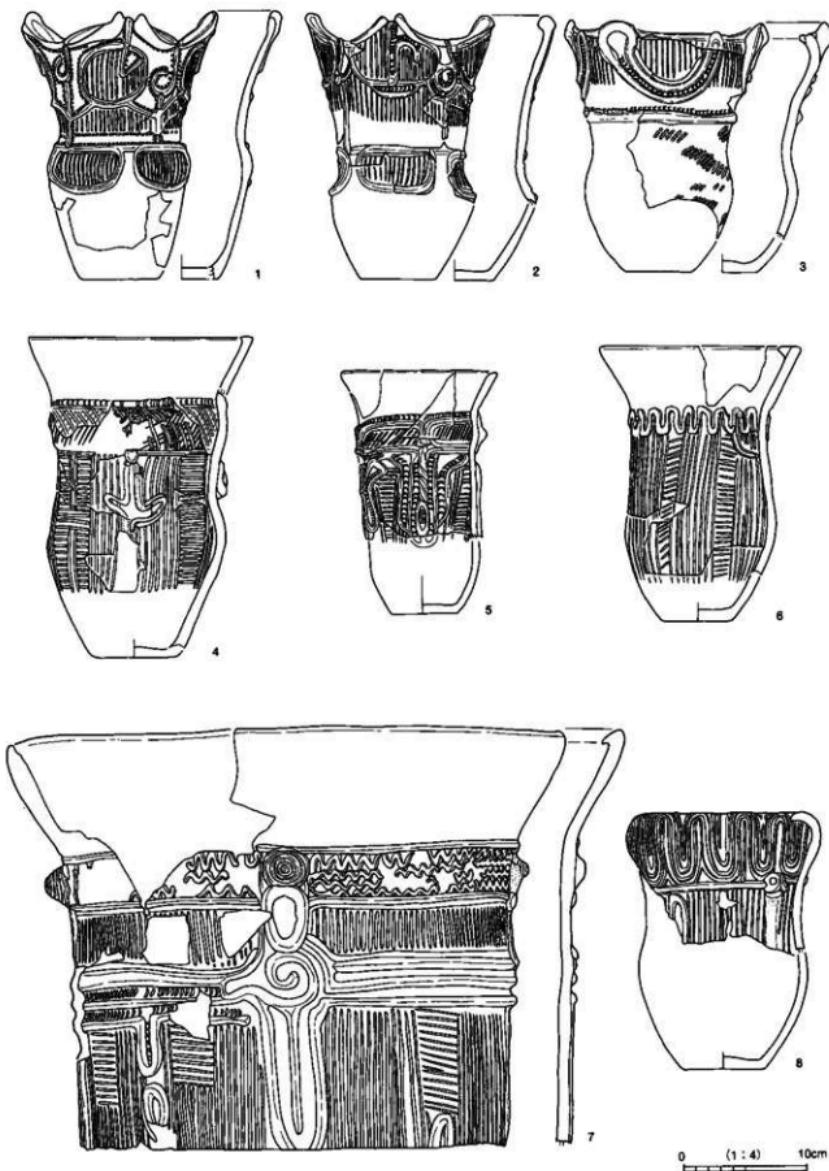
**a 土器** 6号住からは、第II群土器が良好な一括資料として出土した。1・2は1類a種の波状口縁柳形文土器（神村1995）であり、波頂下にタマゴ状区画文を有し、また波底部からはJ字文が



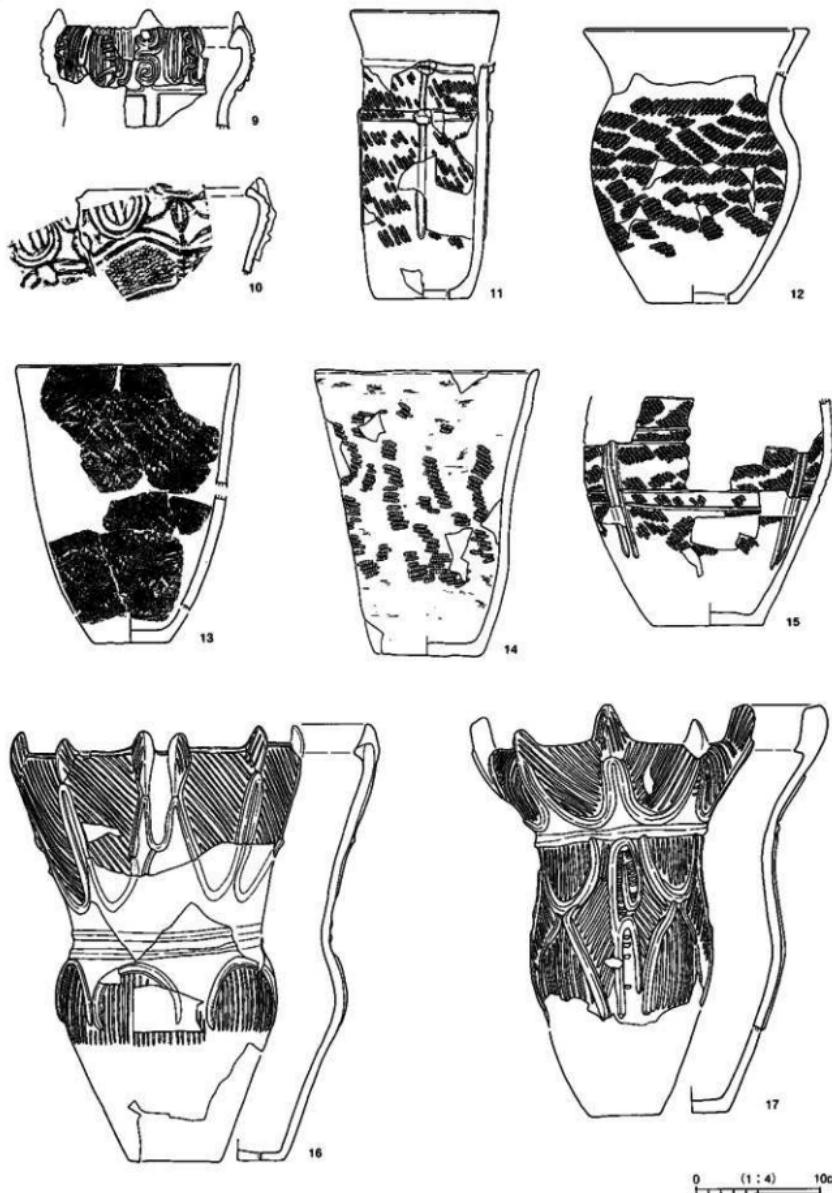
第22図 第6号住居址



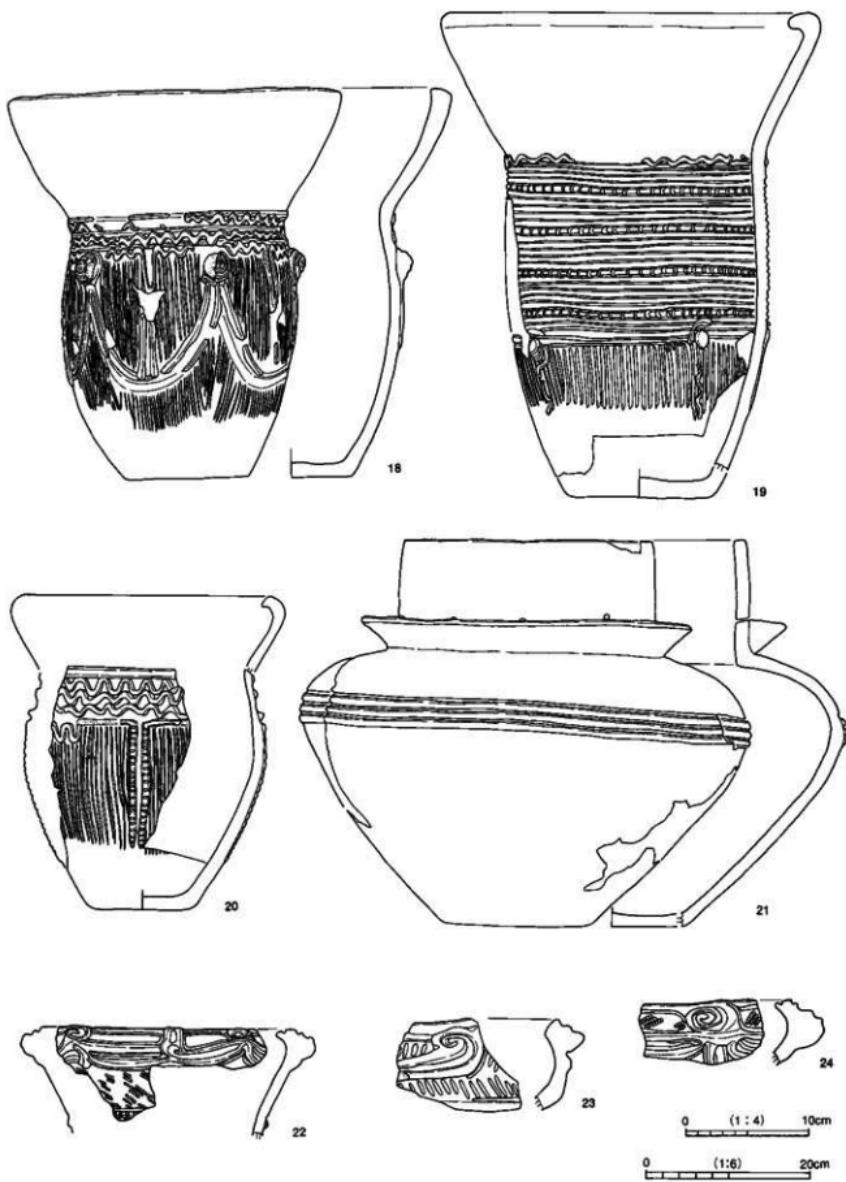
第23図 第6号住居址遺物出土図



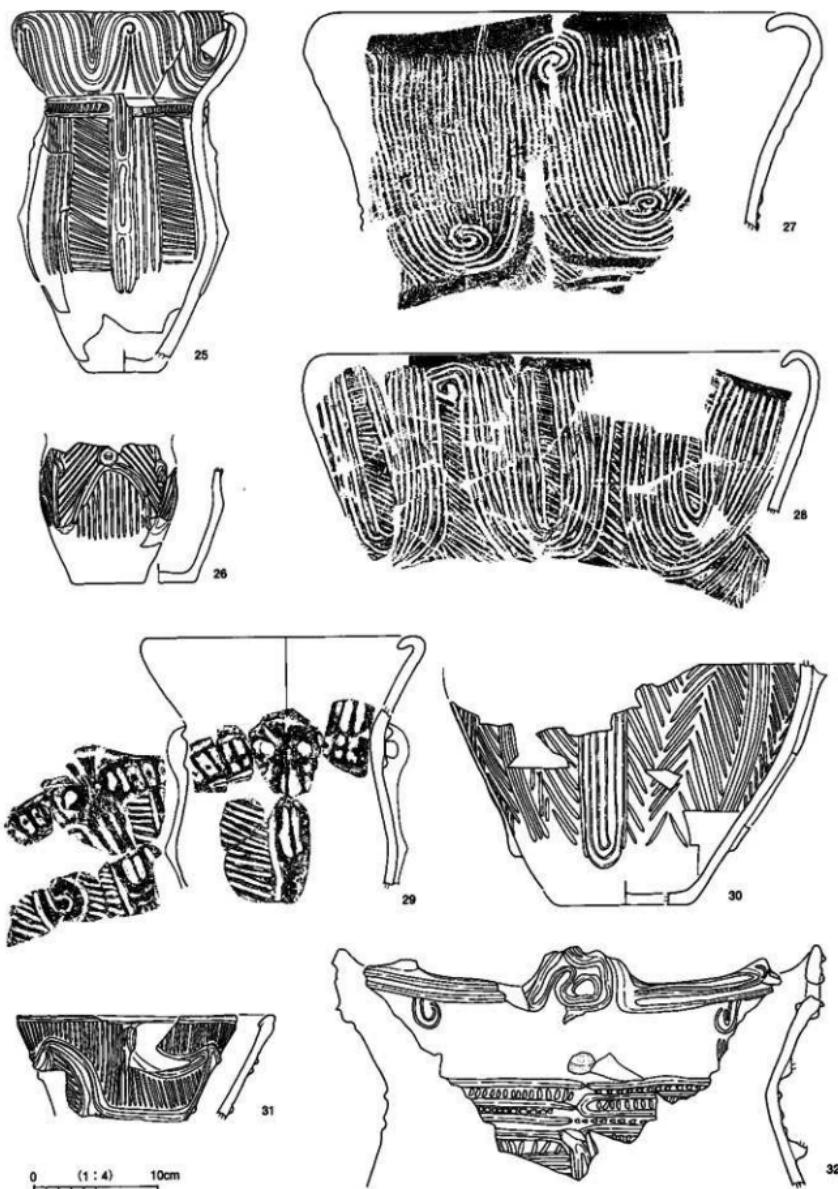
第24図 第6号住居址出土土器（1～8）



第25図 第6号住居址出土土器（9~17）



第26図 第6号住居址出土土器 (18~24)



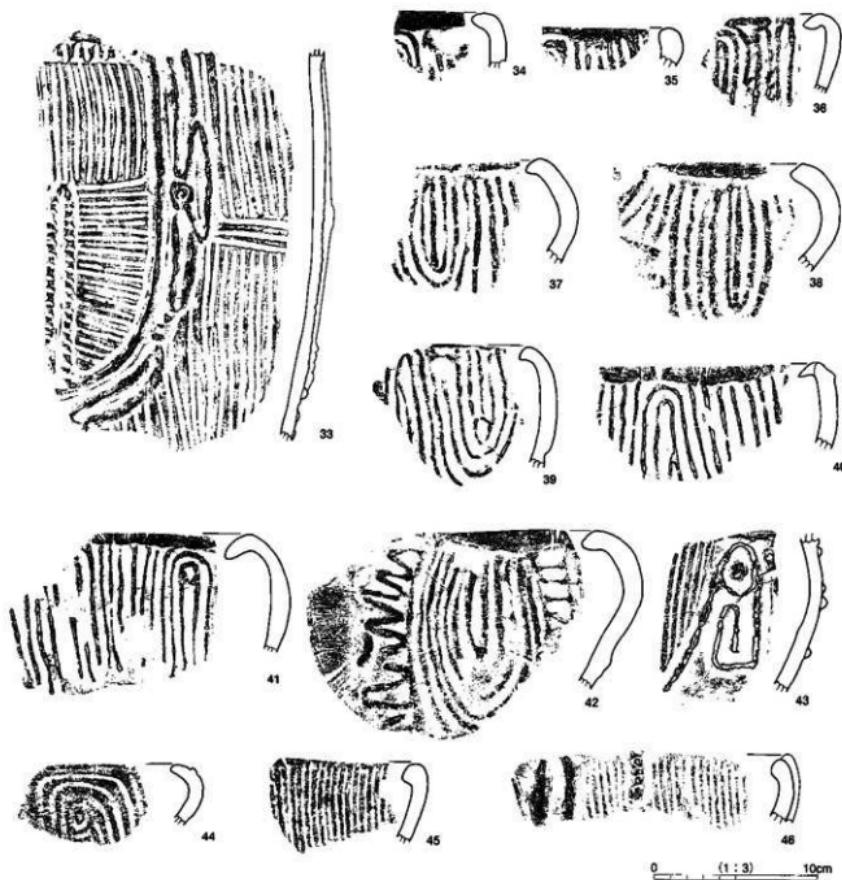
第27図 第6号住居址出土土器（25~32）

垂下し胴下半のアーチ状区画文、いわゆる櫛形文に連続する。また、隆線間・隆線脇には半截竹管工具の背による押引文が施されている。いずれも器高が約20cmと小型であるが、これは当該期における松本盆地～諏訪盆地の土器群の一般的な様相であることも興味深い。

3はキャリバー形を呈し、口縁部にU字状モチーフをあしらった珍しい土器である。U字状モ

チーフの中心部には押引文が施され、区画内外に縦位沈線が引かれている。胴部文様帶との境には、隆線と押引文がめぐって分帶され、LR繩文が施文される。

4～10は、第2・4類：口縁部が無文帶となるもの（4～7・18～20）、第3類：口縁部に横曲文もしくは斜行沈線文をほどこすもの（8～10）の2大別が可能である。さらに2類は、a種：口縁

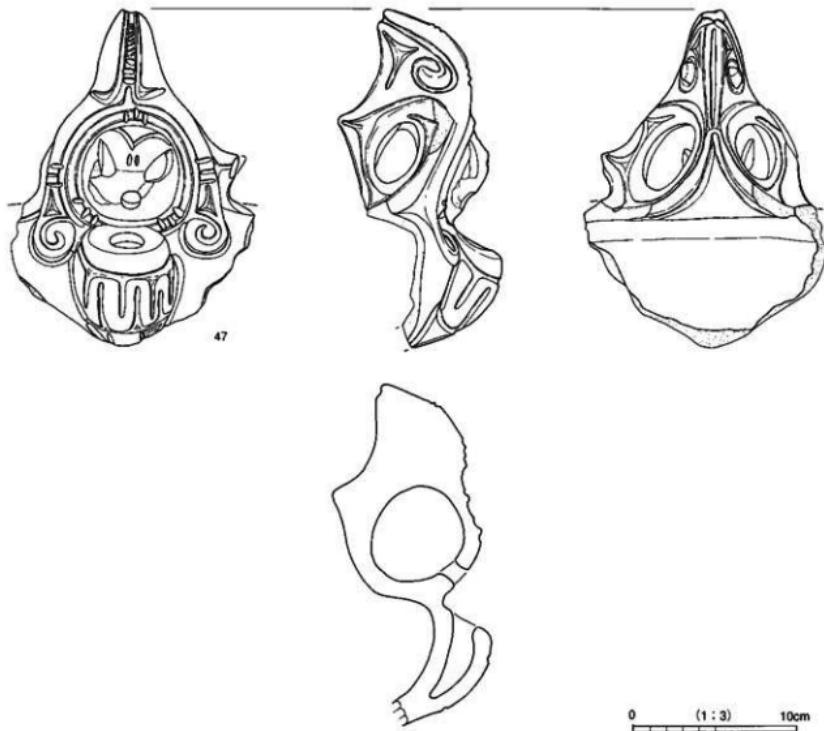


第28図 第6号住居址出土土器 (33～46)

が外反し頸部がやや膨らみを有する4・5とb種)頸部に膨らみを有さない6に分けられる。4は頸部に細隆線を直交させた斜格子目文を有し、胴部には十字文のモチーフを基点として、地文に条線・横位縦帯沈線文（柳原1993）が展開している。5は頸部の区画文に斜行沈線文が充填されている。6・7は頸部に波状隆線がめぐることで共通するが、6は条線文と横位縦帯沈線文の地文のみが、7は渦巻文を中心とした十字状モチーフが描かれ、その後地文が充填されるといった差異が認められる。この頸部の波状文は胴部に横位縦帯沈線文を持たず、さらに隆線間・隆線脇に押引文を施さな

い曾利式に一般的に用いられる要素であることから、第2類と第4類は頸縁的な関係が強いといいうことがいえよう。

梨久保B式にみられる属性の1つとして弧線を重疊させる「褶曲文」・「重弧文」、そこから派生する「斜行沈線文」がある（第3類）。これは口縁部に用いられる文様要素であり、8・10・16・17・25～29が該当する。褶曲文の施工技法としてa種)細隆線貼付（9・10）、b種-1)半裁竹管工具による半隆起・沈線文（8・16・17）、b種-2)棒状工具による沈線文（25～29）が認められる。8は頸部に眼鏡状突起が付き、剥落して不明



第29図 第6号住居址出土土器(47)

であるが主モチーフが垂下している。地文は条線文のみである。9・10は角状突起を4単位有し、隆線による摺曲文が描かれている。10は頸部に刺突文が充填される珍しい例である。16・17は長胴のキャリバー形深鉢であり、口縁部に中実の角状突起が付いている。この突起を基点として、隆線による弧線文がめぐり、区画内に斜行沈線が充填される。胴部には前者が逆U字文、後者は人字文が展開し、中葉的な属性が未だに残存している。25は内湾する口縁部に沈線摺曲文が描かれ、頭部には2条の隆線間に刺突文が充填される。胴部には横円隆線が垂下して4分割し、その間際に条線・横位縦帯沈線文が描かれている。26は胴部下半であり、弧線文と斜沈線が充填される。27・28は大形深鉢の口縁部であり、棒状工具によって摺曲文がそれぞれ施文される。28は口縁部が大きく内湾し、渦文を中心に弧線が重なり合い、28はU字状沈線文の中心に横位縦帯沈線が施文され、前段階のモチーフが踏襲される。29は胴部のみの残存であるが、頭部に格子状隆線がめぐり、胴部には腕骨文の祖形が確認される。地文は斜沈線である。

以上の25～29はいずれも暗褐色を呈し、雲母粒を多く含み、さらに焼成が不良であることを特色とし、第1類～3類a種、4・6類と大きく異なることが指摘でき、当該期における型式変遷に何らかのインパクトが存在したことを伺わせる資料である。第3類はこのように、口縁部の隆線・沈線摺曲文から斜行沈線文へ、胴部の条線文から斜行沈線文へ、小形から大形へと後葉的な土器群への移行過程が観察される（三上1986）のである。

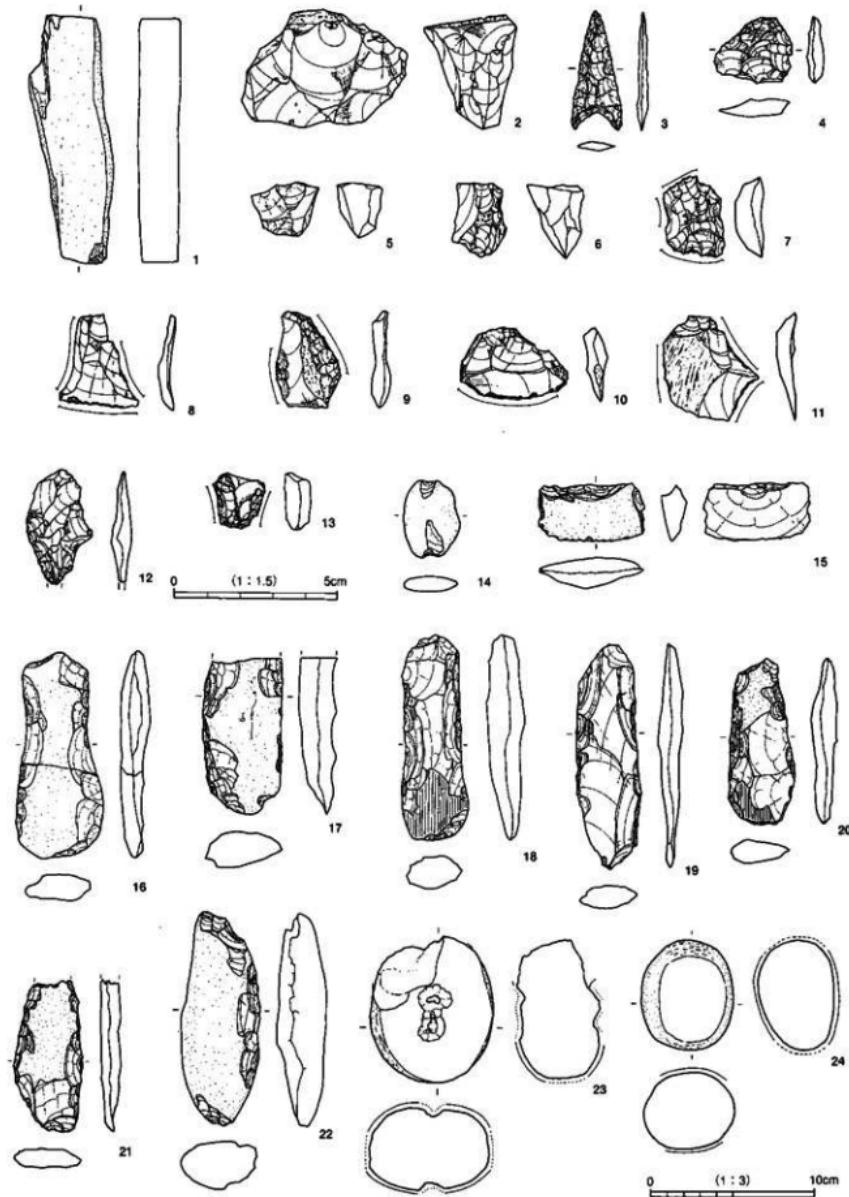
11～12は第6類に該当し、これまで当該期土器群としてほとんど検討されてこなかった一群である。11・13・14は円筒形、12・15は壺形の小型深鉢であり、いずれも頭部以下に縄文が施文されている。これらの一群の中で、11については2段の横位隆線と垂下隆線が直交しており、頭部文様帯が意識されている。また、15は棒状工具による2

本単位の横線と縦線が描かれた珍しい類型である。12～14に共通することは、口縁部文様帯が意識され、地文施文がなされていない点であり、他の意匠文系深鉢と類縁的な関係を示している。

18～20は第4類土器であり、曾利I式に比定される。いずれも無文の口縁が大きく張り出し、胴部がやや張るか、直線的なものになり、頭部に波状文がめぐっている。18は頭部に3条の波状文が描かれ、胴部には円形渦巻突起を基点として弧線文が連結している。地文は櫛歯状工具による条線文である。19は長胴形の器形を呈し、器壁も厚い。頭部に波状文が1条めぐって、半截竹管による横線が多条化している。横線には数条おきに押引が施されインパクトとなっている。胴下半には条線と円形小突起から蛇行隆線が垂下している。胴下半の条線が短いのは、頭部文様帯が広がり、逆に胴部文様帯が狭まったことにある、当該地域では松本市前田木下遺跡1号住、上松町吉野遺跡群94号住にも類例が散見される。20は波状口縁が4条めぐって逆U字状区画が描かれ、条線文が充填されている。18・20は八ヶ岳山麓から諏訪盆地にみられる曾利式に近い。

21は大形の有孔鍔付土器である。胴上半に最大径を持ち、口縁が直立する壺形器形を呈し、頭部に幅広の鍔を有している。この鍔は断面三角形を呈し、孔はその直上に器内に向かって穿たれている。文様は、最大径の胴上半に3条の隆線がめぐるのみで、表面は全面ミガキ整形によって平滑化している。内面もミガキ整形によって丁寧に仕上げられ、一部赤色痕が観察されるなど有孔鍔付土器の特色がみられる一方、全体的な造りとして非常にシンプルであることが指摘できる。

22～24は口縁が大きく開き、「く」字状に屈曲するキャリバー形深鉢である。口縁部にはやや上向きの渦巻つなぎ弧文がみられ、頭部には縄文が施され、隆線上に刻みが施される22と、口縁部の区画内に縄文が充填される24、斜沈線が描かれる23が認められる。22・24は大木8b式の変容形態と



第30図 第6号住居址出土石器（1～24）

思われる（水沢1995）。

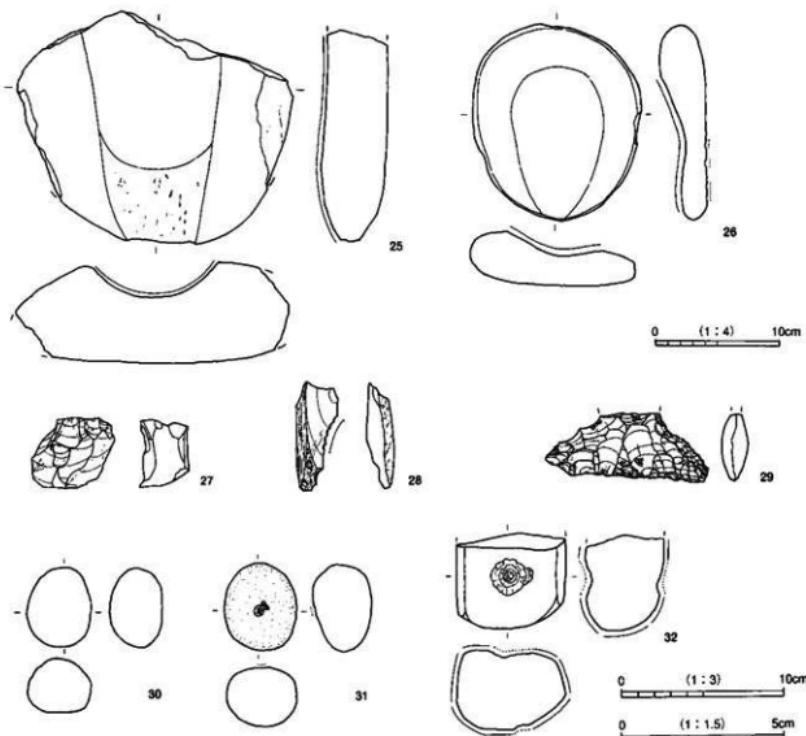
30は胴下半のみ残存する深鉢であり、胴部に3本隆線が垂下し、地文に綾杉状沈線文が施文され次段階の様相を呈している。

31は外反した口縁部にクランク状の隆線が上下から派生し、その間際に縦位沈線文が充填される。32は口縁部の中心に曲線状の円形突起が付き、口唇部には2本の隆線が併走している。この突起は前段階には認められない形態であり、越後地方から東北南部に分布する土器群の突起に系譜が迫れるものと思われる。頸部には4条の隆線がめぐって、文様帶を区画し、隆線間に刺突文が施されて

いる。胴部は隆線モチーフが垂下し、地文に異方向の沈線が描かれた本例は、褶曲文こそないものの、頭部以下の属性は第3類b種と大きな差異はみられない。

33は長胴形深鉢の胴部破片である。J字状モチーフと横位・縦位沈線が施文される。34~42・44~46は第3類土器の口縁部破片である。34~41は隆線によるa種、44~46はb種であり、a種の34~41は焼成が良好で硬質であるのに対し、b種の44~46は焼成が不良であることが指摘できよう。

**b 土製品** 47は口縁が張り出し、内湾する器形の深鉢に付く人面装飾である。頭部が吊り上り、



第31図 第6号住居址出土石器 (25~32)

顔面部は中空で半球状を呈した当該期における典型的な形状である。顔面部は円形で、目尻がつりあがり、鼻が列点状に描かれ、口は円形孔が穿たれて表現されている。頂部には2本の沈線間に縦杉文と交互列点文が、顔面部の側縁にも同じく交互列点文や三叉文、渦巻文が施され装飾性を高めている。上下2段角状に突き出た後頭部は、眼鏡状の円形孔が穿たれている。注目されるのは、顔面下部にタル形土器が付き、上下から沈線を挿入させた波状文様を描いていること、さらに顔面部が外側を向くことであり、類例は多くない。胎土は、砂質で脆弱、細かい白色粒子が多く含まれる。本住居出土土器と比べ、時期的にやや古くなると考えられ、井戸尻I式期に比定されよう。

c石器 1はチャート製の原石であり、角柱状を呈している。2は石核で、打面には礫面が残っている。3・4は石鏃および未製品であり、3は長身の凹基式でいわゆる下呂石製である。5・6は小形の石核。7~11は小形刃器、12は石錐である。13はくさび形石器、14は礫石錐、15は大形刃器、16~22は打製石斧であり、分銅形の16、撥形の20、短冊形の17~19、一側縁が外溝する21・22など形態においてバラエティーが認められる。多くが礫面を残しているが、22は未製品であろう。23は敲石、24・30は磨石、25・26は石皿である。27~29・31・32は5・6号住の帰属が不明であるものを掲載した。27は石核、28は小形刃器、29は小形石匙、31・32は敲石である。

所属時期 第IV~V期 (小口)

### 7 第7号住居址 (第32~38図、図版7・27~28)

位置 中央やや西寄りに位置する。3号住居址を切る。土坑25に切られる。

規模・形状 4.65m×4.36m。方形基調で南東側が外へ張り出し、五角形ともいえる。

検出・調査状況 3号住居址を一部壊して掘り込んでいることから本址が新しいと判断して掘り進めた。壁は東9cm、西20cm、南11cm、北4cmを測

る。

柱穴 P1~P5を主柱穴と考える。深さは、P1・45cm、P2・48cm、P3・42cm、P4・33cm、P5・37cmを測る。また、埋甕の両側にP8、P9がある。深さは、P8・42cm、P9・45cmを測る。入り口施設に関するものと思われる。

炉址 中央奥壁寄りにある。規模は、128cm×108cmの不整形で、炭化物・焼土粒を含む暗褐色土が入る。地面をゆるやかに掘りくぼめてあり、最深部で17cmを測る。炉石の抜き取り痕は見られず、大型の地床炉であろうか。

遺物出土状況 覆土は2層に分けられ、遺物はI層中からほとんどが出土している。I層上面から多數の土器片と、拳大から人頭大の礫が、ともに出土している。比較的まとまった個体もあったが、破片が多いため、住居址全体を50cm四方のメッシュで区切り、小片は、このメッシュごとに一つのまとまりとして取り上げた。大きなものや、まとまった個体については、別に図化して取り上げた。遺物出土図には、後者を中心に掲載した。

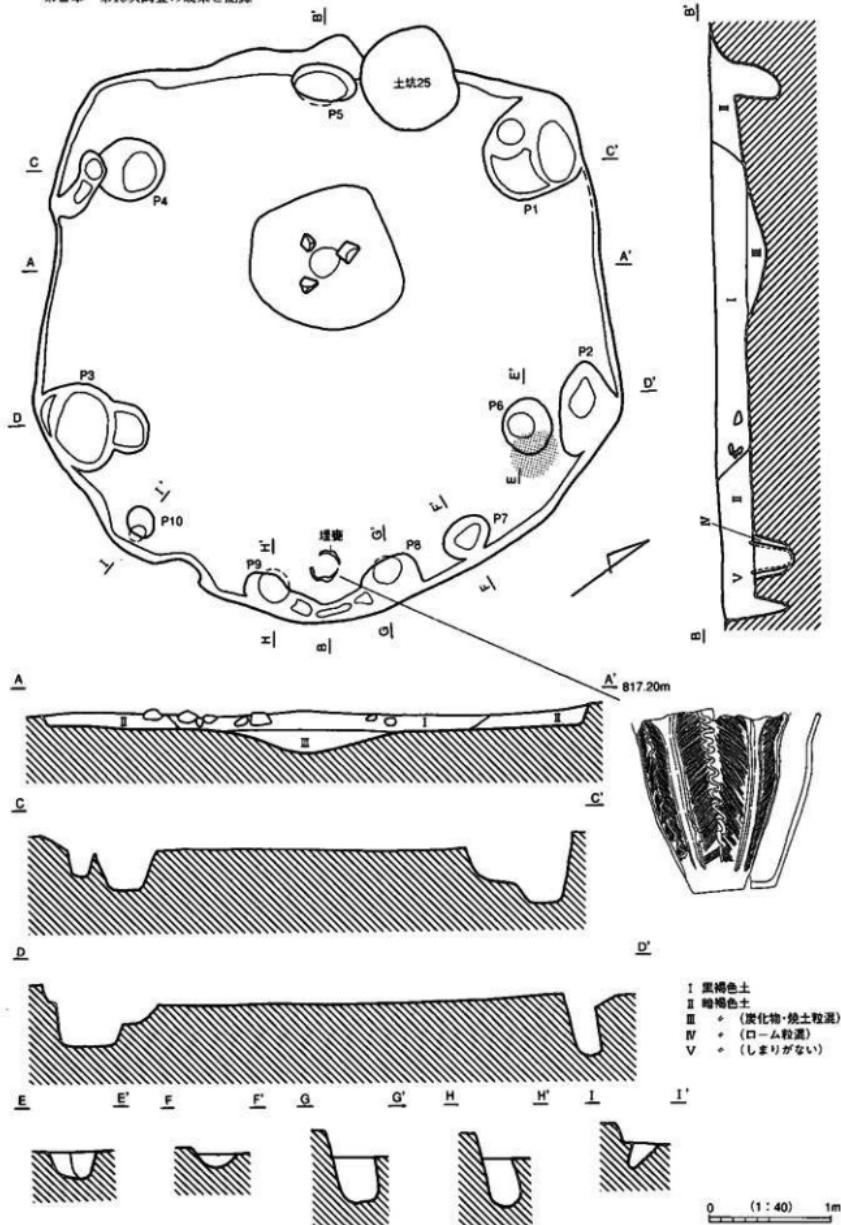
第34図~37図の9~78の土器は、前者のものが中心となっている。これらの出土地点とレベルは紙数の関係で、図化していないが礫の出土地点とおおむね重なっている。出土層位、状況から本址の埋没過程で、廃棄されたものと思われる。

(今村)

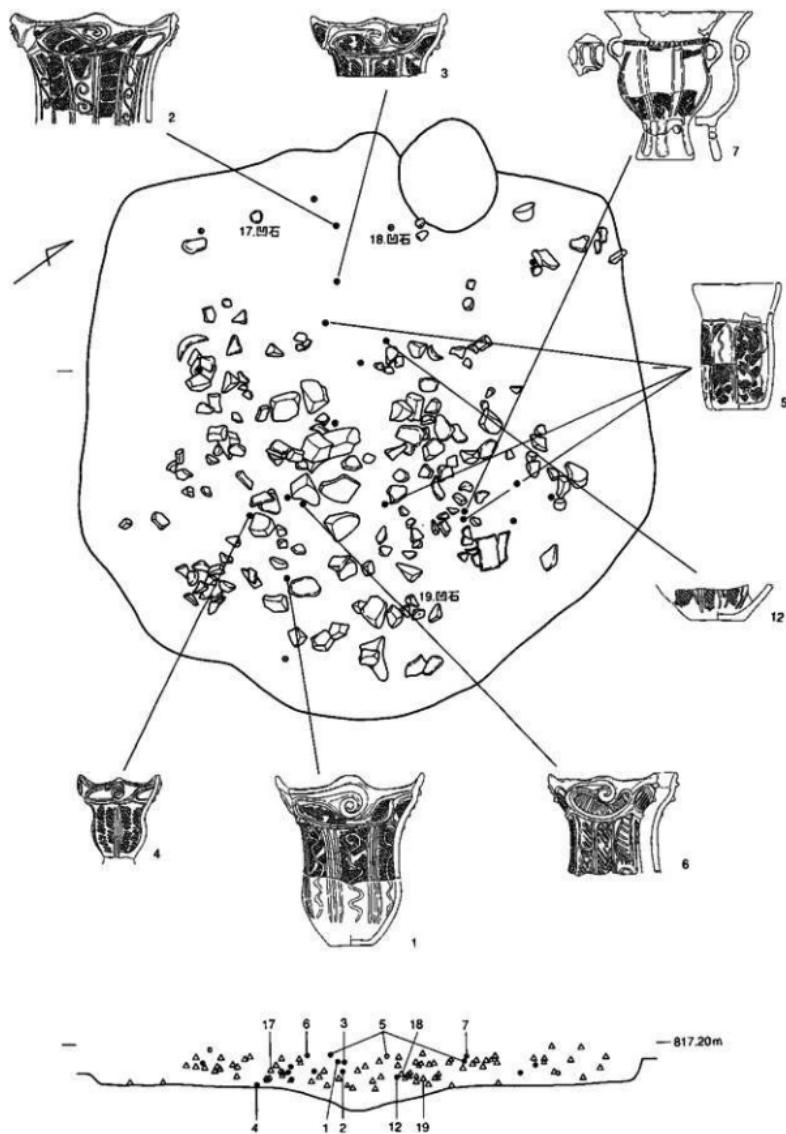
### 遺物 (第34~38図)

a 土器 7号住の覆土中から後葉期における第III群4類縄文系土器群が良好に出土している。

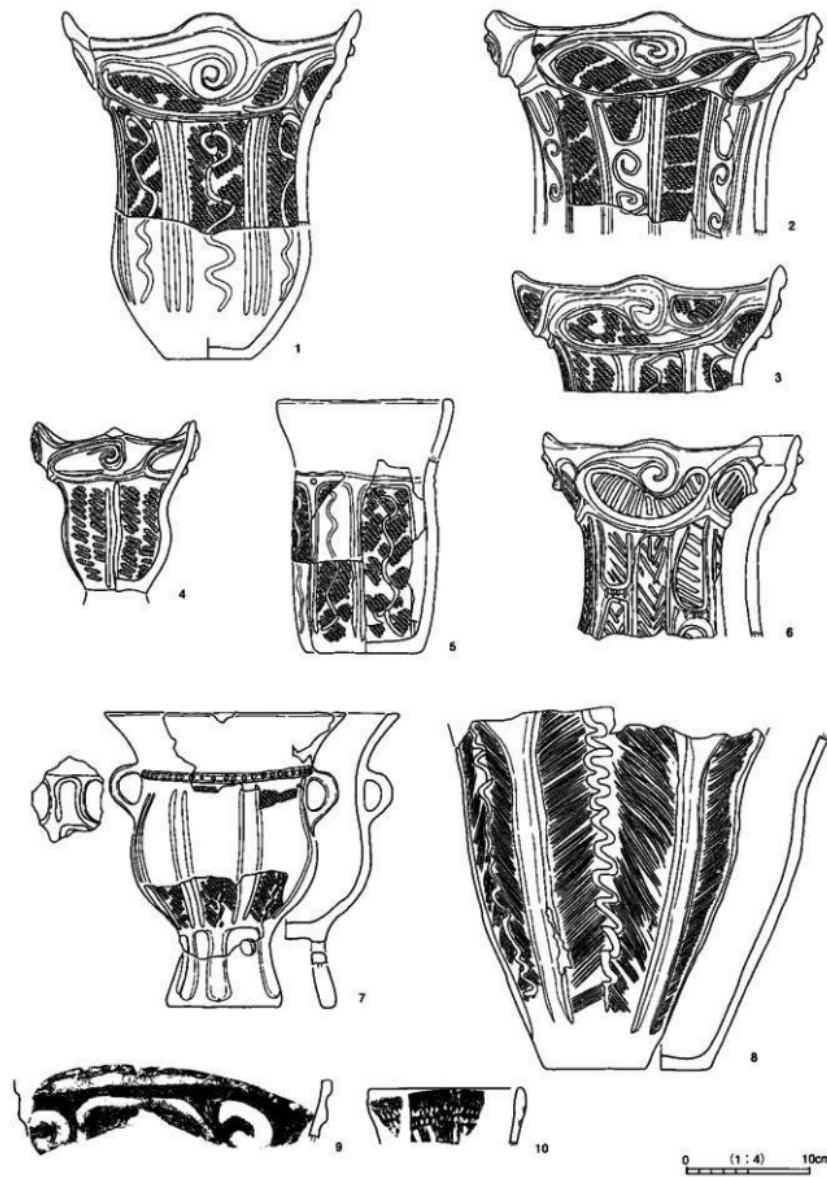
1~4・11は波状口縁を呈する深鉢である。波頂下に隆線による渦巻文が配され、それが横位に連結する渦巻つなぎ弧文がめぐる。隆線脇には幅広の沈線が沿って区画を形成し、内部に縄文が充填される。1・3・4のように2~3本の沈線と蛇行沈線が垂下するもの、2のようなH字状区画文とS字状モチーフを組み合わせるもののが認められ、いずれも懸垂文間にナデ整形を行う程度であり、明確なミガキ整形を行うまで至っていない。



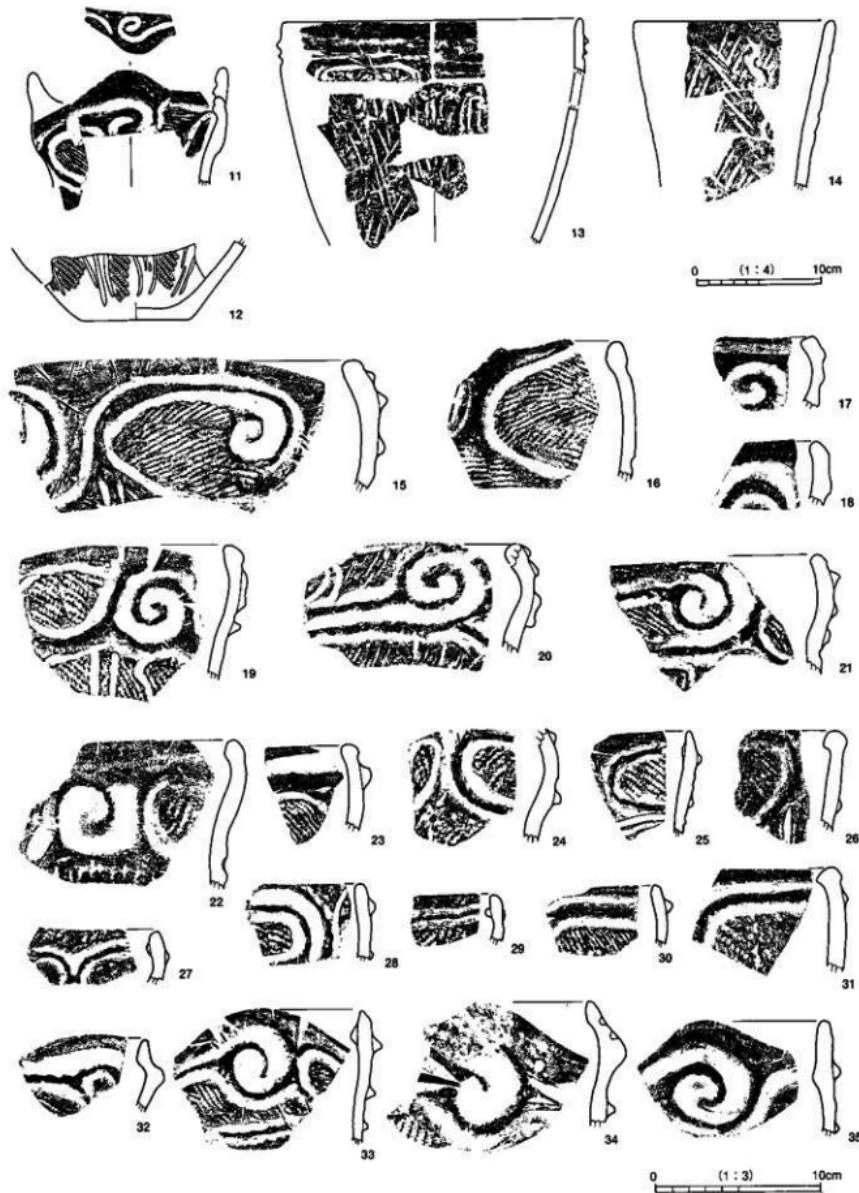
第32図 第7号住居址



第33図 第7号住居址遺物出土図



第34図 第7号住居址出土土器（1~10）



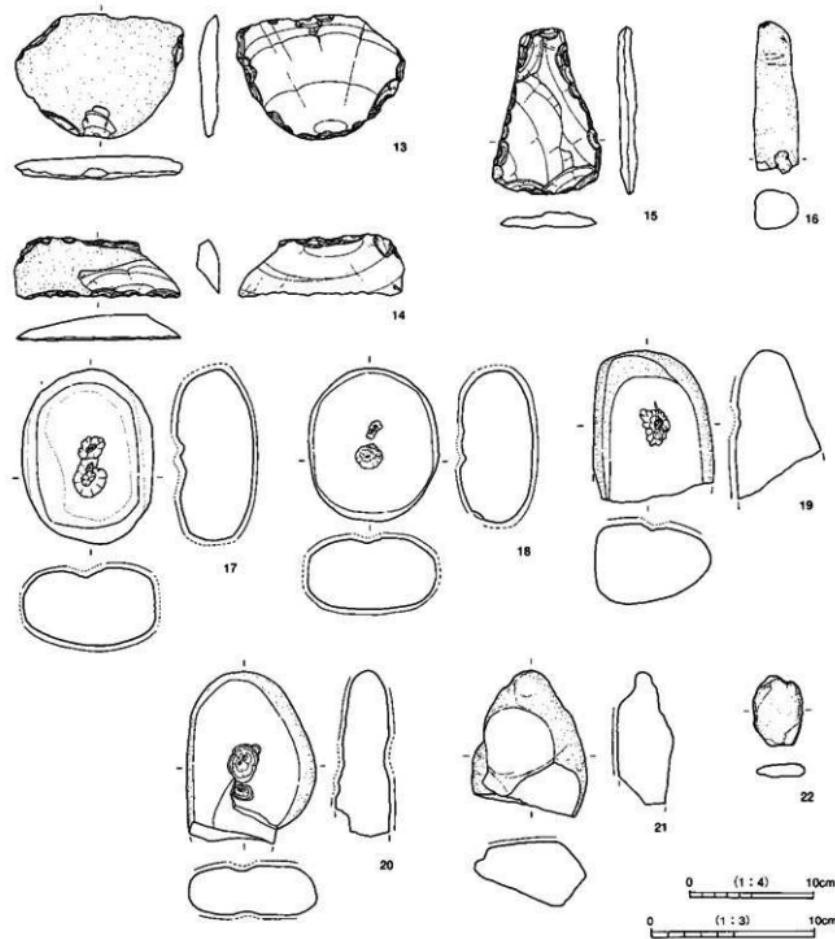
第35図 第7号住居址出土土器（11～35）



第36図 第7号住居址出土土器 (36~63)



第37図 第7号住居址出土土器 (64~78)・石器 (1~12)



第38図 第7号住居址出土石器 (13~22)

4は小形の台付深鉢であるが、台部が欠損している。

5・7は無文口縁部を形成する深鉢と台付の両耳鉢である。5は頭部に沈線をめぐらせ、文様帶の区画を行い、脇部には△状区画内に蛇行沈線を描いている。区画間の上方に円形刺突文が認め

られる。7は頭部に刺突文を施した隆線がめぐり、そこから2単位の橋状把手が貼付される。脇部は2本1組の沈線が垂下し、その間に結節縄文が充填される。台部は円形の透孔が観察され、太隆線が垂下している。この結節縄文と頭部に刺突がめぐる例は松本盆地には少なく、木曾谷・伊那谷

から東海地方にみられる特徴（神村1978）であり、松本盆地西山山麓という地理的な環境がその背景にあるのかもしれない。

6は4類の器形・文様帶構成を踏襲しながら、地文については斜沈線が描かれ、また洞部のH字状モチーフには4本の短沈線が施文されるなど、在地的な要素を組み合わせた折衷土器として捉えることができよう。

8・9は第Ⅲ群3類に該当し、それぞれ口縁部が欠損している。8は埋甕であり、扁平隆線を垂下させ、その間際に蛇行沈線を描く。地文は櫛齒状工具による斜行条線である。9は胴部上半で、扁平隆線上に太沈線による渦巻文が描かれている。いずれも曾利IV式に比定される。10は小形深鉢の上半部であり、頸部に2条の刺突列がめぐり、2本1組の沈線が垂下している。いずれも当該地域の主型式ではなく、むしろ隣接地域に分布する型式であり、在地型式が少ない点は興味深い。

13・14は1類の沈線文系土器である。13はタル形器形を呈し、口縁部に2本の隆線がめぐって、文様帶が区画されている。隆線下には両端小渦文モチーフが描かれ、ラフな綾杉状沈線文が地文として描かれている。14はラッパ状の器形を呈した深鉢であり、口縁部文様帶は喪失して綾杉状沈線と蛇行沈線が描かれている。

15~52は4類の繩文系土器の破片資料であり、15~31、49~52は平縁のa種、32~48は波状縁のb種に該当する。多くが口縁部に渦巻つなぎ弧文を描いているが、15~22のように丸みを帯びた断面がカマボコ状隆線によって渦巻文を描く一群と24~31のように断面三角状の細隆線によって描く一群に大きく分かれる。これはb種にも共通した特徴であり、前者は関東から広域にみられる特色であり、後者は比較的限定された地域にまとまる可能性がある。また、これらの中には、先述した頸部に刺突文を施す22・36、結節繩文を施文する47・49、内面に蓋受け状の突部をめぐらす25・27・29・33・46のような在地の沈線文系が有する属性

との置換関係が認められる例も存在する。

53~68は地文に沈線文を有する1類の破片資料である。53・54は波状沈線・U字状沈線を施す珍しい例であり、西関東から甲府盆地に分布する連弧文土器の影響があるかもしれない。57~59はキャリバー形深鉢の口縁部であり、隆線による渦巻文と斜沈線が施される。60~63・65・66はタル形深鉢の口縁部破片であり、口縁部と胴部を画する隆線上に渦巻文が連結し、この段階では大柄渦巻文は退化してしまっている。また、地文の沈線も綾杉状沈線からラフな直線状沈線へと変化している。この文様要素の転換は段階区分に当たって有効な画期となる。68は大柄渦巻文が描かれる沈線文系土器であり、やや古相を帯びる。69は2本の隆線が垂下し、条線文が引かれた曾利IV式、70は口縁部が内面向かって折れ、2本の沈線がめぐる鉢である。71は円形の頂部から橋状把手が貼付されるキャリバー形深鉢の口縁部破片、72~74は同一個体であり、2本1組の沈線によって渦巻文を胴部に描く壺形土器である。焼成は良好であり、赤彩痕が認められる。

75~78は1類の深鉢に付く把手類をまとめた。中心部を窪ませ、横位の刻みを入れる75、眼鏡状モチーフの76、Y字状の頂部を有し、渦巻文を正面・側面に描いた77、粘土紐を練り上げて渦巻状に仕上げた78など当該期の土器群の把手にはバラティーがある。この中で、77に類似したものが一般的に多い。

以上のように本住居址では、第Ⅲ群4類が主体であり、在地の1群はむしろ客体的な構成となっている。非在地系土器群が徐々に浸透していく状況を示し、そのルート解明のためにもこれらの資料は重要なものといえよう。

**b石器** 1・2は石核であり、1は打面に擦面を残す。3~6は凹基式の石鏃およびその未製品。7~11は小形刃器で、一側縁もしくは二側縁に微細な剥離痕を残す。12はくさび形石器である。側面には擦面が残っている。以上は、いずれも黒曜

石製である。13・14は円錐面を残した剥片素材を用いた大形刃器、15は撥形の打製石斧、16は先端部が欠損した叩石である。17~20は敲石、21は台石、22は頁岩製の礫石錐。

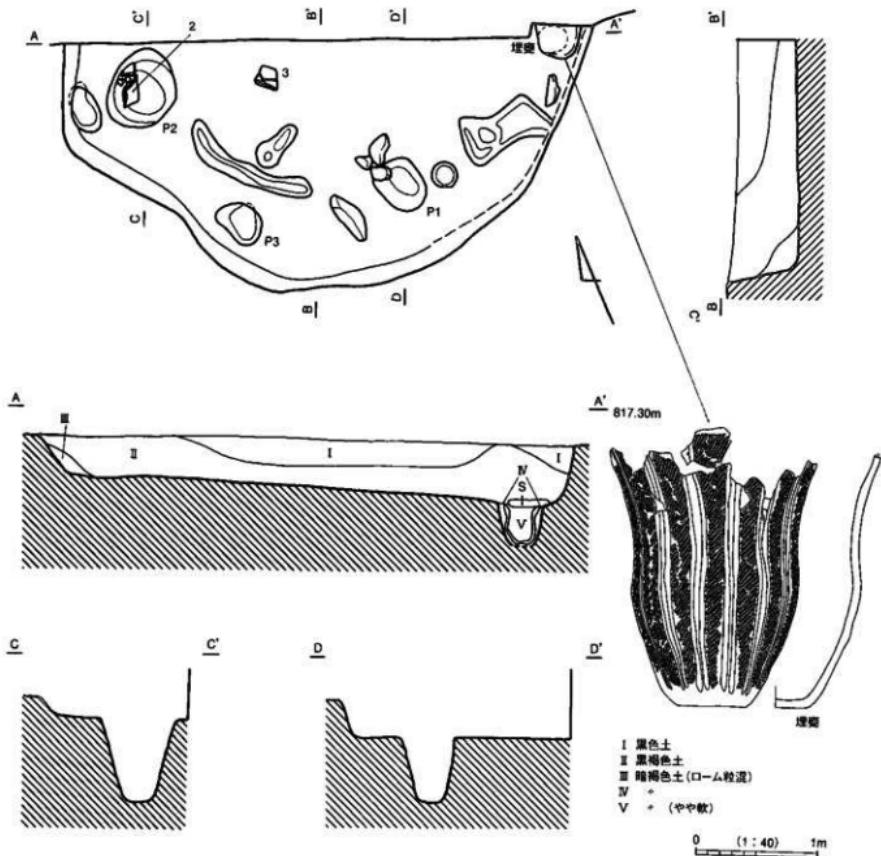
所属時期 第Ⅳ期 (小口)

### 8 第8号住居址 (第39~41図、図版8・28)

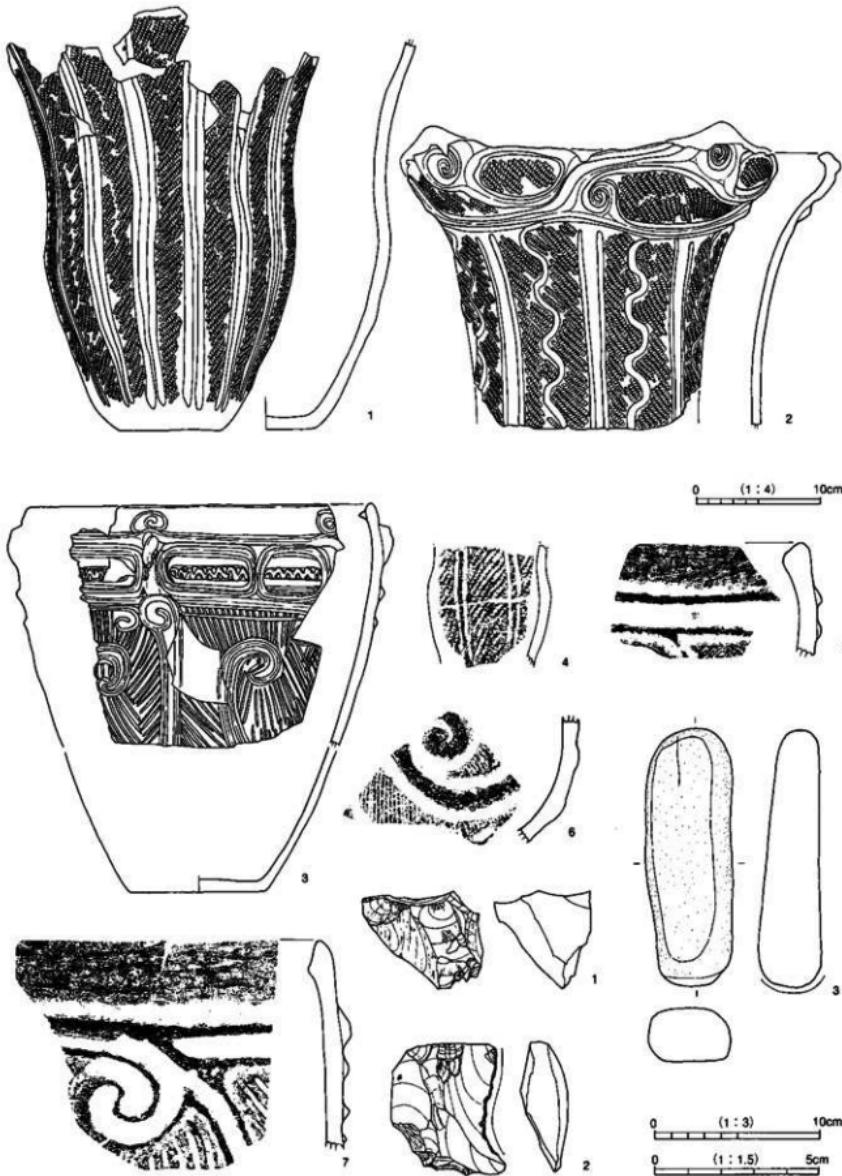
位置 調査区中央西寄りの北壁際に位置する。9号住居址に一部床を貼り、11号住居址を切る。

規模・形状 調査区外にかかる部分が多いが、埋甕の位置から判断して、(5m) × (4.5m) 前後で、胴の張る方形になろうか。

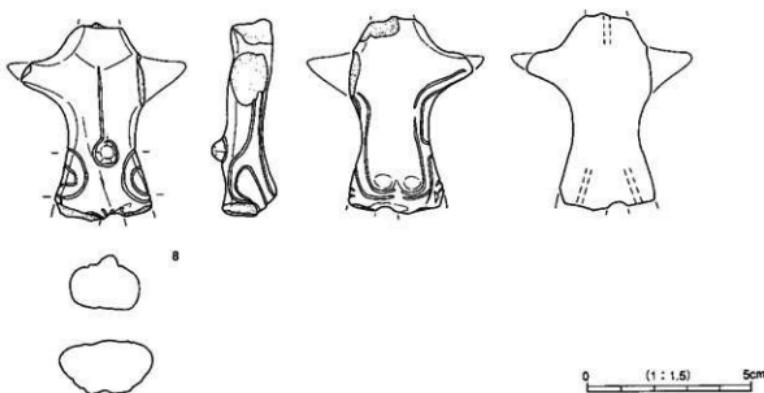
検出・調査状況 調査区北壁際にサブトレンチを入れ調査したところ、明らかに地山のローム層を掘り込む暗褐色土の遺構と、11号住居址と接する位置に埋甕を検出したので住居址とし、また、本址の方が11号住居址より新しいと判断した。なお、9号住居址の覆土中に、本址の貼り床と思われる



第39図 第8号住居址



第40図 第8号住居址出土土器（1～7）・石器（1～3）



第41図 第8号住居址出土土偶(8)

厚さ5cm程の黄色土ロームを検出したことから、9号住居址よりは新しいとした。壁は、北西隅で23cmを測る。

**柱穴** P1・P3を主柱穴と考える。深さは、P1・53cm、P3・65cmを測る。P2も36cmの深さがあり、柱穴とも考えられるが、住居址全体が不明なので、保留としておきたい。

**炉址** 確認されていない。  
(今村)

**遺物** (第40・41図)

**a 土器** 8号住の出土土器は大きく第Ⅲ群1類の沈文系と4類の繩文系と分けることができる。1は埋甕であり、口縁部を意図的に打ち欠いたキャリバー形深鉢である。胴部は2本1組の懸垂文がみられ、沈線間は丁寧にミガキ整形が行われている。4もこれに共通する。2は波状口縁のキャリバー形深鉢である。口縁部には太隆線によって渦巻つなぎ弧文が描かれ、区画内にRL繩文が充填される。胴部は2本1組の沈線と蛇行沈線が垂下しているが、沈線間はやや幅が広く、ミガキ整形が施されている。

3・5・7は在地の沈文系土器であり、いざれもタル形深鉢の資料である。3は口縁部下に横区画文を配し、その中心部に交互刺突による波

状文が描かれている。頭部の撚り繩状モチーフから派生する大柄渦巻文は、2本1組の隆沈線によって施文され、地文には異方向の沈線が充填されている。一方、5・7は横帶横円区画文が存在せず、口縁部と頸部の間に2本の隆線がめぐって小渦巻文と連繋し、そこから渦巻文が派生する。两者には時間差が存在し、3が一段階古くなると考えられる。

6は壺形の鉢で、扁平の隆線とその脇を沿う幅広の沈線によって渦巻文が描かれる。地文には櫛歯状工具による条線文が引かれることから3類の曾利式に比定されよう。

**b 土製品** 11は小形の土偶胸部である。いわゆる出尻土偶・唐草文土偶(神村1984・新谷1993)に比定されるが、臀部も大きさは突出せず、腕部の表現も簡略化されている。胸部の乳房は認められないが、腹部には円形の突起が貼り付いていることから、妊娠を表しているものと思われる。頭部と脚部の破損面には煤が付着した孔が観察されることから、この部位についてはブロック状に製作されたものが接合されたことを示している。小型化した十字状の形態と文様の簡略化から出尻土偶の最終段階に位置付けられよう。

**c石器** 1は石核であり、多面にわたって剥離が行われている。2は一側縁に剥離痕を残す小形刃器である。いずれも黒曜石製。3は先端部に使用痕がみられることから叩石と考えられる。

**所属時期 第VII期** (小口)

### 9 第9号住居址 (第42~54図、図版9・29~32)

**位置** 調査区中央北寄りに位置する。8号住居址が床を貼り、10・11号住居址に切られる。住居址中央南寄りに工事による大きなカクランを受けている。

**規模・形状** 直径6.0mの円形である。

**検出・調査状況** 8・9・10号住居址にわたるサブトレーニチの土層観察によって、8号住居址より古いことは判断できたが、10号住居址との新旧関係は判断がつかないまま、同時に掘り進めた。整理段階で遺物・遺構の形態等から10号住居址を新しいとした。

**柱穴** P1~P6が主柱穴と思われる。深さは、P1・49cm、P2・60cm、P3・40cm、P4・35cm、P5・38cm、P6・53cmを測る。P9・P10はそれぞれ20cm・18cmと浅い。P7・P8は53cm・29cmの深さがあり、入り口施設に關係するものであろうか。

**炉址** 規模は、88cm×84cm、深さ26cmで内部は赤く焼け固くしまる。また炉の周囲の床面が一部赤く被熱しており、炉の作り変え、あるいは灰をかけ出した痕跡などが考えられる。

**周溝** 北西壁際に継続的に巡る。幅10~15cm、深さ10cmを測る。さらに内側に、P3からP5を結ぶように溝が巡り、2重の周溝が存在する。幅10~15cm、深さ15cmを測る。

**遺物出土状況** 遺物の多くは、住居址北西壁際から中央にかけて出土している。住居址覆土I層の堆積に沿って出土していることから、住居址がある程度埋まった段階から、廃棄されていったことがうかがわれる。遺物は個体ごとにまとまっているものも多い。図21と8は、入れ子状に出土している点が注意される。

(今村)

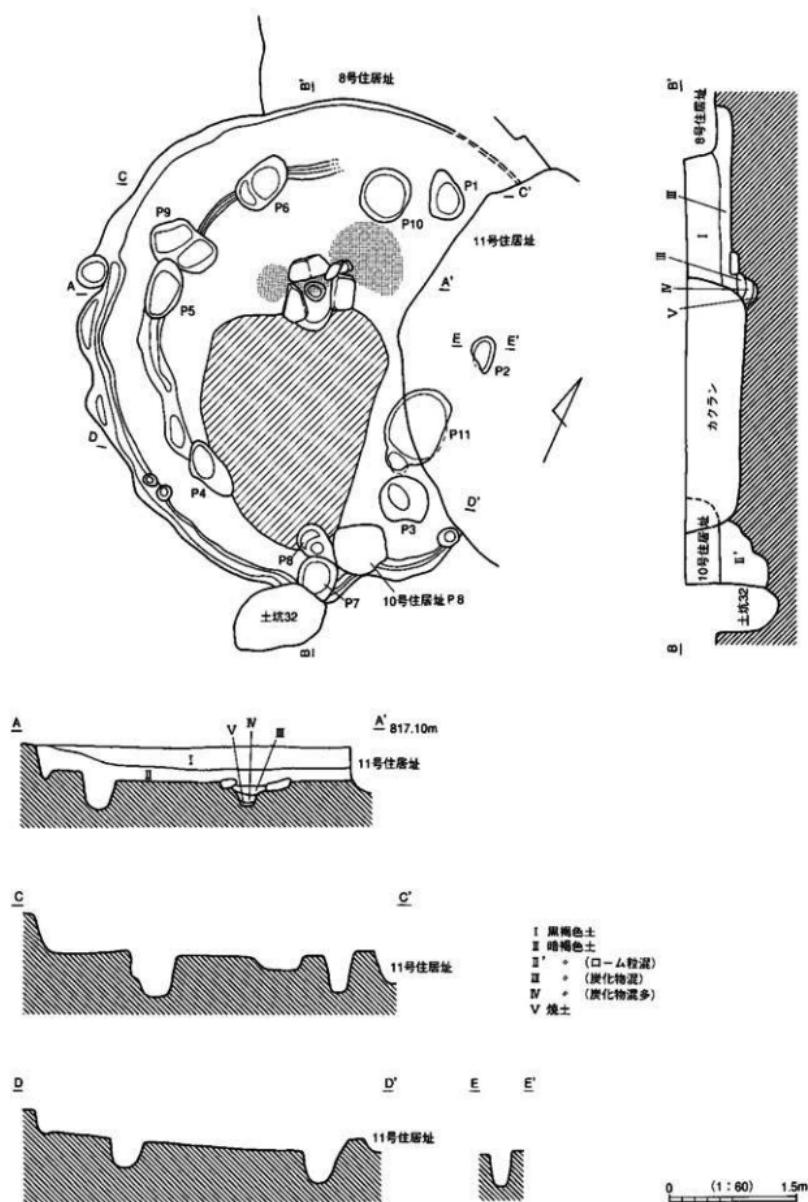
### 遺物 (第44~54図)

**a土器** 9号住からは、第II群土器のなかで、1類土器が良好な一括資料として出土している。

1は第II群5類に位置付けられ、内傾した口縁部には縦位沈線が施され、胴上半には波状隆線がめぐって、三叉文や蓮華文、縦位沈線が充填される。胴下半には隆線がめぐって縄文が施文されることから井戸尻I式に比定されよう。

2~19は第II群1類に相当する。2は口縁部のみであるが、キャリバー形の器形を呈し、波頂下の渦巻文を基点として、縦位沈線や交互列点文、押引文などが施文される。井戸尻I式に比定されよう。3は無文口縁が外反し、頸部に人体文が施され、三叉文や縦位沈線が描かれる。胴下半の弧線文内部には横線が引かれていることから櫛形文の変形として捉えられよう。4~6は胴上半が欠損しているが、下半部の櫛形文が確認される。いずれも隆線上に刻みが施されていることから、古相を帯びる。7は蝶々結び状把手の付いた櫛形文土器である。8・9は褶曲文・縦位密接隆線モチーフ(三上1996)が描かれた櫛形文土器で、8は櫛形文モチーフが2本1組の隆線によって施文され、9はX字状モチーフが貼付されていることが特徴である。この類型は、岡谷市花上寺遺跡25号住から一括出土している。

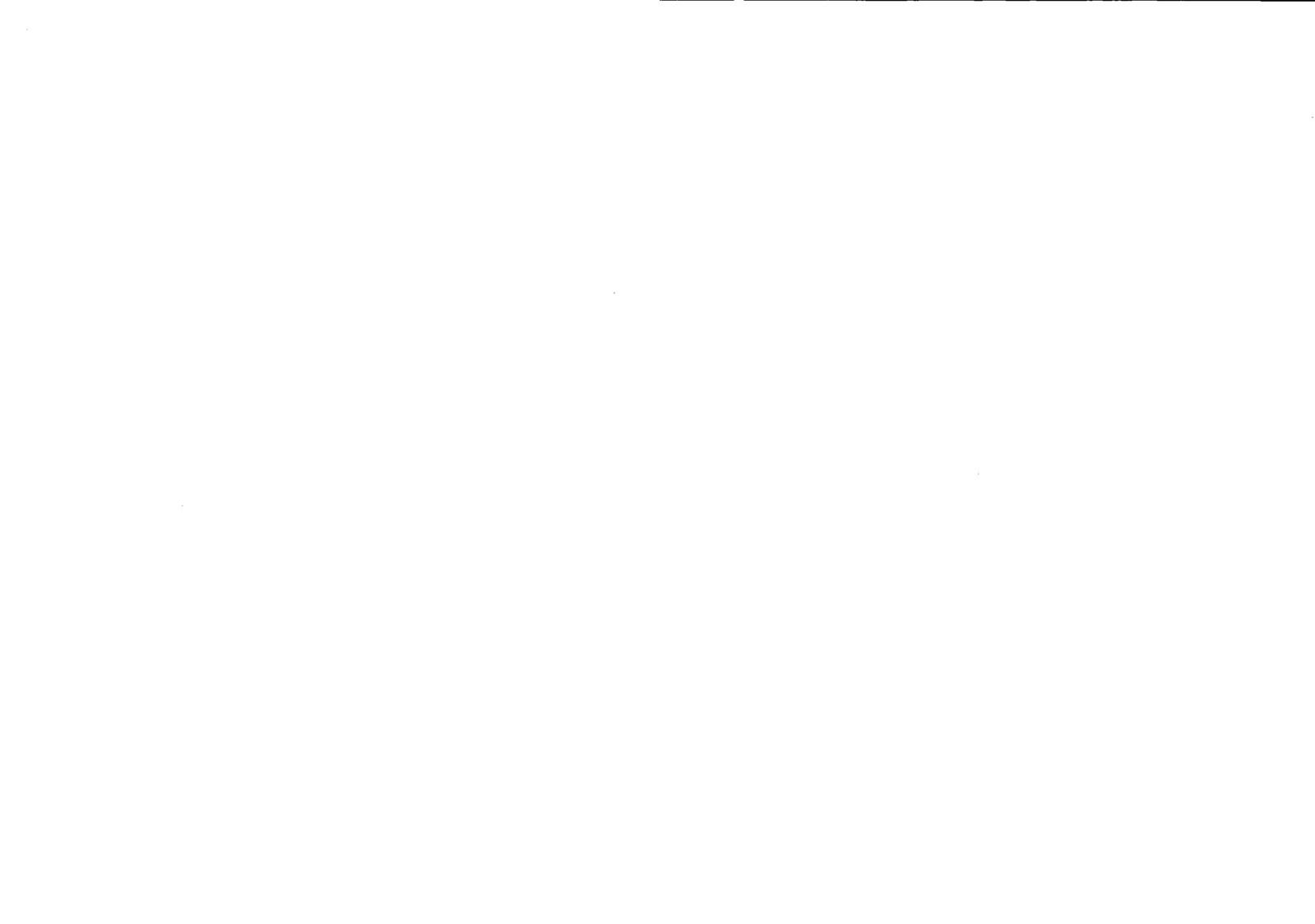
10~15は1類a種に該当する。10・11は大形の深鉢であり、胴下半が欠損しているが、4単位の波頂下に梢円状もしくはタマゴ状区画文を配置し、縦位沈線を充填することで共通している。両者の違いは、交互列点文を沈線上に施す前者に対して、後者は隆線脇に押引文を施すことであろう。10の区画内にみられる縦位沈線上の列点は、のちの横位縦帶沈線文の祖形と考えられることから、10が古段階、11が新段階に位置付けられる。さらに、新旧を分ける視点として、隆線上の刻みの有無が大きな指標となるものと思われ。12は古段階、13~15は新段階と考えたい。16・17はb種土器であり、弧線状区画内に縦位沈線が充填されたもので

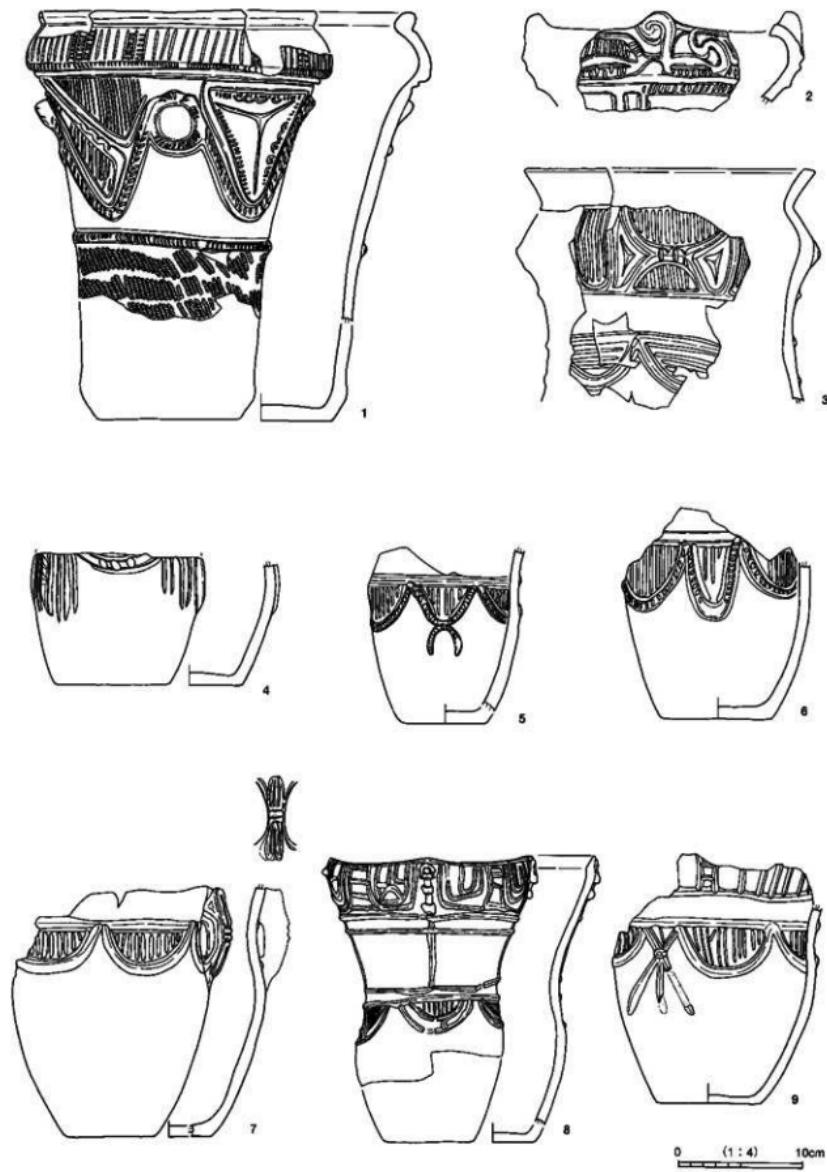


第42図 第9号住居址

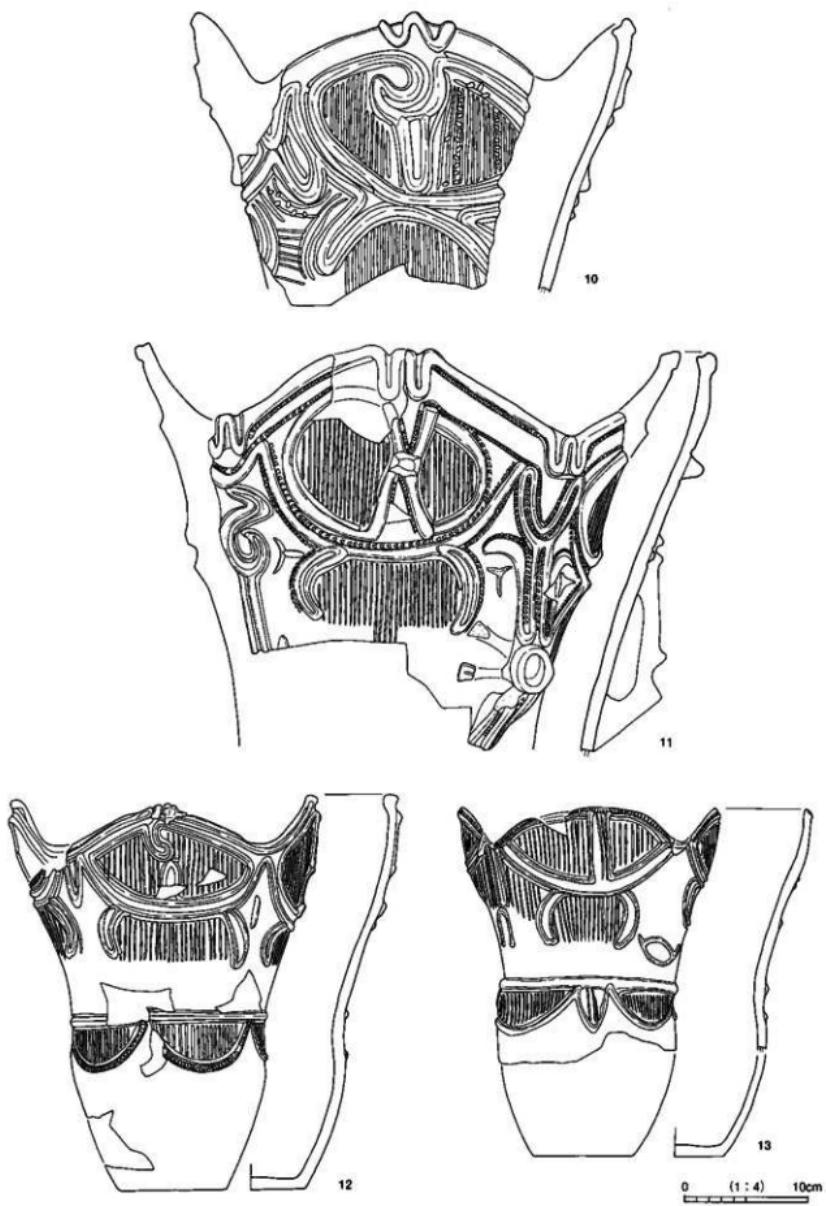


第43図 第9号住居址遺物出土図

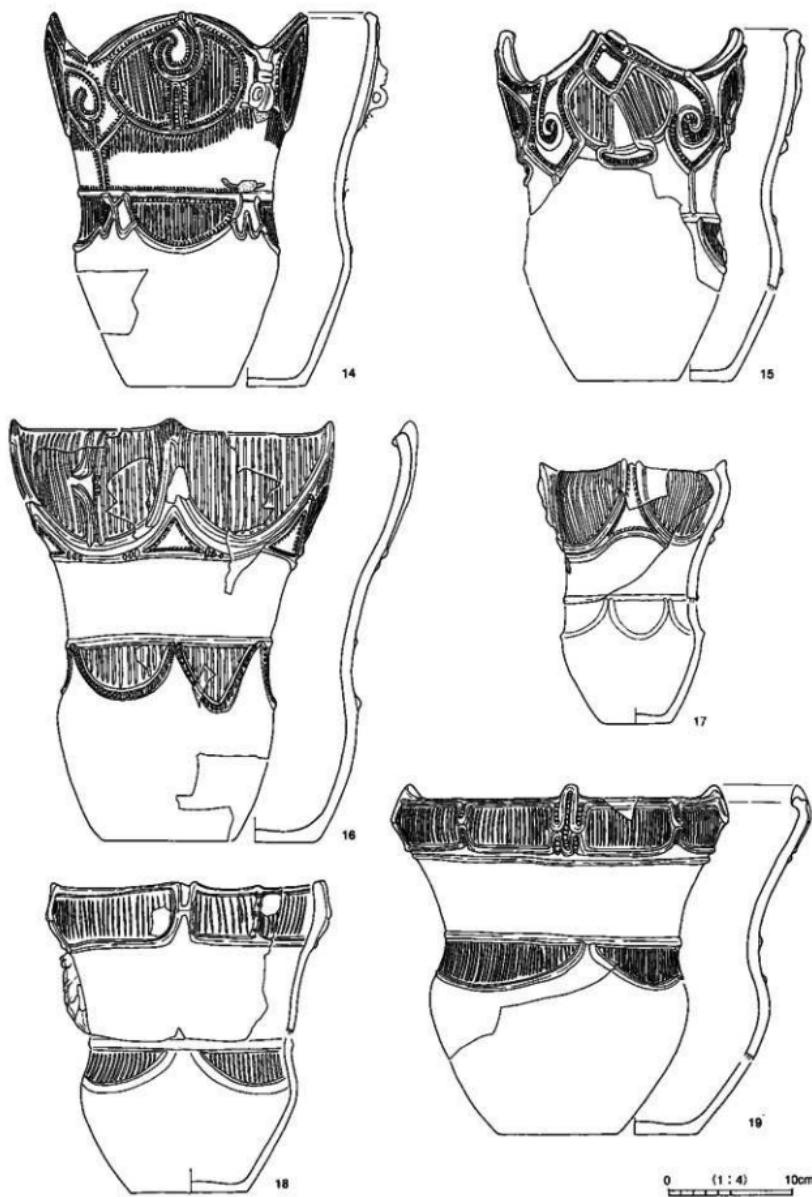




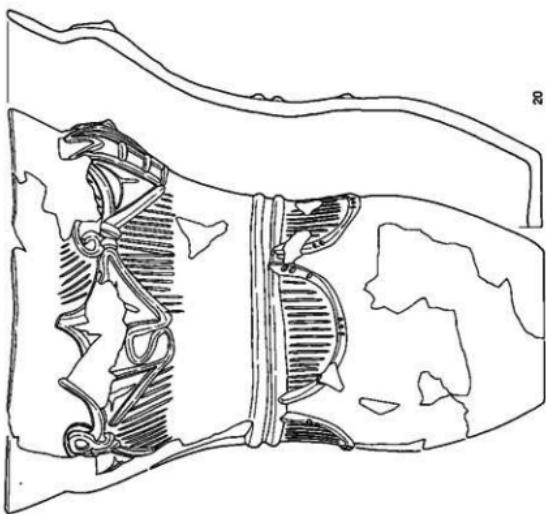
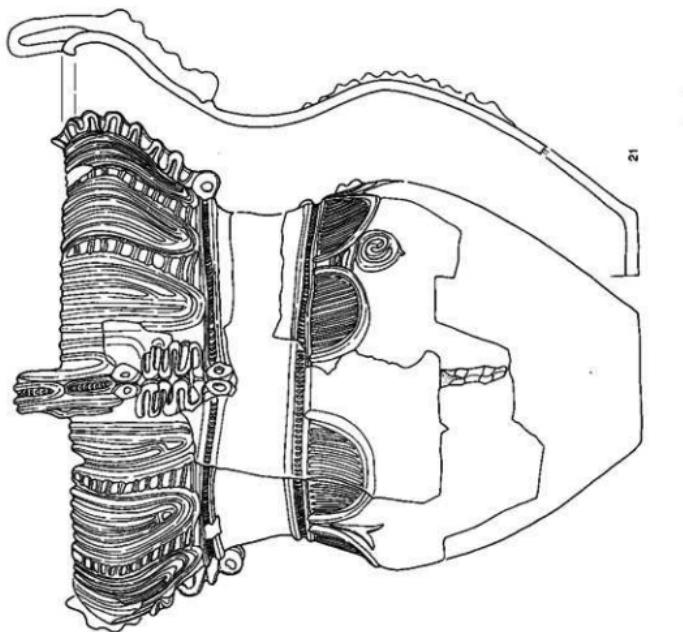
第44図 第9号住居址出土土器（1～9）



第45図 第9号住居址出土土器 (10~13)



第46図 第9号住居址出土土器（14～19）



第47図 第9号住居址出土土器 (20・21)

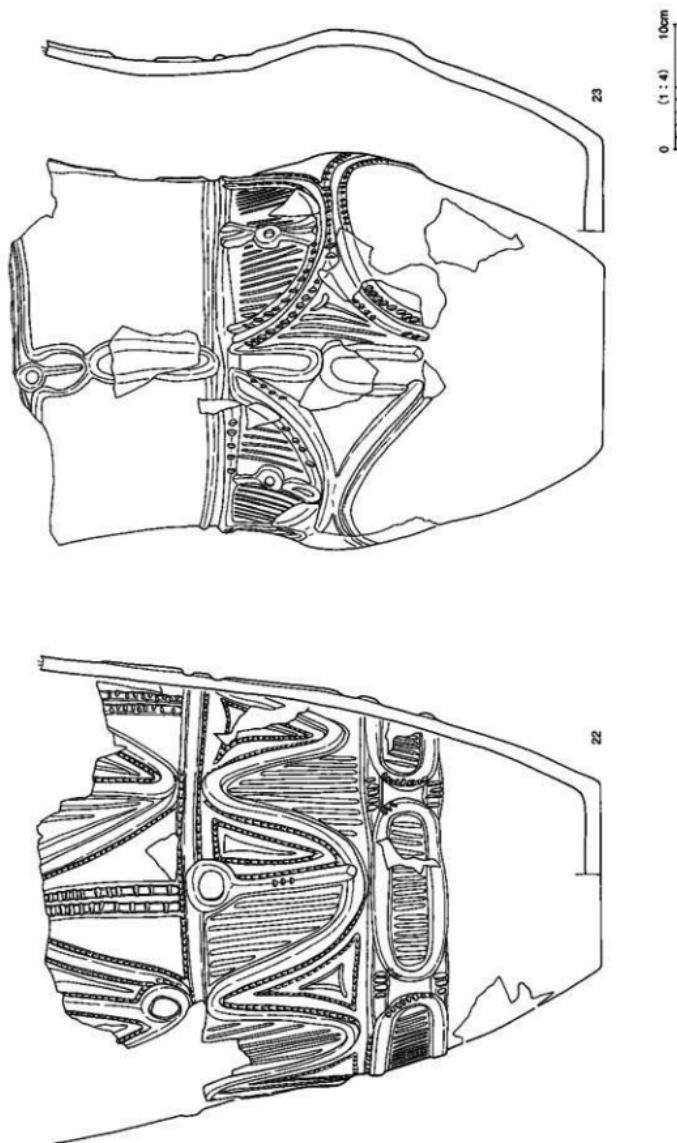
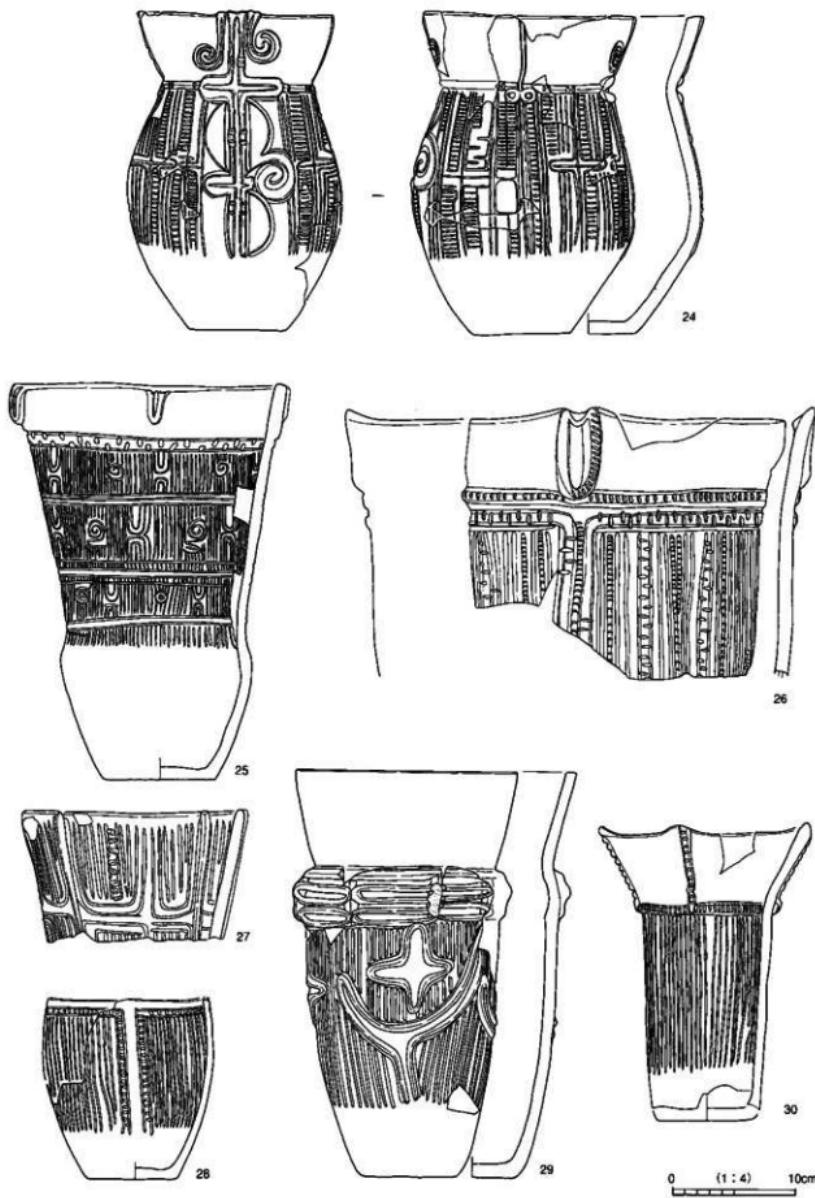
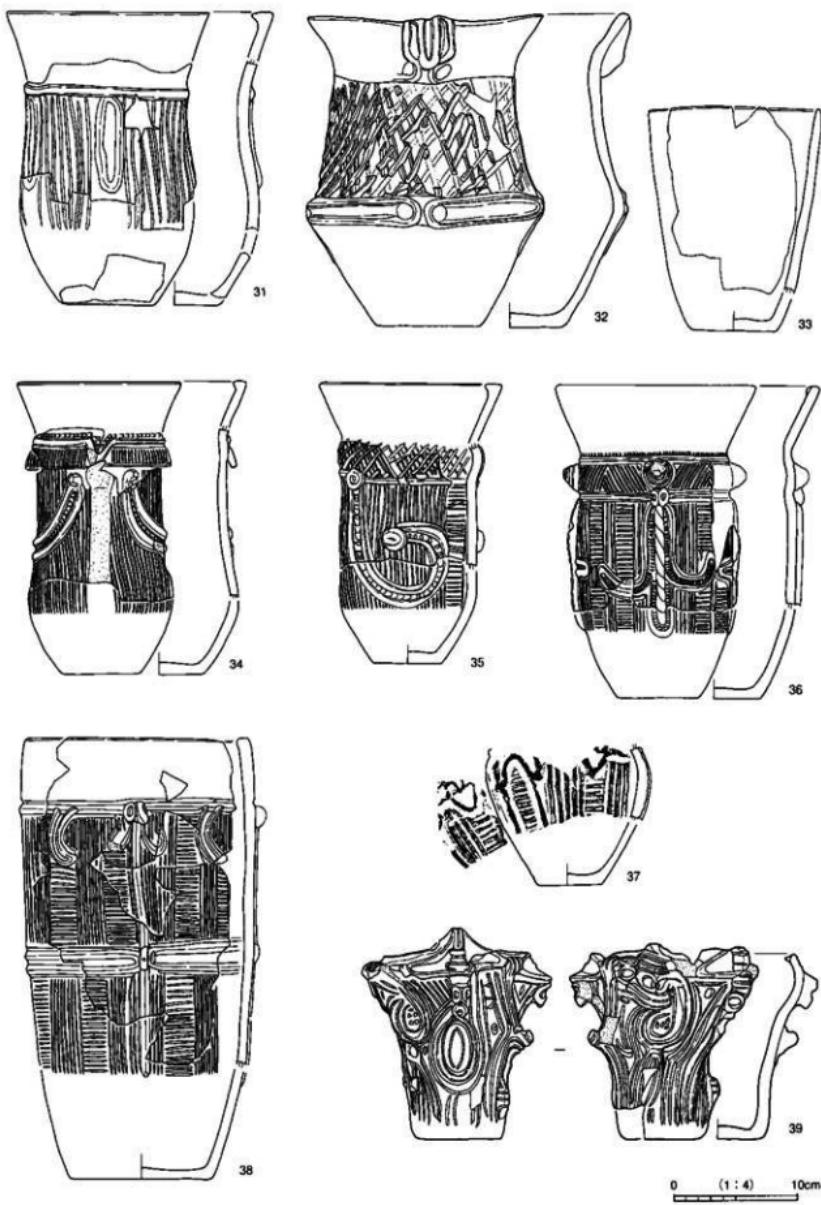


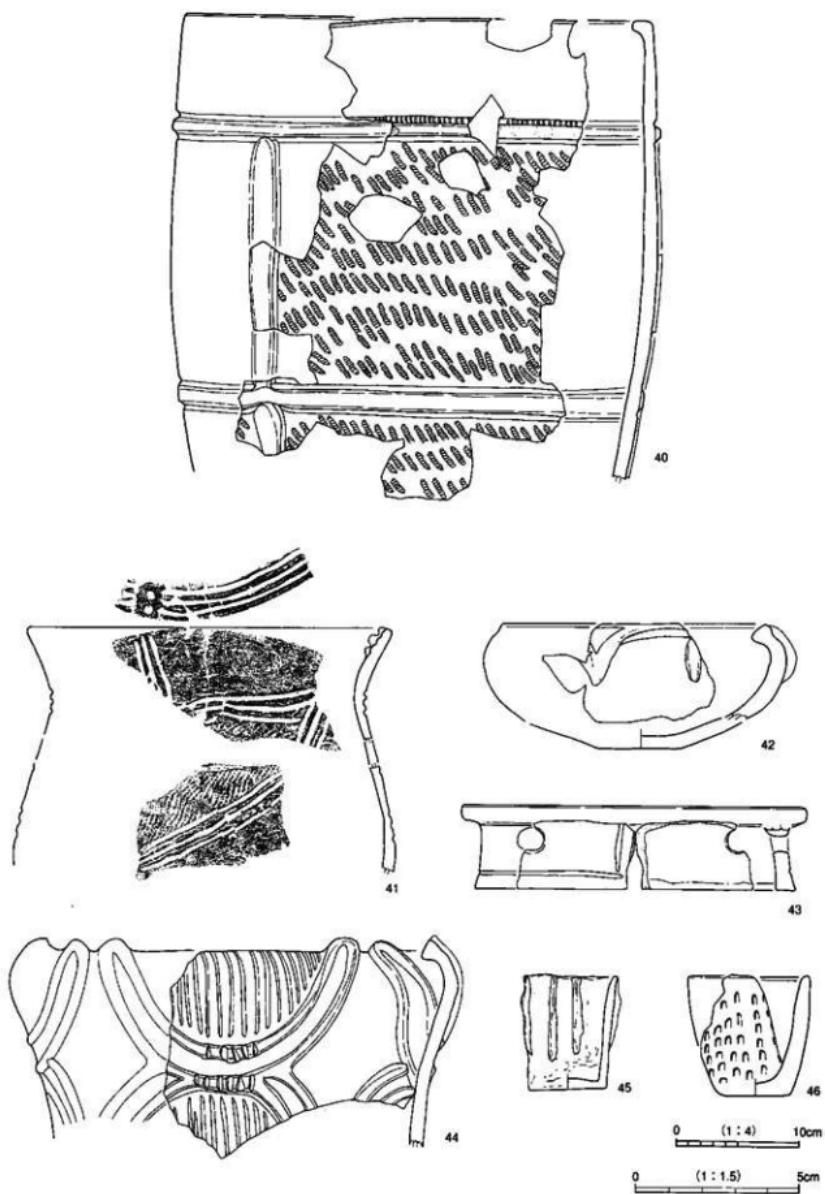
図48 図 第9号住居址出土土器 (22・23)



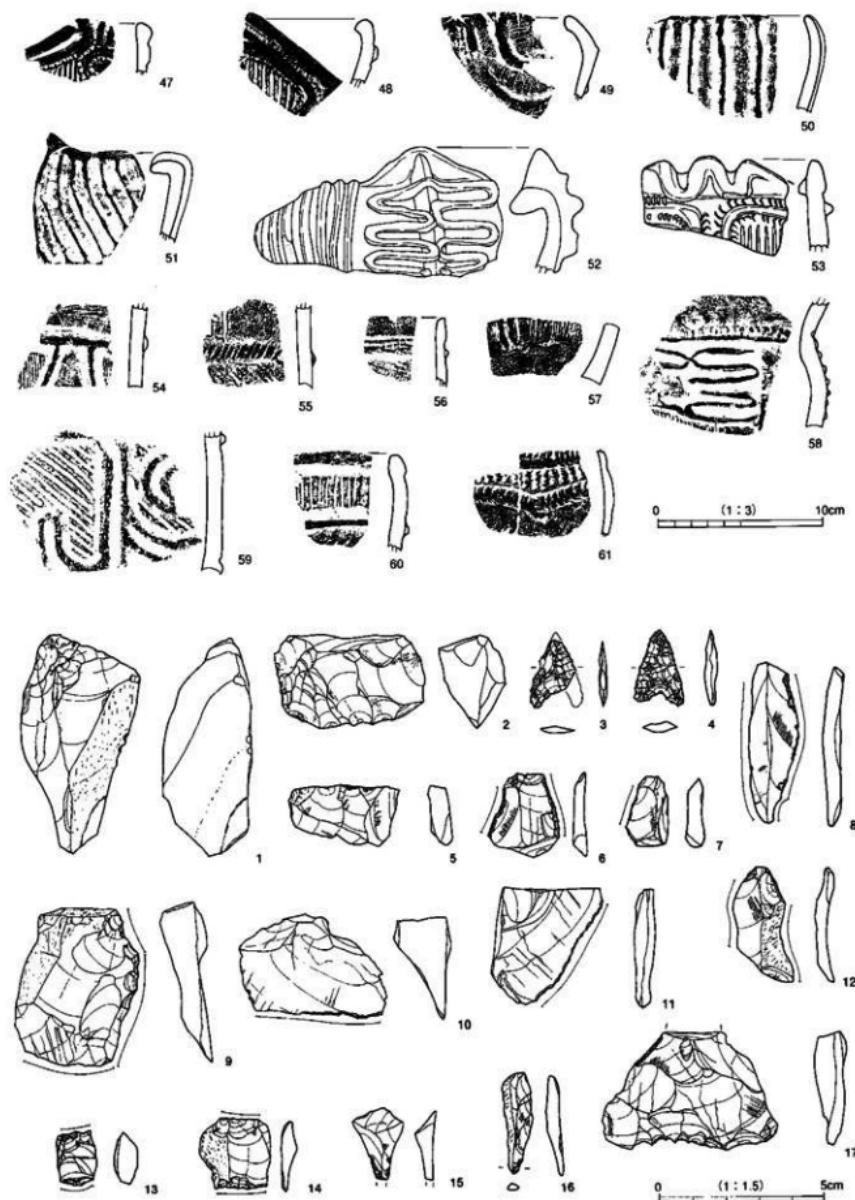
第49図 第9号住居址出土土器 (24~30)



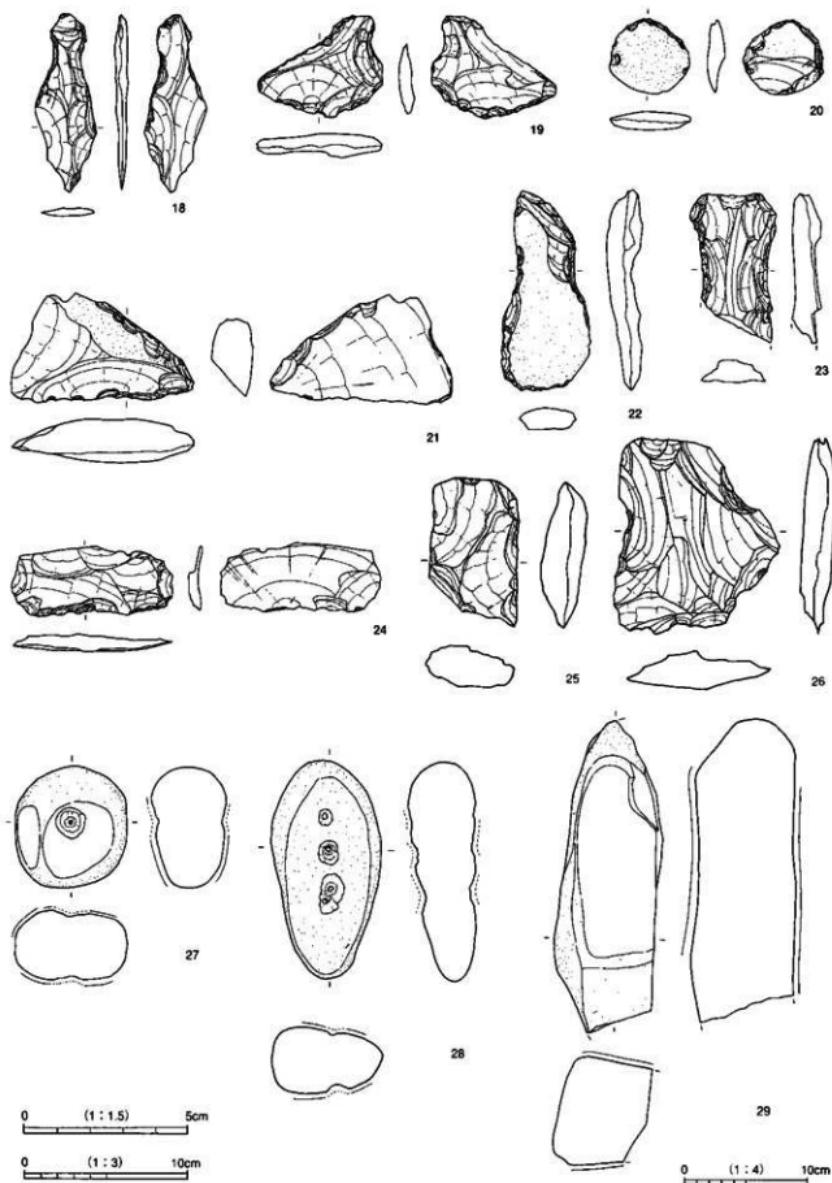
第50図 第9号住居址出土土器 (31~39)



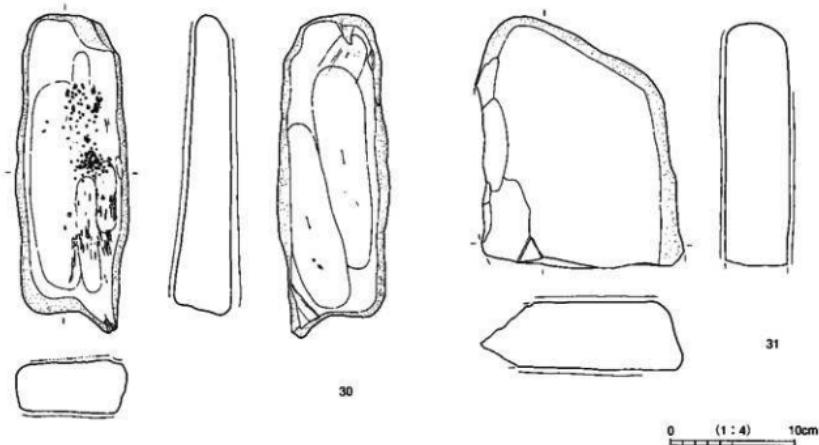
第51図 第9号住居層出土土器・土製品 (40~46)



第52図 第9号住居址出土土器（47～61）・石器（1～17）



第53図 第9号住居址出土石器 (18-29)



第54図 第9号住居址出土石器（30・31）

あり、いずれも押引文が施されている。しかしながら、16については3本単位の列点文や隆線上の刻みが確認されることから、古段階と新段階の両要素を兼ね備えたものとして理解できる。

同じくb種である18・19は、口縁部に方形区画文を形成し、縦位沈線が施されているが、前者は撚り繩状把手が貼り付けられている。また、口縁部の区画隆線上に左右交互列点が認められることから、古段階に属する。20・21は大形の深鉢で、20は「く」字状に外反した口縁部とやや膨らんだ頸部を有し、21は4単位の突起が付いたキャリバー形を呈している。20は頸部に人体文が展開し、上下に縦位沈線が引かれる。また、胴下半部には3本の列点を施した櫛形文が付くことから井戸尻I式に比定されよう。21は隆線による褶曲文が描かれ、突起下に眼鏡状モチーフが貼付され、さらに押引文が隆線脇に併走していることから、梨久保B式として捉えることができる。

22・23は口縁部を欠損した円筒形とキャリバー形の大形深鉢である。22は横帯区画文を形成し、波状文や梢円区画を描く。区画内には三叉文や縦

位沈線などが充填され、押引文もみられることから井戸尻I式に比定されるものと思われる。23は連鎖状のモチーフが垂下し、胴下半に人体文が展開した櫛形文土器の変容形である。隆線上に刻みを施し、内部に縦位沈線が充填される。22と同型式と考えられる。

24～31・34～38は第II群2類に相当する一群である。口縁が外反し、胴下半に最大径を有する24は、36と同様繊細な意匠を描いた資料である。口縁部から2単位の渦巻文と十字文モチーフを垂下させ、胴部を分割している。器面には、横位綱帯沈線が描かれているが、その間において主モチーフである半月状文や方形文が半肉彫状に施され、いわゆる条線が未発達な段階に位置付けられる。25は胴下半がやや括れた円筒形に近い器形であり、口縁部が肥厚している。口縁部には4単位のU字文が貼付され、頸部に交互刺突による波状文がめぐる。胴部には浅い細沈線によって条線が引かれるが、その間にU字文や渦文が入れられ、単調化していない。本来、中葉期における横帯区画文系土器は区画施文を行った後に充填文を施すが、本

例は条線を施文した後、横線を3段引いている。この施文順序が示すのは区画が開放化され、条線が器面全体に展開する段階への過渡期と位置付けられることである。26は大形の円筒形深鉢であり、口縁部にU字文を貼付し、頸部に刻みを施した隆線がめぐっている。胴部の逆U字状区画内には、条線とその間隙に左右からの列点と細い刺突文が描かれ、この左右からの列点文は、後の横位継帯沈線文の祖形となると考えられる。27は円筒形深鉢の口縁部で、隆線によって器面を分割した後、太沈線によるU字状区画と継位沈線が上下2段にわたって描かれている。

28~31は無文口縁を有し、外反した口縁部と頸部が括れる器形を呈した一群であり、地文に条線文のみが描かれる特徴としている。28は刻みを施した逆U字状区画を配し、区画内に条線文を充填している。29は頸部が膨らみ、3段の小梢円文を連続的に横位に貼り付け、J字文や十字文の主モチーフを胴部に展開している。30は波状口縁下に刻列隆線を垂下させた深鉢である。31は頸部に1条の隆線がめぐって、梢円モチーフが胴部に4単位垂下している。

32は口縁部にU字状文と眼鏡状突起が一体化して貼り付けられ、胴部には細隆線による斜格子目文が描かれている。また、胴下半には細い梢円文がめぐって文様帶下端区画となつた稀少な例である。暗褐色から茶褐色の色調が本住居址では多い中、本例は明褐色を帯びて他の土器群とは異なっている。

33は意匠が描かれない素文系深鉢である。内外面にミガキ整形が施される。

34~38は第Ⅱ群2類土器であり、口縁部が無文帯を形成すること、34以外は胴部に横位継帯沈線文を持っていることで共通している。34は傘状の張り出し部が形成され、継位沈線が施文されている。胴部には押引文と隆線が組み合わさり、U字文として展開する。35は頸部に斜格子目文が描かれているが、その施文技法はヘラ状工具による沈

線がまず引かれ、それに交差するように細隆線が貼り付けられる。胴部にはJ字状モチーフが施されている。36は渦巻突起が基点となって、眼鏡状文と拂り綱状懸垂文が垂下している。37は円筒形の深鉢であり、眼鏡状突起から懸垂文が派生し、胴中位で梢円文がめぐって器面を上下2段に分割した珍しい例である。38は小形の深鉢で、頸部に波状隆線がめぐっている。

39は焼町式土器であり、本調査では1点のみ完形品として出土している。小形の深鉢であり、波頂部を基点として、眼鏡状突起が貼付され胴部に曲隆線文が描かれる。また隆線間に刺突文が施されている。熊久保遺跡からは、第3次調査において焼町式の優品が2点ほど出土しているが、このことからも佐久平との関わりが深かったことを伺わせる。

40・41は6類土器であり、縄文施文を特徴としている。40は大形の円筒形深鉢であり、胴部に扁平の太隆線によって十字区画がなされる。41は外反した口縁部内面に8字状の突起と3条の沈線がめぐっている。また、胴部には3本1組によるモチーフが描かれるが、おそらく飛騨地方を中心とした北陸系土器と推定され搬入土器と類推される。42は内湾する浅鉢で、三角状に隆線が垂下している。43は円形透し孔がある器台であり、内外面とも丁寧なミガキ整形が施されている。

44は人体文が施された深鉢であり、井戸尻I式に比定されよう。45・46はミニチュア土器であり、前者は継位に隆線が貼り付けられ、輪積みによって製作されている。後者は刺突文が施され、手づくねで成形されている。

47~48は第Ⅱ群1類a種、49~52は同群3類に相当するが、49・51は口縁が内折していること、隆線間に細沈線が施されることなどから、下伊那地方に分布する類型と考えられる。53は口縁部に波状隆線が貼り付き、方形区画内に継位沈線が充填されている。54は櫛形文土器、55は刻みの施された隆線がめぐって、縄文施文がなされている胴

部破片、56は円筒形で縄文施文された小形鉢である。58は頸部が膨らむ器形である第II群2類、60は方形区画文を有する櫛形文土器の口縁部、59は異方向沈線と2本1組隆線モチーフを特徴とする梨久保B新式に比定されよう。61は薄手の器壁で、やや内湾している口縁部破片であり、弧線状に爪形文が施され、三角押文が縦位に施文されている東海系土器である。搬入品であろう。

**b石器** 1～3は石核であり、1は本調査で出土した石核の中で最も大きな部類に属している。4・5は凹基式の石鎚であり、4は脚部の片側が欠損している。6～12は小形刃器であり、一側縁以上に微細な剥離痕を有している。13・14はくざび形石器、15・16は石錐であり、15は先端部が欠損。17～19は石匙で摘部が破損している。20～21・24は横刃形石器で、いずれも疊面を残した粗い仕上げである。22・23・25・26は打製石斧で、分角形のものが多い。23・25・26は刃部が欠損している。27・28は敲石、29～31は台石で、29・31は欠損品である。

所属時期 第IV期 (小口)

## 10 第10号住居址 (第55～58図、図版10)

位置 調査区中央北寄りに位置する。9・14号住居址を切る。11・12・13号住居址に切られる。

規模・形状 北側に9・11号～14号住居址が重なるため、推定になるが直径6.5m程の円形か。

検出・調査状況 住居址南半分のプランは明瞭に検出できた。調査は、南から掘り下げ、床面を確認しながら北側へ掘り進めた。11号～13号各住居址と重なる地点で本址床面が壊され、各住居址が掘り込んで作られていることが判明したため、本址が古いと判断した。9号・14号住居址との新旧関係は不明のまま同時に調査を行った。整理作業段階で遺構の形態や遺物から、本址が9・14号住居址より新しいとした。壁は、南東9cm、南西22cm、北西15cmが残る。

柱穴 P1～P6を主柱穴と考える。深さは、P1・60

cm、P2・63cm、P3・48cm、P4・43cm、P5・56cm、P6・58cmを測る。P8は、深さ48cmあり、P2と組み合わさる柱穴か。P9は、深さ74cmでP3・P4と入り口の施設を形成していた可能性がある。

**炉址** 中央奥壁寄りにある。規模は、150cm×90cm、深さ20cm、長方形の石囲炉である。内部は平らに掘られ、赤橙色に焼け固くしまる。

**周溝** 南側壁際に幅20～10cm、深さ10cmの溝が巡る。さらに壁際から70～80cm内側に細い溝が巡る。一続きではなく、途切れ途切れではあるが周溝であろう。本址は、建て替えや、拡張の痕跡が柱穴等からうかがえないと、同時に存在したものと考えるが検討する必要があろう。

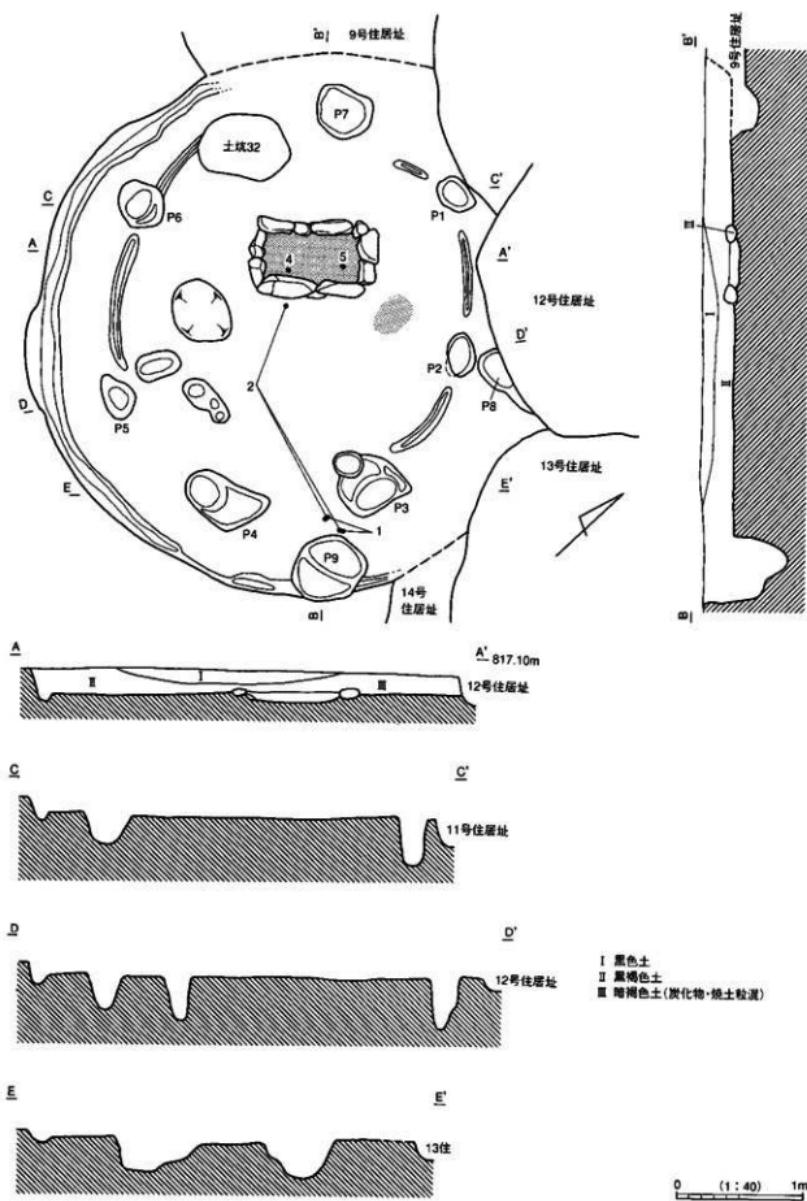
**遺物出土状況** 遺物は全体に少なく、第55図1～3がP3・P4間の床面上から、4・5は炉址覆土内から出土している。  
(今村)

## 遺物 (第56～58図)

**a土器** 10号住からは中葉の土器群から後葉的土器群への過渡期を示す良好な資料が出土している。

その特色は、①深鉢のサイズが小形のものから大形のものへ変化すること、②文様施文技法において半截竹管工具から棒状工具へと転換する2点にまとめることができる。これは、自立的な変化に加え、他型式の影響によるところが大きい。また土器の大形化に伴い、炉のサイズも連動して大形化する状況を見て取ることができ、単に型式学的な影響関係だけでなく、その機能・用途についても検討を行う必要があるものと思われる。

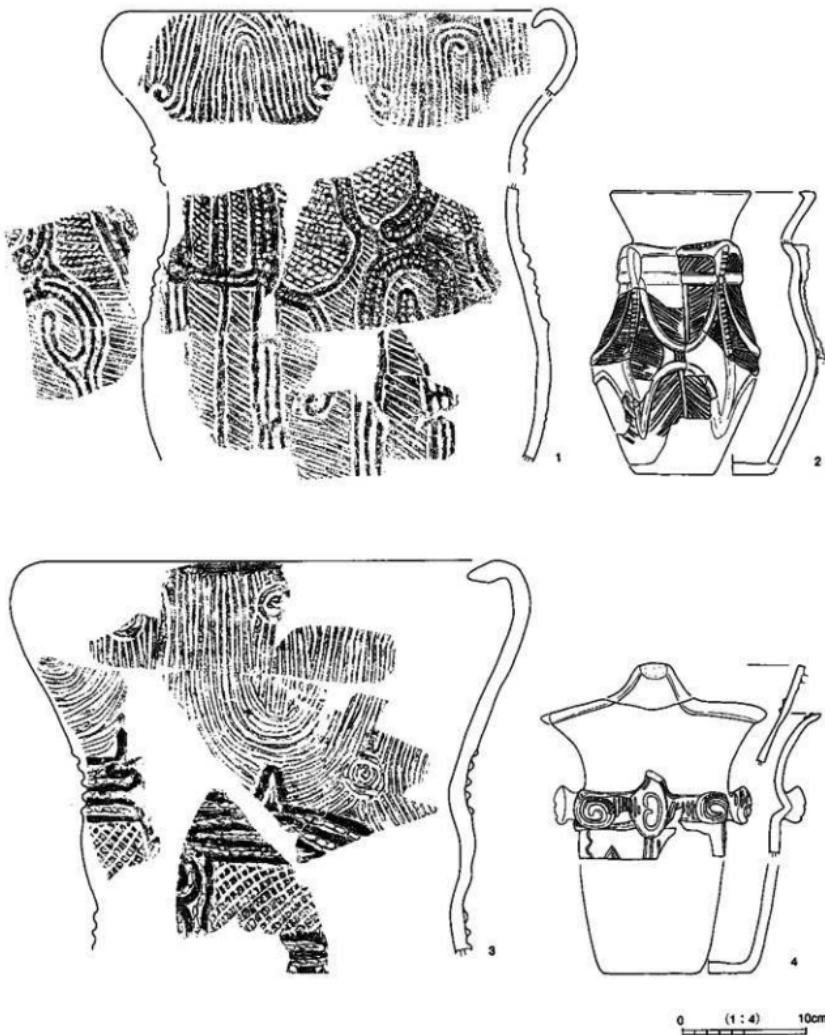
1・3は口縁部が大きく内湾するキャリバー形深鉢である。焼成は不良で器壁が脆弱であり、石英・雲母粒を多く含んだ胎土を有することで共通している。この点は、前段階の土器群の整形が丁寧で、焼成も良好な特徴と対照的なあり方を示している。1は口縁部に沈線褶曲文が施され、胴部は2本1組の隆線によって「田」字状文や変形曲線文が描かれ、隆線間には刺突が施される。主モチーフの複雑化に加え、地文も上半が刺突文、下



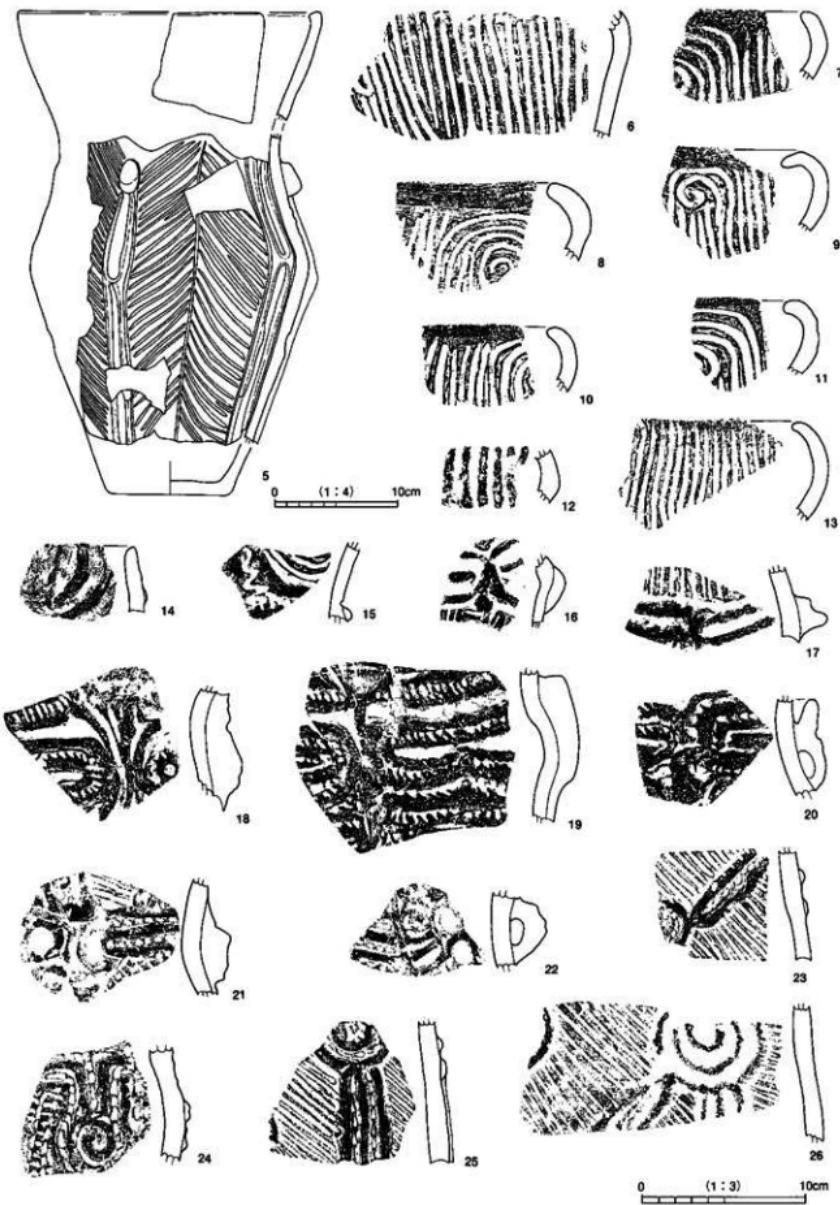
第55図 第10号住居址

半が斜沈線を充填するといった一定の基準がみられず、意匠の摸索段階といった印象を受ける。3も同様口縁部には、渦文と組み合わされた褶曲文

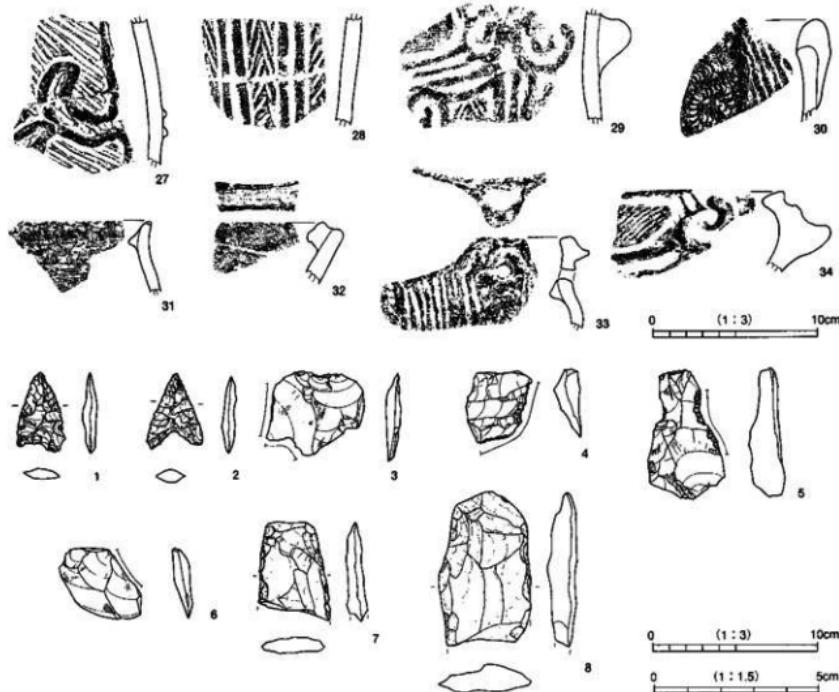
が沈線で描かれ、頸部には4本の隆線が横走し、その間際に刺突文が充填される。頸部はやや膨らみ、斜格子目文を描いている。このような土器は、



第56図 第10号住居址出土土器（1～4）



第57図 第10号住居址出土土器 (5~26)



第58図 第10号住居址出土土器 (27~34)・石器 (1~8)

松本市南中島遺跡17号住、同山影遺跡73号ピット、塩尻市峯畑遺跡5号住埋甕等に類例が求められる。

2は口縁部が外反し、頸部が膨らんで、胴下半に最大径を有する器形である。頸部には方形区画が形成され、区画内に斜行沈線が充填される。頸部から胴部にかけて刺突を施した隆線が垂下し、その間に上下の対向弧線文（人体文）が描かれる。対向弧線文は接触せず、その隙間に4本ほどの短沈線が引かれる。地文には細沈線が斜方向に、さらに弧線文内は2本の細沈線が垂下し、そこを基点として葉脈状に充填される。本例は、胎土が橙褐色を呈し、他の土器群とは異なる特徴を示していることから、木曾谷もしくは伊那谷から搬入されたものと類推される。4は円筒形の器形を呈

し、頸部に楕円形の突起を4単位有し、その中の2単位は波状口縁部と連続した把手を形成するものと思われる。突起間は渦巻文や継位の短沈線が描かれ、胴部においては垂下する3本沈線や剣先文が認められる。

5は炉内から出土したキャリバー形深鉢である。外反する口縁は無文であり、胴部に円形突起とそこから派生するH字状モチーフが描かれる。そのモチーフ間には1本の沈線が垂下し、葉脈状沈線が充填されるが、この段階においていわゆる綾杉状沈線が形成されていることが窺える。

6~15は第II群3類b種に該当する口縁部破片である。いずれも大きく内湾し、渦文を中心としてU字状文を重ねるという手法を探っている。16

～22はこの褶曲文土器の頸部破片である。隆線を重畳させ、その間に押引文を施している。あるいは、橋状把手を有する20・22などが認められる。

23～28は胴部破片であり、隆線による渦文や斜行沈線が描かれる。30はJ字状モチーフが貼り付けられた斜行沈線が引かれている。31は胴上半が張り、口縁がやや反る器形を呈し、口唇部に刻みが施されている。胴部には横位の条線が施された珍しい資料である。32は浅鉢の口縁部破片、33は内湾する口縁の波頂部に穿孔がなされ、縦位沈線が引かれた沈線文系土器である。34は強く屈曲した口縁に、やや上向きの渦巻つなぎ弧文が描かることから大木8b式に比定されよう。

**b 石器** 1～2は凹基式の石鏃である。3～6は小形刃器で、5は抉り状に調整加工が施される。いずれも黒曜石製。7・8は先端部の欠損した撥形・短冊形の打製石斧である。

所属時期 第V期 (小口)

### 11 第11号住居址 (第59～62図、図版11・33)

**位置** 調査区中央北壁際に位置する。9号住居址に床を貼る。10号住居址を切る。8号・12号住居址が床を貼る。

**規模・形状** (5.12m) × (4.96m)。南北の壁がやや張り出す、隅丸方形か。

**検出・調査状況** 造構が密集しているため、何本かサブトレンチを設定し土層観察につとめた。その結果、8号・12号住居址は、本址覆土中に床を張っていることから、本址より新しいと判断した。9・10号住居址については、9号住居址に床を張っていることから、また10号住居址の一部を掘り込んで作られていることから、いずれも本址が新しいと判断した。遺物にはまとまった個体が少ない。覆土中層からの出土である。壁は、東20cm、南21cm、北10cmが残る。なお、炉址前面広い範囲に、人頭大～拳大の礫が散乱している。

**炉址** 中央奥壁寄りに位置する。規模は136cm × 128cm、深さは40cmを測る。大きな石を四角く配

し、いわゆる掘りごたつタイプと言われる石窯炉である。内部は赤橙色に焼けて固くしまっている。

**柱穴** P1～P4が主柱穴と考える。深さは、P1・52cm、P2・41cm、P3・55cm、P4・35cmを測る。P4は他と比較し、規模・深さともに一回り小さい。

**周溝** 南壁際に幅30～10cm、深さ7～11cmで一条巡る。東側は、部分的ではあるが確認できたので多分全周していたのだろう。 (今村)

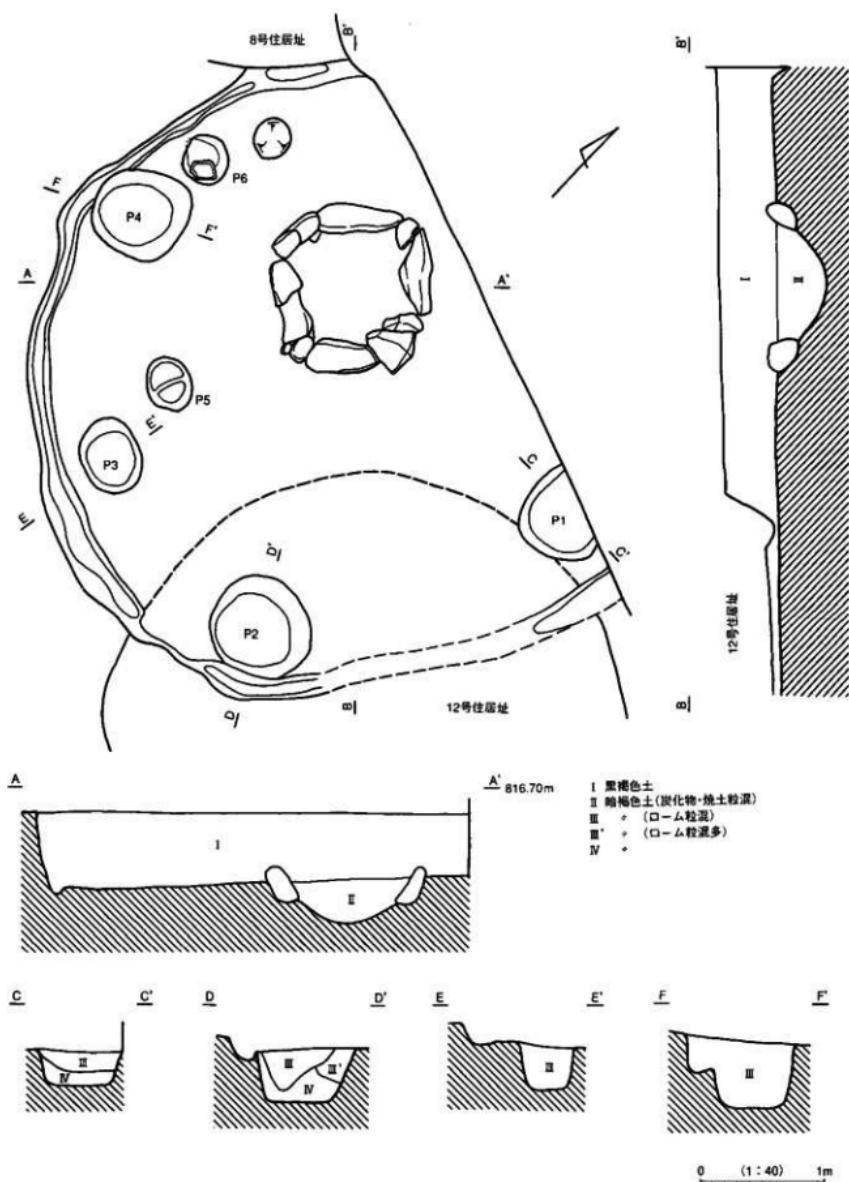
遺物 (第60～62図)

**a 土器** 11号住は第Ⅲ群1類土器の萌芽期として位置付けられる土器群がまとまって出土している。とくに腕骨文モチーフと渦巻文モチーフが一体化した段階として捉えることができる。

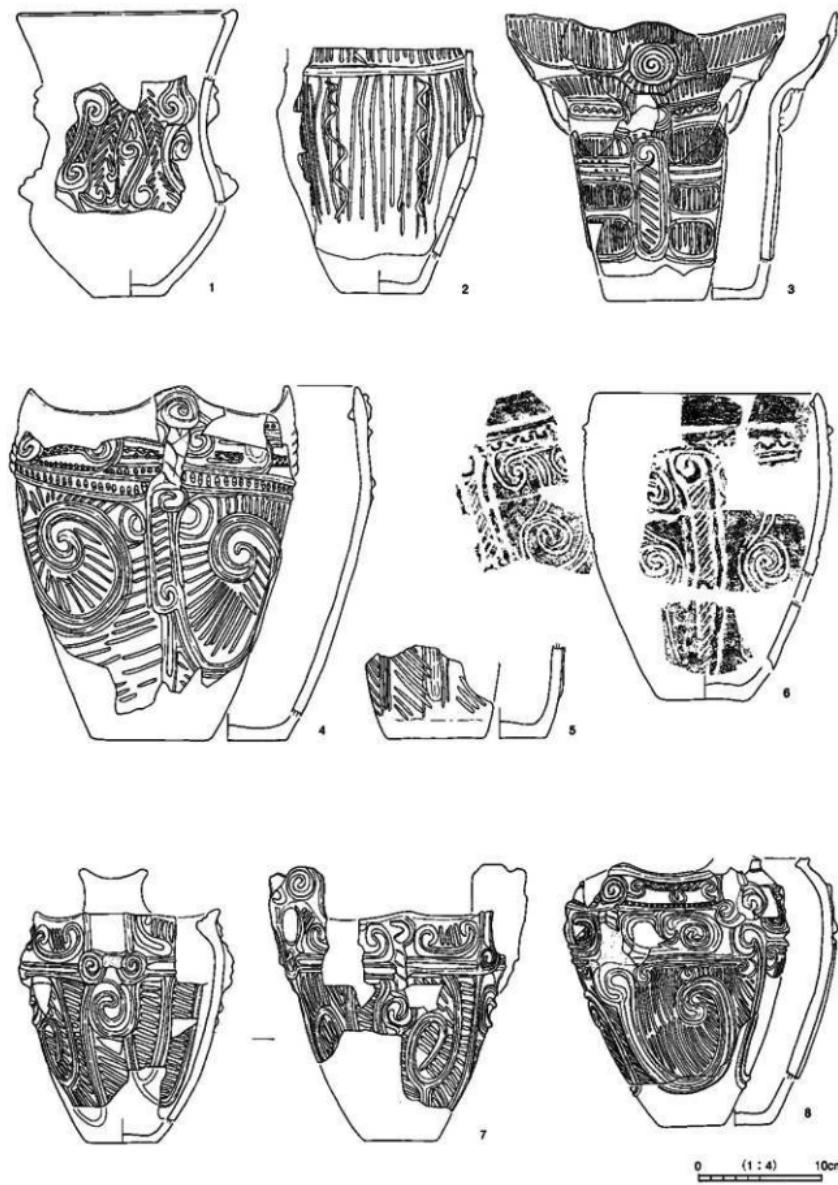
1は腕骨文土器であり、胴下部に最大径を有するキャリバー形深鉢である。口縁部は欠損しているが、おそらく無文帯を形成するものと思われる。腕骨文と劍先文が交互に縦位に貼り付けられ、地文には丁寧な綾状沈線文が施文される。

2は口縁部が欠損したキャリバー形深鉢で、頭部に1条の隆線がめぐって、胴部には棒状工具による条線文と蛇行沈線文が垂下している。3は4単位の波状口縁を有し、波頂下に小渦巻文が貼付される。そこから、胴部に橋状把手が垂下するが、欠損して詳細は不明である。頸部には交互刺突による波状文がめぐり、胴部には竜長の横円渦巻文を基点として、横帶横円区画が3段形成されている。区画内には縦位沈線が充填されるが、本例は器形および文様帶の構成が当該期にはあまり見られない特異な土器である。とくに胴部文様の構成は、中葉期における井戸尻式の横円区画文土器を勢髪させる。

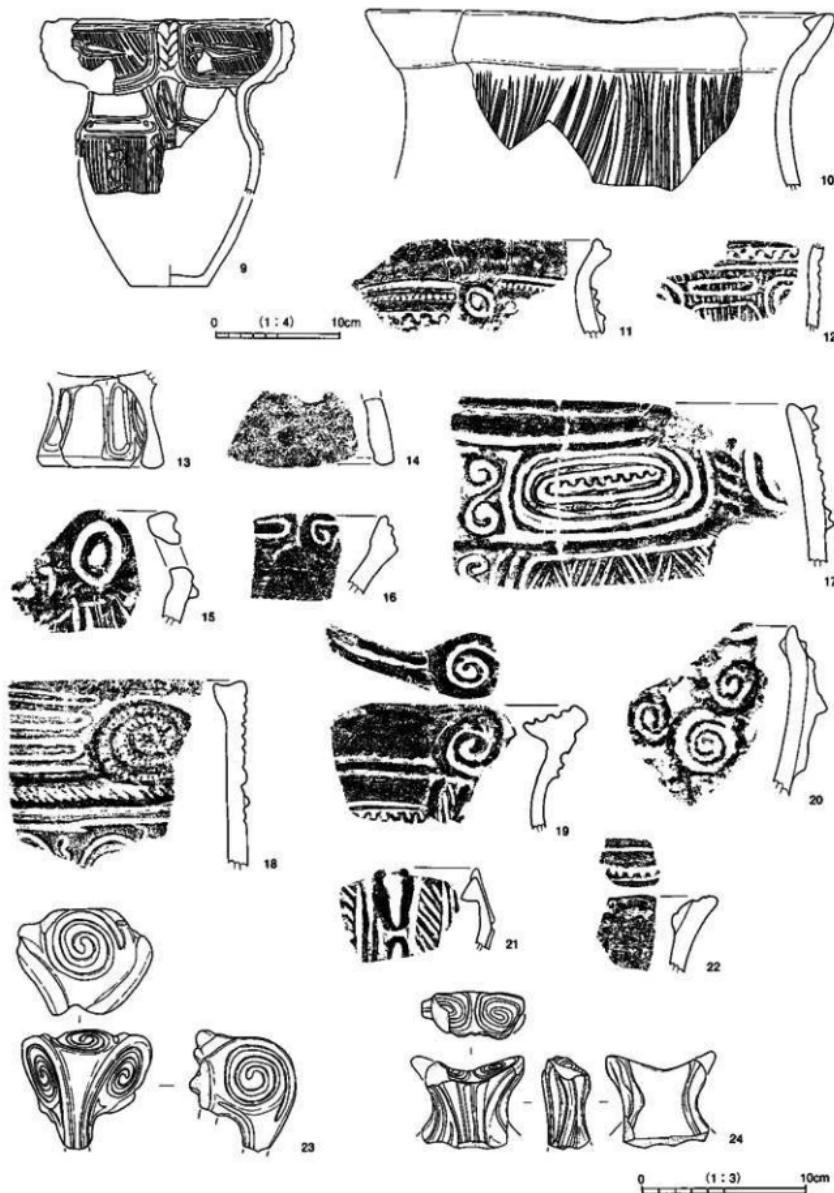
4・6～8は小形のタル形深鉢である。4は4単位の波状口縁を呈し、波頂下に渦巻文と撚り繩状隆線が貼付して、器面を分割する。そこから大柄渦巻文が派生して、胴部に展開している。口縁部と胴部の間には波状文と連続の刺突文がめぐっている。5は円筒形深鉢の底部であり、隆線が垂



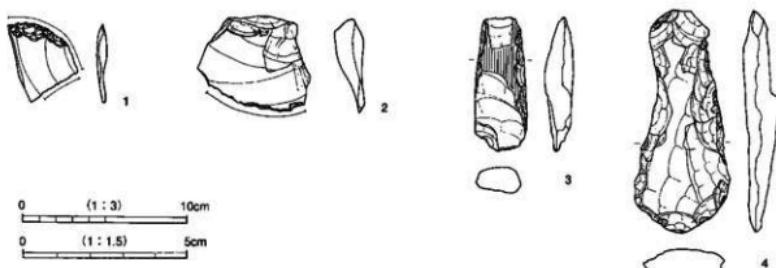
第59図 第11号住居址



第60図 第11号住居址出土土器 (1~8)



第61図 第11号住居址出土土器（9~24）



第62図 第11号住居址出土石器（1～4）

下して斜沈線が施文されている。6は無文口縁部下に交互刺突文による波状文がめぐり、胴中心部に腕骨文が垂下している。分割された器面には沈線による連結渦巻文が描かれるが、本例は地文を有さない点が珍しく注目される。7は2対の把手を有し、口縁部には勾玉状モチーフが描かれている。口縁部と胴部の境に燃り縄状隆線が貼り付けられ、そこから大柄渦巻文が派生する。渦巻文は、単位文様とならず、それぞれが連結している。これは、4や8の渦巻文が単位文様となって独立しているのとは異なるが、沈線文系土器ではこのタイプが多く認められる。ほぼ同じサイズの8は、口縁部と胴部の間に文様帯が形成され、沈線による梢円渦巻文が描かれる。そして、4・7と同様に燃り縄状隆線に連結して大柄渦巻文が展開している。

9は口縁部に燃縄状隆線を貼付し、方形区画を形成して、区画内に刺先文を描いている。頸部には燃り縄モチーフと連結したY字状文が胴部の主モチーフとして垂下する。胴部には条線文と蛇行沈線文が垂下している。10は口縁部が大きく開口し、外反する鉢形土器である。口縁部は肥厚し無文であるが、内縁に蓋受け状の隆線が貼付されている。胴部には樹齒状工具による条線地文が施文されたシンプルな意匠となっている。

11・12は台付土器の脚部である。11は微隆起線が垂下し、縦長の方形区画を形作っている。一方、

12は全面無文であるが、円形の透孔が認められる。13・19は外反する口縁に、渦文を中心に交互刺突による波状文が横走する。14は円筒形の器形を呈する胴部破片である。波状文下に縦位沈線の地文を施文後、横円文を描いている。17・18はタル形器形の口縁部であり、S字状文や梢円区画文を口縁部に描いている。20は、口縁部が緩く内湾する器形で、隆線による渦文が複数組み合わさった珍しい例である。23・24は沈線文系の把手部であり、23は頂部と左右に眼鏡状の渦文が、24は頂部中心と左右が崖んだ把手であり、頂部に眼鏡状の渦巻文が描かれている。本例は、7に貼付された把手と同形態であり、当該期には一般的なものである。

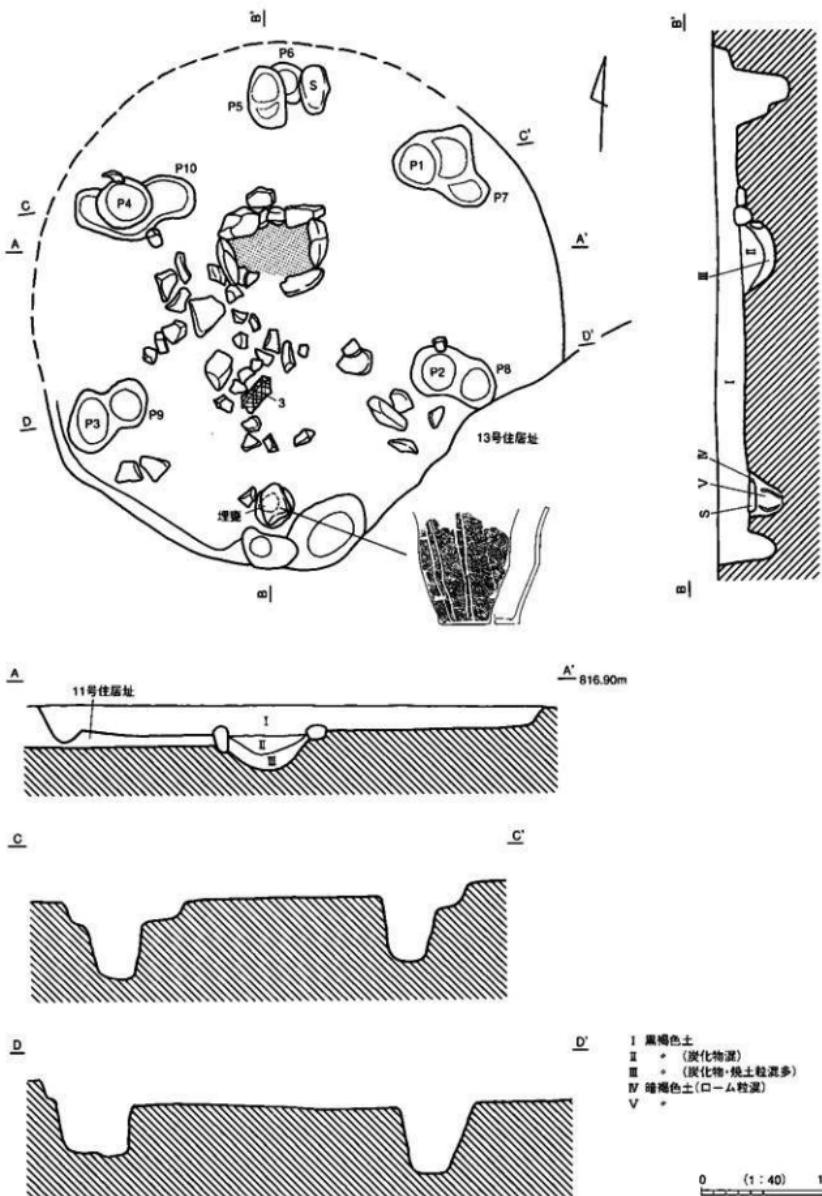
16・22は沈線文系の浅鉢である。口唇部には前者は沈線による渦巻文、後者は沈線上に刺突が施された意匠を有する。焼成は、いずれも不良である。

**b 石器** 1～2は黒曜石製の小形刃器。3・4は撥形の打製石斧であり、3は研磨痕を残す小形のものである。

所属時期 第VI期 (小口)

## 12 第12号住居址 (第63・64図、図版12・33)

位置 調査区中央北壁際に位置する。10号住居址を切る。11号住居址に床を貼る。13号・14号住居址に切られる。

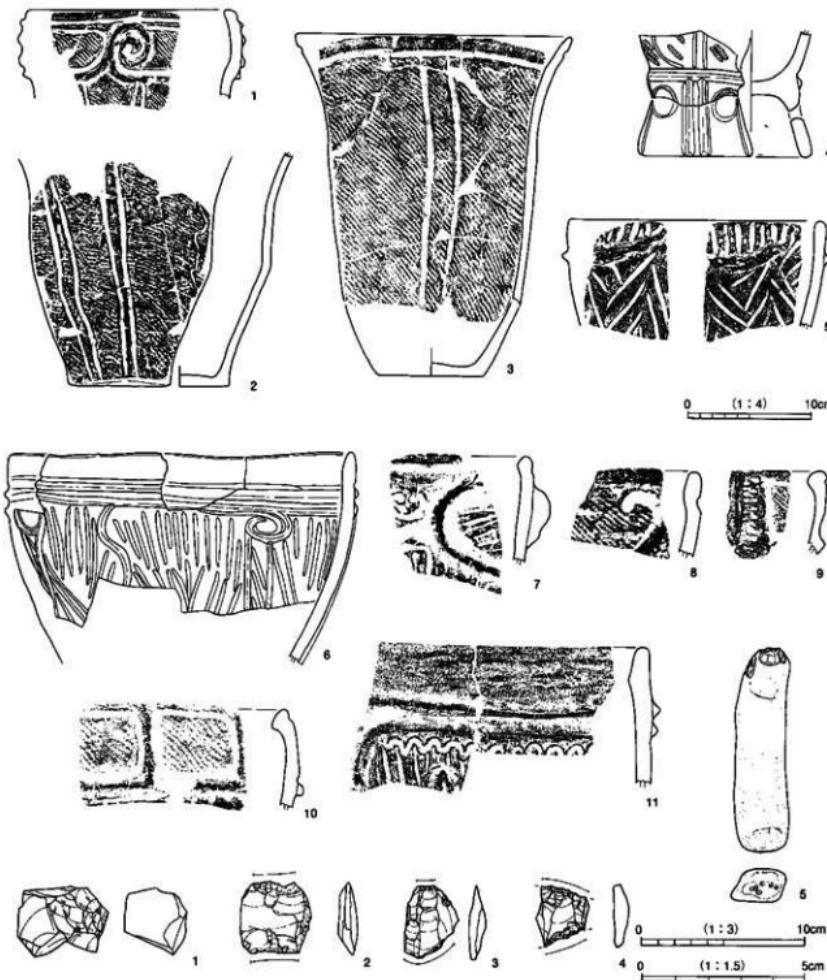


第63図 第12号住居址

**規模・形状** 直径4.2mの円形。

**検出・調査状況** 11号住居址調査中に黄色土ロームをたたきしめた床面を検出した。東側へ調査を進めると、炉址および壁の立ち上がりが確認されたので、12号住居址とした。壁は西南部15cm、北

東部3cmが残る。覆土は、黒褐色土の単層で上～中層にかけ人頭大の礫が数多く出土した。礫は住居址縁辺部から中心部に向かって、出土位置を下げていることから住居址埋没途中で投棄されたと考える。遺物はこの礫の間からわずかに出土して



第64図 第12号住居址出土土器（1～11）・石器（1～5）

いる。床面には遺物はない。東壁やや内側で蓋石を伴う埋甕が出土した。口縁部を打ち欠いた深鉢の胴部が正位で埋めてある。断面を観察すると、埋甕の外側7~8cmの所に掘り方と思われるラインが見られ、暗褐色土（ローム粒混）が詰まっていた。炉址と埋甕を結ぶ線を主軸と考える。

**柱穴** P1~P5が主柱穴だろう。深さは、P1・55cm、P2・63cm、P3・42cm、P4・61cm、P5・46cmを測る。P6~P10は、各主柱穴の脇に位置する。配置や切り合い関係から住居址の拡張・建て替え前の柱穴が考えられる。

**炉址** 規模90cm×70cm、深さは最深部30cmを測る方形石囲炉で、南辺の石が一部欠ける。内部は赤く焼け固くしまっている。  
(今村)

#### 遺物（第64図）

**a 土器** 12号住からは、大きく第Ⅲ群1類（5~7・11）と4類（1~4・8~10）が均衡して出土している。

1は平縁のキャリバー形深鉢の口縁部である。隆線による渦巻つなぎ弧文によって方形区画文が形成されている。2は埋甕であり、口縁部は打ち欠きが行われ欠損している。胴下半が「く」字状に屈曲し、緩やかに開くキャリバー形器形である。胴部には2本1組の沈線と蛇行沈線が垂下している。沈線文間にラフにナデ整形が施されている。3は朝顔形に口縁が開く器形を呈した深鉢である。通常みられる口縁部の渦巻つなぎ弧文は省略され、沈線がめぐって胴部と区画が為されている。胴部は全面に繩文が施文された後、2本1組の沈線が垂下しているが、その間隙は磨消し等の整形はなされていない。4は台付深鉢の胴下半部であり、懸垂文と繩文が施された胴部下端に透孔の入った脚部が貼り付けられている。8・9・10は4類の口縁部破片であり、9は方形区画を行う隆線上に刻みが施されている。

5・6・11はタル形器形の沈線文系土器であり、5は口縁部に弧線文を形成し、その上部に縱位短沈線、下部に綾杉状沈線文が施文される。一方、

6は口縁部下に2条の隆線をめぐらせ、そこから小渦巻文と蛇行隆線が派生している。地文沈線も直線状を呈し、ラフに引かれることが特徴である。11は同じく隆線によって口縁部と胴部が区画され、隆線下に波状沈線が描かれる。この波状沈線は、交互刺突文によるものから、1本引きによるものへと省略化したものといえ、地文の沈線文も含め繩文系が組成の中で増加するに従い、施文が粗くなる傾向にあることがいえよう。

**b 石器** 1は石核、2~4はくさび形石器。いずれも黒曜石製。5は上下端部に敲打痕をもつ叩石である。

**所属時期 第Ⅳ期** (小口)

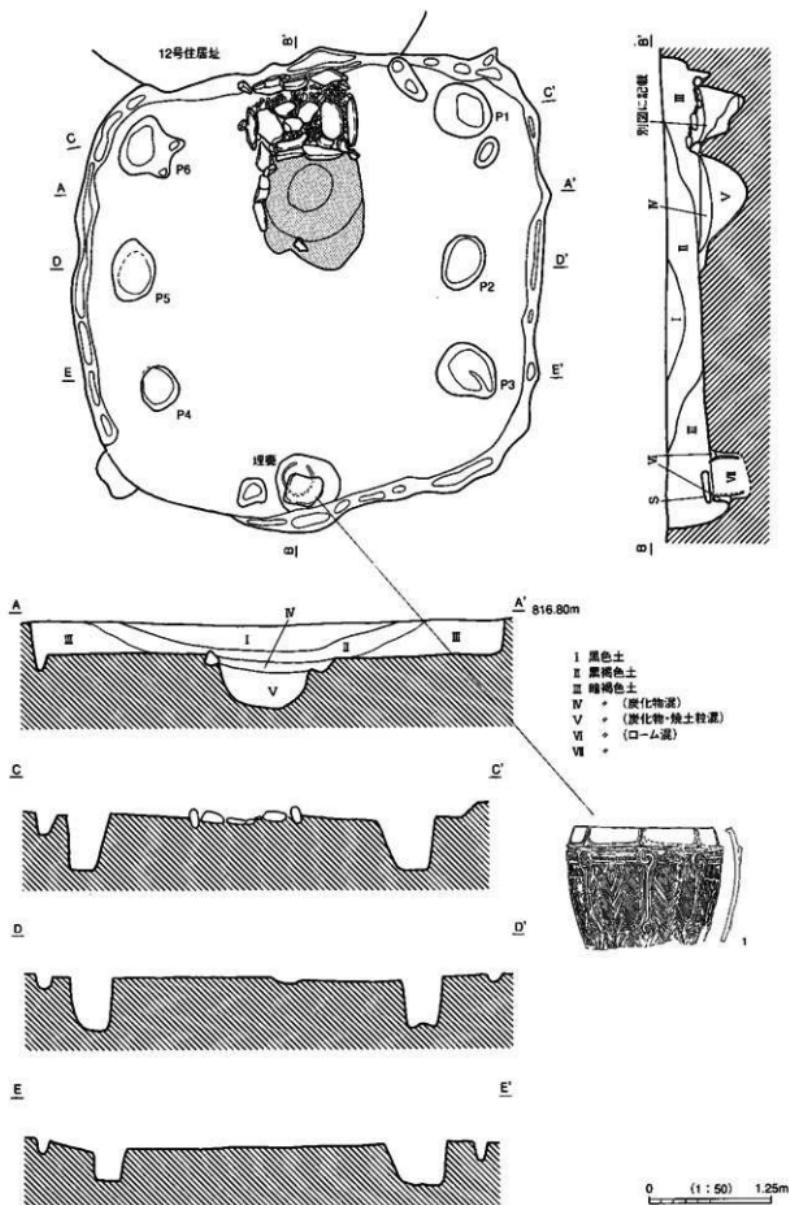
#### 13 第13号住居址（第65~73図、図版13-33-34）

**位置** 調査区中央北寄りに位置する。10・12・14号住居址を切る。

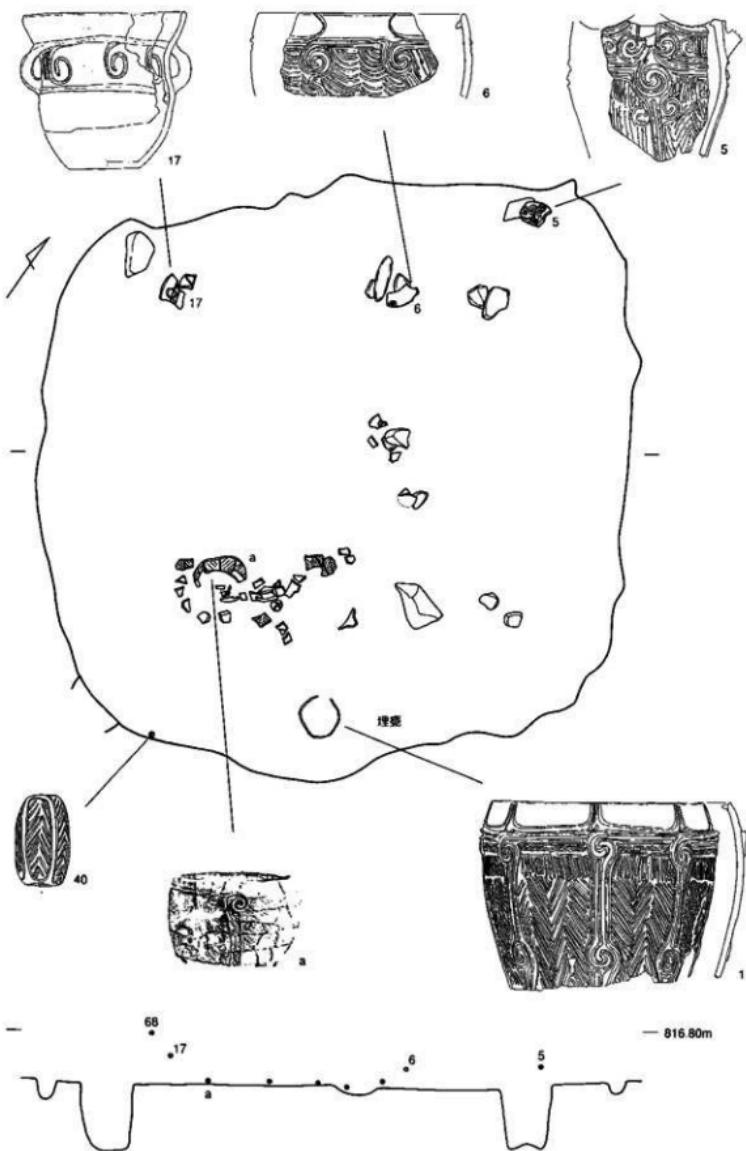
**規模・形状** 4.72m×4.72mの方形。南東部がやや外へ張り出す。

**検出・調査状況** 当初14号住居址1軒として調査を始めた。土層観察によって内側に一段深い周溝を巡らせる別の遺構を検出し、13号住居址とした。12号住居址と接する部分は、本址の石壇が壊されていないため、本址が新しいとした。10号・14号住居址は、本址がそれぞれ床面を壊して掘りこんでいることから、本址が新しいと判断した。壁は、北角17cm、東8cm、西20cm、南5cm、北17cmが残る。

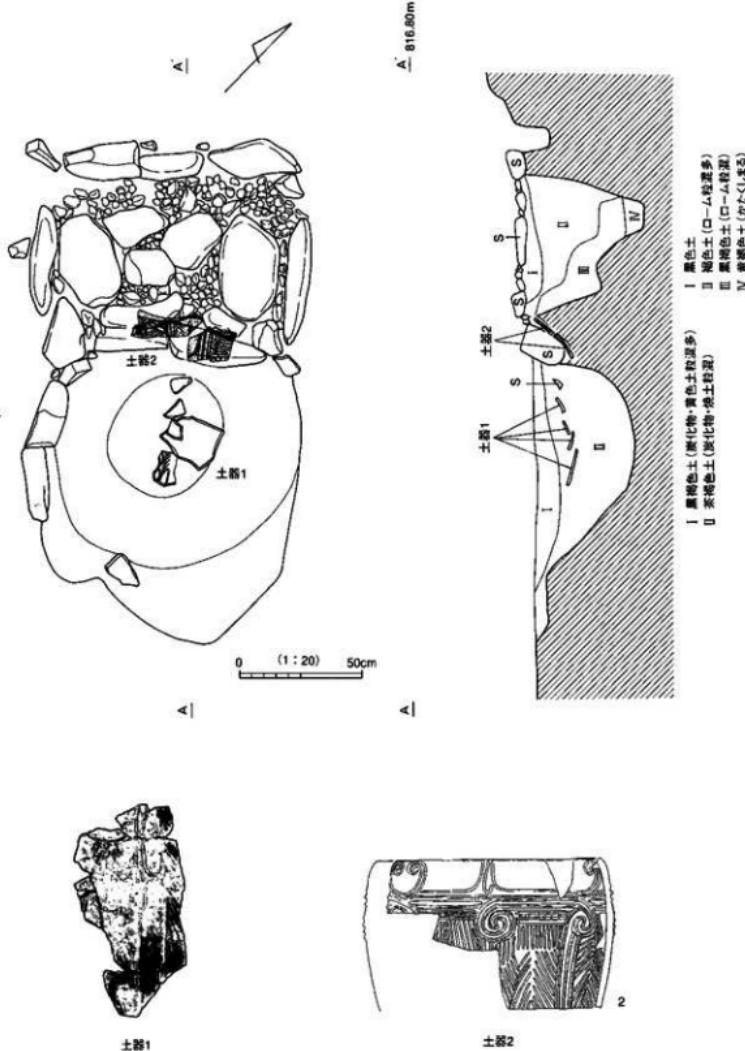
**炉址・石壇** 中央奥壁寄りにある。規模は、120cm×110cm、深さ80cmと大きく掘りこまれている。石囲炉と思われるが、北東・南東2辺の縁石は残っていない。内面は、赤燈色に焼け固くしまっている。炉址覆土は2層に分けられ、Ⅱ層上部から大型土器片（第67図土器1）が出土している。次に、炉址と奥壁との間に四角い石壇状の遺構を検出した。手前の石囲炉の北西辺を共有していて、規模は約100×65cmを測る。四角く囲まれた内側には平らな20×40cmほどの板状石を5~6枚敷き



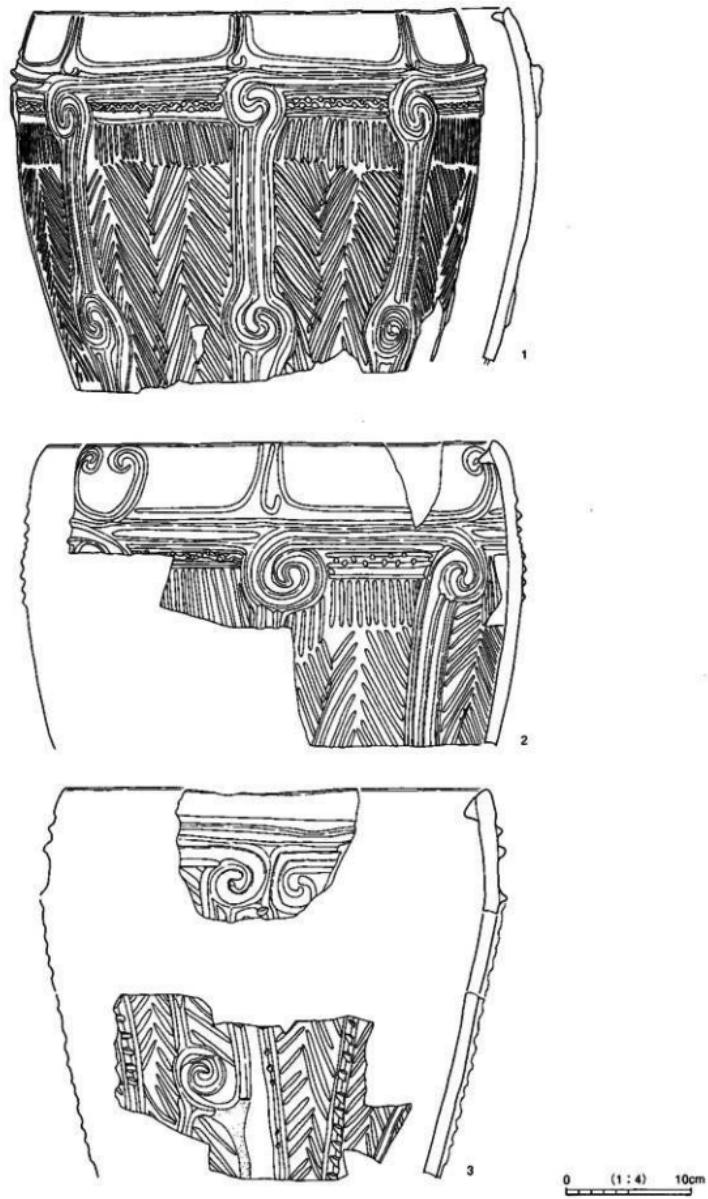
第65図 第13号住居址



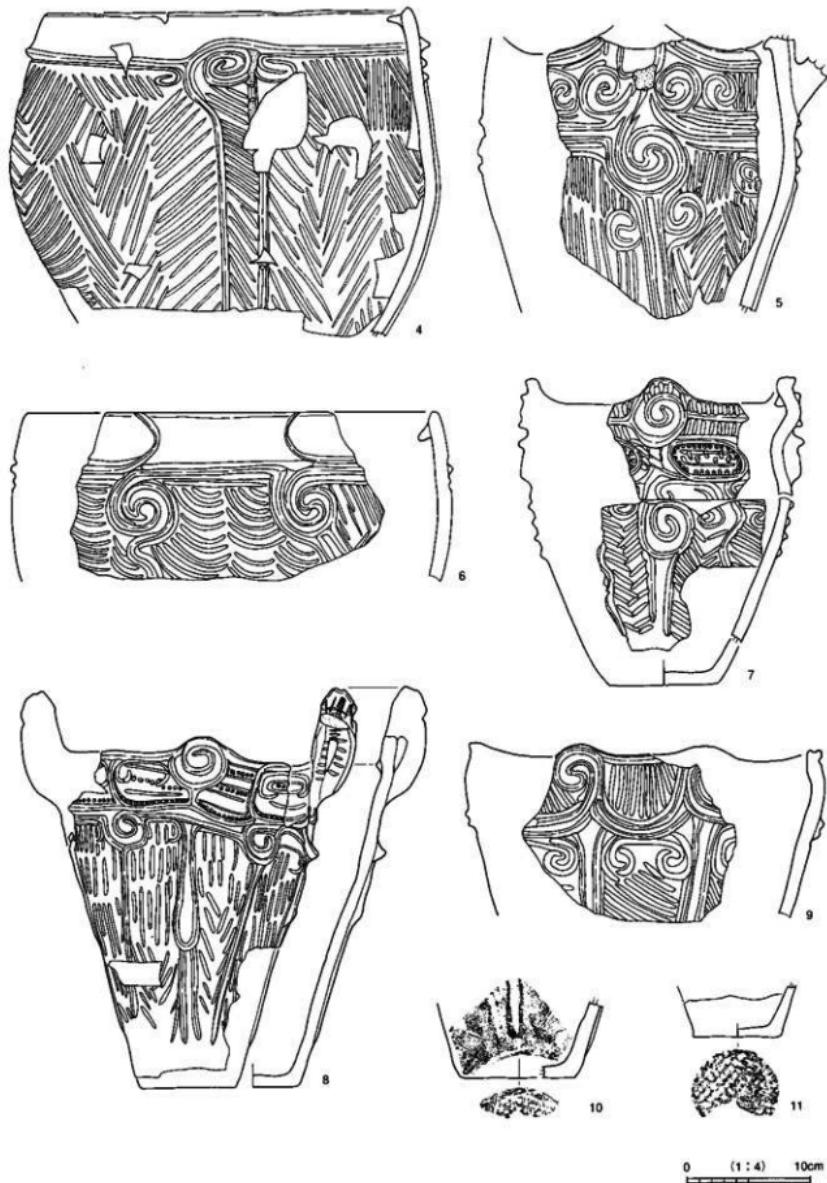
第66図 第13号住居址遺物出土図



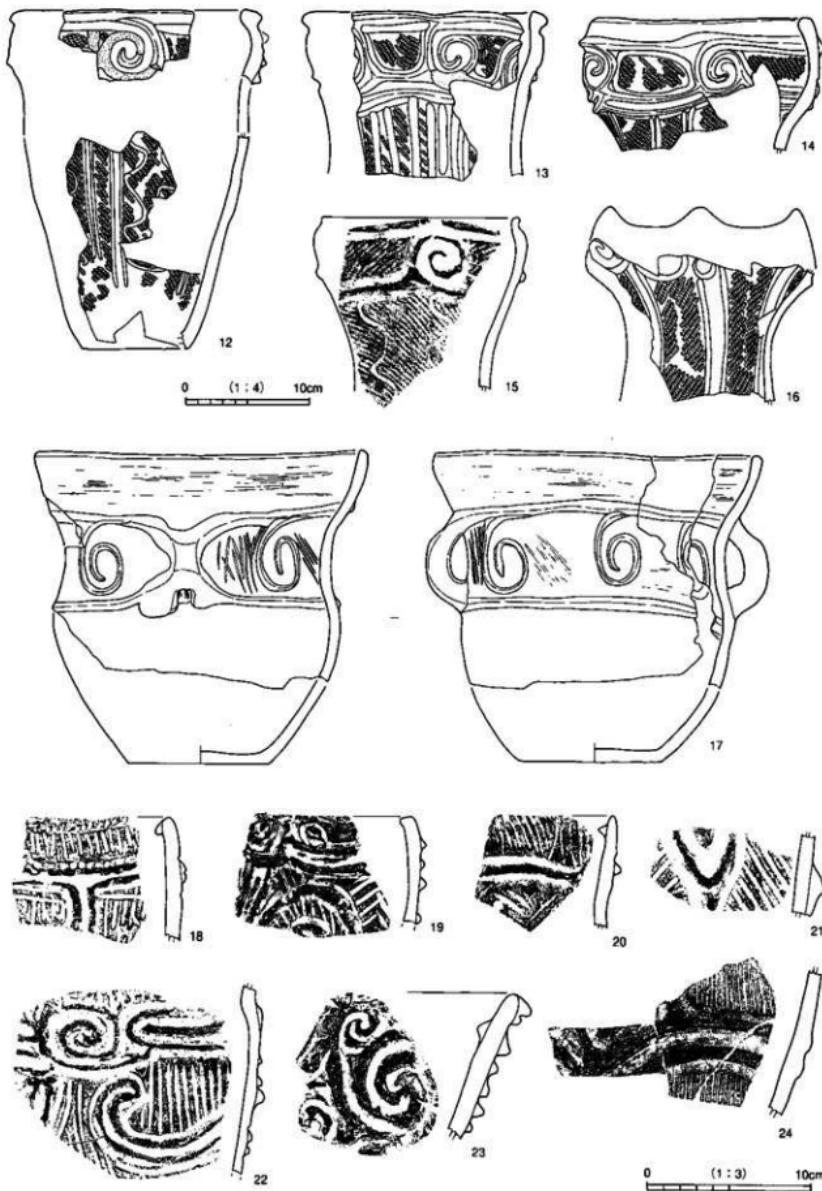
第57図 第13号住居址炉・石壇



第68図 第13号住居址出土土器（1～3）



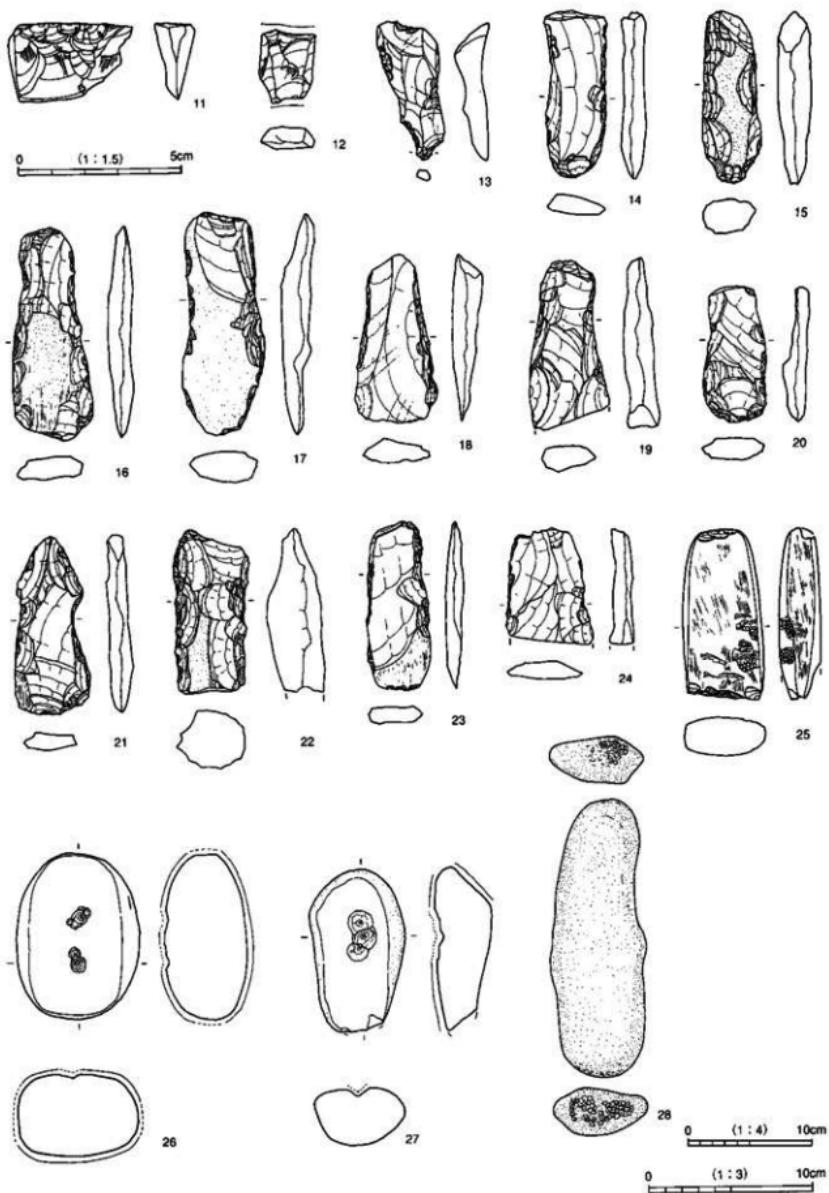
第69図 第13号住居址出土土器 (4~11)



第70図 第13号住居址出土土器（12～24）



第71図 第13号住居址出土土器 (25~39)・石器 (1~10)



第72図 第13号住居址出土石器（11～28）

詰め、その隙間には小石を詰めてある。形状から石壇と考えてよからう。遺構を断ち割って断面を観察すると、大きな土坑状の落ち込みが観察された。何かを埋納し石壇を築いたとも考えたがそうした痕跡はなかった。14号住居址の柱配置から判断して、同址の柱穴が埋められた後本址の石壇が築かれたとしたい。

**柱穴** P1～P6が主柱穴と思われる。深さは、P1・50cm、P2・53cm、P3・46cm、P4・39cm、P5・55cm、P6・57cmを測る。P1～P3、P4～P6が対象的にならぶ点他住居址と違い、本址を特色づけている。

**遺物出土状況** 住居址南側床面上からまとまって出土している。  
(今村)

**遺物** (第67～73図)

**a 土器** 13号住からは後葉期における在地型式である第Ⅲ群1類の一括資料が良好に得られている。

1～4・6は大形のタル形深鉢で、1は埋甕である。いずれも無文帯を挟んで、2条の隆線がめぐって文様帯を画する。1・2は隆線下に交互刺

突による波状文が施文され、隆線に連結する小渦巻文から派生した腕骨文・大柄渦巻文が胴部に展開する。このなかで、隆線上に刻みを施す技法は、松本盆地では散見されるが、むしろ佐久地方が量的に安定して認められる要素であり、北信地方の隆帯压痕文土器(綿田1983)との関わりがあるかもしれない。6は小渦巻文から蛇行隆線が垂下しているが、興味深いのは佐久地方と下伊那地方でみられる鱗状沈線地文であり、沈線が曲線化する事例は中信地方では顕著でない。

5・7・8は波状口縁を呈し、5・8は2単位の把手が認められる。5は波頂下に小渦巻文を貼り付け、そこから渦巻文が胴部に展開している。8は同じく波頂下に小渦巻が付き、口縁部に区画文を形成している。区画内に平行沈線や円形刺突文を施していることが特徴であり、7の頸部文様帯でも同様な意匠が認められる。胴部には懸垂文がみられ、地文にはラフな継ぎ沈線が施文される。7は波頂下の渦巻文から左右に隆線が伸び、上下に短沈線が施文される。小渦巻から撚り繩状隆線



第73図 第13号住居址出土土器 (40)

が垂下して、胴部の渦巻文へと続くが、頸部に脩円区画文を形成していることが特色であろう。9は口縁部に渦巻つなぎ弧文を配し、区画内に縦位沈線を描く。胴部には2本1組の隆線が垂下し、斜沈線が充填される本例は、文様帶構成が繩文系の影響を受けたものと思われ、折衷土器といえよう。10・11は沈線文系の底部破片であり、網代痕を残している。

12~16は第Ⅲ群4類土器であり、口縁部に渦巻つなぎ弧文が展開し、胴部に懸垂文が施文されるものをまとめた。

17は3類土器に相当し、在地型式にはほとんどみられない両耳鉢である。器面全面が、黒褐色を帯び口縁部と胴下半部はミガキ整形がなされる。胴中位にX字状の把手を有し、その間際に渦巻文を描く。この文様帶は上下に隆線をめぐらせ区画を行っているが、地文ではなく、やや粗い擦痕が観察される。曾利Ⅲ式に比定されよう。

18~36は1・3・4類の破片資料である。18・19のタル形、20~22のキャリバー形器形に分かれると、いずれも渦巻文と斜行・縦位沈線を描いている。23は山形状の口縁部破片であり、渦巻文が貼付されている。24は3類に該当し、扁平隆線と幅広沈線による渦巻文と櫛状条線地文が描かれる。いわゆるX字状把手深鉢形土器であろう。

25~34は4類の繩文系土器である。多くが渦巻つなぎ弧文を描くのに対し、29は渦巻文を描かず、方形区画文を展開している。35は台付土器の脚部で、沈線が垂下する。36は渦巻文が描かれた把手を有する壺形土器の肩部であり、器面に赤彩痕が残る。

37~39は沈線文系に付く把手であり、39は二叉に分かれた器面に波状文と渦巻文を描いている。37はH字状の形態で、頂部に脩円形の貫通孔がみられる。38は頂部が窪み、斜沈線と麻手文が施文された眼鏡状把手である。

**b 土製品** 40はタフラ状を呈した土鈴である。厳密には片方が先細りして、頂部は渦巻文が施文

される。器面には、4単位の脩円区画文と、その内部に綾杉状沈線を施文。在地型式と同じ意匠が描かれている。音色はコロコロとやや甲高く、素朴なもので、鳴子はおそらく1つと思われる。当該地域では、完形品として松本市小池・ツ家遺跡で類例が求められるが、数少ない優品の1つであろう。

**c 石器** 1~10は小形刃器で形態もバラエティーがあり側縁部に微細な剥離痕がみられる。黒曜石製。11は石核、12はくさび形石器、13は石錐。14~24は打製石斧で短冊型が多い。25は数少ない角形の磨製石斧。

**所属時期** 第Ⅵ期 (小口)

#### 14 第14号住居址 (第74~77図、図版34)

**位置** 調査区中央北寄りに位置する。10号・12号住居址を切り、13号住居址に切られる。

**規模・形状** 6.0m×5.8m横長の長円形。

**検出・調査状況** 10号・12号住居址の一部を掘り込んで、本址が築かれていることから、新しいと判断した。また13号住居址北コーナーが、14号住居址の壁を壊して作られている点から新旧関係を判断した。壁は東20cm、西16cm、南25cm、北7cmが残る。南北の壁際に沿って径10cm前後の小ピットが並ぶ点が珍らしい。周溝は観察されなかつたが、細い杭状のものを立てた痕跡と考えられる。

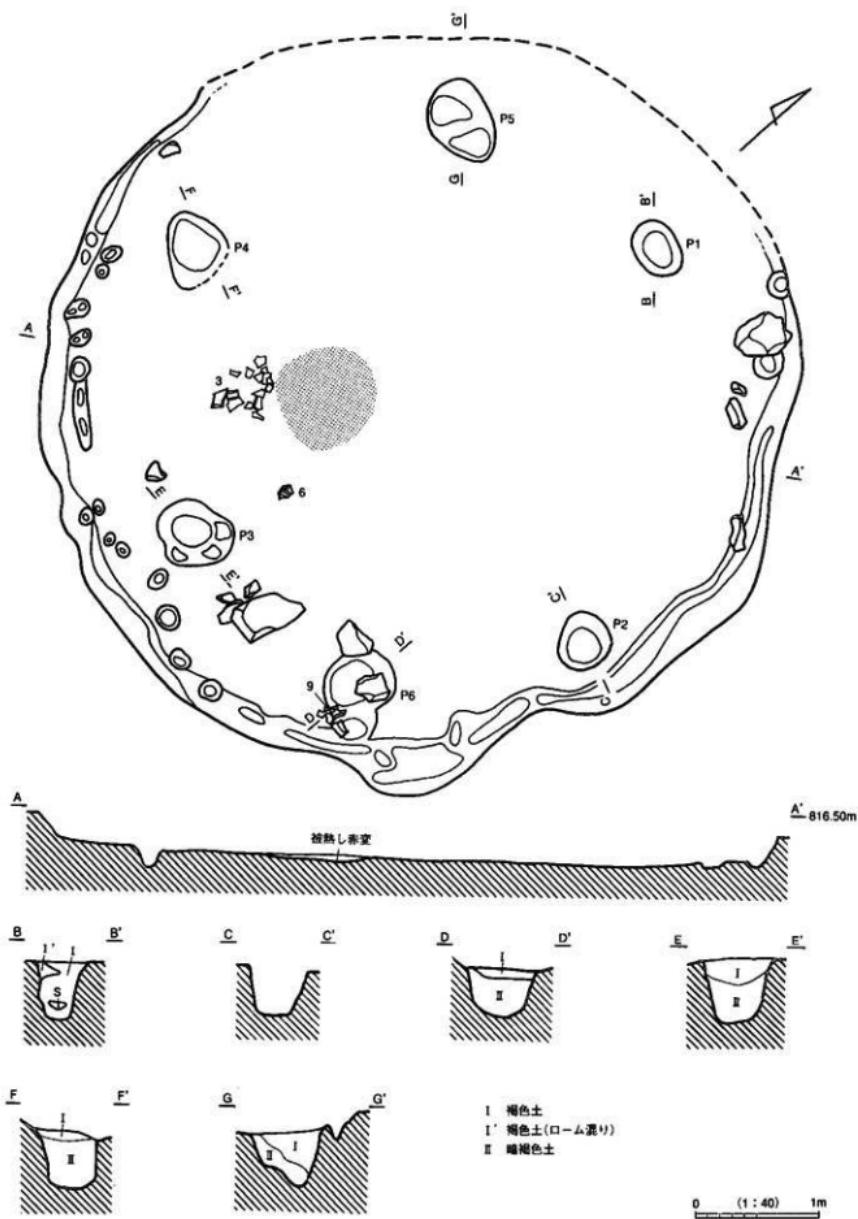
**柱穴** P1~P5が主柱穴と考える。深さは、P1・47cm、P2・48cm、P3・53cm、P4・45cm、P5・43cmを測る。しかし、P6（深さ51cm）を加えて6本主柱としてもよい。

**炉址** 確認されていない。13号住居址床面上に、赤く被熱し硬化した部分が認められ、本址の炉底部の可能性がある。 (今村)

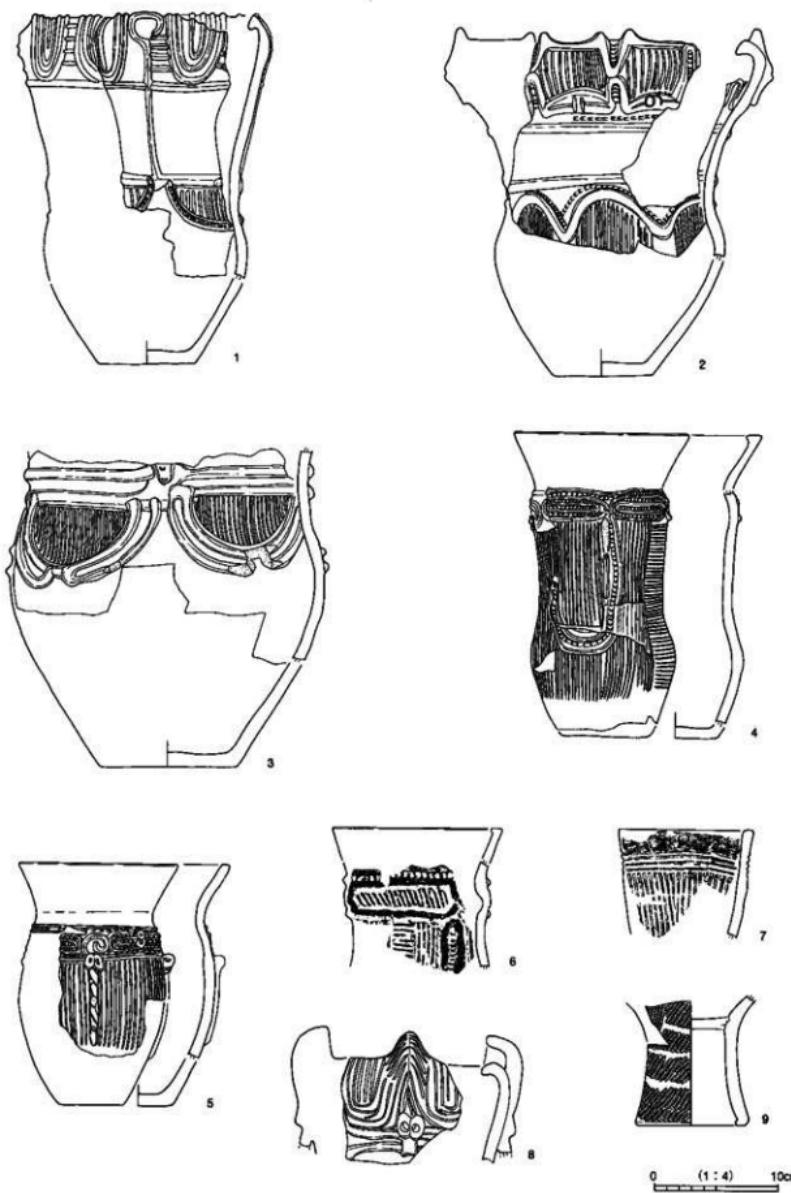
#### 遺物 (第75~77図)

**a 土器** 14号住から6・9号住とはほぼ同群の土器が出土している。その構成は第Ⅱ群1類と同2類に大きく分かれる。

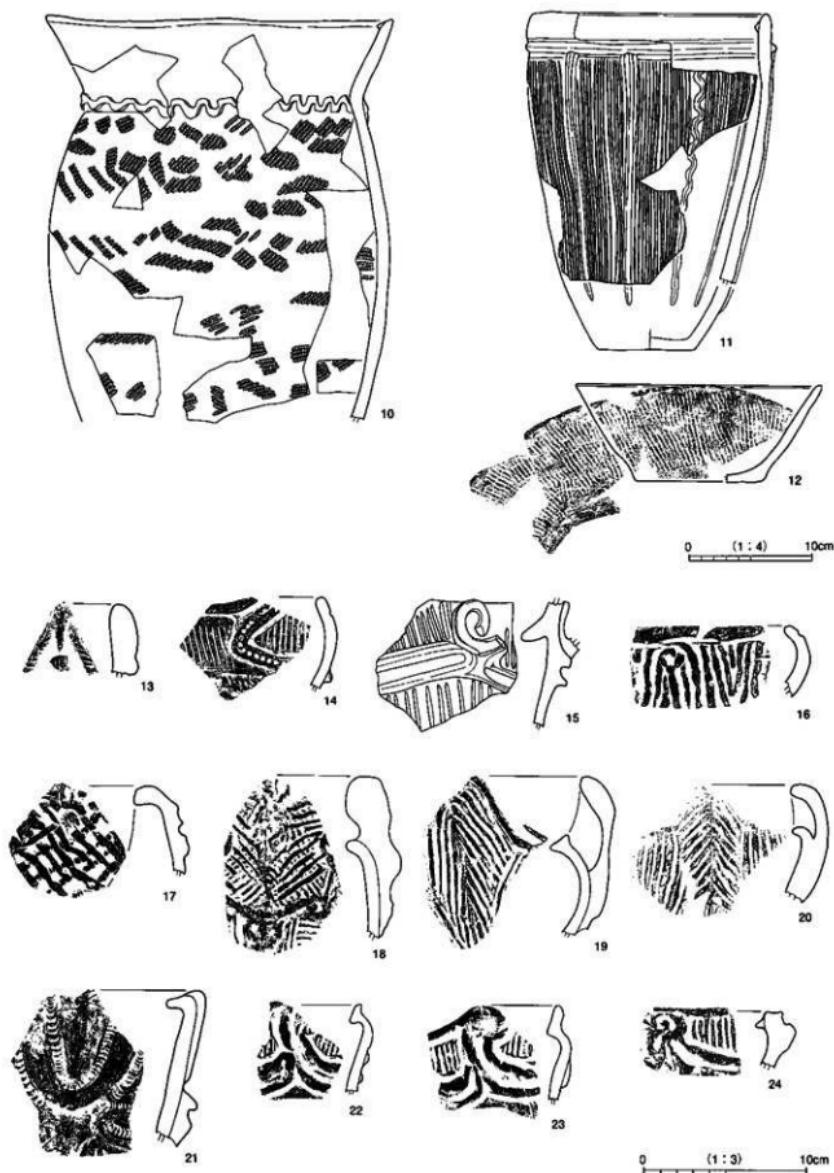
1~3は1類の櫛形文土器である。いずれも



第74図 第14号住居址



第75図 第14号住居址出土土器（1～9）



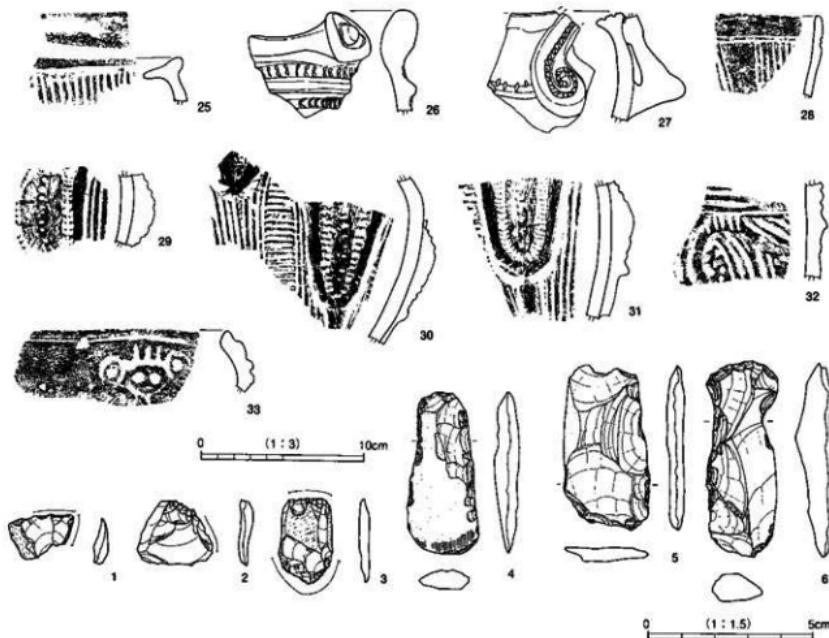
第76図 第14号住居址出土土器 (10~24)

キャリバー形の深鉢を呈し、口縁部が欠損している3を除き、緩やかに内湾している。1は口縁部に隆線による褶曲文を描き、中心部の鍵状モチーフから垂下した隆線によって胴下半の櫛形文へ連結している。褶曲文は一定の間隔をもって描かれ、それを平行隆線が繋いでいる。注目されるのは、胴下半の弧線文が棒状工具によって刻まれていることであり、若干古い様相を帯びている。2は口縁部に匂字状区画文を配して方形区画を形作り、内部に縦位沈線を充填する。下端区画文として、連鎖状隆線がめぐり、さらにその下部に押引文が施されている。胴下半には、櫛形文を反転させた波状隆線が押引文と共にめぐっている。3は胴下半のみ残存した大形深鉢であり、2本の隆線によって櫛形文が描かれている。9号住の10・11に類似することから、1類a種の波状口縁櫛形文土

器（「中野山越A2類土器」戸田1995）と類推される。

4～8・11は2・3・4類に該当する土器群をまとめている。口縁が無文の4～7・11と褶曲文の8に分かれるが、ここでは前者が多い。4は口縁が大きく外反し、胴部下半が膨らむ小形深鉢である。頸部には梢円渦文が押引文と共に描かれている。胴部にはJ字状文が垂下し、その中心部にも同じく押引文が引かれている。地文には、条線と横位縦帶沈線文が施された典型的な梨久保B式である。本例は、焼成が良好で整形も丁寧な優品である。

5は、器形こそ異なるが頸部文様など4と類似した小形深鉢である。胴部は、眼鏡状突起と撲り縄状懸垂文が垂下し、条線文のみの地文が認められる。6はやや膨らんだ頸部に、方形区画文を描



第77図 第14号住居址出土土器(25~33)・石器(1~6)

き斜位沈線を充填している。7は円筒形の小形深鉢で、頸部に3条の沈線をめぐらせて、条線文を描いている。11は、胴部に懸垂文と蛇行隆線を施して櫛歯状条線文を地文にした珍しい例である。第Ⅲ群土器群のタル形器種の祖形となるかもしれない。8は4単位の角状突起を有し、突起下に眼鏡状モチーフをあしらっている。

9・10・12は第Ⅱ群6類に位置付けられる。9は台付土器の脚部であるが、全面にLR縄文が施され、器面内部には炭化物が付着していることから、盛り付け用の器種と認定するには疑問が残る。6類a種の10は口縁部が外反し、頸部が括れる深鉢であり、色調が明褐色と他の土器群とは異なった特徴が観察できる。頸部に波状隆線をめぐらし、胴部に縄文のみを施す本例は、塩尻市剣の宮遺跡、松本市小池・一つ家遺跡164・173号住など松本盆地を中心に分布をみせる器種であり、比較的大形のものが多い。

12は、小形の浅鉢であるが、当該期には稀少な事例である。口縁は緩やかに外反し、口唇部が細くなり、ナデ整形がなされる。器面整形も丁寧であり、焼成良好。内面がヨコミガキ、表面は無筋縄文が施されている。本例が当該地域では類例がみられないことから、あるいは撤入土器の可能性も想定される。

13~33は破片資料である。13は山形状の波状口縁を呈する櫛形文土器の波頂部と思われる。14は1類a種の口縁部破片であろう。焼成良好で、胎土が硬鐵である。押引文を施した隆線による三角状区画文が認められる。15は2本1組の隆線が横位に貼り付けられ、渦巻状の突起が中心部にみられるので、地文に継位沈線が引かれる。16~20は3類a種の平縁、波状縁の資料である。16~18のようにソーメン状隆線を貼り付けるものと、半截竹管のハラ側で施文するものの二者が認められる。角状突起は全て中空であり、突起下は、18のように眼鏡状モチーフが貼付されることが多い。20は外反した口縁部が強く口唇部で内折して、U

字状モチーフが幅広隆線で表現されたものである。

22~24はキャリバー形深鉢の口縁部で、渦巻つなぎ弧文に継位沈線文が施文される。25は内折した口唇部を扁平に作り上げ、凹線を施す。26は口唇部が肥厚し、円形突起が外向きに貼り付けられている。隆線間に半截竹管による刺突文がめぐる。27は口縁部に渦巻状の把手が垂下し、渦巻文の中心部に刺突が施されている。

29~32は第Ⅱ群2類・3類の胴部破片である。鰐状の隆線が貼付され、その周囲に押引文と隆線がめぐる。おそらく、角状突起を有する土器群の胴部破片と類推される。32は焼町式土器の胴部破片であり、握拳状突起や半隆起線によって弧線や斜線を描いている。焼成は不良であり、赤褐色を帯びる。33は浅鉢の口縁部破片である。口縁部は内湾し、口唇下に1条の沈線がめぐっている。沈線下には獸面装飾をあしらっている。眉間の3本沈線、ブタ鼻などの表現から、イノシシであろうか。

**b石器** 1~3は小形刃器である。3は上下端部に剥離痕があるくさび形石器に近く、表面に疊面を残している。4~6は打製石斧で、4は両側縁に剥離を施し、刃部には使用痕がわずかに残る。  
所属時期 第Ⅳ期 (小口)

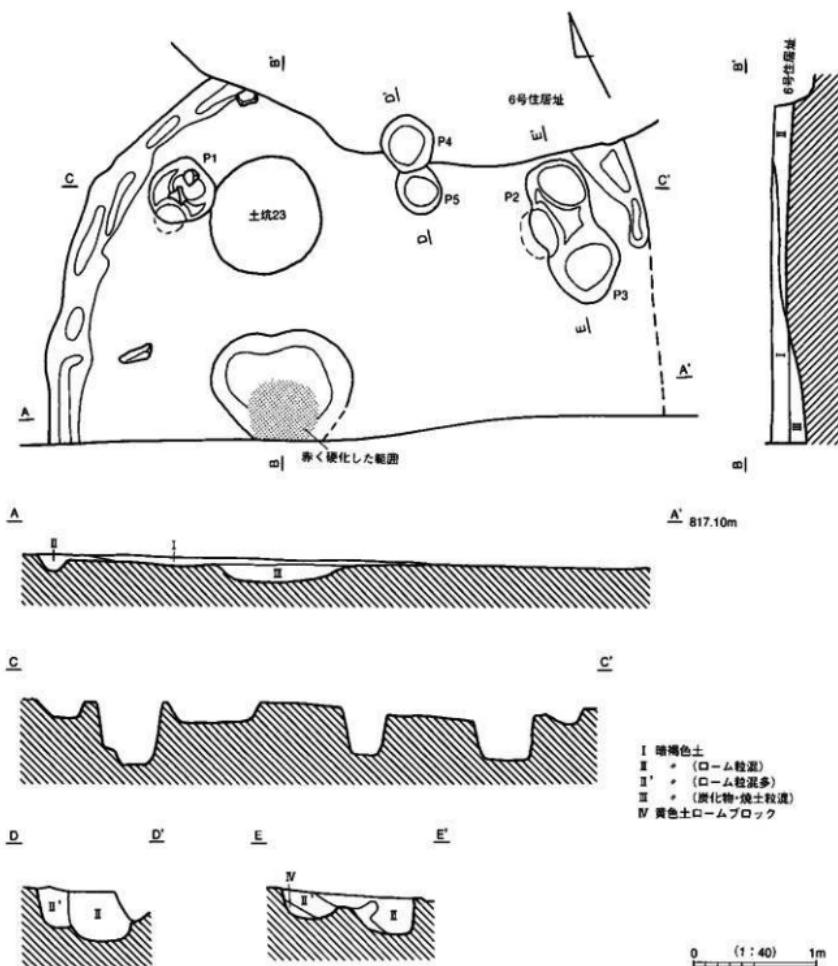
## 15 第15号住居址 (第78・79図、図版14)

**位置** 調査区中央南壁際に位置する。6号住居址・土坑23に切られる。

**規模・形状** 調査区外に半分かかるので推定値となるが、(5.4m) × (4.8m) 横長の方形基調か。

**検出・調査状況** 6号住居址が深く掘り込んでいることから、本址の方が古いとして調査した。覆土は工事により大きく削平されていて、北西部では周溝が残るだけであった。南東は更に削平が大きく周溝の底に近い部分が若干検出され、これとともに住居址の範囲を想定した。

**柱穴** P1・P2・P4が主柱穴と考える。深さは、P1・52cm、P2・43cm、P4・32cmである。なおP3・P5



第78図 第15号住居址

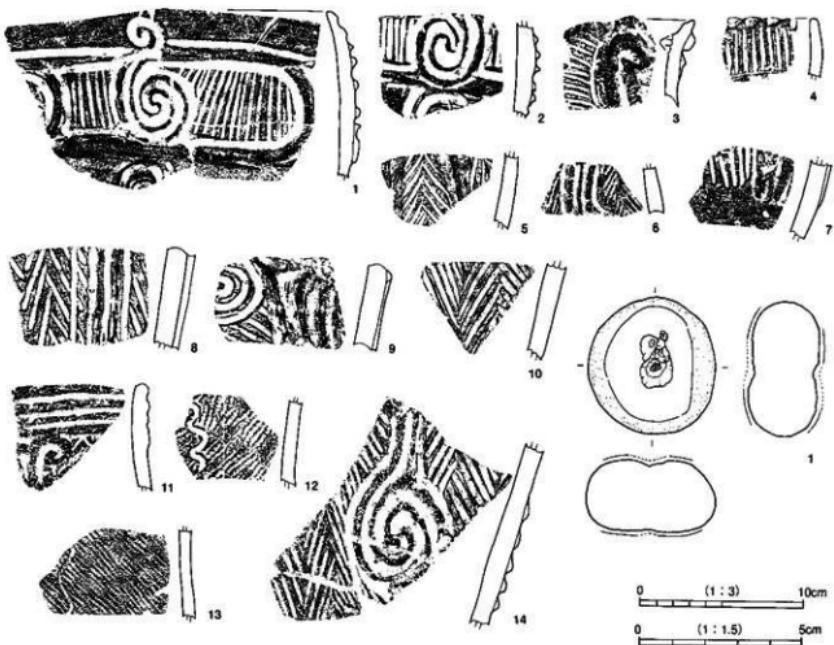
も深さはそれぞれ38cm・29cmの深さを測る。拡張前の柱穴か、補助的な柱の痕跡であろうか。

**周溝** 北西側に幅35cm、深さ15cm前後のやや掘り方の粗な周溝が残る。

**炉址** 中央やや西壁寄りにある。50cm×(60cm)

やや横長の土坑で船底形に掘りこまれ、底部は赤く焼け固くしまる。縁石は無く、地床炉であろうか。

(今村)



第79図 第15号住居址出土土器（1～14）・石器（1）

## 遺物（第78図）

**a 土器** 本住居出土遺物は破片資料のみである。1と2は同一個体であり、タル形の深鉢口縁部である。口縁下に橢円区画文を形成し、内部に継位沈線文を充填している。3は外反した口縁部に腕骨文が貼り付けられる。5～11・14は第Ⅲ群1類の胴部破片である。渦巻文や直線的な降線を垂下させ、地文に丁寧な綾杉状沈線文を施す。12・13は地文に縄文を有し、蛇行沈線を描いた4類に該当する。

**b 石器** 1は蔽石である。表裏面の中心部に窪みを有している。

所属時期 第Ⅸ期

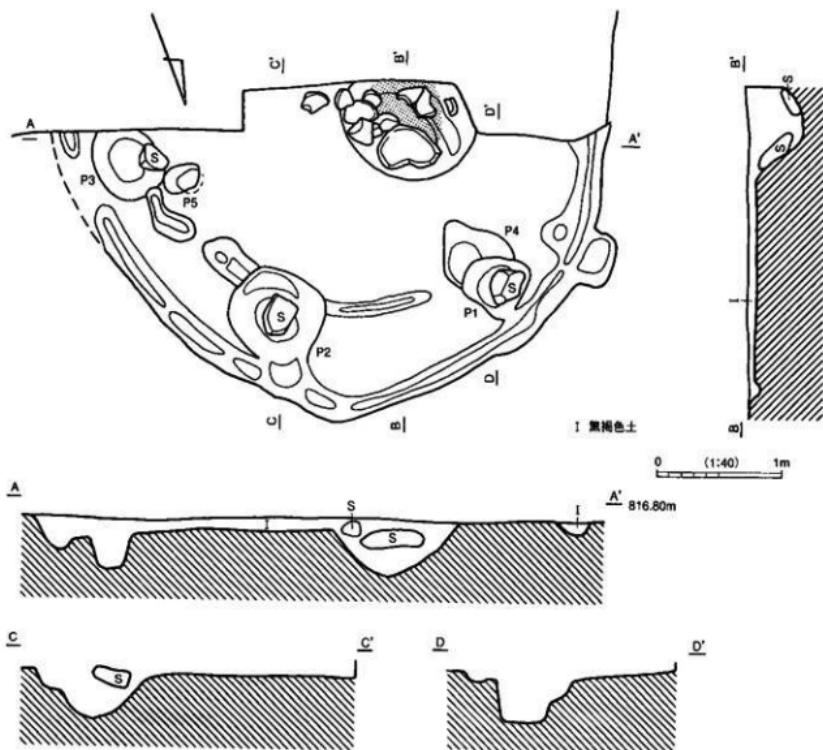
## 16 第16号住居址（第80・81図、図版14）

**位置** 調査区中央南壁際に位置する。17号住居址と接する。

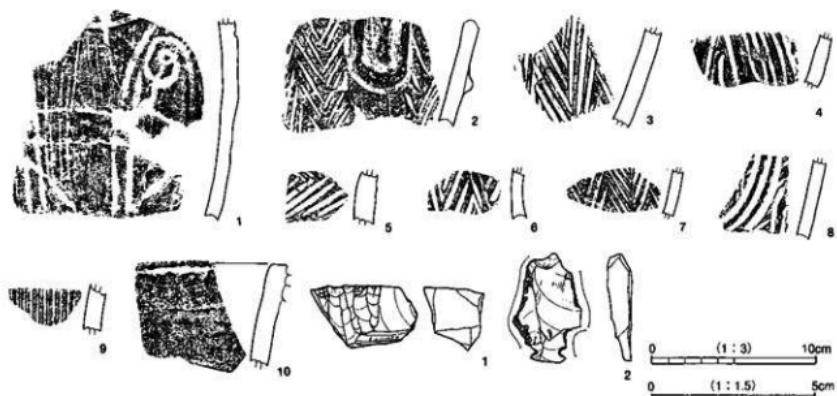
**規模・形状** 調査区外に遺構の半分程がかかるため、推定値となるが $4.8m \times 4.4m$ 、やや横長の円形になろうか。

**検出・調査状況** 住居址西側は大きく削平され周溝が残るだけであった。北東部は壁が残るもののが北壁で7cm、東壁で4cmを測るのみである。調査区南壁の土層観察によって、17号住居址とは切り合い関係がないことが判断した。

**柱穴** P1～P3が主柱穴と考える。深さは、P1・36cm、P2・38cm、P3・27cmを測る。P1に切られるピットは深さ28cmを測る。拡張前の柱穴か主柱の補助



第80図 第16号住居址



第81図 第16号住居址出土土器 (1~10)・石器 (1・2)

的な柱穴が考えられる。

**周溝** 壁際に沿って一条巡る。15号住居址同様部分的に深くなったり、浅くなったりして凸凹がある。この周溝より40cm内側に、やや幅の狭い溝が観察された。拡張前の周溝か、P1~P3の間を結ぶ間仕切り的な溝であろうか。

**炉址** 住居中央部よりやや北によっている。規模は、(112cm) × 108cm、深さ42cmの方形の石囲炉と思われる。内部に炉縁石が崩れ落ちている。炉底部は赤橙色に焼けている。  
(今村)

#### 遺物 (第81図)

**a 土器** 第Ⅲ群1・2類の破片資料である。1は2類のタル形の深鉢胴部である。地文の櫛齒状条線が描かれた後、沈線による渦巻文が施文される。2~8は地文に綾杉状沈線文が描かれた胴部破片であり、2のような隆線モチーフが一般的であるのに対して8のように沈線モチーフが描かれたものも存在する。10は外反する無文口縁であるが、口唇部外側の隆線が剥落してしまっている。

**b 石器** 1は角柱状の石核、2は小形の刃器で、いずれも黒曜石製である。

**所属時期** 第VI期  
(小口)

### 17 第17号住居址 (第82~83図、図版19)

**位置** 調査区南壁際東寄りに位置する。16号住居址と接する。1号小ピット群およびSK55が切る。

**規模・形状** 4.58m × 4.48m方形の住居址であろう。

**検出・調査状況** 住居址北側のプランは明瞭に検出できた。16号住居址と接する部分は、調査区南壁の土層観察で切り合いかないことが判明した。覆土は、3層に分かれる。北壁際には黄色土ロームの三角堆積が見られる。遺物は少なく覆土II層中からの出土が多い。

大形土器片の1は床面よりやや浮いたⅢ層上面から出土している。

**柱穴** P1~P4が主柱穴と考える。深さは、P1・40cm、P2・45cm、P3・38cm、P4・44cmを測る。4本

主柱である。P6は深さ40cmあるが、P2・P3を結ぶ位置より多少ずれているため、柱穴としなかった。P7も同様である。

**炉址** 中央奥壁寄りに位置する。規模は108cm × 100cm、すり鉢状に掘り込まれ最深部は32cmある。内面は赤く被熱し固くしまる。底に接して、60cm × 24cmの平らな石が横たてあった。石畳い炉の一部であろう。  
(今村)

#### 遺物 (第83図)

**a 土器** 大きく第Ⅲ群1類 (1・3~7) と4類 (2) に分かれるが前者が主体である。1はタル形深鉢の胴部に該当し、中心部に腕骨文が貼り付けられ、地文に丁寧な綾杉状沈線が施文されている典型的な沈線文系土器である。3・4・6も同様綾杉状沈線が施された胴部破片資料である。5は通常無文口縁が多い中で、波頂下に渦巻文や勾玉状モチーフ・短沈線が描かれた珍しい例である。7は口縁部に隆線による方形区画を形成し、区画内に勾玉状モチーフが描かれている。

2は2本1組の懸垂文が垂下した縄文系の小形深鉢である。沈線文施文後、縄文が充填されている。

**b 石器** 1は石核、2~4は小形刃器であり、側縁部には微細な剥離痕を残す。5・6は打製石斧である。5は疊面を残した粗雑な作りである。

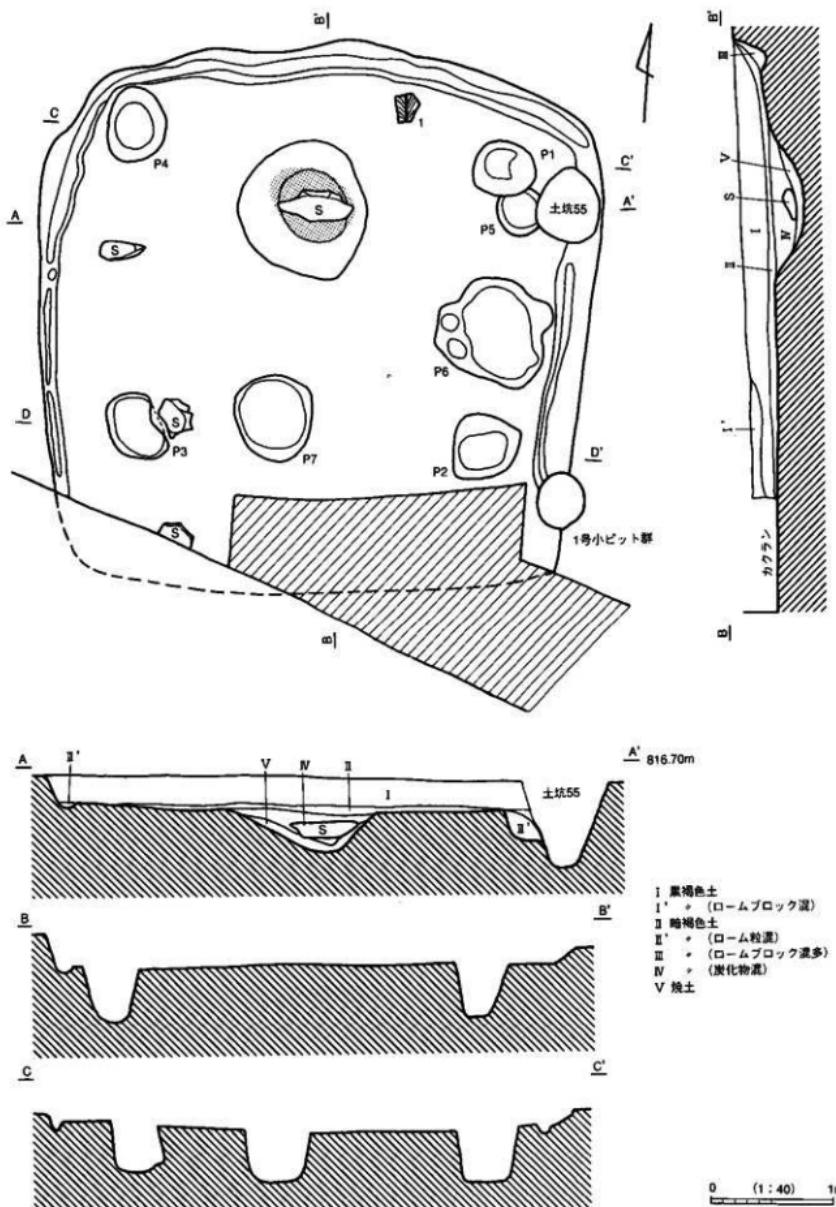
**所属時期** 第VI期  
(小口)

### 18 第18号住居址 (第84~89図、図版15・34)

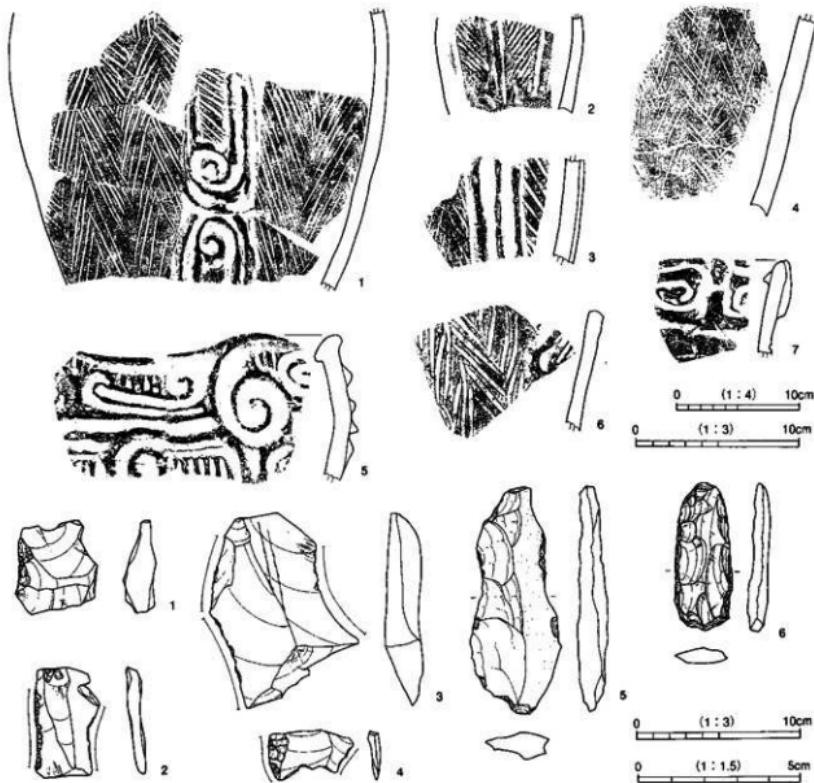
**位置** 調査区東寄りに位置する。27号住居址に床を貼る。

**規模・形状** 5.52m × 5.24m縦長の円形。

**検出・調査状況** 住居址西側のラインは、明瞭に把握できた。27号住居址と重なる部分は、本址の壁の立ち上がりが明確でなく、床面から推定した。新旧関係は、土層観察から27号住居址が完全に埋没した後に、築かれたことが明らかことから本址が新しいとした。覆土Ⅲ層は炭化物をやや含む茶褐色土中に10~30cmの疊が多く出土した。掘り



第82図 第17号住居址



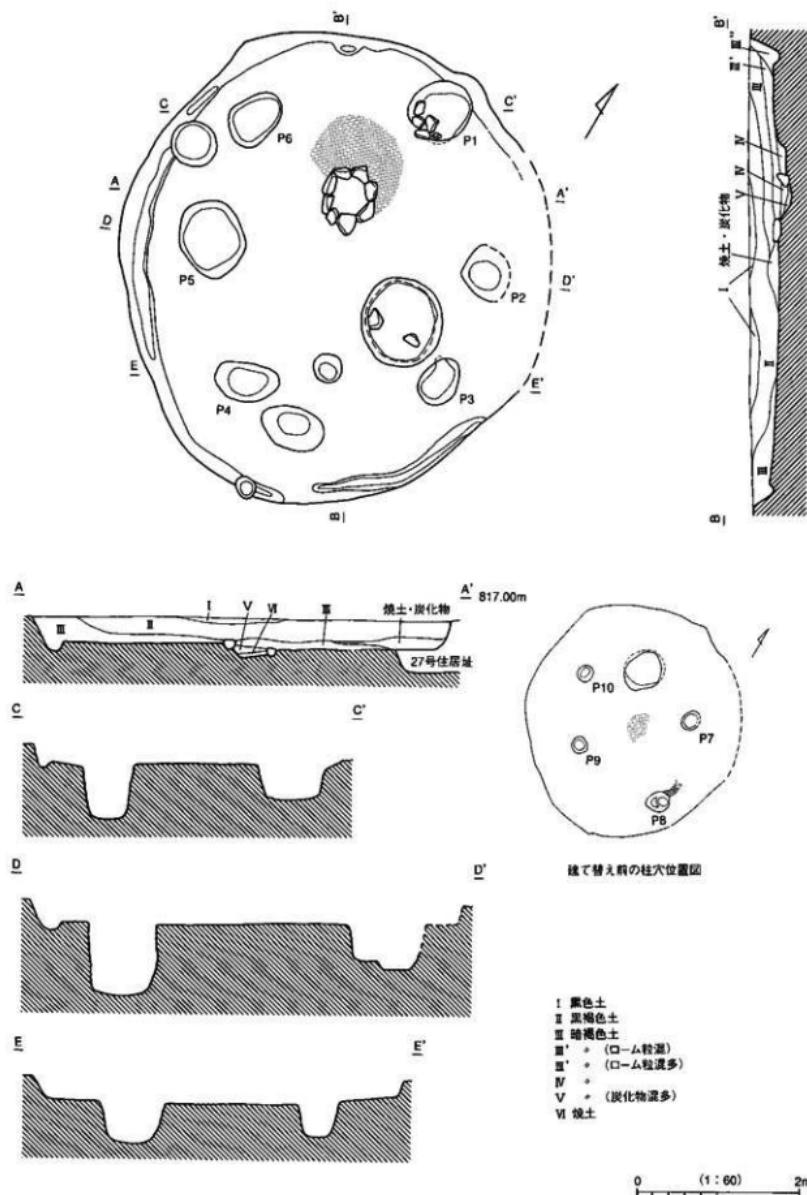
第83図 第17号住居址出土土器（1～7）・石器（1～6）

下げるに、住居の構築材と思われる炭化物や焼土とともに炭化材が出土した。住居址中央から壁に向かって放射状に広がっている。形状は、板状のものが多い。試料分析を考えて、固化後かたまりごとに、番号をつけて取り上げた。また、広範囲に橙色に焼けた土塊が点在する。出土状態は炭化材の上を覆ったり炭化材の間からも出土している。本址は柱穴と考えられるピット内覆土も、炭化物を多量に含んでいることから、柱材は抜かれた状態で焼失したと考える。この焼けた塊は、消火のた

めかぶせた土か、屋根を覆っていた土が崩れたか、いずれかと理解したい。

**柱穴** P1～P6を主柱穴と考える。深さは、P1・40cm、P2・34cm、P3・42cm、P4・51cm、P5・84cm、P6・65cmを測る。P7～P10は径20cm程度の小型であるが、P7・38cm、P8・62cm、P9・44cm、P10・41cmと深く、建て替え前の柱穴と考える。

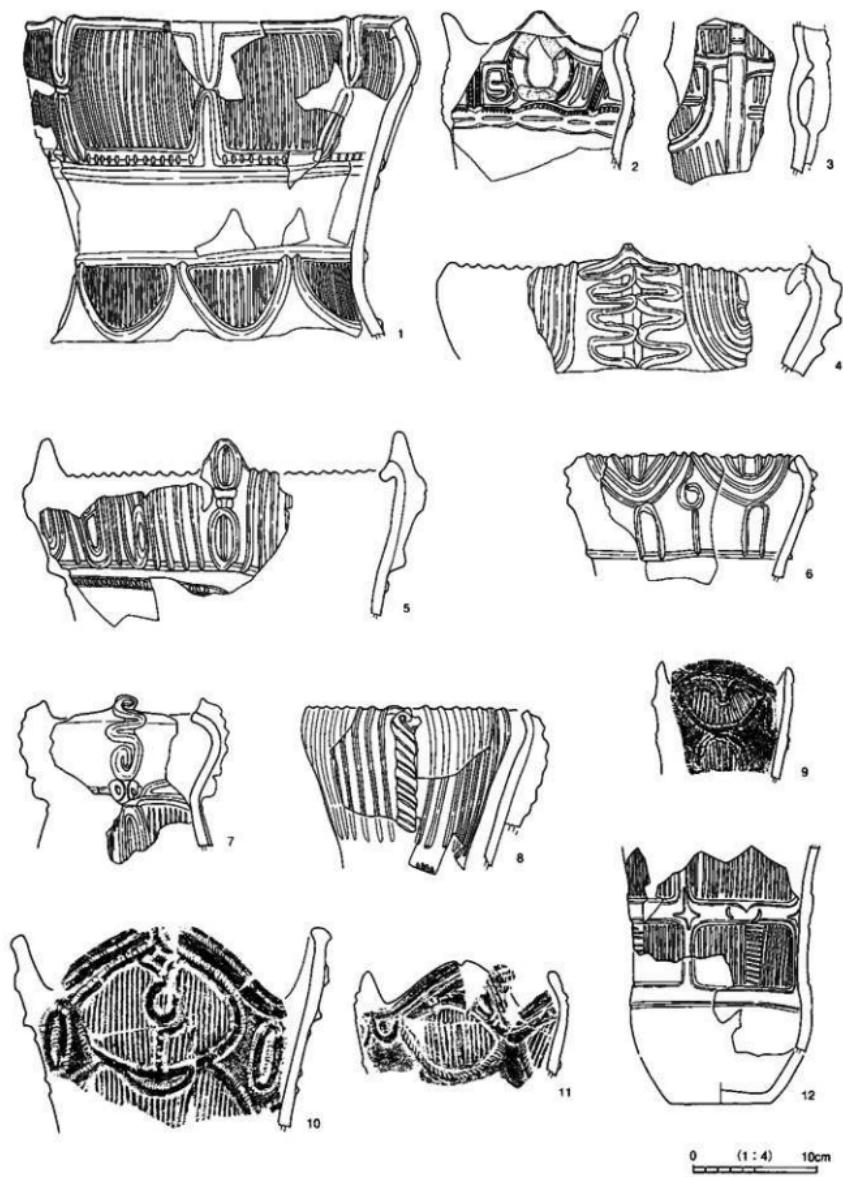
**炉址** 中央奥壁寄りにある。規模は70cm×68cm、ほぼ四角形で、南辺の石が外へ出張る。内部は平らに約10cm掘り込まれ、赤く焼けている。



第84図 第18号住居址

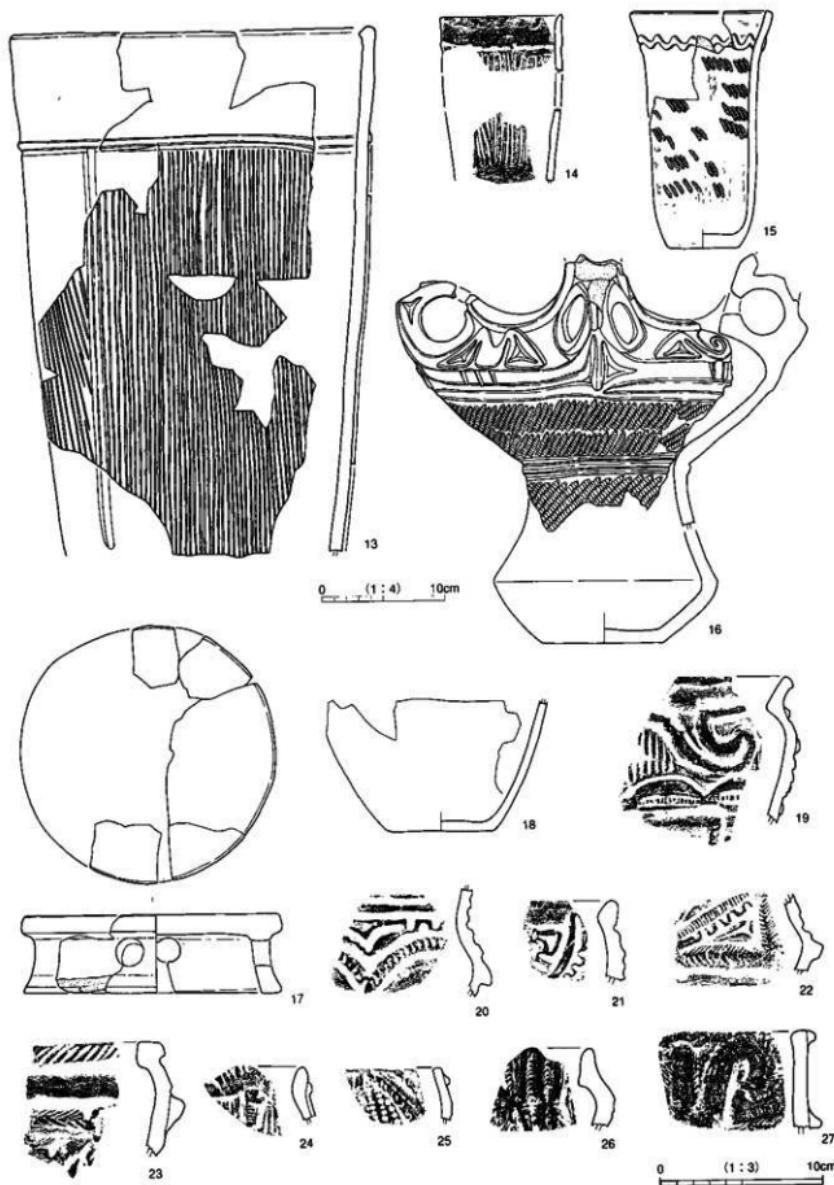


第85図 第18号住居址遺物・炭化材出土図

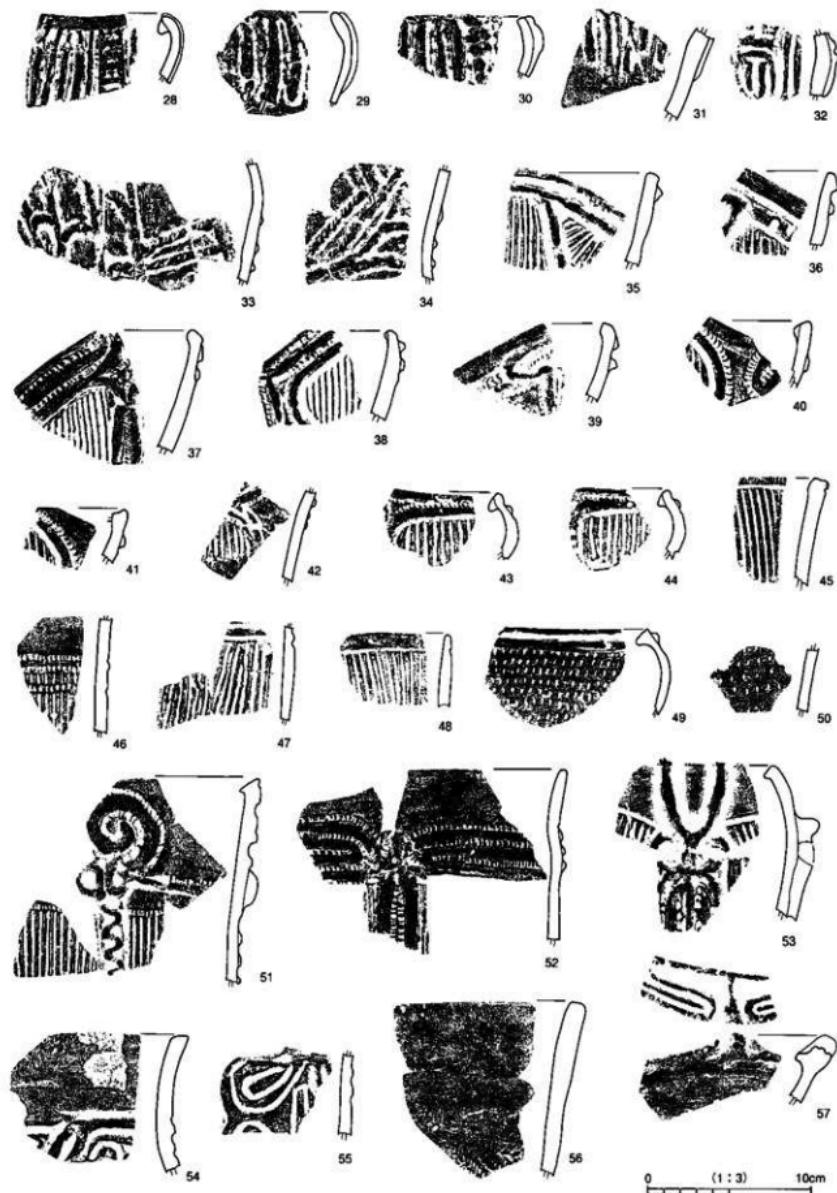


0 (1:4) 10cm

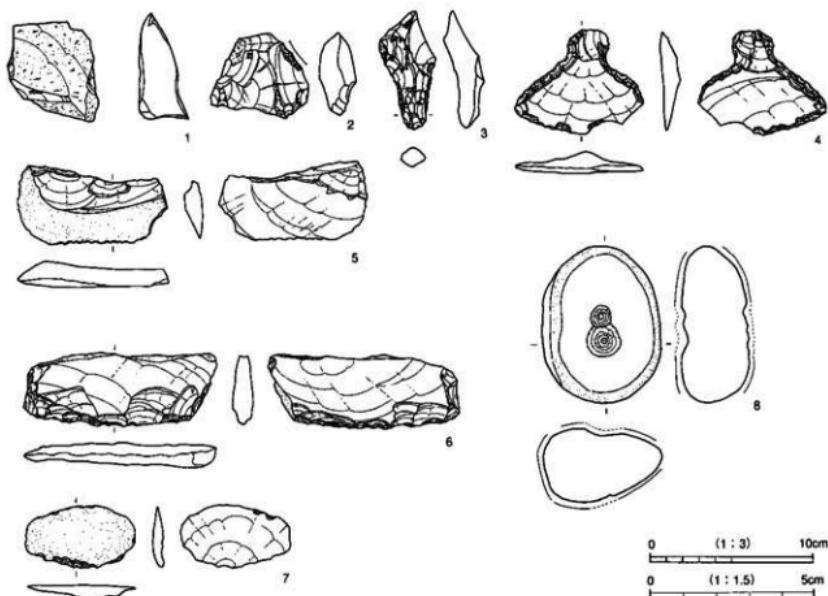
第86図 第18号住居址出土土器（1～12）



第87図 第18号住居址出土土器 (13~27)



第88図 第18号住居址出土土器 (28~57)



第89図 第18号住居址出土石器（1～8）

周溝 西と東面壁際に部分的に幅10～15cm前後、深さ9cmほどの明瞭でない溝がある。（今村）遺物（第86～89図）

a 土器 1～9は第II群1・3類土器であり、胴部に櫛形文モチーフが付くものをまとめている。1・2は1類b・c種であり、前者は口縁部に方形区画文を形成し継位沈線を充填している。後者は波状口縁を有し、鎖連状隆線によって文様帯を区画して、斜沈線やS字状文を描いている。2はやや古相を帶びる。4～6は口縁部に櫛文、もしくは継位密接隆線を貼り付けるもので、いずれも胴下半が欠損しているものの、無文帯を挟んで櫛形文が展開するものと思われる。7は4類に該当しようか。撫り繩状把手の付いた8については、頭部に繩文が施されることから、この限りでない。9～11は1類a種であり、11のみ隆線上に刻みを施していることから、古段階に属する。

12は2類に属し、後者は円筒形深鉢で、胴部において横帶区画がなされ、継位沈線と横位継位沈線文が充填される。

13・14は大小の円筒形深鉢で、口縁部に無文帯を形成し、胴部に条線のみを施している。15は、口縁がやや外反した円筒形深鉢であり、頭部に波状隆線がめぐって、繩文が胴部に施される第II群6類a種に該当する。

16は関東西部から中部地方に分布するいわゆる「多喜窪タイプ」と呼ばれる類型であり、内折した口縁部に大形の中空把手を4単位配し、胴部に繩文施文を行う。器壁が厚く、赤褐色を帶びる。井戸尻III式期に属する。17は、器台であり、脚部には円形透し孔が穿たれ、円盤上は丁寧なミガキ整形が施されている。

19～26破片資料である。19～22は「く」字状に屈曲した口縁部を有し、横走隆線や弧線文、交互

刺突による波状文や三叉文が描かれている。井戸尻I式に比定されよう。24~33は口縁部に継位密接隆線が施された一群であり、25は隆線間に押引文が、26は太隆線脇に押引文が施文される。

28~30は内湾する口縁部に細隆線が貼り付けられたもの、32・33は同一個体で、刻みを施した細隆線を継位や斜位に施文する。35~42は1類a種、43・44は1類b種に該当しよう。45~48・51・52は円筒形深鉢に条線文を施文する一群。49・50は同一個体で、口縁部に凹線がめぐって刺突文が施されている。56は第II群6類b種の繩文のみ施文の素文系深鉢。54・55は口縁部が緩やかに外反し、頭部以下沈線による曲線意匠を描く。北陸系土器であろう。57は次段階の沈線文系に伴う波状口縁を有する浅鉢。

**b石器** 1は風化した節理面を残す原石で、いわゆる「ズリ石」と呼ばれる。2・3は小形刃器でともに黒曜石製。4は数少ないホルンフェルス製の刃部を一部欠く横形の大型石匙。5~7は大形刃器で5・7は礫面を残した粗い仕上げ、6は両面によく刃部が残る。8は表裏面に敲打痕を残す敲石。

**所属時期 第VII期 (小口)**

### 19 第19号住居址 (第90~95図、図版16)

**位置** 調査区東壁寄りに位置する。23号・28号・29号住居址を切る。

**規模・形状** 6.68m×4.94m、横長の長円形。

**検出・調査状況** 多くの遺構と重なっていたが、本址覆土は炭化物を多量に含み、色調も黒色に近く、他と容易に区別できた。掘り下げるに、住居址南半分に大きな炭化材が現れた。西壁際に沿って薄い板状の炭化材が、点在していた。西壁からやや内側にも厚い板状の炭化材がまとまって出土し、この一群と南壁から中央に向かう板状の炭化材が直行するように見えた。18号住居址では、炭化材が中心から放射状に残っていたのに対し、19号住居址では一見すると異なる残り方を示してお

り、残存する炭化材が住居の構築材の組まれ方をある程度反映しているとするならば、18号住居址と19号住居址は違う上屋構造を持つと考えられ興味深い。試料分析を考えて、固化後かたまりごとに、番号を付け取り上げた。また、赤橙色に焼けた土塊が東半分に多く、炭化物を覆うように出土している。18号住居址で記述したような考え方ができるよう。

**柱穴** P1~P6が主柱穴と考える。深さは、P1・49cm、P2・31cm、P3・31cm、P4・30cm、P5・36cm、P6・47cmを測る。

**炉址** 規模は130cm×120cm。やや横長で南東部が張り出す五角形の石囲い炉である。中央部が深さ32cm掘り込まれ、内部は全面赤く焼けている。

**周溝** ほぼ全周巡る。幅20cm前後、深さは10~20cmと均一でなく、断面はV字型を呈する。

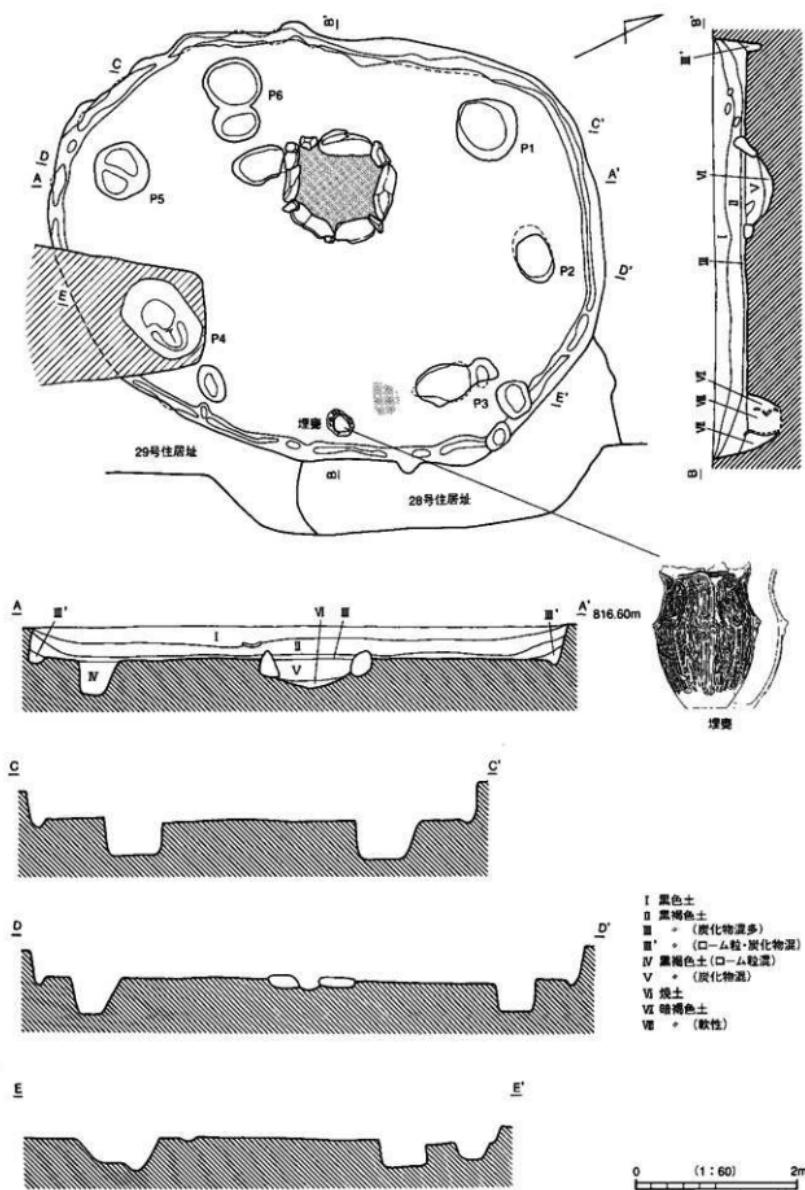
**遺物出土状況** 数量は少ない。覆土V層中床面上よりやや浮いた状態で、比較的大きな破片が出土している。図示した蓋石を伴う埋甕がある。また、北壁際に2ヶ所床面に据えられた大きな石が、検出されている。石1は上面が平らでやや摩滅した面をもつ。石2は2個の石が組み合わさっていて、台状の大きな石の上に丸みを帯びたやや小さめの石が乗せてある。いずれも被熱し割れていることから、住居に備わって置かれていたものと考える。

(今村)

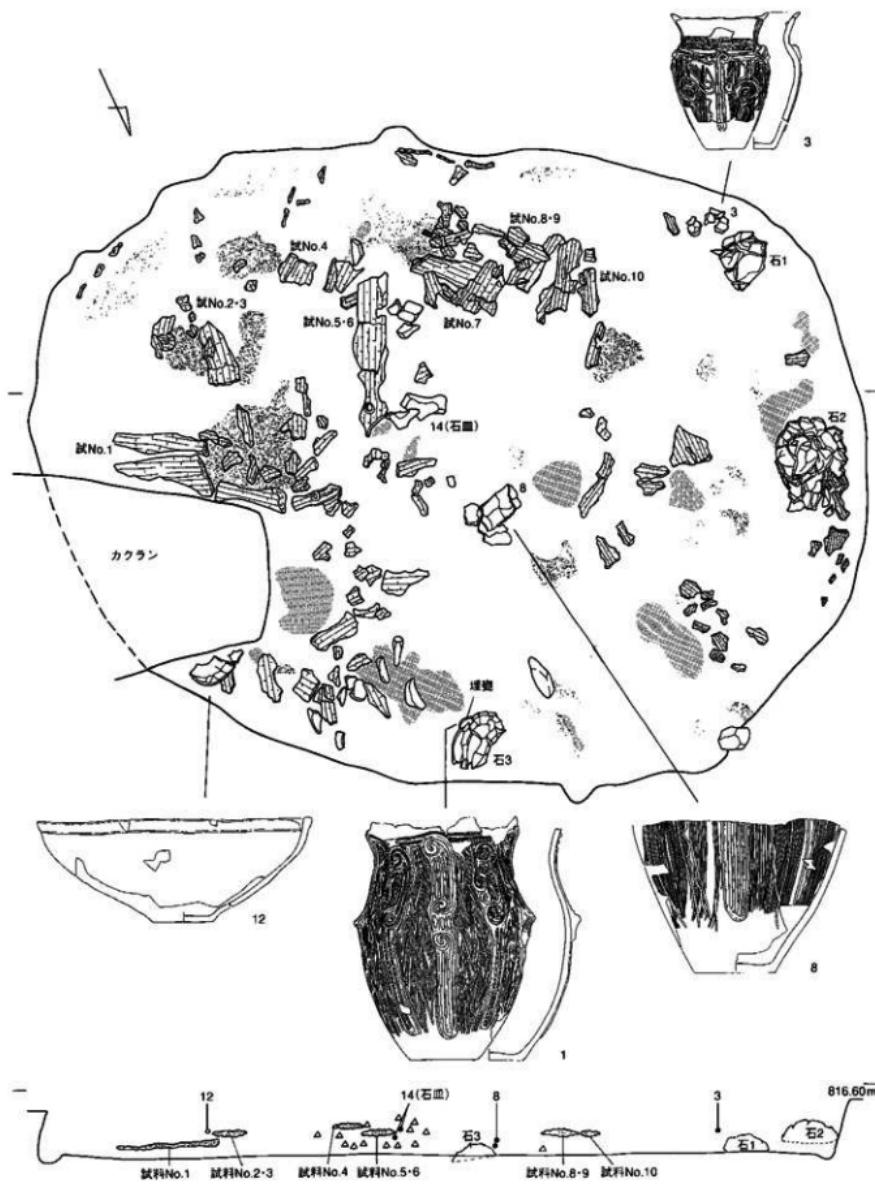
### 遺物 (第92~95図)

**a土器** 19号住からは、中葉的様相がほぼ拭され、後葉的様相へと色濃く転換する土器群がまとまって出土している。

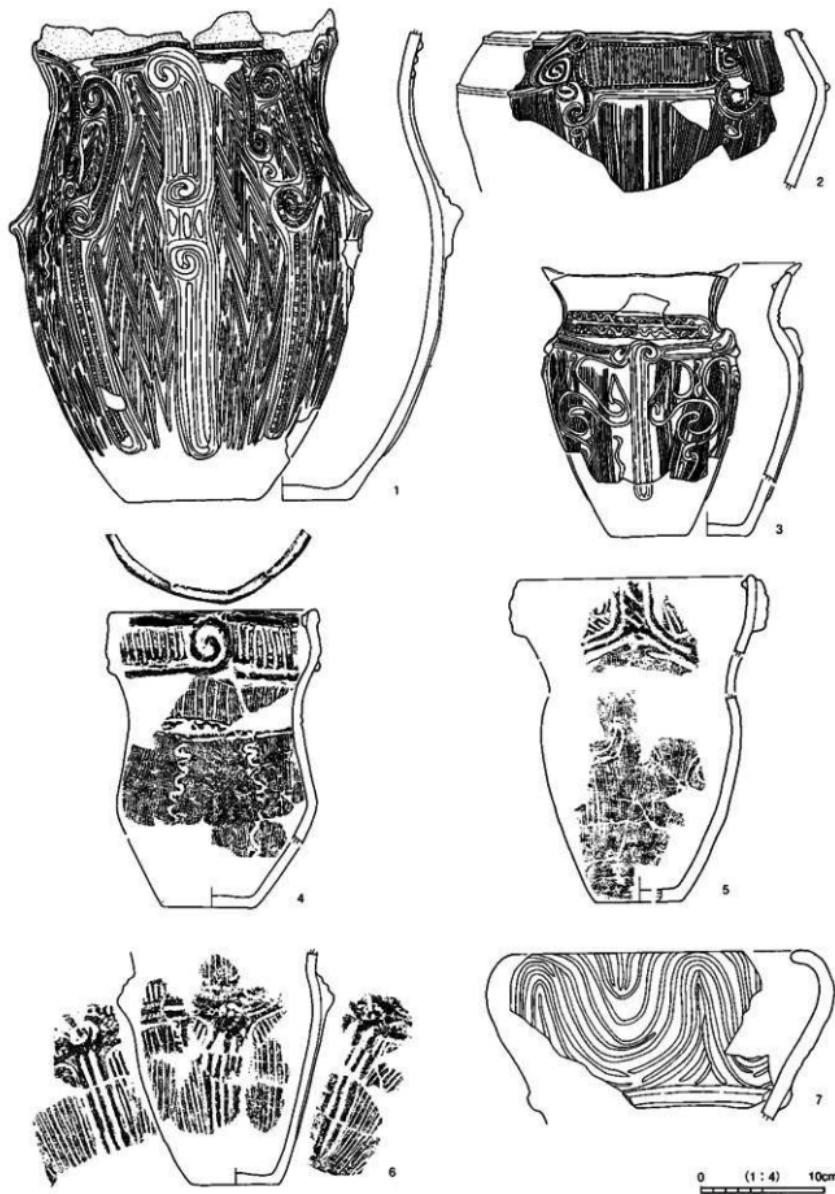
1は埋甕であり、第III群1類a種に該当する。口縁部は欠損し、胴部には腕骨文が8單位配され、綾杉状沈線文が施文される。腕骨文は隆線によって描かれるが、その内部には刺突文が施されることが特徴である。2は「く」字状に屈折するタル形深鉢である。口縁部文様帶には、小渦巻文により区画が行われ、継位沈線が充填される。一方、胴部については櫛齒状工具による条線文が施文さ



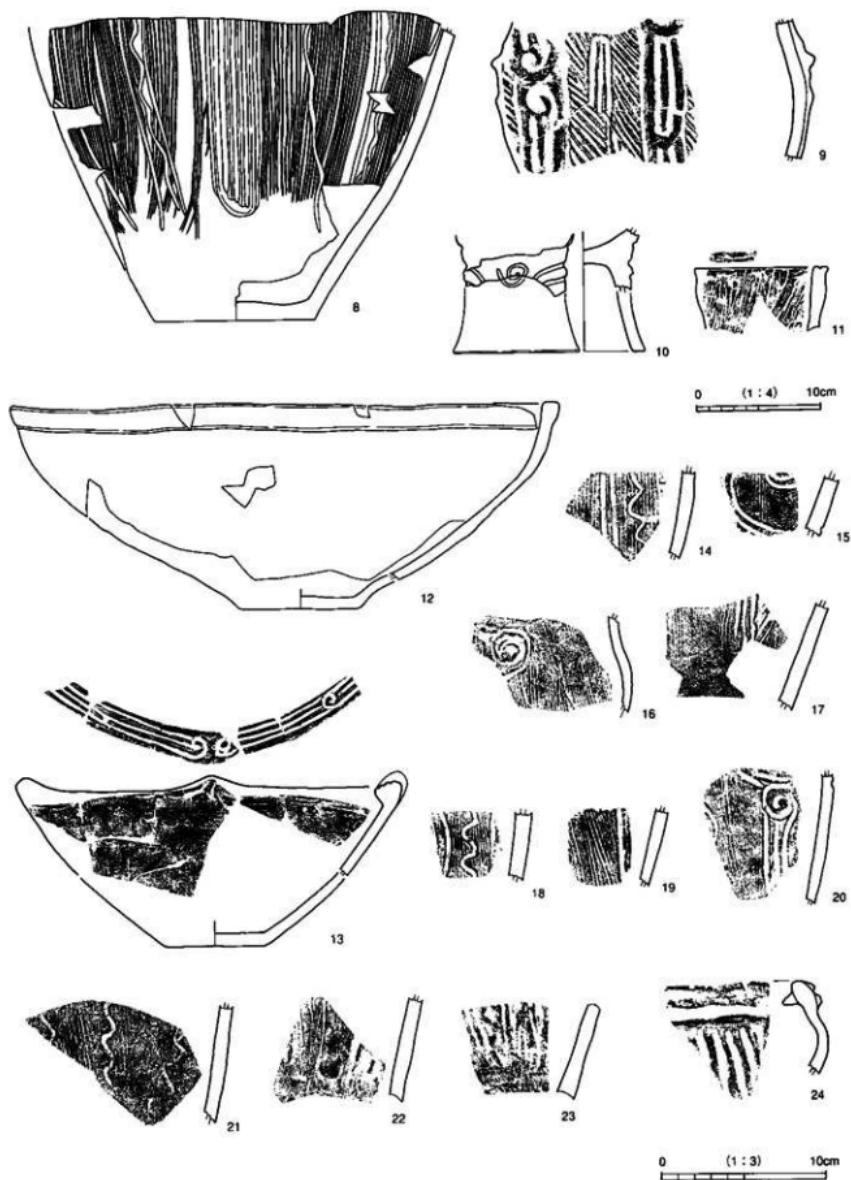
第90図 第19号住居址



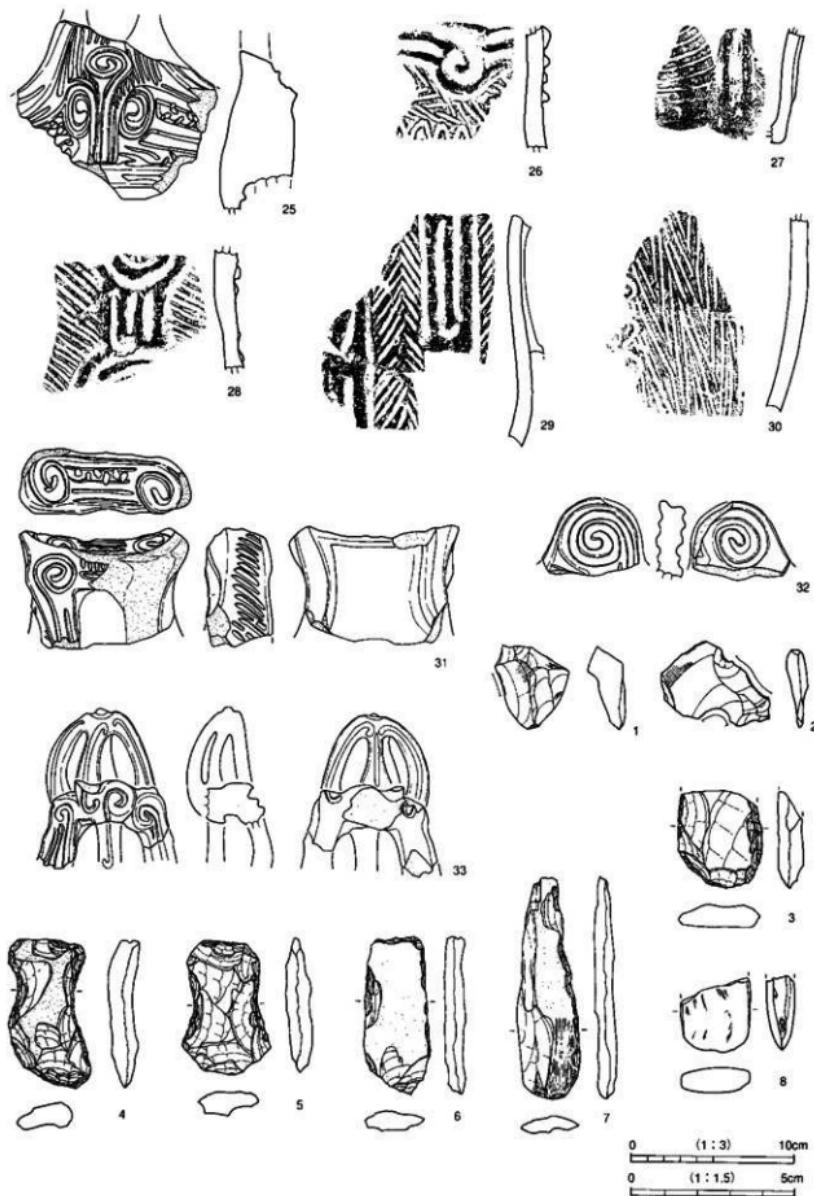
第91図 第19号住居址遺物・炭化材出土図



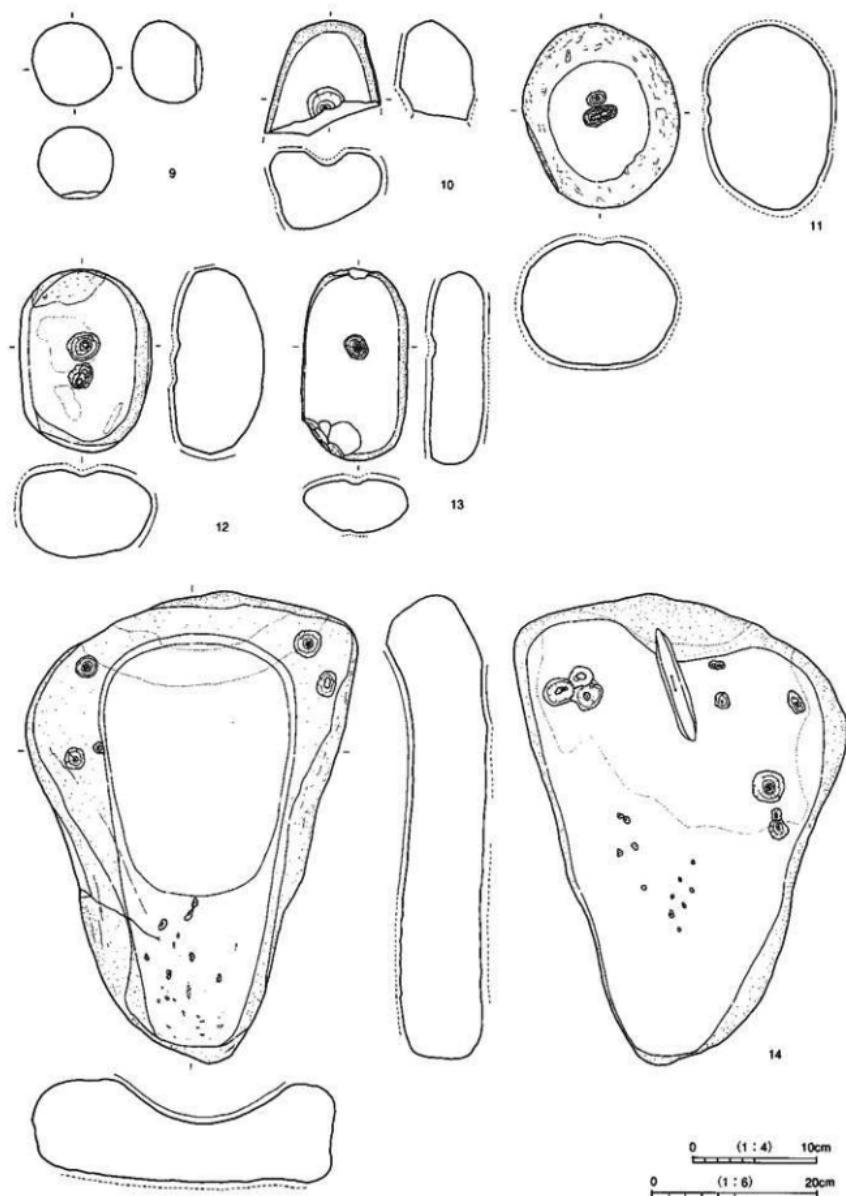
第92図 第19号住居址出土土器（1～7）



第93図 第19号住居址出土土器（8～24）



第94図 第19号住居址出土土器 (25~33)・石器 (1~8)



第95図 第19号住居址出土石器（9～14）

れる。これは、3～5・8にも共通した特徴である。3は外反した無文口縁下に、2条の波状文がめぐり脇部に懸垂文が施される。地文条線施文後、剣先文と渦巻文、蛇行沈線が施文される。4・5はキャリバー形深鉢であり、口縁部には渦巻つなぎ弧文が展開し、継位沈線が充填される。以上の2～5は第Ⅲ群2類に該当する。7は沈線による褶曲文が描かれた口縁部であり、前段階に位置付けられよう。9は1と同じ1類a種である。11は条線が施文されたミニチュア土器。12・13は浅鉢形土器であり、前者は口縁部が肥厚し、後者は口唇部に3条の沈線と小渦巻文が描かれる。10は台付土器の脚部であり、渦巻文が施文されている。

14～23は第Ⅲ群2類土器の脇部破片であり、蛇行沈線や懸垂文が描かれている。24～31は1類土器に相当し、24は内湾する口縁部、26は把手下の脇上半部である。

31～33は沈線文系に付く把手である。31は幅広の柱状形態で、頂部の両端に渦巻文、中心部に交互刺突による波状文が描かれる。33はアーチ状を呈した把手であり、越後地方との関係が類推される。32は板状の円形突起であり、表裏面に渦巻文が施されている。

**b 石器** 1・2は側縁部に微細な加工施す小形刃器。3～7は分鋼形・楔形の打製石斧で、7は刃部に磨耗がある。8は頭部を欠く蛇紋岩製の磨製石斧。9は球形の磨石、10～13は表面に瘤みがみられる敲石。14は完形大形の石皿で被熱しており、裏面は砥石として使用されている。また、表裏面に円孔となる敲打痕が数ヶ認められる。

**所属時期 第VII期 (小口)**

## 20 第20号住居址 (第96～102図、図版17・35)

**位置** 調査区北東に位置する。23号・27号住居址・SK51を切る。21号住居址と接する。

**規模・形状** 4.48m×3.96m。東壁が外側に張り出す方形の住居址。

**検出・調査状況** 本址が23号・27号住居址を大き

く掘り込んでいることから、各住居址より新しいとして調査した。21号住居址とは、北壁の一部で重なる。土層観察では新旧の関係が判然としないため、2軒同時に調査を進めた。本址のP1柱穴が21号住居址の周溝を切ると考える。遺物からは時期差がないが、若干本址が新しいと思われる。覆土は大きく3層に分けられる。I層は、後世のカクランであろう。II層は、自然堆積を示している。III層は、黄色土ローム上に3～4cmの厚さで堆積している。均一ではなく、炉址から東半分にかけてやや厚く、壁際に近づくにつれて薄くなる。ローム床面の傾斜を補正したと考えられる。固くしまり生活面的である。

**柱穴** P1～P4が主柱穴。深さは、P1・43cm、P2・46cm、P3・53cm、P4・43cmを測る。P5・P6は入り口施設に伴うピットであろう。

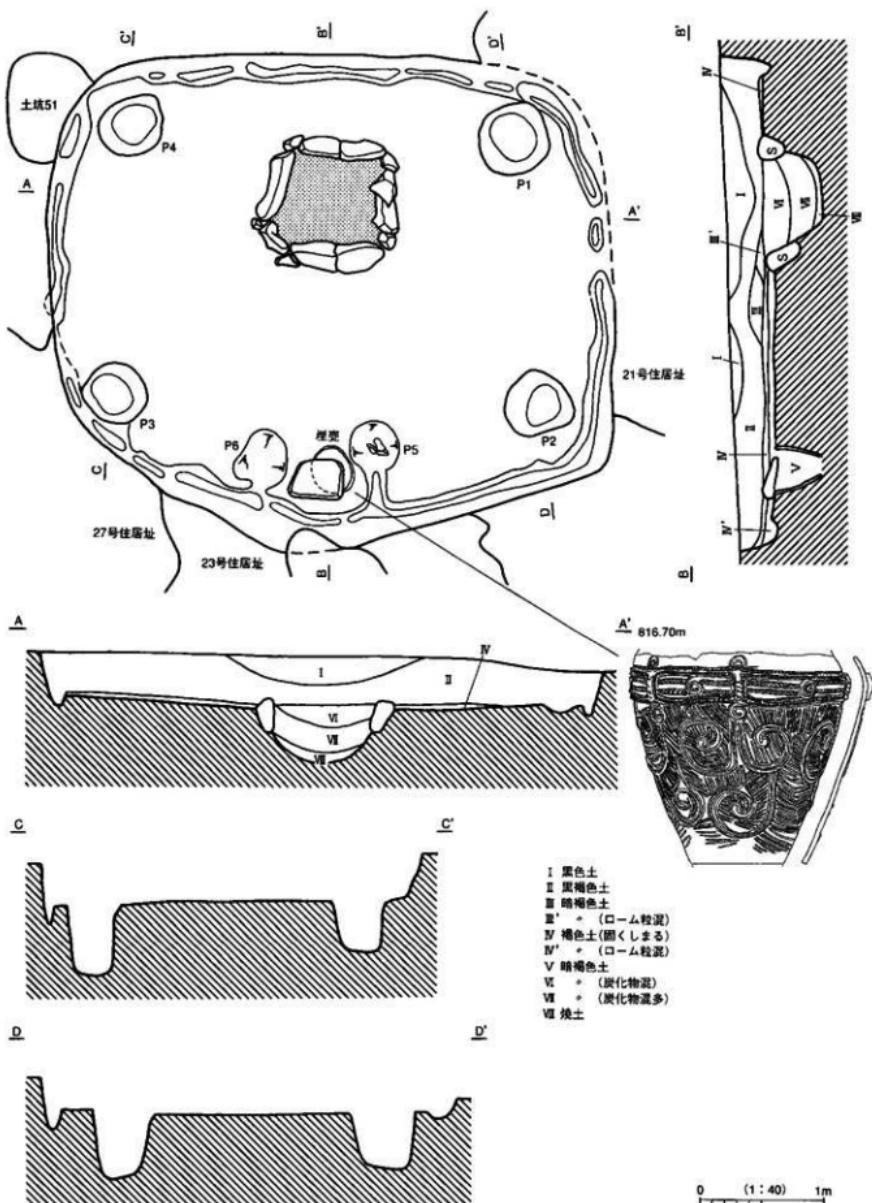
**遺物出土状況** 覆土II層上面からIII層上面にかけて出土している。10cm～40cmの礫とともに被棄されたものが大半であろう。1は埋甕で東壁中央やや内側に蓋石を伴って出土している。正位で埋設されている。14は住居址北東部床面上に口縁を下に伏せて置かれていた。

**炉址** 規模は105cm×105cmの四角い石囲炉で、よく形態を留めている。内側は大きく掘り込まれて、最深部は47cmと深く、赤橙色に被熱して、固くしまっている。  
(今村)

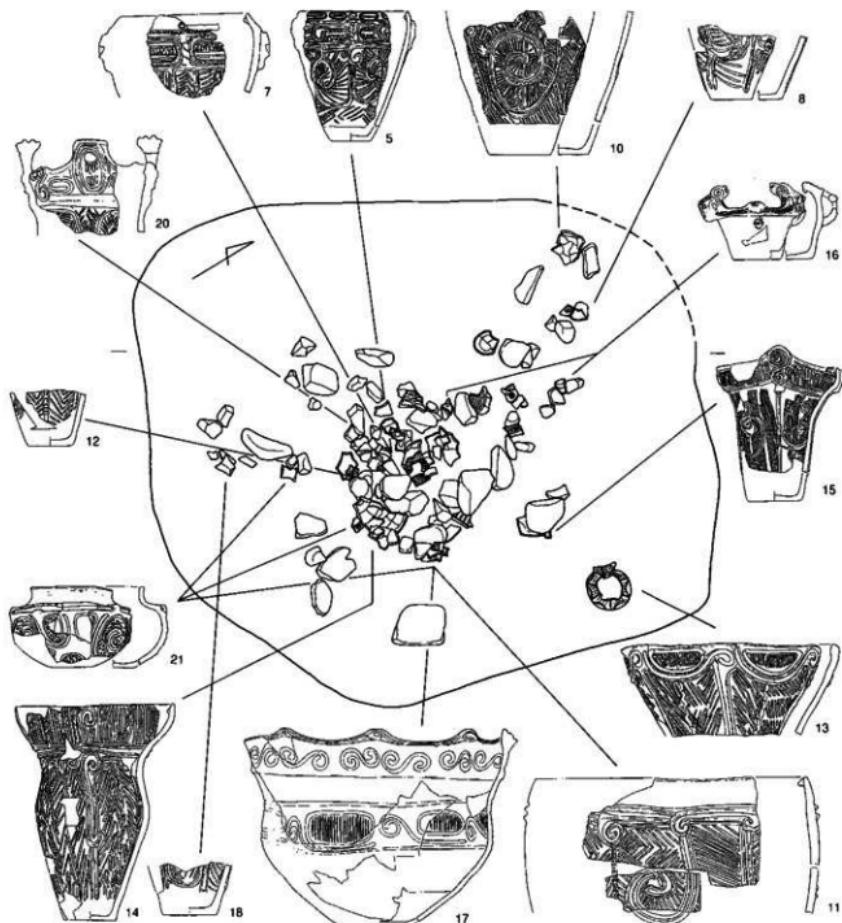
**遺物** (第98～102図)

**a 土器** 20号住から第Ⅲ群1類土器を主体として、3類土器が伴い、一方で4類土器がほとんど共伴しない興味深い組成となっている。

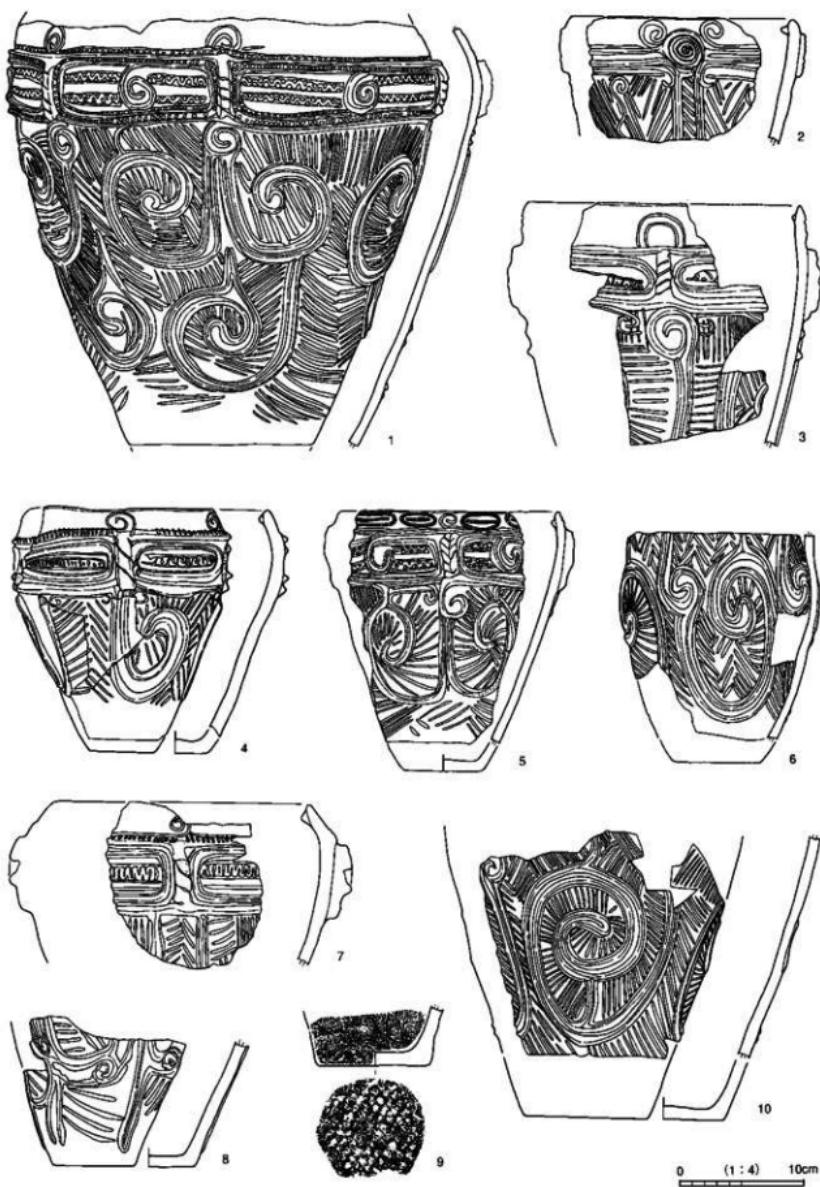
1～12はタル形器形を有する深鉢形土器である。1は無文口縁部下に撚り繩状モチーフを基点として橢円区画文が展開する。区画内には、交互刺突による波状文が2条描かれる。脇部には左右に枝分れした渦巻文がみられ、右の渦巻文下にはさらに剣先状渦巻文が垂下している。3～7もほぼ同様の構成をとっている。8～10はタル形器形の脇下半部である。11・12は同じタル形でも隆線上に



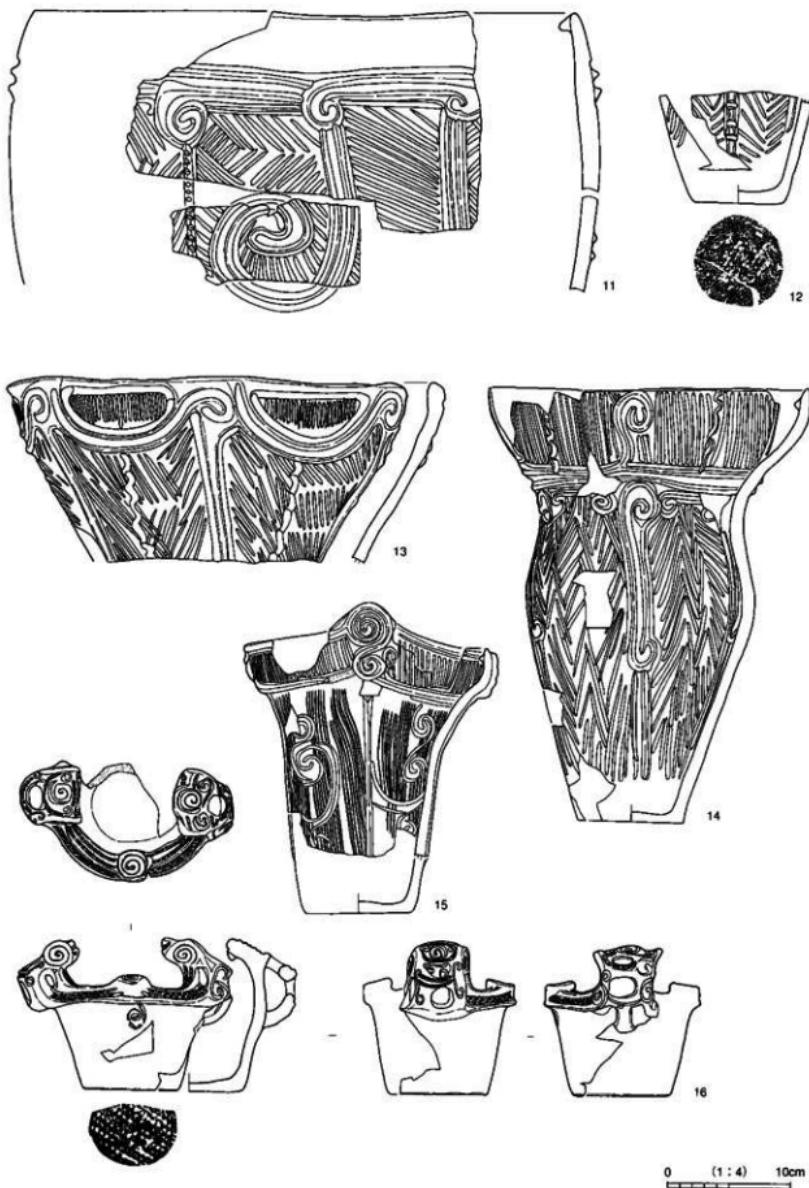
第96図 第20号住居址



第97図 第20号住居址遺物出土図



第98図 第20号住居址出土土器（1～10）



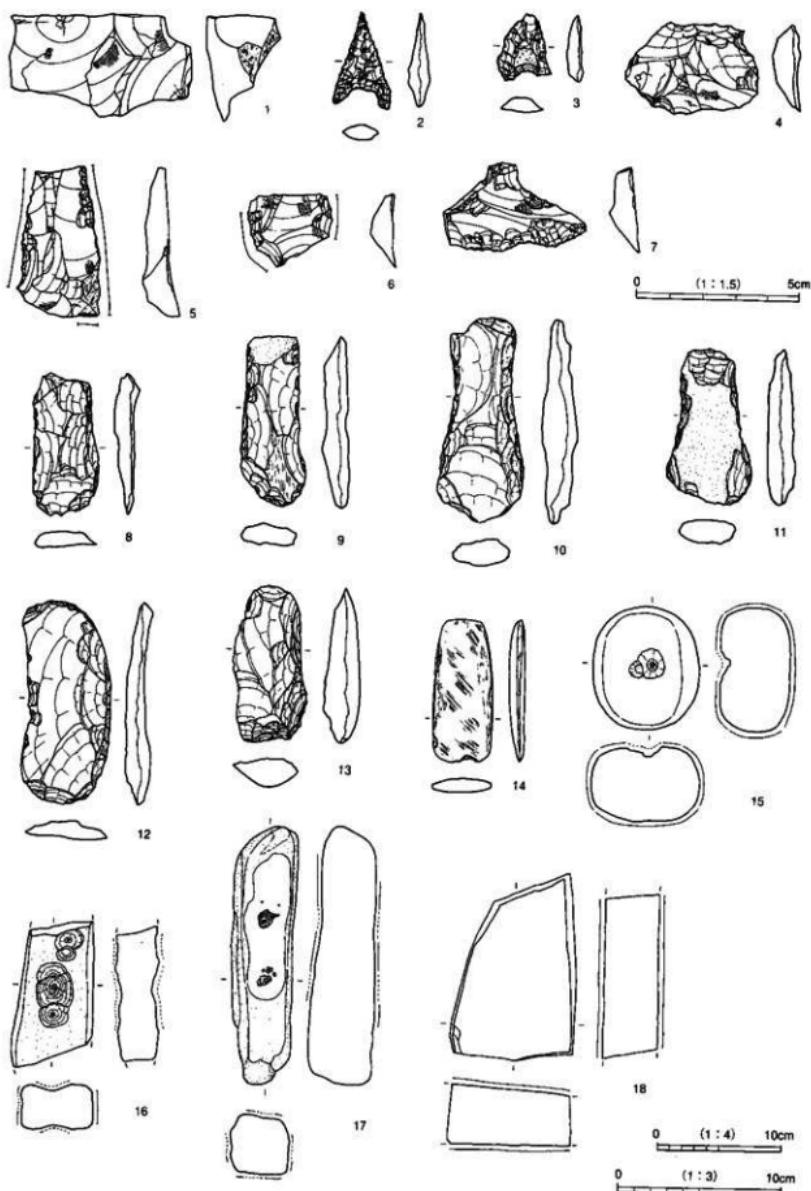
第99図 第20号住居址出土土器 (11~16)



第100図 第20号住居址出土土器 (17~27)



第101図 第20号住居址出土土器 (28~38)・土偶 (39)



第102図 第20号住居址出土石器（1～18）

刻みを施す一群であり、佐久地方に多くみられる。13・14はキャリバー形器形を呈した深鉢であり、13は口縁部に連弧文区画を形成して、縦位沈線を充填する。そこから扁平隆線が垂下し、蛇行懸垂文が描かれている。地文は当該地域で一般的な棒状工具による1本引きであるが、文様構成からみて曾利Ⅲ式に比定される。14は口縁部と頭部の境に2条の隆線をめぐらせて区画を行う。口縁部には4単位の渦巻文と蛇行隆線が、胴部には腕骨文が描かれている。

15は2類に該当し、ラッパ状に開く口縁部に渦巻文が配され、縦位沈線が施される。一方で、胴部においては、櫛齒状工具による条線地文が施され、渦巻文モチーフが描かれるといった前段階に特徴的なあり方を示す。

16は吊手土器である。中空の拳状把手が2単位付き、口唇部に1条の波状文と円形刺突文が2条めぐっている。胎土は非常に精緻であり、色調は明褐色を呈することから、他の土器群とは異なる。素材の粘土が異なるか、他遺跡からの搬入品の可能性が指摘できる。本遺跡からは、過去の調査を含めて4個体の吊手土器が発見され、当該地方では最も多く出土している遺跡の1つとして注目される。

17・19~21は3類曾利Ⅲ~Ⅳ式に比定される一群である。17・19・20は肥厚帶口縁部系(山形1989)で、口縁部に渦巻文や窓枠状区画文を描くことを特徴とする。17は大形の鉢形土器であるが、胴部中位に横円区画文が展開している。19は腕骨文が垂下し、櫛齒状条線が斜位に施文されている。いずれも黒褐色を帯び、砂粒が多いことから、在地土器群とは異なる製作者がよって造られたものであろう。21は壺形土器であり、肩部に橋状突起が付いている。この突起の用途については、明瞭な使用痕が認められないため断定できないが、有孔鍔付土器の系譜を引くものと思われる。胴部には扁平隆線による渦巻文が描かれ、内部に刺突文が充填される。

22~24は1類b種の口縁部であり、22・23は波状文がめぐっている。25~27はキャリバー形深鉢の口縁部で、隆線区画内に縦位沈線が施文される。28・29は波頂下にS字状渦巻文が付いた一群、30は隆線間に丁寧な綾杉文を充填した胴部破片である。31は胴部に列点状沈線文を施していることから、次段階に位置付けられよう。33・34は数少ない縄文系土器である。前者は加曾利E3式に比定される。35は波頂下に円形孔がみられるもので、口縁に沿った沈線や条線地文などから曾利Ⅲ式と考えられる。36~38は沈線文系の把手であり、Y字状に頭部が窪み、橋状を呈する36、眼鏡状の貫通孔が穿たれる38などがみられる。

**b 土製品** 39の土偶脚部が1点出土している。脚先は欠損しているが、断面カマボコ状を呈した安定的な造りとなっている。全面にわたって沈線文が施文され、側面部には2本の隆線が貼り付けられる。破損面には煤が付着した貫通孔がみられ、ブロック状に製作されたことがわかる。沈線文様から、出土土偶(唐草文土偶)の脚部である。

**c 石器** 1は多方向からの剥離痕を残す石核である。2は凹基式の石鎌、3は石鎌未製品である。6は上下の対方向に剥離面を残すくさび形石器である。4・5は両側縁部に細かな剥離が観察される小形刃器。7は黒曜石製の石匙。8~13は打製石斧であり、短冊形と撥形があり、9・10・12には刃部に磨耗がみられる。14は頁岩製の完形の磨製石斧だが被熱をうけている。15~17は敲石であり、15は円形で16・17は角柱状を呈する。18は台石の欠損品である。

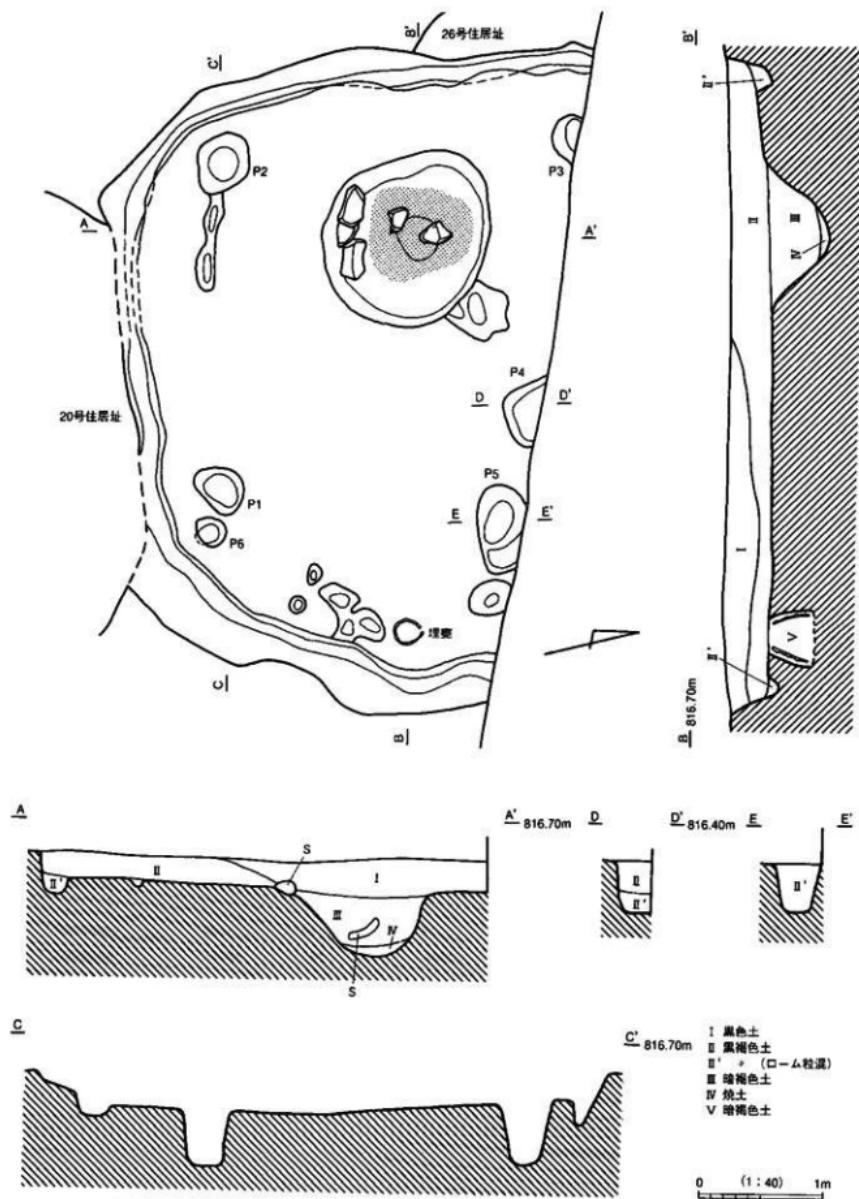
所属時期 第Ⅷ期

(小口)

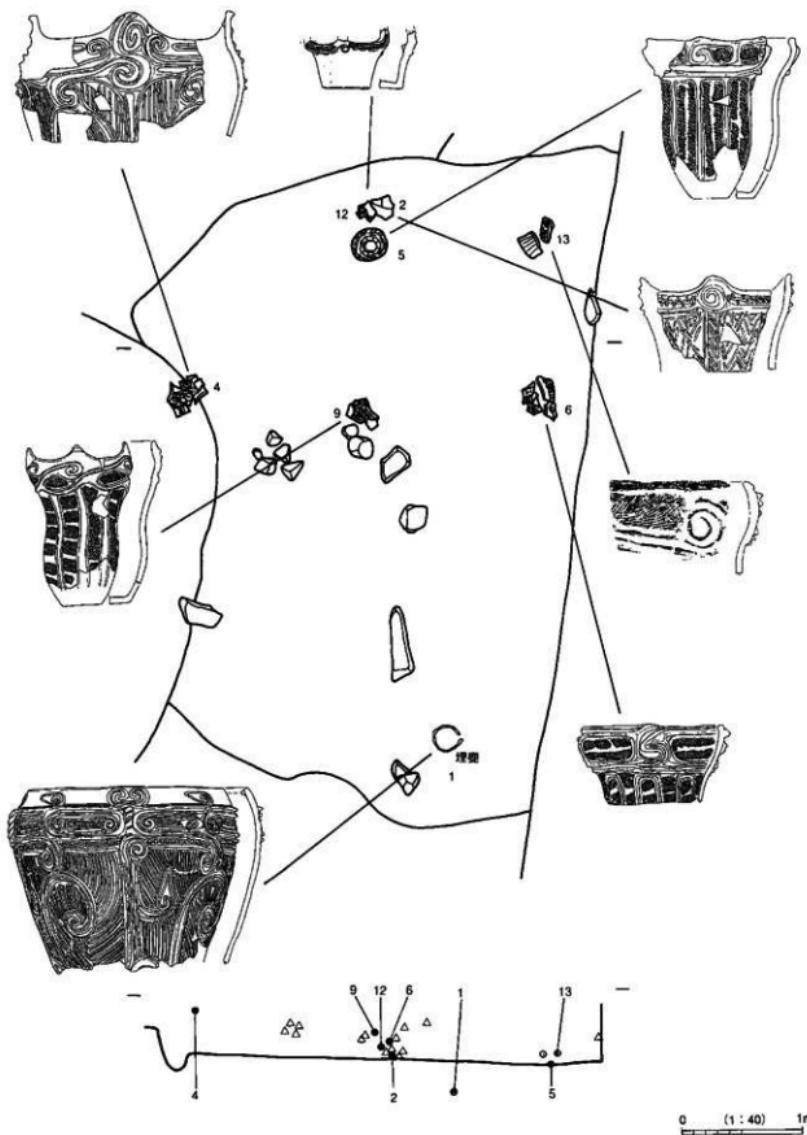
## 21 第21号住居址 (第103~107図、図版18・36)

位置 調査区北東部に位置する。20号住居址と接し、26号住居址を切る。

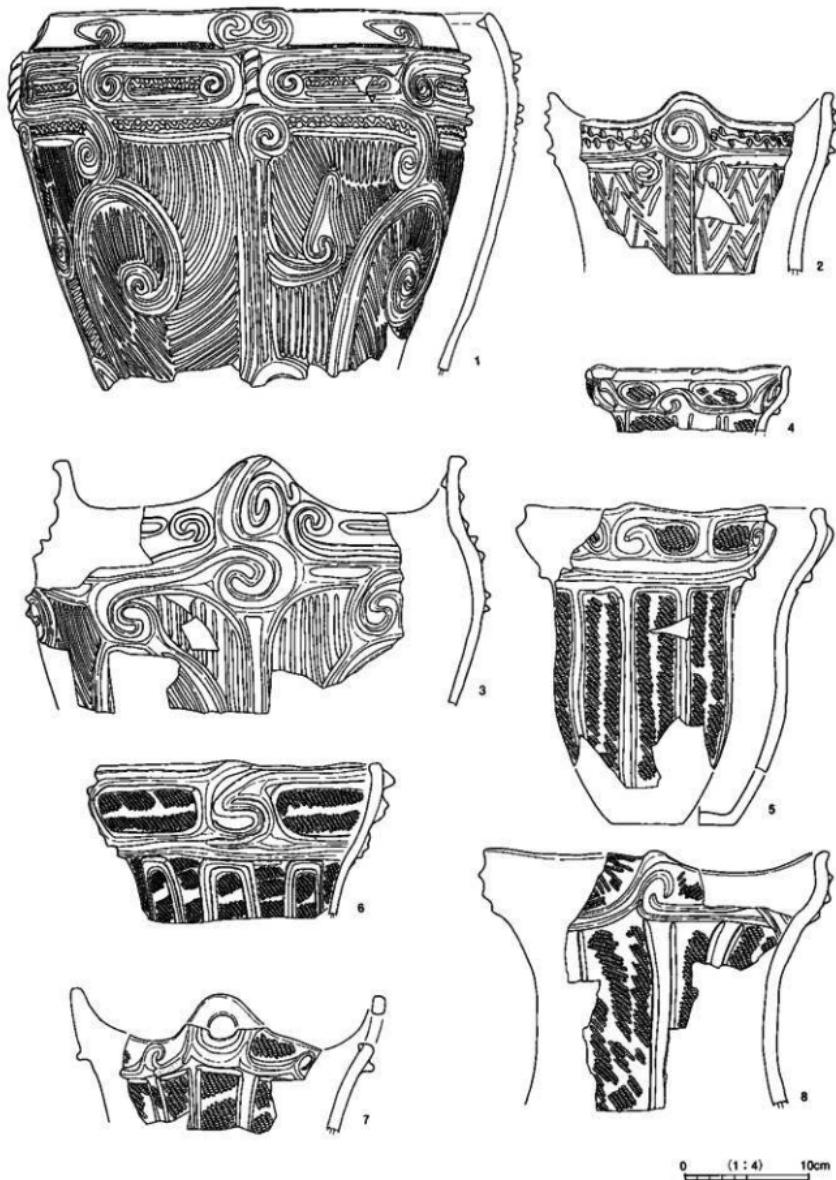
規模・形状 全体の3分の1ほどが調査区外にあるため推定値になるが、5.2m×(5.0m)の東壁が外へ張り出す。五角形に近い方形と思われる。



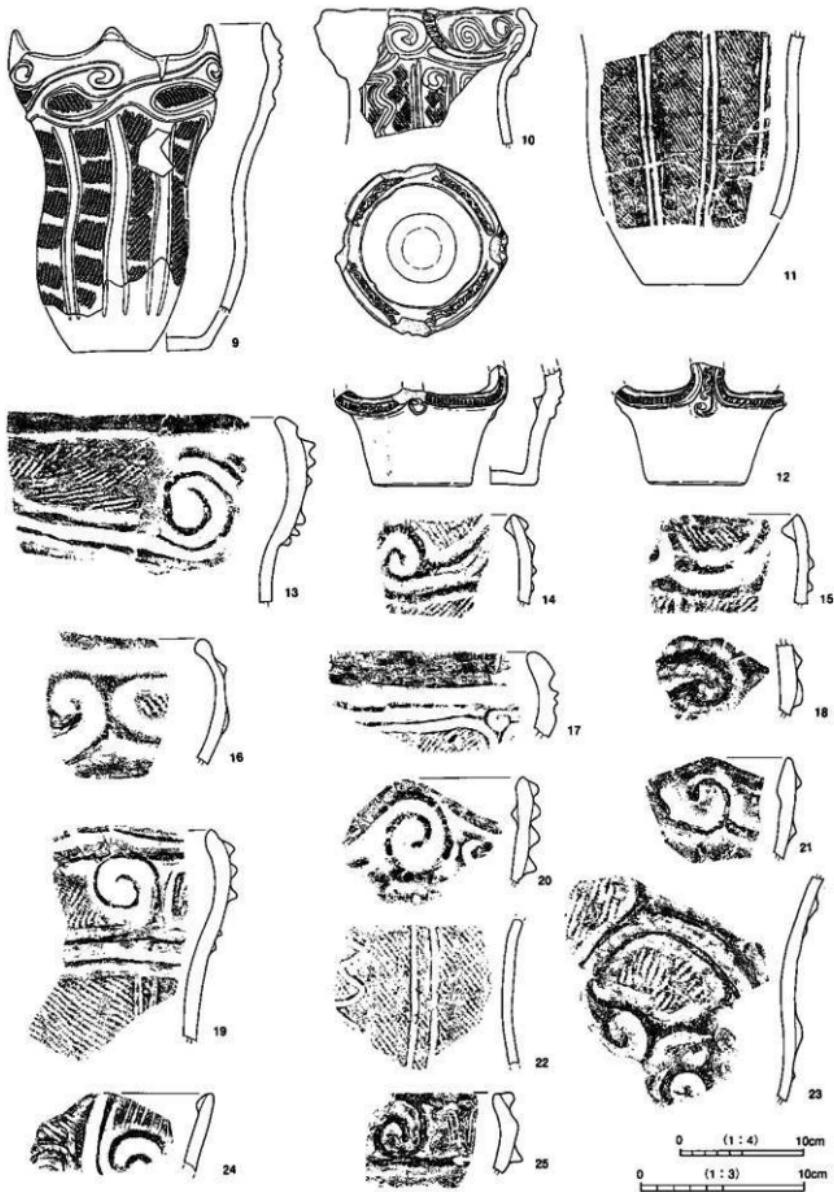
第103図 第21号住居址



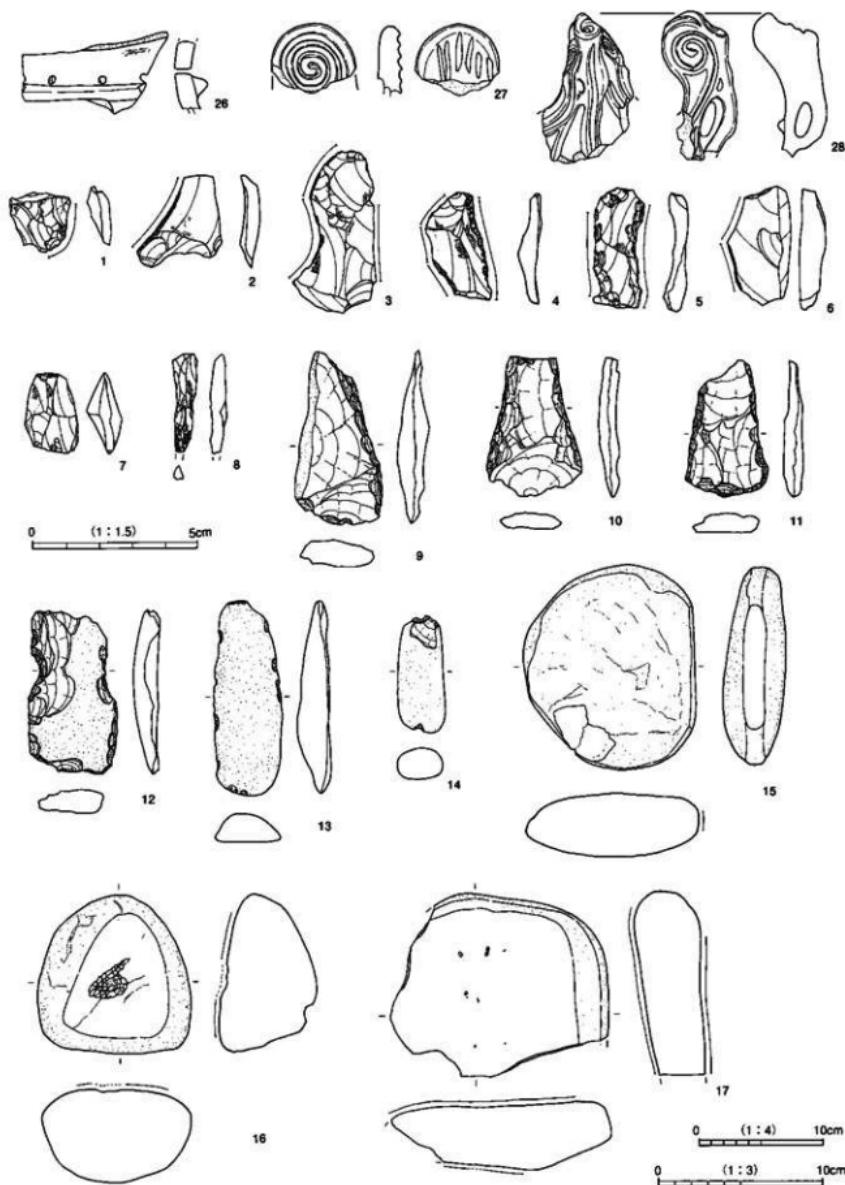
第104図 第21号住居址遺物出土図



第105図 第21号住居址出土土器（1～8）



第106図 第21号住居址出土土器 (9~25)



第107図 第21号住居址出土土器 (26~28)・石器 (1~17)

**検出・調査状況** 20号住居址との新旧関係は、前項で述べたので省略するが、26号住居址とは調査区北壁の土層観察によって、本址が新しいとした。壁は、東25cm、西22cmが残る。

**柱穴** P1・P2・(P3) が主柱穴と考えられる。4本主柱と思われる。P1・48cm、P2・53cmを測る。

**炉址** 奥壁から60cmと近い位置にある。炉石は南辺のみ残るが、他は抜き取られた痕跡があるため、四角い石囲い炉であったろう。掘り方の規模は138cm×134cmを測る。内面は赤く被熱し固くしまる。

**遺物出土状況** 覆土は2層に分けられる。I層中からは小片のみ出土している。105図3は、II層上面、106図9はII層中間から出土しているが、他は床面直上からの出土である。特に、5は口縁を下に伏せた状態、12は横に倒れていたが、特別な目的を持ってここに置かれていたものと理解したい。

(今村)

**遺物 (第105~107図)**

**a 土器** 21号住は後葉期における第Ⅲ群1類沈線文系と同4類繩文系がそれぞれ均衡して出土している。大形のタル形深鉢の1は埋甕であり、胴下半は打ち欠きによって欠損している。胴部文様帶が分帯し、横帯輪円区画文が形成され、内部に端部渦文と組み合わさった波状沈線が充填されている。胴部には燃り繩状モチーフから派生した大柄渦巻文が展開して、いわゆる唐草文様の意匠を描いた典型的な資料である。2は4単位の波状口縁を呈し、波頂下に渦巻文が配され、そこから左右にわたって交互刺突による波状文がめぐっている。口縁部の渦巻文から2本の隆線が垂下し、単位文様を形成し、地文の綾杉状沈線文が丁寧に引かれている。3は1と2が組み合わさったような器形を呈した深鉢である。波頂下に2段の渦巻文が配置され、下段の渦巻文は胴部の大柄渦巻文と連結する。口縁部文様帶には端部渦巻文や細長指円文が描かれることも特色である。

4~11はキャリバー形深鉢の繩文系土器である。

平口縁の4~6、10と7~9の波状口縁に分かれると、関東における加曾利E3式に比定されるものが主体を占め、その変容形態であるものが加わる。口縁部は、渦巻つなぎ弧文を基点とした方形区画や変形区画を形成し、縄文が充填される。胴部は2本の懸垂文が一般的であるが、逆U字状区画を有する5~7、蛇行沈線と小渦巻文が描かれる10などもみられ、バラエティーに富む。7のように波頂下に貫通孔を施したものや、10のように隆線上に刻みをもつものなどは在地で変容した形態と考えられる。

12は吊手土器である。吊手部は欠損しているが、4本の隆線が十字状に連結していたものと想定される。口唇部が平坦化し、外部を張り出させて上面には交互刺突による波状文を、側面部には連続刺突が施される。吊手部にも、おそらく刺突文か波状文が描かれていただろう。整形は、内外面ともミガキが施され、色調は明褐色を呈する。

13~22は第Ⅲ群4類に位置付けられる。多くが2本の隆線によって渦巻つなぎ弧文を描いているが、18・20・21のように1本隆線によるものも認められる。22は4類の胴部破片で、懸垂文が施される。23は同じく繩文系であるが、微隆起線による渦巻文が展開した大木9a式に比定されよう。24・25は沈線文と渦巻つなぎ弧文が描かれた折衷土器である。

26は有孔銅付土器の破片資料である。明黄褐色を呈し、隆線の上部に貫通孔が穿たれ、わずかに赤彩痕が確認される。27・28は沈線文系の把手である。27は円盤形に渦文を描いたもの、28は同じく沈線文系のキャリバー形深鉢に付くものであろう。

**b 石器** 1~6は小形刃器、7はくさび形石器である。8は石錐で先端部が欠損。9~13は打製石斧で、9~11は擾形、12・13は未製品の可能性がある。14は石錐で、上下端部に打ち欠きが施されている。15は磨石、16は敲石、17は台石である。

所属時期 第Ⅶ期

(小口)

## 22 第22号住居址（第108・109図、図版19・37）

**位置** 調査区北東の隅に位置する。切り合いはない。

**規模・形状** 住居址の大半が調査区外にかかるため規模は不明だが、一辺4m前後の方形基調と思われる。

**検出・調査状況** 調査できた遺構部分は明瞭に検出できた。調査区壁際で土層観察を行ったところ、黄色ローム層を20cm掘り込む遺構断面を確認した。炉址は調査区外になると思われるが、平面形および柱穴と考えられるピットの配置から住居址とした。住居址中央には大きく後世のカクランを受けていた。

**柱穴** P1・P2は主柱穴と考える。深さはP1・35cm、

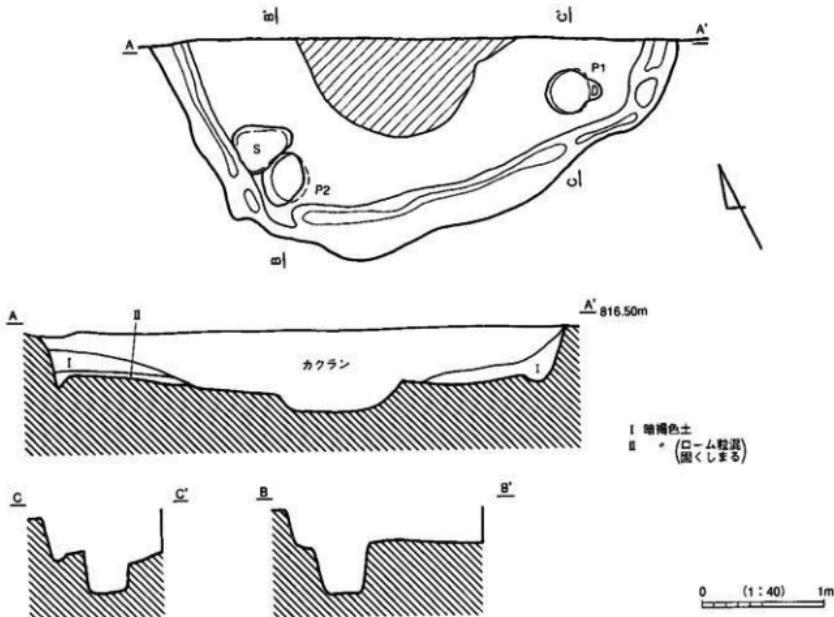
P2・41cmを測る。P2側に大きめの平石がある。周溝 壁際に沿って巡る。幅約10~20cm、深さ15cm前後掘り込まれているがやや不規則である。

(今村)

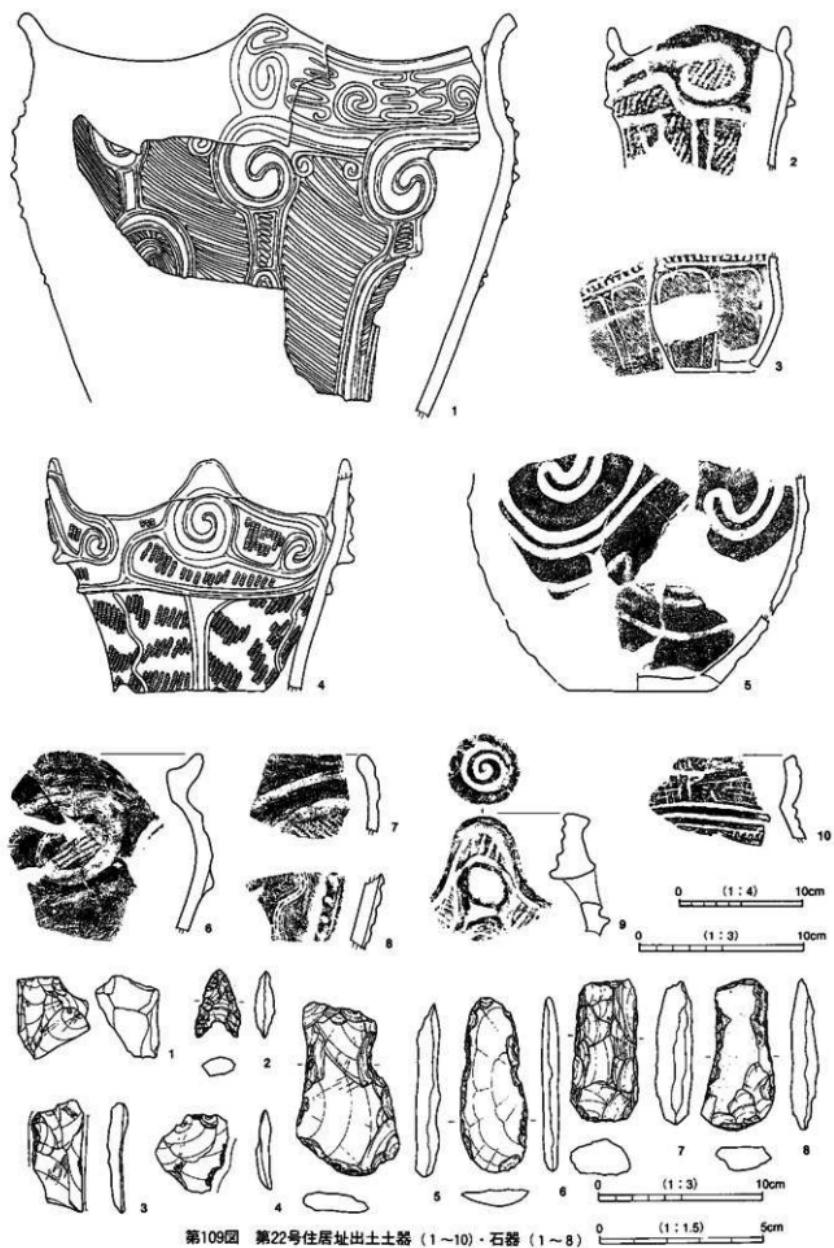
## 遺物（第109図）

**a 土器** 22号住からは、出土遺物は少ない。1は21号住の3とはほぼ同器種に相当する。波状口縁を呈し、口縁部文様帶には蛇行沈線や小渦巻文が描かれている。胴部は小渦巻文から大柄渦巻文が派生し胴部に展開する。

2~4は第Ⅲ群4類で、加曾利E3式に比定される。2・4は波状口縁の深鉢形土器であり、前者は丸みを帯びた隆線で渦巻つなぎ弧文を描いているのに対し、4は断面三角状の隆線という相違が認められる。3は口縁部が欠損、頸部に円形刺



第108図 第22号住居址



突文がめぐっている。5は削り出しによって渦巻文を描いている鉢である。色調は褐色を呈し、内面はミガキ整形後、赤色塗彩が施されている。

6・7は4類の口縁部破片、8は刻列隆線が垂下し、櫛歯状工具による蛇行懸垂文が施された胴部破片である。東信地方の資料であろうか。9は波頂部に円形孔が穿たれた沈線文系土器である。口縁部に斜沈線が描かれている。

10は頭部が「く」字状に括れ、口縁部がやや内湾する器形を呈する。口縁部には半截竹管による爪形文がめぐり、その下部には細沈線による格子目文が描かれる。内面はミガキ整形が施されて、灰白色を呈していることから、明らかに在地の土器群とは胎土が異なる。東海系の北裏CⅡ式もしくは大畠C式（松井1998）に比定され、搬入土器と考えられる。

**b石器** 1は石核、2は凹茎式の石鎌である。3・4は小形刃器、5～8は打製石斧であり、分銅形の5と短冊形の6～8が認められる。

**所属時期 第VII期 (小口)**

### 23 第23号住居址 (第110～112図、図版20)

**位置** 調査区東側に位置する。19号・20号住居址に切られる。27号住居址に床を貼る。

**規模・形状直徑** 5.2m前後の円形か。

**検出・調査状況** 20号住居址検出中に炉址を発見した。覆土は床面上にわずかしかなく、北側の周溝と南側に9cm残る壁の立ち上がりから、住居址の範囲を決めた。19号・20号住居址は、本址床面を掘り抜いていることから本址が切られると判断した。27号住居址は土層観察では新旧関係が判断できなかっただけ、同時に掘り上げてしまった。しかし、炉の形態や遺物から本址より古いことが判明した。

**柱穴** P1～P5が主柱穴と考える。深さは、P1・27cm、P2・26cm、P3・58cm、P4・21cm、P5・49cmを測る。

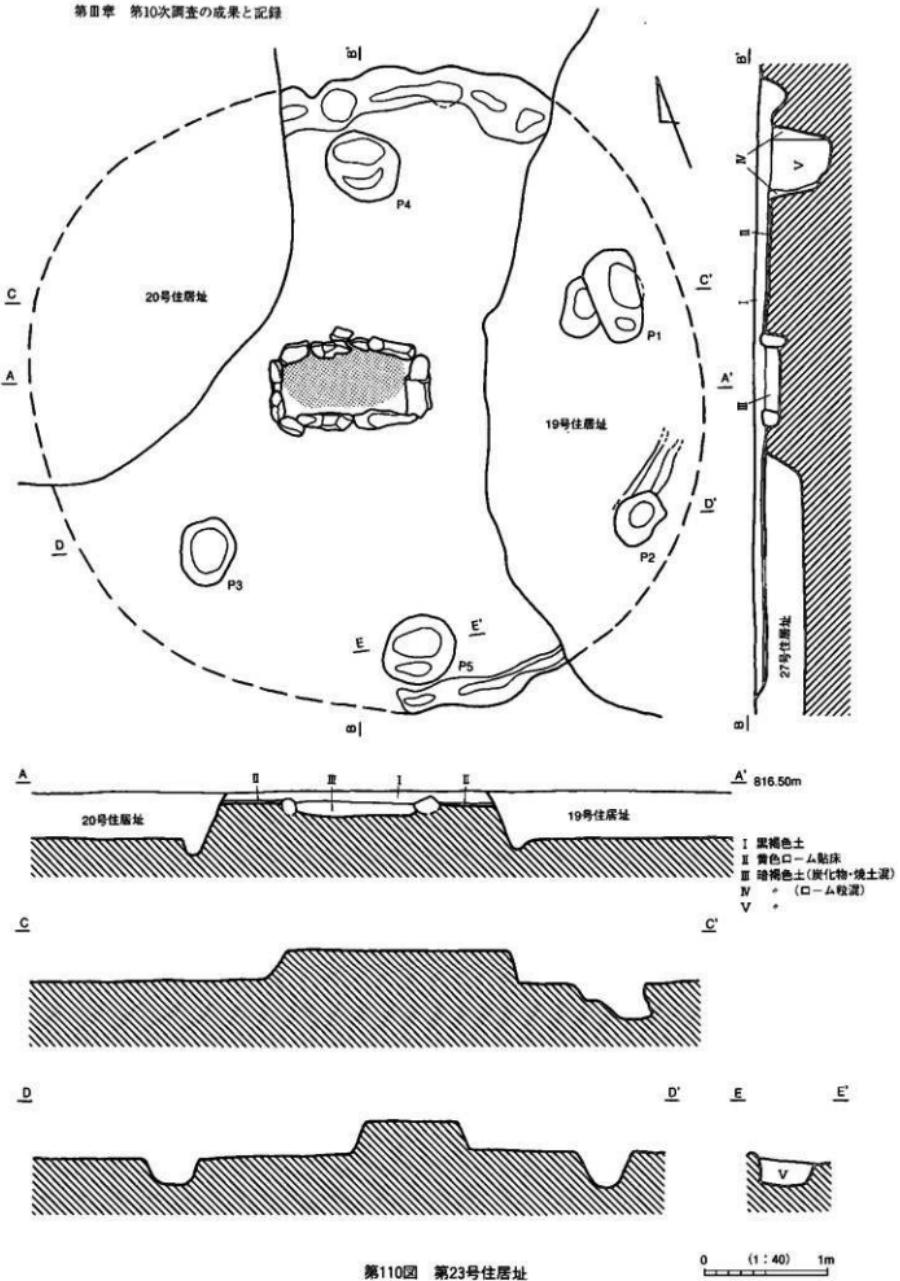
**炉址** 規模は128cm×70cm。住居址中央部に作ら

れた長方形の石囲炉である。内側は平らに浅く掘られていて、橙色に焼けている。  
(今村)  
遺物 (第111～112図)

**a 土器** 1・3・4は第II群3類a種である。隆線による褶曲文を特色とする土器群であるが、いずれも口縁部に4単位の小突起を有している。1は頭部に方形区画が展開し、押引文がそれを囲っている。また、中心に撚り縄状モチーフが貼り付けられ、胴部には条線が引かれる。4も突起下に蛇行隆線が垂下し、そこに連結して胴部にはワラビ状モチーフが配されている。2は外反する無文口縁下に三角状の押引文が2条めぐり文様帶を画している。胴部には刻みの施された隆線が垂下し、横位沈線が重疊している。以上の土器群は、梨久保B式に比定される。

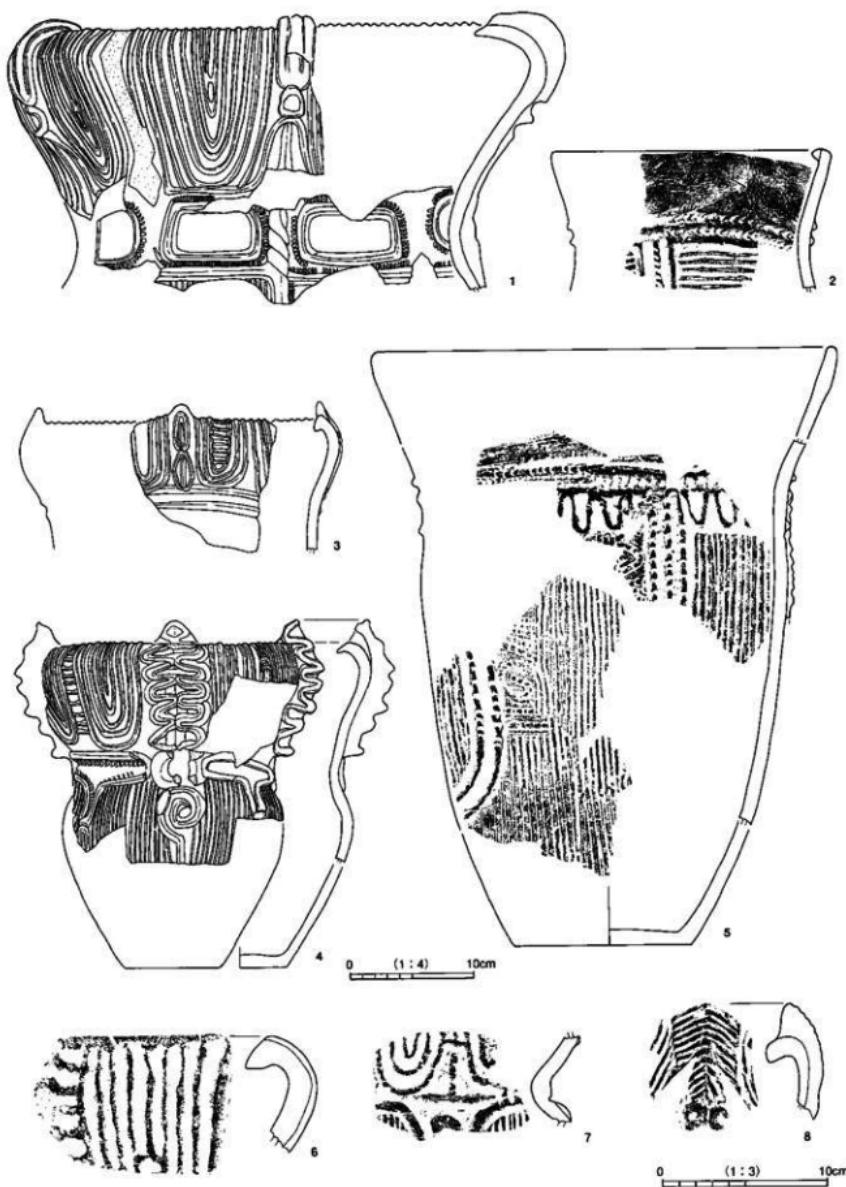
5は長胴形の深鉢で、外反する無文口縁を有し、頭部に押引文を施した隆線と波状隆線がめぐっている。頭部から2～3本1組の隆線がJ字状に懸垂し、隆線上に押引文がみられる。隆線脇には半截竹管による押し引きによって横線、渦文や波状文といったモチーフが描かれることも特色である。以上の特徴から、本例は甲府盆地に多く分布する長胴形の曾利I式に比定され、松本盆地には稀少な資料である。

6～27は破片資料である。6～11は3類a種、11はその胴部である。6・7は平口縁、8～10は角状突起を有し、9のみ中空となっている。13～15は1類a種、15・16は太隆線による渦巻文が施されていることから加曾利E1式が変容したものであろう。17・18は同一個体で、内湾する口縁に眼鏡状モチーフを配し、押引文や三叉文を施す。やや古相を示す土器である。19～23は胴部に異方向沈線を施す一群であり、次段階の描出技法への過渡的様相を帯びている。25・26は3類b種で、沈線褶曲文や腕骨文が施されている。27は「く」字状に屈曲した器壁の薄い口縁部破片であり、半截竹管ハラ側による縱位短沈線と弧線文が描かれることを特色とし、東海地方の子種式（増子1998）

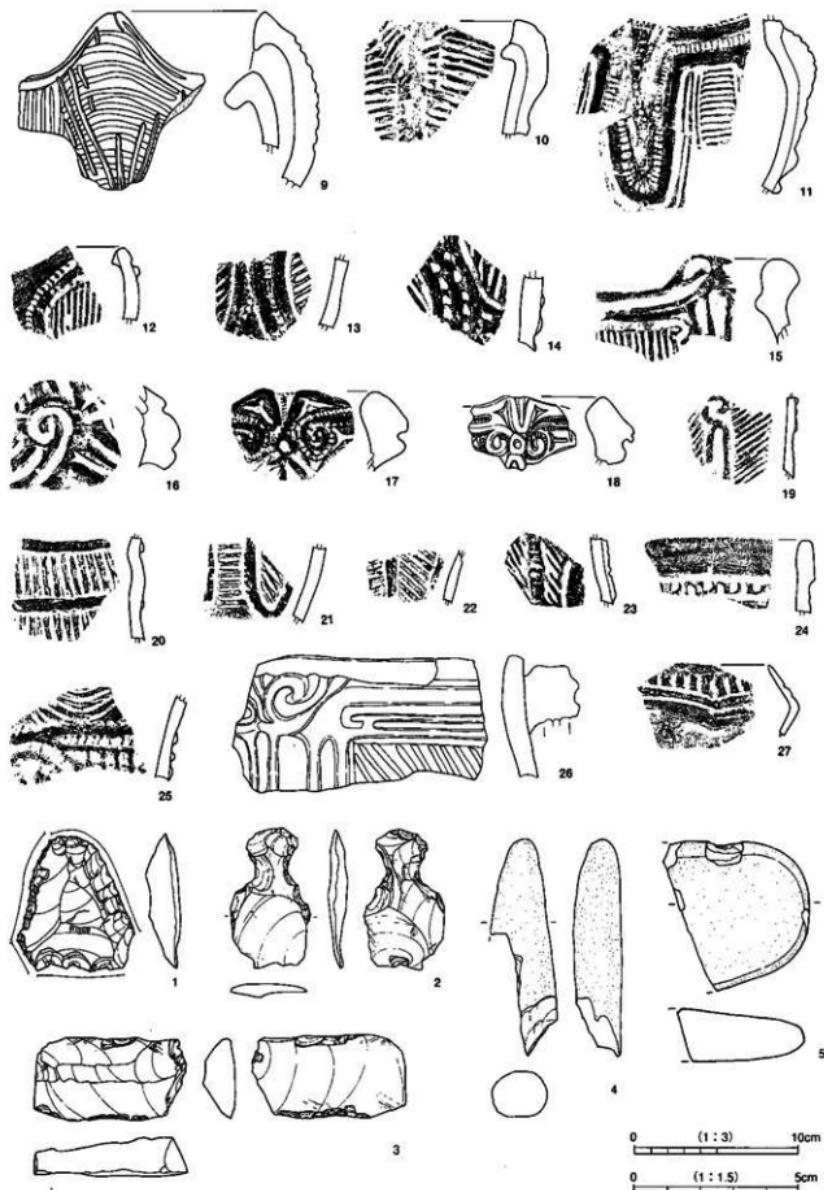


第110図 第23号住居址

0 (1 : 40) 1m



第111図 第23号住居址出土土器（1～8）



第112図 第23号住居址出土土器（9～27）・石器（1～5）

に比定される。

**b 石器** 1は小形刃器で周縁に調整加工が施される。2は大形石匙、3は大形刃器である。4は磨製石斧の基部で、刃部は欠損している。5は石錘。

**所属時期 第IV期** (小口)

#### 24 第24号住居址 (第113・114図、図版19)

**位置** 調査区東壁際に位置する。29号住居址を切る。

**規模・形状** 住居東隅のみの検出で大半が調査区外にあるため不明である。他と同様4～5m前後の方形基調の形状だろう。

**検出・調査状況** 調査した遺構は明瞭に検出できた。黄色土ローム層を25cm掘り込む。炉址は確認できていないが、壁際にU字状の周溝が巡る。遺物は覆土中から小片が出土している。

**柱穴** P1は主柱穴の1つと考えられ、深さ67cmを測る。 (今村)

#### 遺物 (第114図)

**a 土器** 全て破片資料である。1は山形状の口縁部に刻みを施し、隆線が垂下している。2はやや外反した口縁部に弧線状の隆線区画を形成し、波状隆線や斜沈線が描いている。3は胴部に縦位と横位の沈線を引き、さらに列点文が施される。4・5は口縁部に縦位沈線が引かれる一群で、次段階に位置付けられよう。6～8は縦位密接隆線が付く一群で、褶曲文と類縁的関係を持つ。10は櫛形文土器である。

以上の土器群は、梨久保B式の前段階である井戸尻Ⅲ式期に位置付けられる。

**b 石器** 1・2は黒曜石製の小形刃器で、1は両側縁に調整加工が施され、2は一側縁に微細剥離痕が認められる。3は磨石、4は敲石である。

**所属時期 第III期** (小口)

#### 25 第25号住居址 (第115・116図、図版21)

**位置** 調査区東側に位置する。SK52に切られる。

**規模・形状** 工事のカクランを何ヶ所も受けているため不明である。しかし、柱穴の配置から径5～6m前後の円形であろう。

**検出・調査状況** 18号住居址東側を検出中に、石囲炉を発見した。周辺を精査したところ、数個のピットと西壁の一部を確認し住居址の範囲を決めた。覆土はほとんどなく小片がわずかに出土している。

**柱穴** P1～P6が主柱穴と考える。深さは、P1・37cm、P2・34cm、P3・31cm、P4・21cm、P5・22cm、P6・28cmを測る。

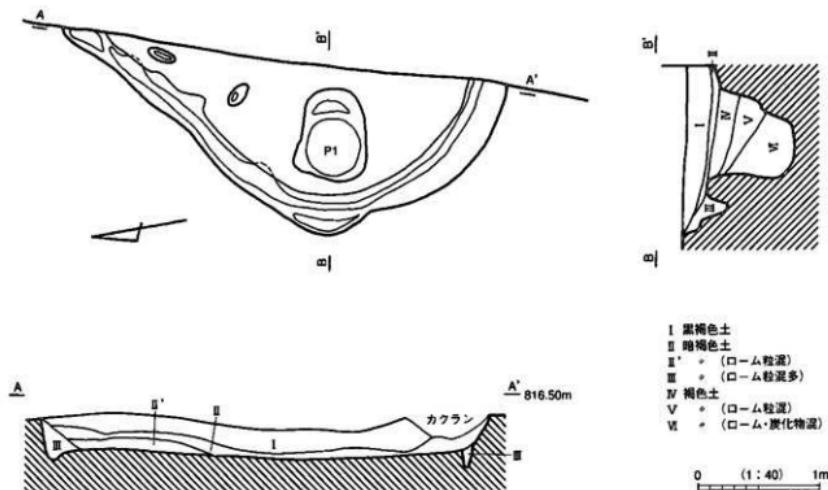
**炉址** 規模は、58cm×52cm、深さ15cmの四角形の石囲炉で、炉石はよく残っている。底部には焼土が3cmの厚さで堆積している。 (今村)

#### 遺物 (第116図)

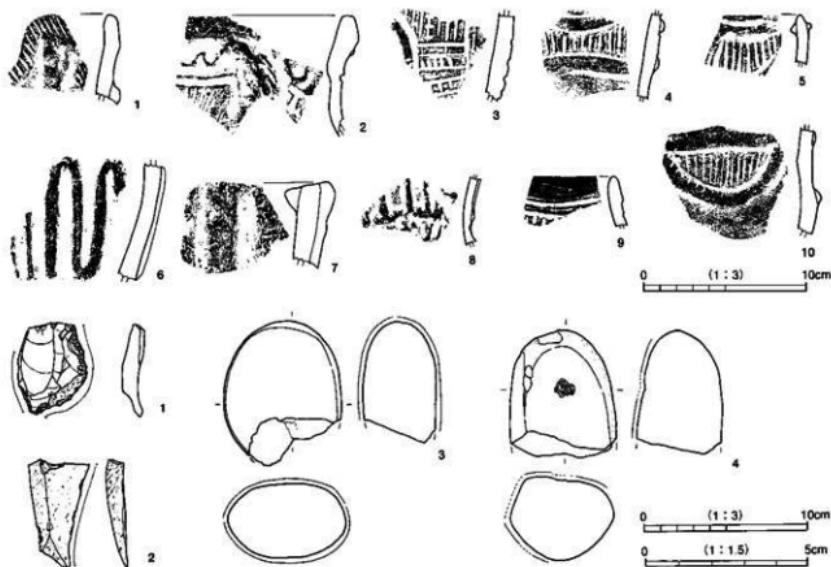
**a 土器** 1は口縁部が大きく外反し、頸部が膨らむ第II群2類土器である。頸部の区画文上部に押引文がめぐり、頸部の方形区画内には斜沈線が充填される。梨久保B式に比定されよう。2は内湾した口縁部に、連鎖状モチーフが横走し、地文に縄文が施されている。3は「く」字状に屈曲した無文口縁部下に縦位沈線が充填された区画文が認められる。4は隆線によって重三角区画文が形成され、内部に三叉文や弧線文が描かれる口縁部破片である。中心の隆線上には左右から交互刺突文が施されている。5・6は櫛形文モチーフが付く胴部破片であり、前者は隆線に交互刺突が、後者は連続の刻みが入れられる。7～12は胴部に条線文が施された一群であり、7・8のJ字文や9・10の渦文・Y字文が貼り付けられている。12は胴部を横位分割し、縦位沈線間に交互刺突が施される。13・14は3類の褶曲文土器、15はソロバン玉状の底部であり、段部に爪形文がめぐっている。16は2本隆線による渦巻つなぎ彌文が施された大木8a～8b式であろう。

**b 石器** 1・2は大形刃器である。

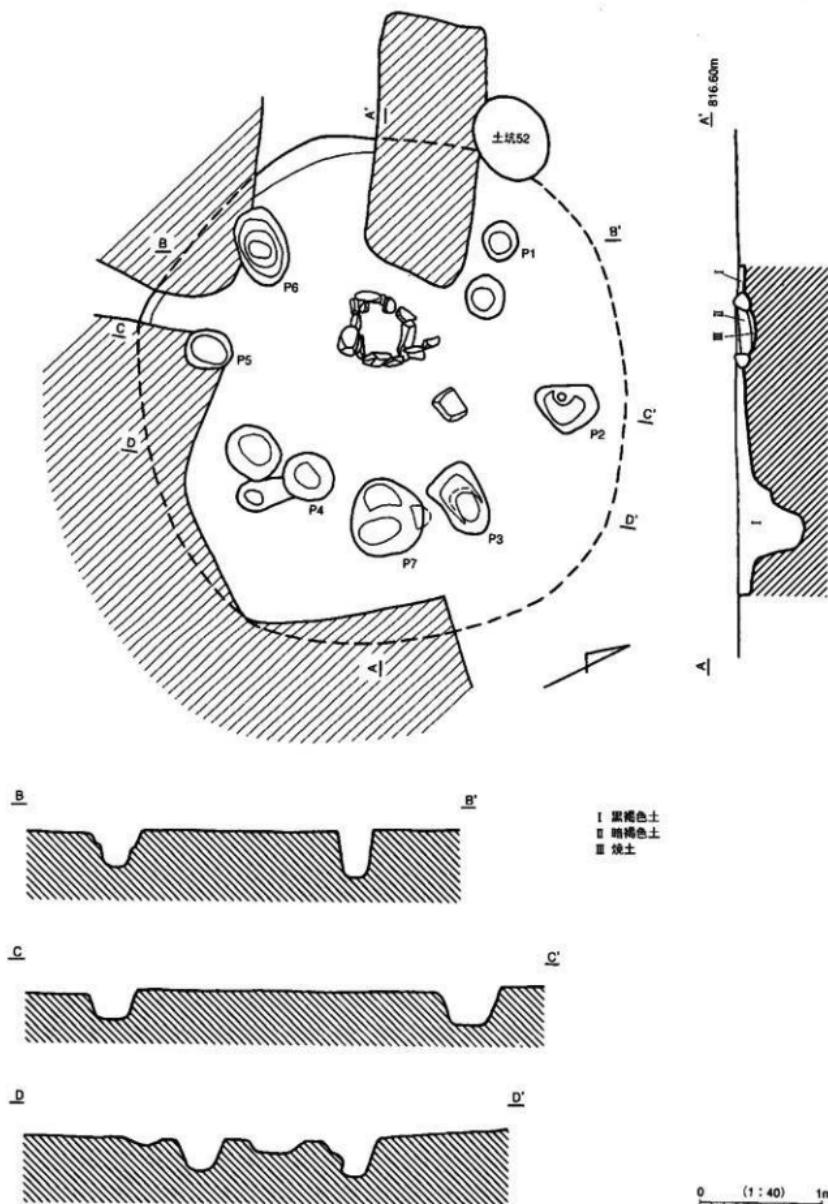
**所属時期 第III期** (小口)



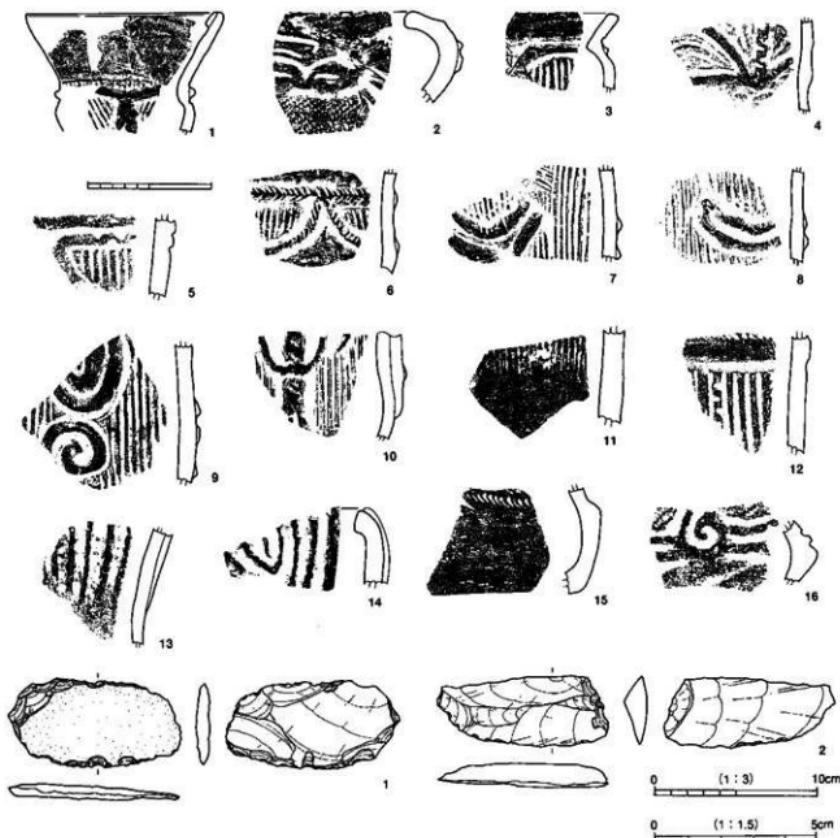
第113図 第24号住居址



第114図 第24号住居址出土土器 (1~10)・石器 (1~4)



第115図 第25号住居址



第116図 第25号住居址出土土器（1～16）・石器（1・2）

## 26 第26号住居址（第117図）

**位置** 調査区北壁際に位置する。21号住居址に切られる。

**規模・形状** 大半が調査区外にあるため不明。

**検出・調査状況** 21号住居址を調査中、調査区北壁の土層観察を行ったところ、同住居址に切られる遺構を検出した。わずかな部分ではあるが、壁と周溝状の溝を持つこと、21号住居址の周溝とは

角度が違う点などを考慮して、別の住居址とした。  
遺物はないため所属時期は不明。

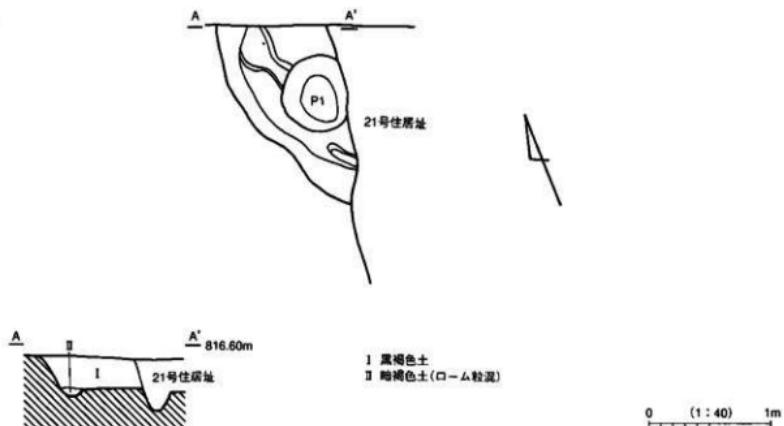
**柱穴** 主柱穴の1つらしいP1がある。（今村）

## 27 第27号住居址（第118～120図、図版21）

**位置** 調査区東側に位置する。18号・23号住居址が床を貼る。20号住居址に切られる。

**規模・形状** 直径3.5mの円形。

**検出・調査状況** 18号・23号住居址よりも深く掘



第117図 第26号住居址

り込んで作られていたため、残りは良好で形状をほぼ把握できた。壁は東28cm、西20cm、南30cm、北21cmが残る。周溝はない。黄土ローム面を床面とし、多少凸凹はあるが固くしまっている。

**柱穴** P1～P4が主柱穴と考える。深さは、P1・52cm、P2・45cm、P3・48cm、P4・45cmを測る。またP5・P6は補助的な柱穴の可能性がある。

**炉址** 中央に位置し、規模は35cm×30cmと小型で、深さは12cmを測る。4個の細長い石で囲まれている。内部には焼土粒・炭化物が多量に入っているが、被熱し硬化した様子は見られない。（今村）

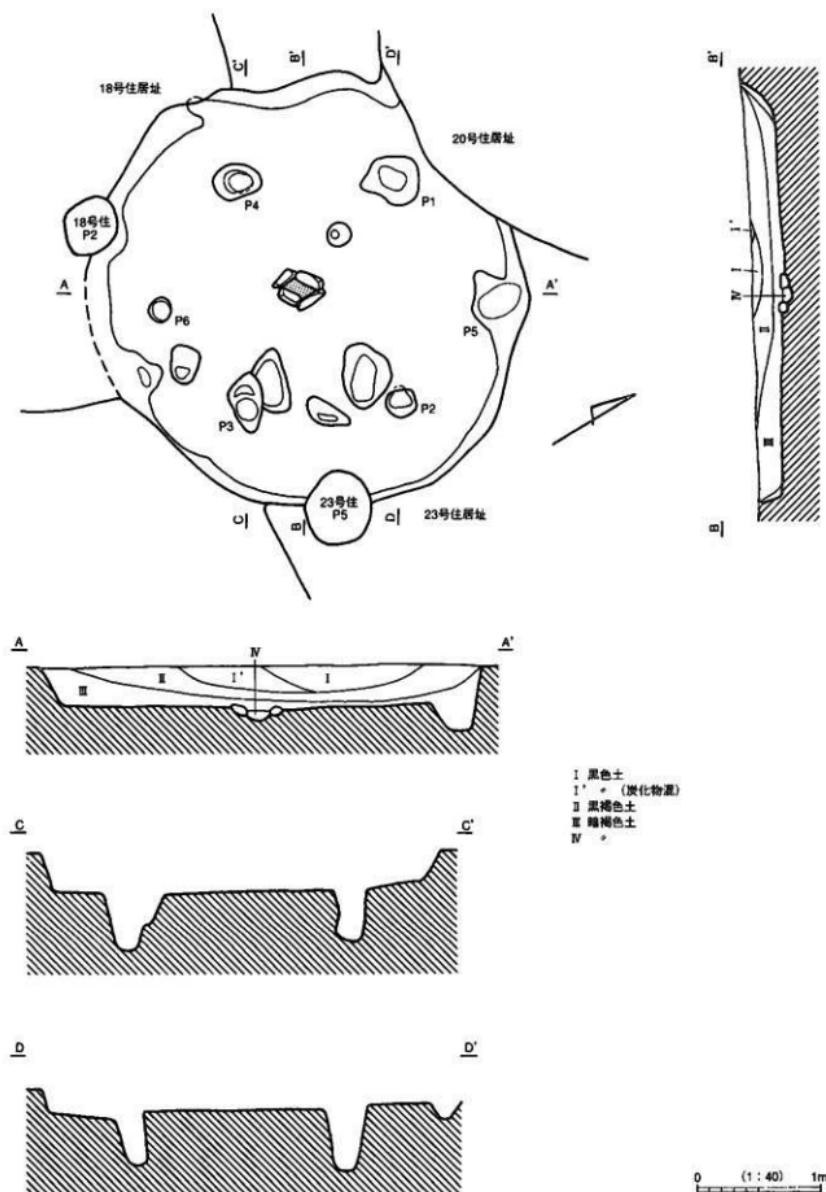
遺物（第119・120図）

**a 土器** 中期前葉から中葉への移行期に位置付けられる本住居は、2号住との連続性を示す資料が出土しているが、重複が著しく一括資料に乏しい。

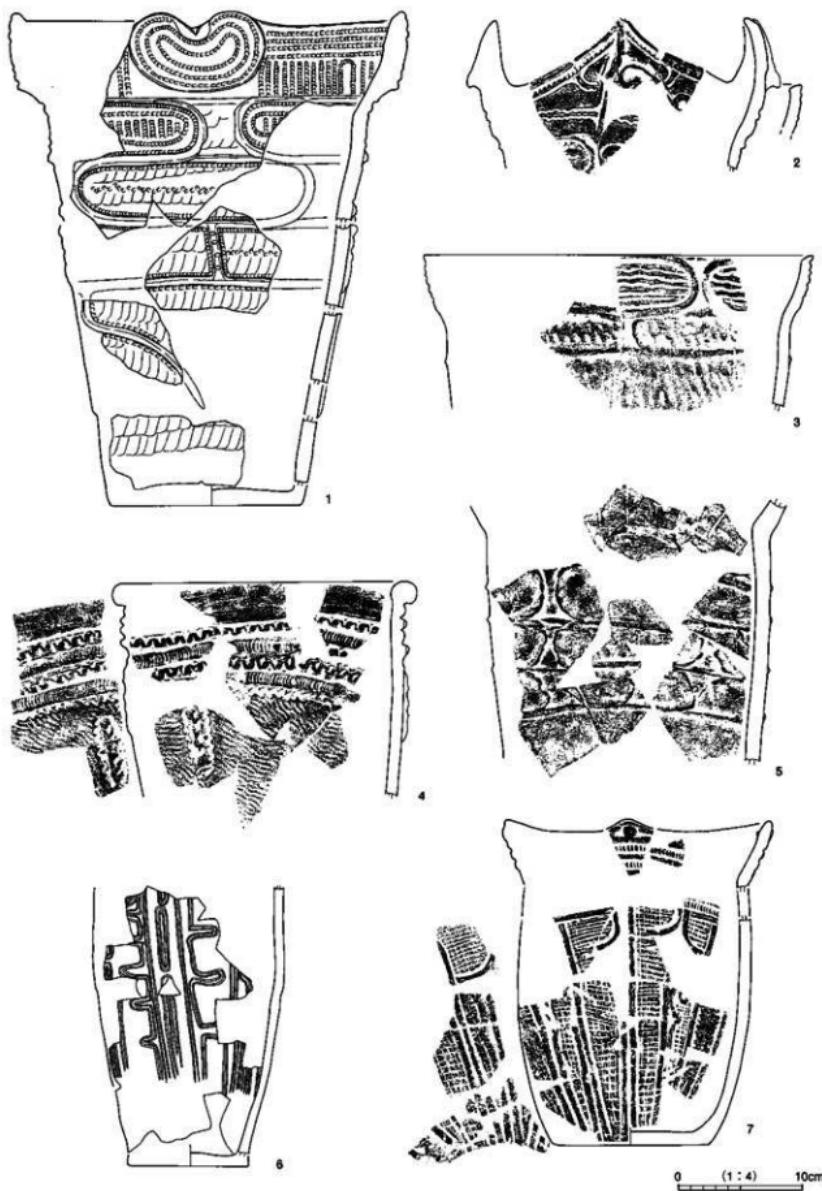
1は口縁部が肥厚し、やや外反する器形を呈した深鉢である。全体に横帯区画が多段化した特徴を示し、中葉期の特色を帶びている。口縁部にはハート形のモチーフが貼り付けられ、角押文による装飾がなされている。とくに、口縁部下に4条の横位と縱位の角押文列が描かれているが、これ

は前葉期のT字文の系譜を引くものと考えられる。胴部はおそらく2段の楕円区画と1段の方形区画文を形成し、縱位・波状の角押文が施される。胴下半にクランク文が垂下し、指頭圧痕を残す点から格沢式に比定されよう。

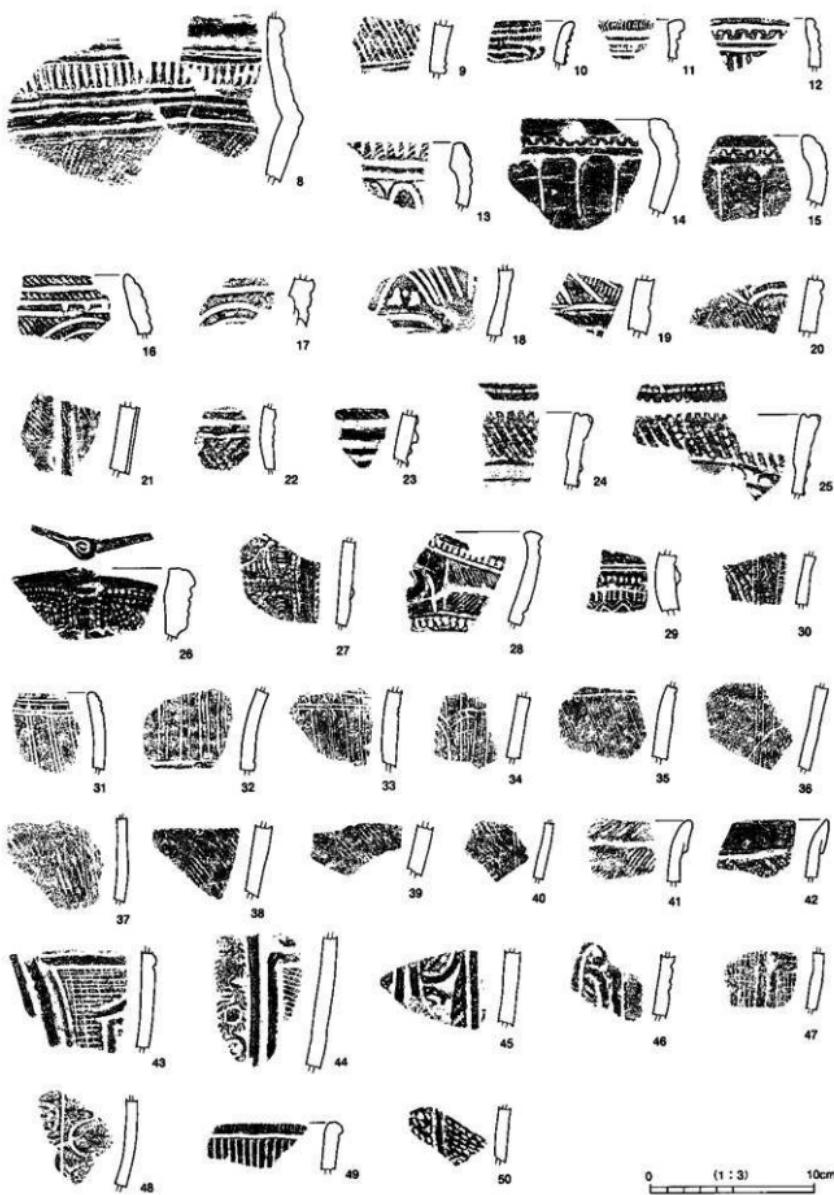
2は口縁部が緩く内湾し、山形状口縁を呈する深鉢である。波頂下の渦巻文が基点となって、波状沈線に刺突列が口唇部に沿って描かれる。また、楕円区画や波状沈線がみられることから、本例は北信地方に分布する器種と類推される。3は1と同様指頭圧痕文系であり、口縁部と頸部に楕円区画文を形成し、上段の区画内には波状沈線が充填される。4は丸みを帯びた肥厚口縁部下に交互刺突文による波状文と押引文が交互に横走している。胴部にはケムシ状貼り付け文がみられ、地文の繩文が施される円筒形深鉢である。5は口縁部が外反し、T字文が施され胴部に横帯区画文を多段形成する素文系の深鉢である。6は比較的薄手の器壁にサボテン状モチーフを半截竹管による細沈線で描いたものであり、2号住の2に類似している。7は焼成が不良で、全面赤化した色調を帯びている北陸系の新崎式である。波頂下にボタン状貼り



第118図 第27号住居址



第119図 第27号住居址出土土器（1～7）



第120図 第27号住居址出土土器 (8~50)

付け文があり、半截竹管による平行沈線と押引文が併走している。胴部には継位の区画文が描かれ、内部に細沈線の格子目文が充填される。

8~50は破片資料であり、第Ⅰ群4類の8~21、2類の31~40、1類の43~47などに大別される。

8・9は平行沈線間に短沈線や斜格子目文を施した沈線文系土器である（三上1987）。10・11は口唇を外反させ、半隆起線文上に爪形文を引くことを特徴としている。12・14・15は口縁部に波状文とT字文を有する。地文縄文上に弧線文が描かれる16~20、そしてその胴部破片である21~23は五領ヶ台Ⅱc式に比定される。24~27は角押文が施される一群であり、24・25は同一個体である。口唇部上に角押文が1条引かれ、口唇端部に刻みがあり、さらに口縁部には斜行の押し引き沈線が描かれている。頭部には微隆起線による梢円区画文を形成している。31~40は半截竹管による平行沈線がみられる平出ⅢA系土器である。いずれも暗褐色か灰褐色を帯び、長石や砂粒が含まれることを特徴としている。

41・42は折り返し口縁を有し縄文を施すが、肥厚部に縄文を有するものと、無文部のものに分かれる。東海系土器か。43~47はパネル状区画と細密沈線もしくは縄文が充填される新崎式である。

49は外反する口唇部に爪形文が引かれ、継位沈線が垂下した口縁部破片である。50は垂下した隆線によって器面が分割され、全面刺突が施されている。

b 石器 6片の剥片のみであった。

所属時期 第Ⅱ期 (小口)

## 28 第28号住居址 (第121・122図、図版21)

位置 調査区東側に位置する。19号住居址に切られ、29号住居址を切る。

規模・形状 周溝と壁の一部から一辺4m前後の方形の住居址を推定した。

検出・調査状況 19号住居址東壁の調査に伴って東側調査区外へ伸びる別の住居址壁の一部を検出

した。また、同址床面上に周溝の底部が残存していた。確認の意味から調査区をやや拡張したところ、黄色ロームを掘り込んだ炉址の跡を確認した。これらの配置から住居址とした。覆土中から遺物は小片がわずかに出土した。

柱穴 P1~P3が主柱穴と考える。深さはP1・46cm、P2・23cm、P3・36cmを測る。

炉址 炉址本体上部は19号住居址によって削平されていたが、黄色ロームの床面が直径50cmの範囲で掘り込まれ赤く硬化していた。炉の底部であろう。

周溝 壁際に一条巡る。幅10~20cm、深さは8cm~15cmで、底は凸凹がある。 (今村)

遺物 (第122図)

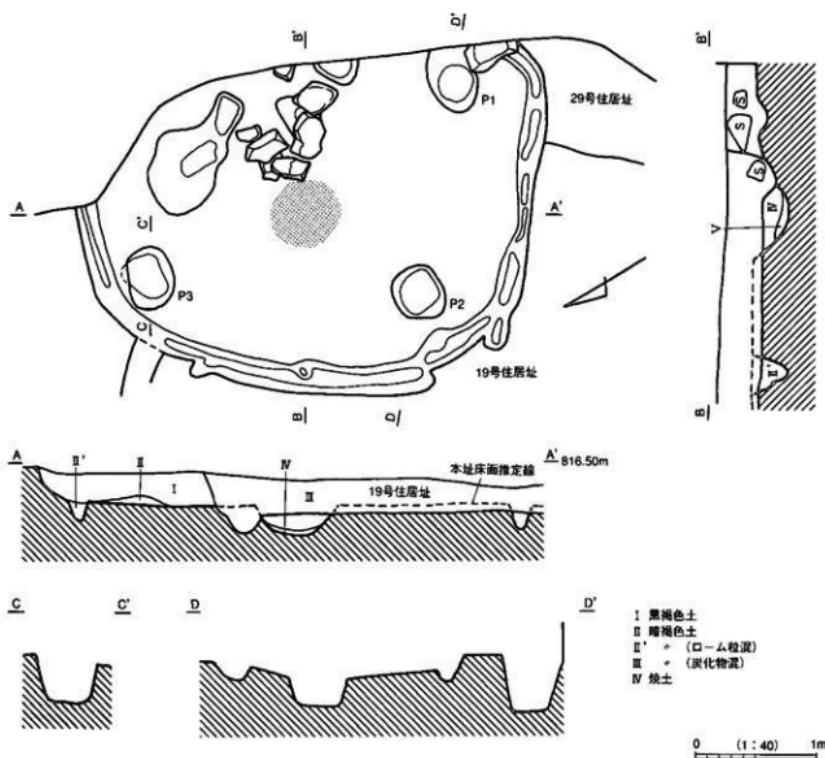
a 土器 1は波状口縁を呈するキャリバー形深鉢である。波頂下にX字状のモチーフが貼り付けられ、下端の連鎖状隆線とともに梢円区画文が形成している。内部には半截竹管による平行沈線間に三角押文が充填され、これは胴下半の区画内も同様である。隆線上は「ハ」字状刻列文が施され、織細で丁寧な意匠となっている。

2~7は口縁部・胴上半部の破片資料であり、指頭押圧や刻みを施した隆線によって重三角区画文を形成して、内部に三叉文や継位沈線を充填している。そのなかで、3はRL縄文が隆線上に施文された稀少な資料である。8は連鎖状隆線がめぐって、口縁部文様帶の下端区画となっている。9は太隆線による曲線文様がパネル状に描かれている。11・12は半截竹管による刺突文が、14~16は縄文が施された一群である。17は胴上半に刺突文がみられる土器であり、次段階に位置付けられようか。

以上の土器群は、井戸尻I式に比定されよう。

b 石器 1は両側縁に調整加工をもった小形の刃器である。

所属時期 第Ⅲ期 (小口)



第121図 第28号住居址

## 29 第29号住居址 (第123・124図)

**位置** 調査区東壁際に位置する。19号・28号住居址に切られる。

**規模・形状** 重複と後世の大きな搅乱もあって不明である。

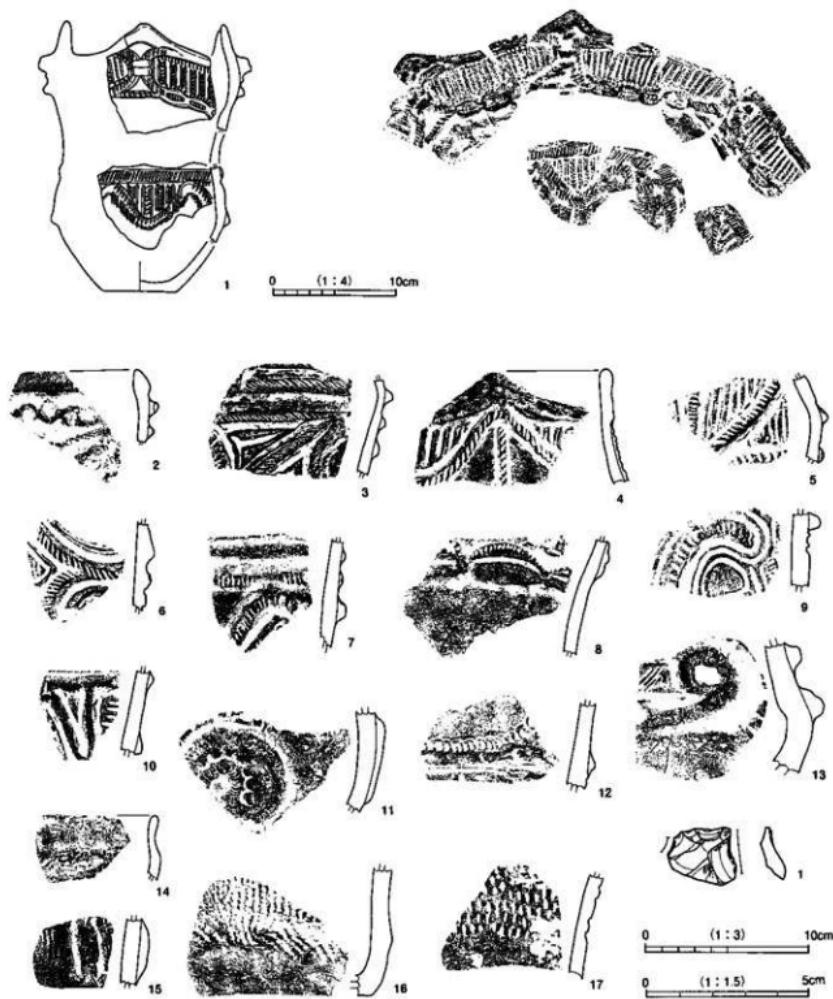
**検出・調査状況** 調査区東壁の土層観察で28号住居址南壁外側に周溝を認めた。更に19号住居址床面上に弧状に続く周溝底部も検出した。炉址・柱穴は確認できていないが一応住居址とした。

(今村)

## 遺物 (第124図)

**a 土器** 29号住は、19号住と重複関係にあり資料の混在が著しかったが、前葉期におけるものを一括掲載した。

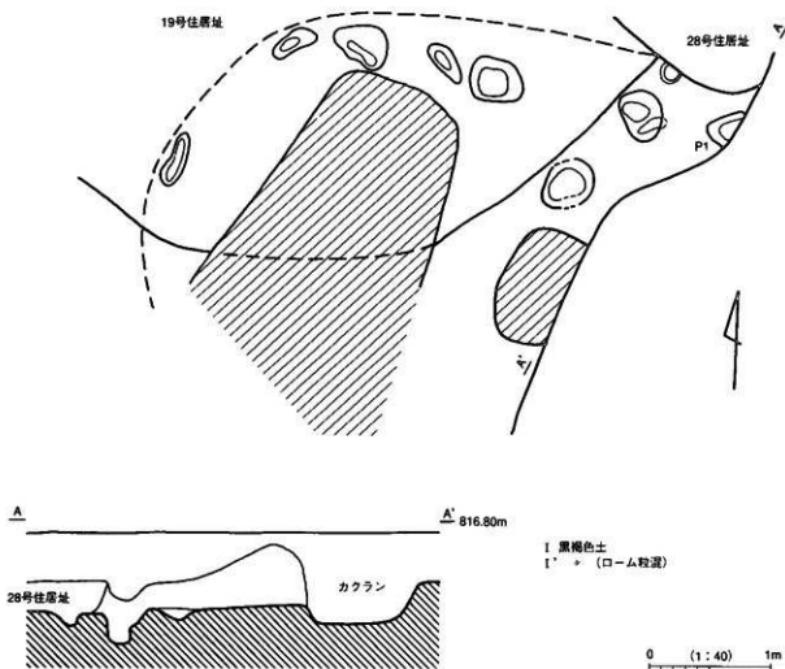
1・2・24-35は第I群1類に相当し、口縁部の半隆起線上に爪形文を、その下部に「蓮華文」を描き、さらに胴部において縦位の区内に細密沈線を充填する新崎式である。多くが暗褐色から黒褐色を呈し、雲母粒を含む。3~5はミミズ腫れ状の隆線に爪形文を施したもので、褐色を呈する。東海系の土器に帰属する可能性がある。6は三角印刻文を隆線上下に描いている。



第122図 第28号住居址出土土器（1～17）・石器（1）

10・11・13～18は第I群2類の沈線文系土器群であり、浅い縱位沈線や弧線文、さらに地文として縄文を有することを特徴としている。19～23は同4類に該当し、やや肥厚して内湾する口縁部に

横線・波状文や弧線文を描く。また、12は三角印刻文と細密沈線を描いたもので、比較的関東地方に多く分布する土器である。36は浅鉢であり、口縁部内面に爪形文がめぐっている。48・49も同様



第123図 第29号住居址

浅鉢であり、前者は口唇部に波状隆線が貼り付けられ、後者は口唇部に刻みを施し、交互突による波状文が施文される。

37・38は焼成が良好で、ミガキ整形が丁寧に行われる。爪形文による横線や縦位沈線を描いている。39・40は押引文が施される一群、44は三角状突起に格子目状の細沈線が描かれている。46・47胴部と底部に該当し、焼成が不良、沈線による弧線文が描かれる。

**所属時期 第Ⅰ期 (小口)**

### 30 第30号住居址 (第125図、図版22)

**位置** 調査区南壁西寄りに位置する。切り合はない。

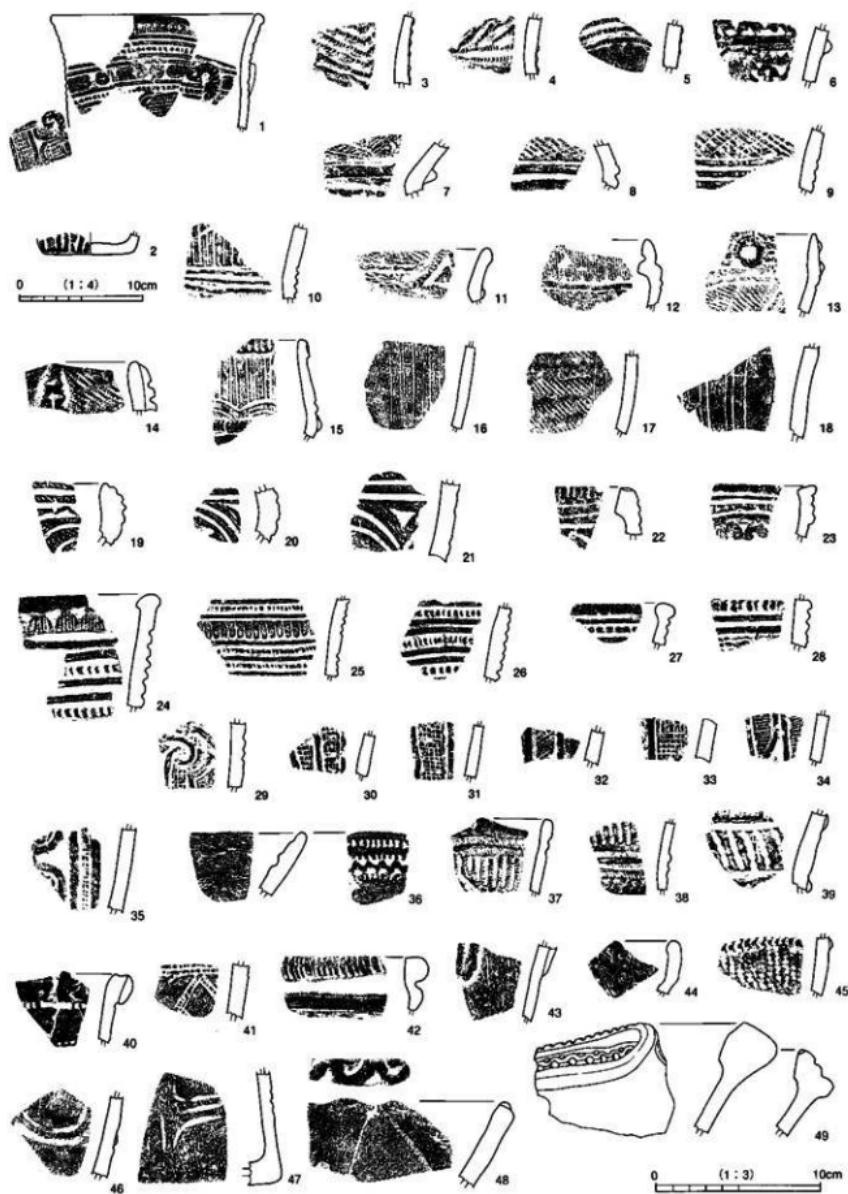
**規模・形状** 推定値であるが  $(4.2\text{m}) \times (3.4\text{m})$  の長円形か。

**検出・調査状況** 調査区南西部は、1号柱穴群とした小ビットが並んで検出されたが、これらとは並び方や大きさが異なるビットがあった。周辺を精査すると、被熱し赤く硬化した面を確認した。この地区は工事によって大きく削平されていることから、確認された遺構は住居址の柱穴と炉の底部の可能性があると判断した。

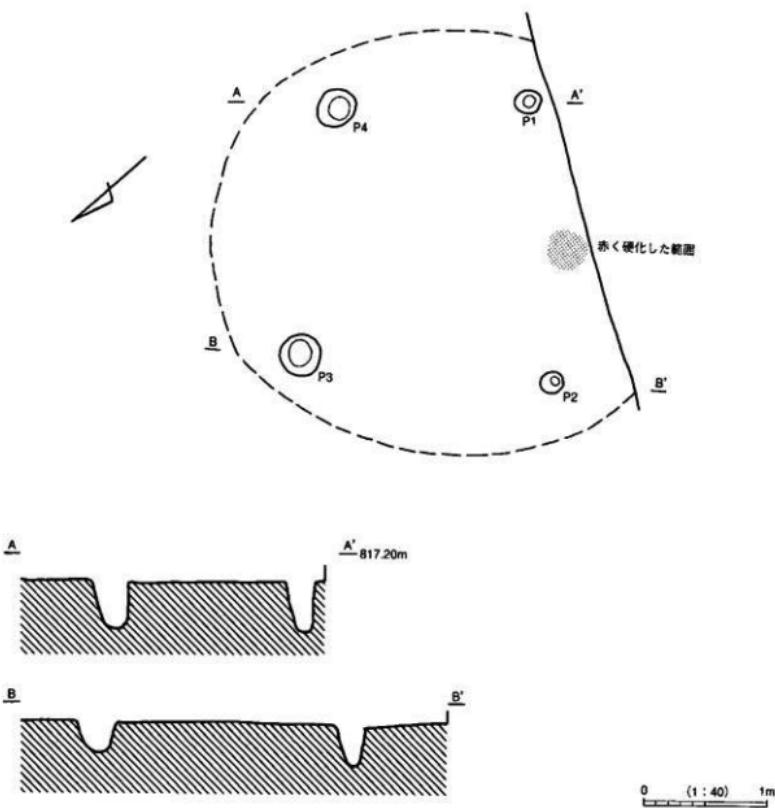
**柱穴** P1~P4が柱穴と思われる。深さはP1・41cm、P2・33cm、P3・39cm、P4・26cmを測る。

**炉址** 形態は不明である。住居址の中心でなく奥壁寄りに位置すると想定した。

**遺物** 出土していないため、所属時期は不



第124図 第29号住居址出土土器（1～49）



第125図 第30号住居址

明。

(今村)

遺物 埋甕が一点のみである。

(今村)

### 31 第31号住居址 (第126図)

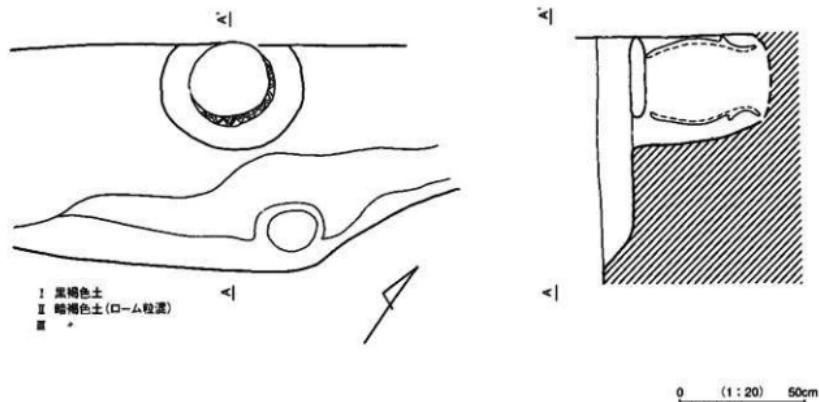
位置 調査区域外

規模・形状 不明である。

検出・調査状況 本址は、平成13年調査終了後に  
行われた美術館に付随する植栽工事中に発見され  
た。工事範囲は1.5m×1.5mと狭く、埋甕と住居  
址の壁の一部が確認されたのみである。従って遺  
構全体の形狀は不明である。

遺物 (第126図)

a 土器 埋甕が1点出土している。口縁部が、  
外反して頸部が括れる長胴形の深鉢であり、頸部  
に渦巻つなぎ弧文が展開することが最大の特徴で  
ある。胴部には4単位の腕骨文が垂下し、蛇行沈  
線や綾杉状沈線文が施文される。この類型は、地  
文に条線文を有するものが一般的に多く、塩尻市  
平出遺跡口号住、岡谷市長塚3号住、諏訪市穴場  
遺跡2住、茅野市棚畠遺跡11住、岐阜県丹生川村



岩垣内遺跡SB 6・SB17などで発見されている。

所属時期 第VI期 (小口)

### 32 中期前葉土器集中部

(第127・128図)

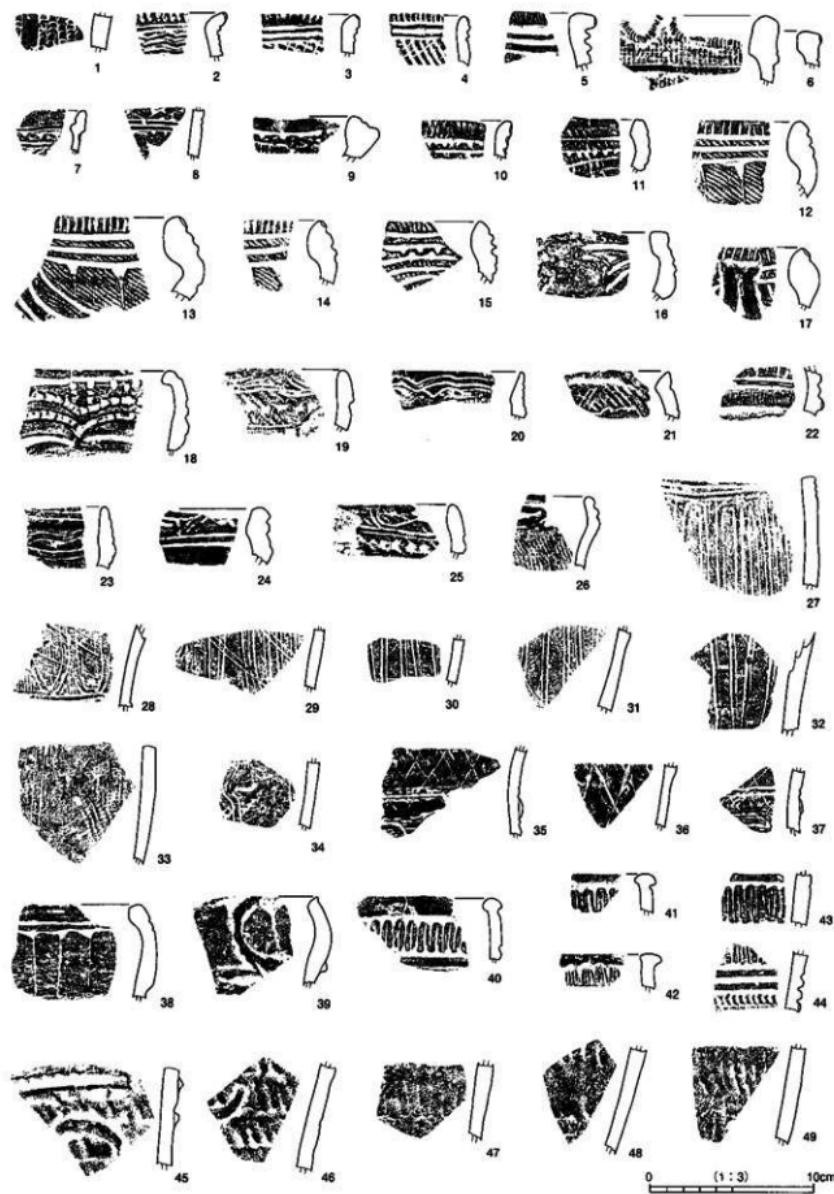
位置 調査区中央西より7・9・10号住居址付近。

規模・形状 不明である。

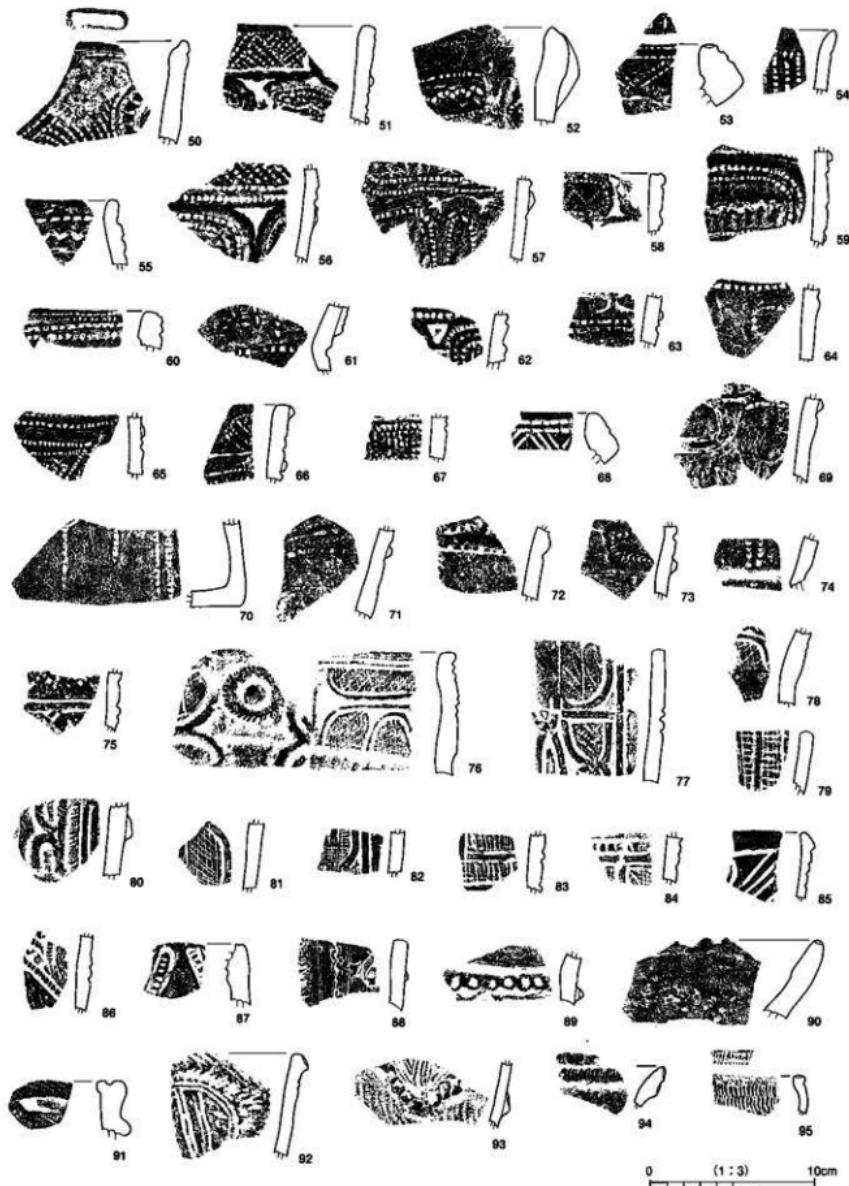
検出・調査状況 調査段階では黄色土ロームを掘り込む住居址は、7・9・10号住居址付近には他に検出されていない。しかし、遺物整理時に明らかに時期が異なる一群の土器が、この付近で出土している点を指摘された。7・9・10号住居址はいずれも中期後葉の住居址に位置付けられているが、これらの住居址覆土中に、中期前葉の土器がこれだけまとめて出土している点をどう考えるか検討を行った。その結果、一つの仮説として暗褐色土中に掘り込まれた中期前葉の住居址を、後に中期後葉の住居址が壊して作り、その際掘



第126図 第31号住居址と出土土器



第127図 純文中期前葉土器集中部出土土器 (1~49)



第128図 桶文中期前葉土器集中部出土土器 (50~95)

り出された中期前葉の土器が住居址埋没過程で覆土中に取り込まれた可能性が考えられる。(今村) 遺物(第127・128図)

**a 土器** 住居址と明確に断定できる遺構は見られなかったが、7・9・10号住居址にわたって出土した前葉期の資料をまとめた。

1は半截竹管による押引文を有している。2~10は第I群a種の沈線文系、11~17は同群4類a種である。前者は半隆起線文に爪形文を施し、斜沈線や波状沈線をえがいている。後者は、口唇部に刻みを入れ、弧線文やT字文、波状沈線などを描くことを特徴としている。19~27は2類の平出Ⅲ類A土器で、屈曲した口縁部に波状沈線・平行沈線をめぐらせ、頸部に縦位集合沈線・斜格子目文を描いている。38・39は内溝する口縁部にT字文や横円区画を有する一群、40~44は蓮華文を特徴とする1類の新崎式に比定されよう。45~49は指頭圧痕文を残す胸部破片であり、クランク文などが45・46で認められる。50~75は押引文が施された一群をまとめた。50は扇状の突起を有した口縁部破片、51・56・54・56~59は円筒形の器形で横帯区画文内に斜行押引文を充填する。

76~83は新崎式の胴部破片であり、B字文やバネル状区画内に細密沈線が施されている。90は波状口縁を有した浅鉢、92・93は器面の隆線上に刻みを入れ、縄文を施す特徴を持っている。94・95は爪形文を多用する土器であり、胎土が明褐色を呈している。東海系の北裏C式に比定されよう。  
所属時期 第I期。

(小口)

### 33 土坑・集石(第129~132図、図版23)

10次調査では、土坑・集石の検出は少なく、簡単にまとめておく。土坑は合計54基が調査区域内に散在している。強いて集中する地域をあげると、3・7号住居址の周辺ともいえるが、特記すべき状況ではない。ただ3・7号住居址西北側は住居址のない部分で、そこに10基前後がある点が目につく程度である。土坑の大きさは最も大きいもの

で径が1.5m、小は30m前後、深さも88mある土坑32を除くと、30~10cmである。形は円形が主で椭円や不整形があり、中に2つ連結する2例がある。掘り方は大半がしっかりしており、黒色土のみの1層が多いが、中に2層になるもの、土坑2のように細かく分層できる例もあった。土坑15・25は底面中央に逆茂木痕らしいビットがあるが深さなどからみて落し穴とはいえない。土坑内からの出土遺物は土器片が多く、土坑38・42の礫がつまる例もある。唯一20号住居址に切られた土坑51では底面中央の浅いビット内に焼土が検出されている。調査区域が住居址群内であったため、特記すべき土坑がなかったのだろう。

集石は2基ある。4号住居址東の集石1は、1.8×1.7mのほぼ円形で、深さ35cm前後のナベ底状の内部に30cm~10cm前後の河原石や礫數十ヶが充満していた。多少炭化粒などもあったが強く燃焼したという痕跡はない。7号住居址の東に接してある集石2は、105cm×100cmの円形で、しっかりした掘り込みではなく15cm前後の掘り込みだけの上部に20ヶほどの河原石と礫が平坦に置かれるようになっていた。ここも屋外炉的な状況はなかった。土坑・集石とも縄文中期以外の遺物が出土していないので、該期の遺構としてよい。

(樋口)

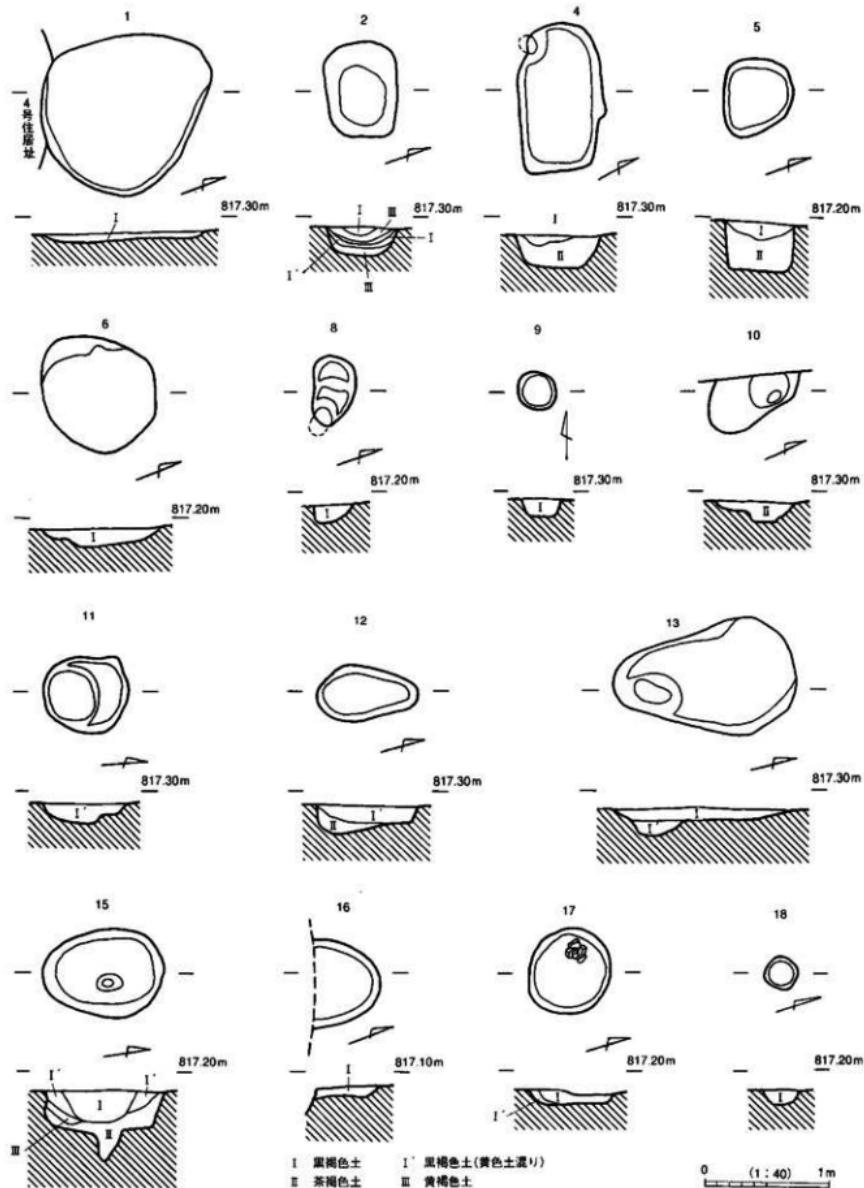
### 土坑出土遺物(第132図)

**土坑**(圖では「SK」とする) 1 1はB字状文、2は地文縄文に細沈線が施文されといふことから、それぞれ第I群2類、1類に該当しよう。3は指頭圧痕文から3類である。

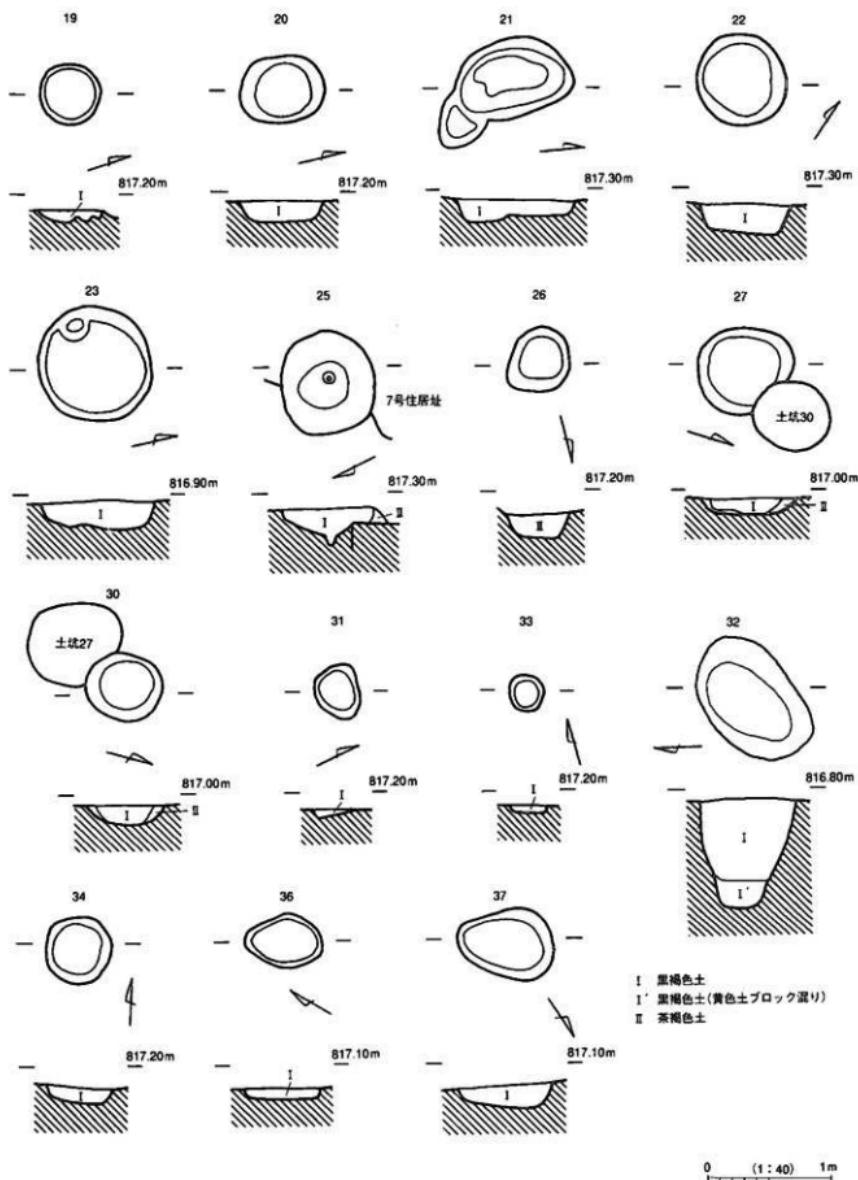
**土坑5** 1点のみ出土である。第I群1類と考えられる。

**土坑12** 1は外剥状の口縁部を有し、縦位沈線が施文される。2は縄文のみ施文。3はJ字状懸垂文に条線と刺突文が施されている。いずれも中期前葉に該当しよう。

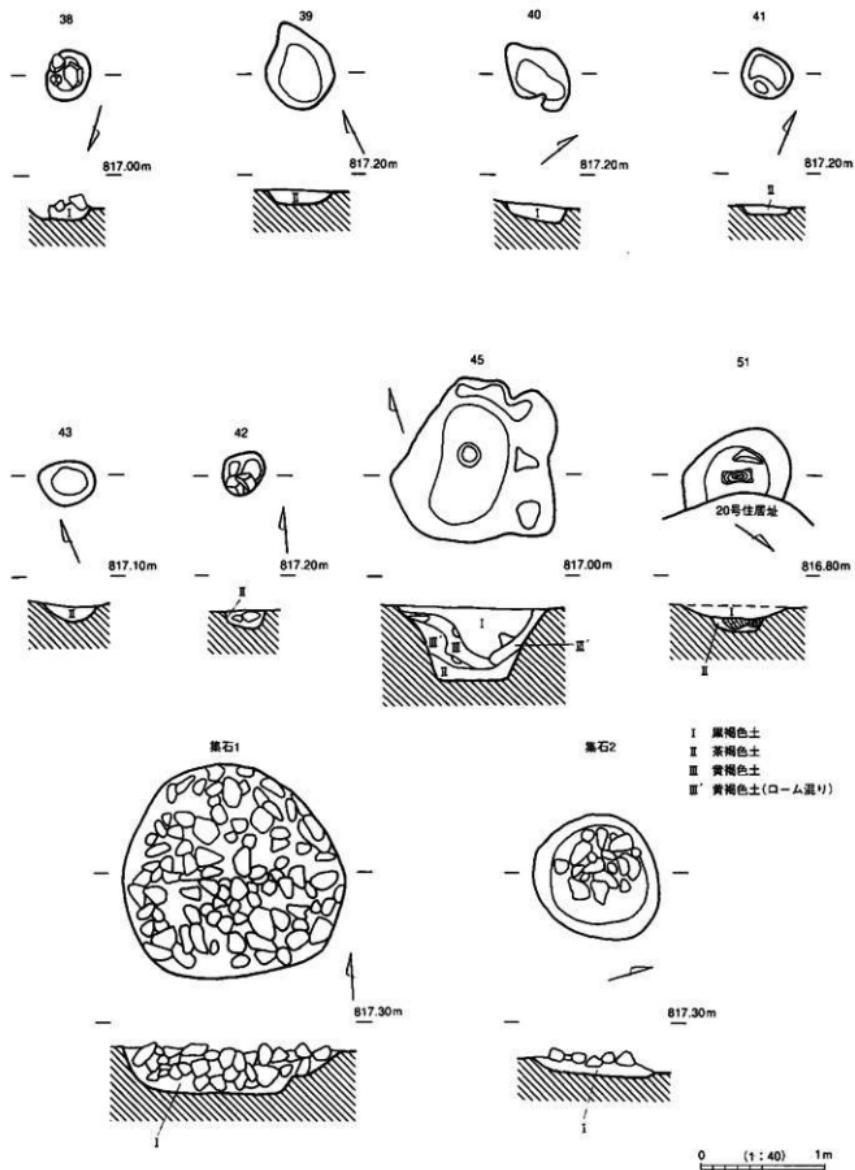
**土坑14** 2点のみ出土である。外反した口縁部に突起が付く1と薄手の器壁に縄文施文される2はいずれも中期前葉に位置付けられよう。



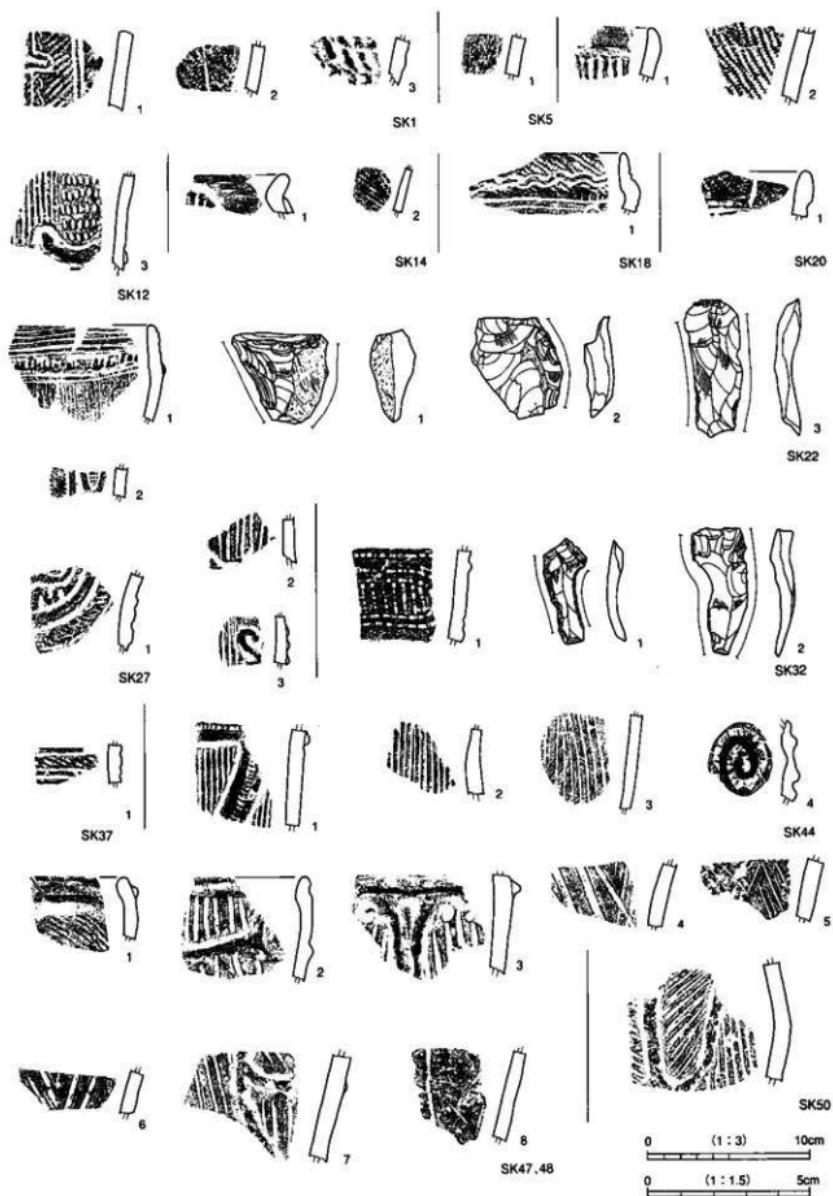
第129図 土坑 (1)



第130図 土坑 (2)



第131図 土坑（3）・集石



第132図 土坑内出土遺物

**土坑18** 1は口縁部に波状沈線がめぐって、その下部に集合沈線が施文される第Ⅰ群1類である。

**土坑20** 1は第Ⅰ群1類の平出第Ⅲ類A土器に比定されよう。

**土坑22** 1は第Ⅰ群1類、2は2類である。1～3は側縁部に調整加工施された小形刃器である。

**土坑27** 1は刻列隆線が弧線状に貼り付けられた井戸尻1式、2・3は胴部に条線文が施文されていることから梨久保B式もしくは曾利式であろう。

**土坑32** 1は楕円区画文内に角押文が施された前葉土器である。1・2は小形刃器。

**土坑37** 1は胴中位に帯状隆線が付いた中期前葉の土器である。

**土坑44** 1は楕円文土器、2・3は胴部に条線が引かれていることから4類に比定されようか。4は円形渦巻文内に押引文が充填されている。梨久保B式に比定されよう。

**土坑47・48** 1は緩やかに内湾する口縁に繩文施文がなされていることから第Ⅲ群4類、2～8は綾杉形上沈線文を有する同1類に位置付けられる。

**土坑50** 1はU字状区画文内部に斜沈線が充填されていることから第Ⅲ群1類に該当しよう。

(小口)

### 34 検出面（覆土）と出土遺物

調査域全面は書で畑地であったため、覆土中には土器・石器の破片が少なくなかった。一応調査中には下部の遺構（住居址）との所属関係をとらえるべく、比較的細かに分層発掘を行ったが、明確に遺構との関連を示す第Ⅱ・Ⅲ層中のものを除く大半が「検出面」出土として区分する状況であった。しかし遺物整理段階ではより厳密な分類・分析を行って、できるだけ遺構との関係を求めるよう作業を進めた。その結果、検出面出土であっても遺構に含めた例も少なくなかった。そこで「検出面」出土土器、土製品のうち主なものを以下紹介しておく。

(穂口)

### 検出面出土遺物（第133～135図、図版37）

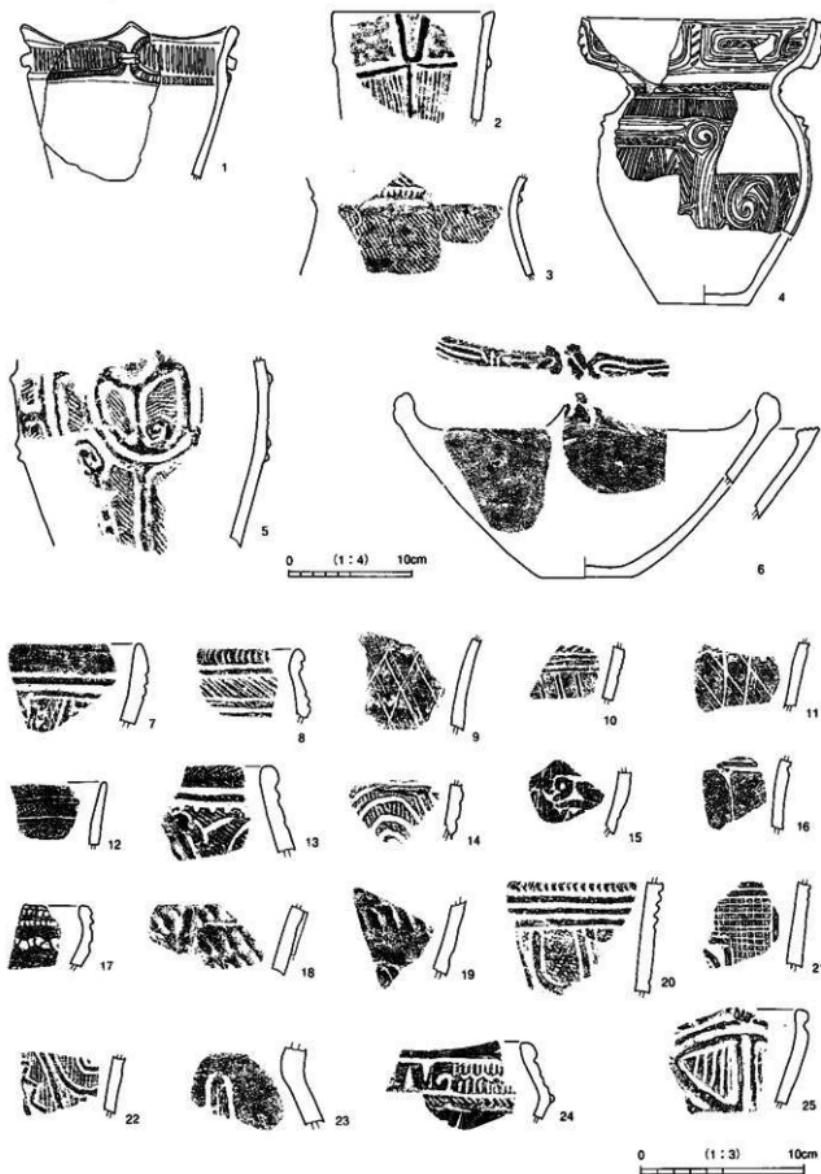
**a 土器** 検出面からは第Ⅰ～Ⅲ群土器が出土している。第Ⅰ群は7～23が該当し、全て破片資料である。7～12は1・4類土器に比定され、斜沈線や爪形文を施文している7・8、さらに弧線文や繩文施文を行っている13・14は後者に位置付けられる。指頭圧痕がみられる18・19は3類、小区画文内に細沈線が充填される20～22は2類である。

第Ⅱ群土器は1・2、24～28に該当する。1・24は1類の楕円文土器、26はいわゆる多喜窪タイプに比定されよう。27・28は口縁部に縦位沈線や褶曲文を施した3類である。2は無文口縁に条線文を胴部に施文している4類に位置付けられよう。

第Ⅲ群土器は1～4類が多く出土している。4・6・35～38は在地の主体型式である1類、5は大木9式、29～33は4類に比定される。同じ繩文系土器でも3は伊那谷に多くみられる類型であり、下膨れの胴部に地文繩文と蛇行沈線文が施文されている。さらに34は無文口縁下に1条の微隆起線がめぐって、胴部に逆U字状の沈線区画を施文していることから、今次調査では最も新しい時期である加曾利E4式と考えられる。39・40は3類、41は北陸系土器であろうか。42～45は1類の把手である。

46～47はミニチュア土器である。46は口縁部が欠損しているが、縦位に隆線が貼り付けられていることから、井戸尻Ⅲ式から梨久保B式に伴うものと思われる。胴下半は整形時の指頭圧痕が観察される。47は手づくね土器であり、中心部に指を差し入れ成形している。口唇部から縦位の沈線が垂下し、その中段で2条の横位沈線が引かれる。後葉期に位置付けられようか。

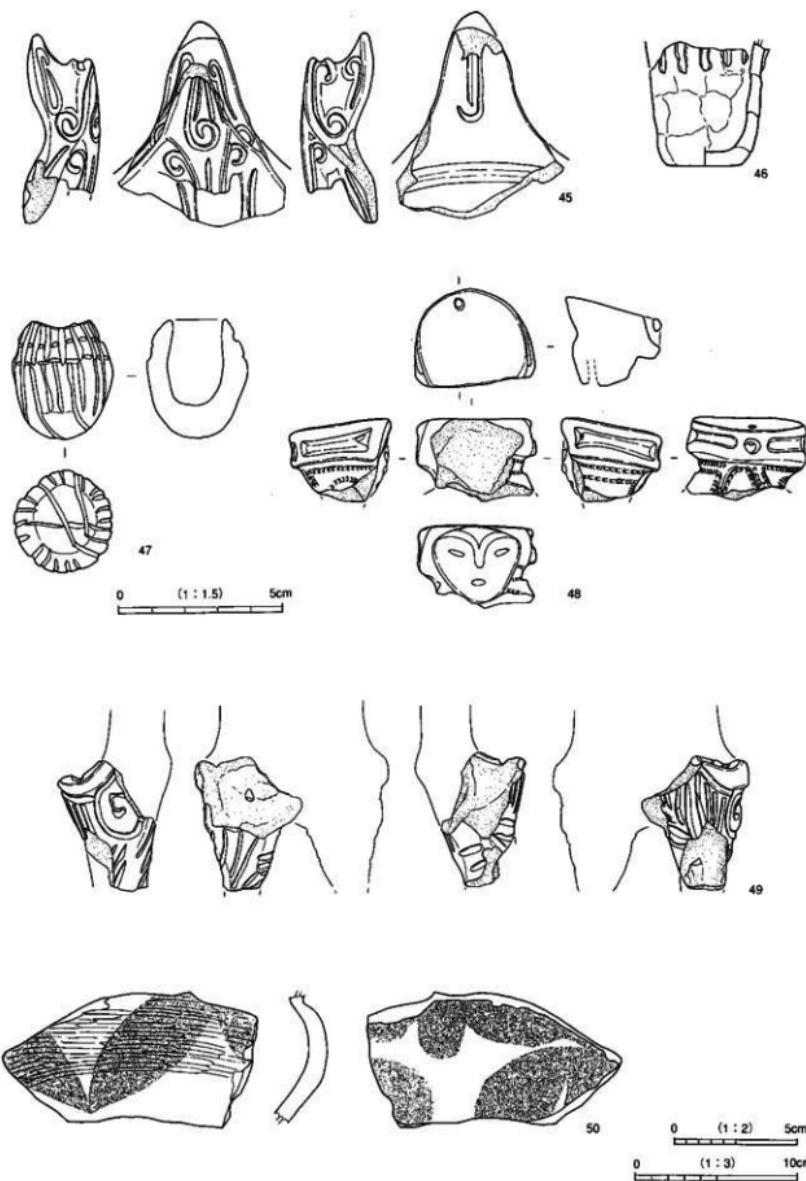
48～49は土偶であり、いずれも欠損品である。48は円盤状の頭部を呈し、側面に凹線がみられる。また、後頭部には上下に貫通穴が穿たれ、頸後部には、角押文がめぐっていることから、前葉から中葉前半期の河童型土偶に比定されよう。残念な



第133図 検出面出土土器 (1~25)



第134図 検出面出土土器 (26~44)



第135図 検出面出土土器 (45~47)・土偶 (48・49)・赤色塗彩土器 (50)

がら、顔面が剥離してしまっているが、実測図下段は顔面の想定復元図である。

49は脣部が張り出した後葉期の出尻土偶の片脚である。側面には渦巻文、表裏面には縦位沈線が描かれている。破損面には煤が付着した貫通孔が確認されることから、各部位に製作されたものが串のようなもので接合されたと考えられる。

50は赤彩された浅鉢の破片であり、外反する口縁部の下部に該当しよう。外面は丁寧なミガキ整形がなされ、連結した木の葉文（雲形文？）が赤色で描かれている。内面もミガキ整形がなされ弧線のモチーフが同じ赤色で描かれた稀少な資料である。

明らかに浅鉢の器内外面に曲線による文様を描出したことは間違いない。注意深く洗ったが明瞭に朱色が残り、一部に黒色とも思える部分があるが、確定しがたい。顔料の科学的分析はしていない

いが、漆類を加えた原料を使用していると思われる。これだけでは時期の細分はむずかしい。

わずか1片のみであるが、この土器片発見の報を早速県下の数名に知らせ類例の教示を求めたが得られず、県下で初見らしいとの感触を得た。しかし、たまたま松本市教委の田多井氏から銚子市栗島台遺跡で大量の同時期資料が出土しているとの報を得て帰宅したところ、奇しくもその報告書が銚子市在住の伊藤睦憲氏から贈られていた。奇遇というべきだった。いずれにしろ今後塗彩物質の分析なども行いたい。なお、この土器片が出土した下層にある6号住居址からは多量の遺物が出土し、とくに類例の少ない有孔鈎付土器（第26図21）や人面付把手（第29図47）など、他住居址と異なる土器を出土して、本例の存在も何らかの関連を考えてよいかも知れない。（桶口・小口）

#### 第4節 時期不明の小ピット群

今回の調査ではほとんど縄文時代の遺構・遺物に限られたが、遺構で1ヶ所だけ小ピット群が検出されているので触れておきたい（第4・5図）。

段丘崖に沿う農道に平行するように調査区の南側北半部に東西方向に複数列で並んでいる。多分調査区域外ににも広がると思うが、検出した部分は、東西に約20m、南北で最大幅は約3m前後の範囲となる。ピット数は約40ヶ、最大で径・深さともに10数cm、最少5cm前後で、大半がローム面に及んでいるが掘り方はあまり明確でない。この小ピット群のある一帯は覆土が浅く、かつ農道造成時や耕作に

よって多少表土が動かされたらしいが、ローム面までは調査区全体で最も浅い部分に当たる。当初



第136図 時期不明のピット群（東から）

は2~3列の構列を想定していたが、直線的に並ぶ列もあるが、全体を通すと規則的とはいえない。6・15号住と16号住の間や30号住の中心を横切る列は、比較的ピット間の距離が30cm前後と揃っているが、他はほとんど不規則である。ピット中の埋土は黒土層のみで縄文時代より新しいことは間違いない。伴出遺物もなく時期を限定できない。

ただ、古老の話によれば、段丘崖に沿う現農道

はかつては幅1mにも満たない小道で、今回の調査区へは低い土堤状の高みをよじ登って遊んだという。そのため段丘崖に沿って低い猪土堤のような高みが続いていたらしい。現農道を作る時にその土堤状の高みは削平したという。当初構列と考えた理由もそこにある。今後段丘崖に沿う調査時に再検討したい。

(樋口)

## 引用・参考文献

- 会田 進ほか 1971 『長塚遺跡』 岩谷市教育委員会
- 上原真昭ほか 2000 『岩塙内遺跡』 鈴鹿市文化財保護センター
- 鷹飼幸雄 1977 『平出第三類A土器の編年の位置付けと社会的背景』『信濃』29-4 信濃史学会
- 大場磐雄ほか 1955 『平出一長野県宗賀村古代集落遺跡の総合研究』朝日新聞社
- 小口連志ほか 1994 『峯畠遺跡発掘調査報告書』 塩尻市教育委員会
- 金子直行 2001 「2 加曾利E式成立期における土器群の再検討」「まま上遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 神村 透 1978 「結節縄文をつけた一群の土器」「長野県の考古学」 長野県考古学会
- 1984 「下伊那性を示す有脚尻張り立像土偶」「中部高地の考古学」Ⅲ 長野県考古学会
- 1996 「波状口縁柳形文土器を追う」「長野県の考古学 鈴鹿長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ」 鈴鹿長野県埋蔵文化財センター
- 鶴原功一 1993 「曾利I式土器の再検討—山梨県大泉村姥神遺跡の資料をもとに—」「縄文時代」4 縄文時代文化研究会
- 小松 学ほか 2002 『剣ノ宮遺跡』 塩尻市教育委員会
- 新谷和孝 1993 「松本平における縄文時代中期後半の土偶の変遷」「平出遺跡考古博物館歴史民俗資料館紀要」10 塩尻市博物館
- 高見俊樹ほか 1983 『穴場I—長野県諏訪市穴場遺跡第5次発掘調査報告書—』 諏訪市教育委員会
- 箕子市教育委員会 2000 『栗島台遺跡』
- 寺内隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」「下総考古学」7 下総考古学研究会
- 十日町市教育委員会 1998 『笹山遺跡発掘調査報告書』
- 戸田哲也 1995 「中野山越A2類土器論」「先史考古学研究」5 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 宮坂光昭ほか 1990 『棚畠遺跡』 茅野市教育委員会
- 増子康眞 1998 「東海地方縄文中期前半土器群の研究史と課題—北屋敷I式から「北屋敷II式土器へ—」「縄文時代中期前半の東海系土器群」静岡県考古学シンポジウム実行委員会
- 松井一明 1998 「静岡県中西部の中期前半東海系土器(1)一大畑C式土器とその前後—」「縄文時代中期前半の東海系土器群」静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
- 松本市教育委員会 1991 『南中島遺跡』
- 1993 『山影遺跡』
- 1998 『小池・一ツ家遺跡』
- 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」「長野県考古学会誌」51 長野県考古学会
- 1987 「梨久保式土器再考」「長野県埋蔵文化財センター紀要」1
- 1996 「花上寺遺跡における縄文時代中期後半の土器様相—特に梨久保B式土器の組成に関する考

- 察を中心として—』『花上寺遺跡—中部山岳地帯の繩文・平安時代集落址—』岡谷市教育委員会
- 水沢教子 1996 「大木8b式の変容(上)」「長野県の考古学」(第長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ)
- 森崎 稔福 1991 「筑造跡—北信濃中央山地における繩文中期集落址の研究」小川村教育委員会
- 山形真理子 1989 「曾利式土器の研究(下)」「東京大学考古学研究室紀要」15
- 米田明訓 1980 「南信天竜川沿岸における繩文時代中期後半の土器編年—所謂『唐草文土器』を中心として—」『甲斐考古』17-1 山梨県考古学会
- 綿田弘実 1983 「北信濃地方における繩文中期後葉より後期初頭の土着土器」「須高」17 須高郷土史研究会
- 1988 「北信濃における繩文中期後葉土器群の概観」「長野県埋蔵文化財センター紀要」2

第1表 土坑一覧表

土坑 No.	図No.	平 面 形	規 模 (cm) 長軸×短軸×深さ	備 考	土坑 No.	図No.	平 面 形	規 模 (cm) 長軸×短軸×深さ	備 考
1	129	不整円形	140×130×5	4号住居址を 切る	28	—			欠番
2	◆	隅丸長方形	78×60×26		29	—			欠番
3	—	隅丸長方形	71×44×11		30	130	円形	60×56×14	土坑27を切る
4	129	不整隅丸長方形	120×70×28		31	◆	稍円形	42×36×6	
5	—	椭円形	60×56×38	4号住居址内	32	◆	隅丸長方形	110×70×88	10号住居址を 切る
6	129	不整円形	100×94×14		33	◆	円形	29×29×6	
7				欠番	34	◆	円形	57×54×12	
8	129	不整長円形	58×32×30		35	—	不整円形	37×34×10	
9	◆	円形	30×29×15		36	130	椭円形	62×44×8	
10	◆	不整長円形	(94)×40×17	区域外にかかる	37	◆	不整長円形	80×60×21	
11	◆	隅丸方形	66×60×16		38	◆	円形	38×34×14	
12	◆	長円形	81×42×22		39	◆	不整円形	70×56×11	
13	◆	不整隅丸長方形	150×88×24		40	◆	不整長円形	66×40×14	
14	—			欠番	41	◆	不整円形	40×36×8	
15	129	隅丸長方形	98×72×58		42	◆	円形	33×32×16	
16	◆	円形か	(104)×40×10	カクランに切 られる	43	◆	円形	46×38×13	
17	◆	円形	70×70×12		44	—	不整長方形	80×40×44	
18	◆	円形	28×26×12		45	130	不整形	132×120×57	
19	130	円形	50×48×9		46				欠番
20	◆	隅丸方形	69×56×17		47	—	円形か	46×44×46	
21	◆	不整隅丸長方形	120×63×17		48	—	円形	90×88×69	
22	◆	円形	64×62×24		49	—	不整長円形	164×120×62	
23	◆	円形	94×90×22	15号住居址を 切る	50	—	円形	68×60×25	
24	—	隅丸長方形	102×82×32		51	130	隅丸方形か	88×(80)×22	20号住居址に 切られる
25	130	円形	80×74×31	7号住居址を 切る	52	—	長円形	64×54×15	
26	◆	隅丸方形	52×53×21		53	—	不整円形	58×56×25	
27	◆	不整円形	80×70×10	土坑30に切ら れる	54	—	円形か	56×54×24	区域外にかかる
					55	—	不整円形		17号住居址を 切る



## 第Ⅳ章 調査成果の分析研究 —松本平西山山麓における縄文中期文化の研究—

### 第1節 2号住出土土器の型式学的検討 —松本盆地における中期前葉期の様相—

小口 英一郎

#### はじめに

2号住から出土した土器群は、その特徴から中期前葉から中葉への過渡期に位置付けられる良好な一括資料である。一方で、当該期は前期後半以来の広範囲にわたる安定的な諸系統が大きく崩れ、中葉期の広域的な土器群の再編へ向う流動的な時期でもあり、本住居出土土器のあり方もそれを裏付けている。

当該期の土器群については、本県において八ヶ岳西南麓から諏訪盆地の資料を中心とした先行研究（数野1984、寺内1987・1988、三上1987）によって整理されてきたが、その実態は本住居が示すように単純ではなく、また近年の北信地域の成果（寺内2000）によって県内の地域的特性が明らかになりつつある。とくに熊保遺跡はその地理的状況からそれまでの関東地方の繋がりに加え、北陸・越後地方や東海地方の当該期土器群との関連の中で考える必要がある。本稿では、その基礎作業として第Ⅲ章1節で示した分類を基準として、各個体資料の系統別の諸属性および前後関係の検討を行うとともに松本平における当該期土器群の様相を明らかにすることで、地域単位としての編年案を提示したい。

#### 1 2号住出土土器の構成と生成過程

先述したように、第Ⅰ群土器は以下のように分類が可能である。

1類：平行沈線を多用し、平出第Ⅲ類土器に比

定されるもの。

a類：地文に縄文を有する。

b類：地文の無いもの。

2類：B字文・パネル状文様など半截竹管工具によってモチーフが描かれるもの。

3類：指頭圧痕文を有する一群。

4類：横帯区画文が多段化し、区画内に波状沈線や斜行沈線、刺突文が施される。

5類：口縁部が肥厚し、縄文が施された一群。

##### (1) 文様帶構成とモチーフ

1類は中期前葉五領ヶ台式（梨久保式）を構成する沈線文土器からの変遷が明らかにされている（三上1987）。器形は、口縁部が「く」の字状に屈曲して立ち上がり、頸部で括れるいわゆるキャリバー形を呈する。文様帶構成は、口縁部・頸部・体部の3帯からなり、口縁部には4単位の継位隆線が貼り付けられ波状口縁を呈するものが多い。モチーフは半截竹管による平行沈線もしくは波状沈線がめぐるが、地文に縄文が施されるものと（a種）、無いもの（b種）に分かれる。頸部は継位の平行沈線と斜格子目文の2者が認められる。

体部文様帶は地文縄文上に平行沈線・弧線状沈線が垂下している。そして、頸部文様帶との境に橢円区画文を施す。

いずれのモチーフも半截竹管工具と縄文原体によって施された非常にシンプル装饰であることが特色であり、前期以来の伝統を強く残したものと指摘できよう。

2類は新崎式もしくはその影響を受けたものに

についてまとめている。とくに第Ⅲ章第9図2・3は後後に位置付けられるが、その構成は単純ではない。

2は口縁部が肥厚し頸部に平行沈線がめぐって胴部との境に1類と同じ楕円区画文が施される。口縁部が肥厚し、楕円モチーフを有する点は1類に近いが、一方で頸部の半隆起平行沈線や胴部のパネル状文の構成は新崎式の影響を強く受けたものであろう。

3は肥厚した口縁部を有し、頸部がやや括れた短胴形の深鉢である。口縁部は無文であり、頸部に一条の押引文を施した隆線がめぐる。また、胴部には逆U字状区画文が展開し、その内部に同心円文や弧線文（B字状文）などが充填されている。この胴部の区画文は連結していることが注意され、隣接する隆線が継に併走してU字状を呈している部分と両者が合流してY字状になっている部分が観察される。このY字状部分の存在から、区画文自体は当該地域における前型式のY字状懸垂文が変形した名残と考えられ、北陸方面と当該地域の諸要素が組み合わさった類型であることが想定される。いずれにしても2、3は当該地域に求められる既存の型式には比定されないものとして注目される。

3類は指頭圧痕の地文を有することをまとめたが、下記の細分が可能である。

a種：角押文を有する一群（9・13）＝貉沢式

b-(1)種：Y字状文やヘラ沈線によるモチーフがみられるいわゆる「大石式（大石タイプ）」（今村1985、小林1995）と呼ばれる一群（10・11・14）

b-(2)種：指頭圧痕とクランク文のみの一群

（12）

a種の9は胴上半が「く」の字状に屈折して、口縁部文様帶が2段の横帯区画文構成となっている。上段には1単位の把手が付き頂部に渦巻文が描かれる。区画内には波状押引文、下段には区画に沿って押引文が充填される。13も大形の胴張り

深鉢形土器であり、口縁部は欠損しているが「く」字状に屈曲して押引文が横走している。胴上半に楕円区画文が描かれ、いわゆるクランク文が垂下している。この楕円区画文内に角押文がみられないことから貉沢式の範疇に入るか戸惑うが、頸部に施される角押文の存在から、この類型に含めた。

b-(1)種の10は左右非対称の突起を有し、口縁部下に幅広の押引文が横走している。そして、その下段にはヘラ沈線によるY字状文が描かれる。11も同様に1単位の球状突起が貼り付けられ、ヘラ沈線によるY字状文が施される。14も簡形の器形を呈し、やや開いた口縁部にヘラ沈線が垂下している。この一群は胴部における指頭圧痕文を除き、今村啓爾氏の大石式、小林謙一氏の大石タイプに該当し、横帯区画文や角押文が未発達であることからa種に比べやや古相を帯びている。胴部の指頭圧痕文の多様化は松本盆地の地域的特性といえるかもしれない。

b-(2)種の12は口唇部が外剥状を呈し、頸部に横帯区画文が微隆起線によって描かれているが、角押文はみられず、b-(1)種と同時期と考えられよう。

4類は横帯楕円区画が多段化し、区画内に平行沈線や波状沈線を充填している（第Ⅲ章第12図15）。また、沈線の下端に連続的に刻みを施し、いわゆる角押文が施されない点などは佐久地方にみられる斜行沈線文土器（寺内 1996）との繋がりを類推させる。

5類は8のみである。口縁部は肥厚し、波状縁となっている。口縁部と胴部ともに縄文施文がなされ、胴部に「L」字状のモチーフが認められる。このモチーフは断面三角状を呈し、隆線上に半截竹管工具による刺突がなされている。また、モチーフの周囲には半截竹管のハラ側によって弧線文等が描かれる。このような特徴を備えた土器については、当該地域では類例が少ないようである。ただし、あえて類例を求めるならば、東海地方の

山田平遺跡において肥厚した口縁で縄文を施す一群が散見される（山下1998）。また、この器形に近いもので、肥厚した口縁部に角押文が施された56・57がある。波状口縁下に円形刺突文を有した土器として西日本の船元Ⅰ式と呼ばれる一群が挙げられるが、本例はそれらの模倣・変容形態といえるかもしれない。

以上の土器群の中から、時期的細分の指標となる3類・5類の型式学的特徴についてまとめると、①ヘラ沈線によるY字文を有し、胴部にクランク文が垂下する3類b種、②角押文・横帶捺円区画文とクランク文が垂下する3類a種、③横帶捺円区画文が多段化し、区画内に波状沈線と沈線下端に刻みを施す4類があり、①は角押文と横帶捺円区画文が未発達であることから古相を帯びることが指摘できよう。したがって、2号住出土土器群は古段階と新段階の2段階区分が可能である。

そこで、次にこれらの土器群を地域別に集成し、当該期における地域的様相を概観したうえで、編年的位置付けについて検討を行いたい。

## 2 松本・諏訪・八ヶ岳山麓・甲府盆地の様相

当該期における良好な一括資料が得られている遺跡を4つの地域（松本盆地・諏訪盆地・八ヶ岳山麓・甲府盆地）から概観したい（表1）。

### ＜松本盆地の様相＞（図1～3）

松本盆地には大きく東山山麓と西山山麓において遺跡が密集するが、これに加え盆地北端・南端に位置する遺跡も注目される。

松本盆地北端に位置する松本市塩辛遺跡、同市矢作遺跡では当該期資料が各系統別に一括資料として出土している。塩辛遺跡41号住（1～4）からは新崎式が1個体出土している（1）。そして、これに伴い指頭圧痕を有し、横帶区画文とクランク文が組み合わさる2、さらに押引文が施された浅鉢（4）が検出している。矢作遺跡5号住（5～10）からは、胴部に輪積痕を残す1類土器の5、さらに斜行沈線文土器である9、角押文を特徴と

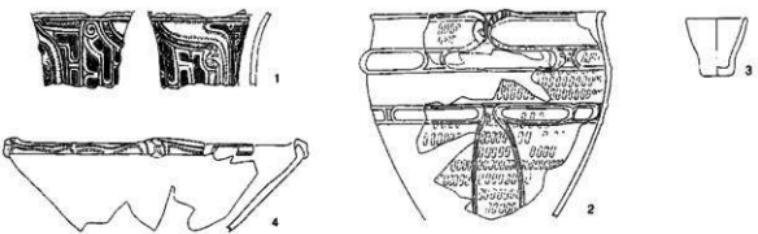
する8・10があり、8は口縁部に重三角文が形成されていることからやや新相を帯びている。6は隆線上の爪形文や半肉彫による波状文や円形文などの文様から北陸系新崎Ⅱ式（加藤1995）に比定されよう。

次に東山山麓をみていく。松本市一つ家遺跡66号住（11～16）からは、1類と4類が良好な一括資料として検出されている。11・12は1類平出ⅢA土器であり、13はその変容形態であろう。14は3類指頭圧痕文土器、15はラッパ形の器形に横帶区画文を形成し、角押文と波状沈線が施された4類に比定される。4類の存在から新段階に位置付けられる。

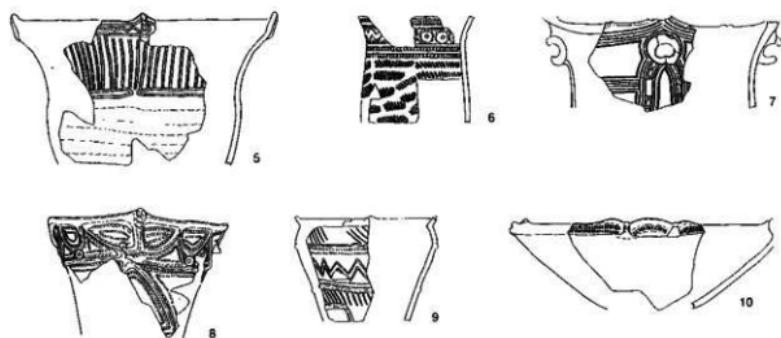
塩尻市堂の前遺跡11号住（17～23）からは17～19の1類、口縁部に棒状貼付文を有し、継位の押引文を施す21、斜行沈線文を特色とする20、さらに押引文が口縁部に施された浅鉢22・23がみられる。18の平出ⅢA土器の口縁部には上下からの交互刺突文が施文されるが、この文様手法は前型式から継承されたものであろう。

寺内隆夫氏によって同市塩原遺跡103号住資料が紹介されている（寺内1988）。その内容は非常に興味深いものとなっている（24～31）。1類は2点出土し、口縁部に交互刺突文を2条施文する24、さらに押引によって波状沈線を描出す25は本類型の中でも珍しい資料である。その他、円筒形を呈し、口縁部に蓮華文、胴部にB字文を施文した26は北陸系新崎式が在地型式と組み合わさり変容したものであろう。28～30は角押文が施文された3類a種、31は文様帶構成が平出ⅢAと共通しながら、胴部が縄文施文のみの大形深鉢である。以上の土器群の組成のあり方から、2号住新段階に平行するものと思われる。

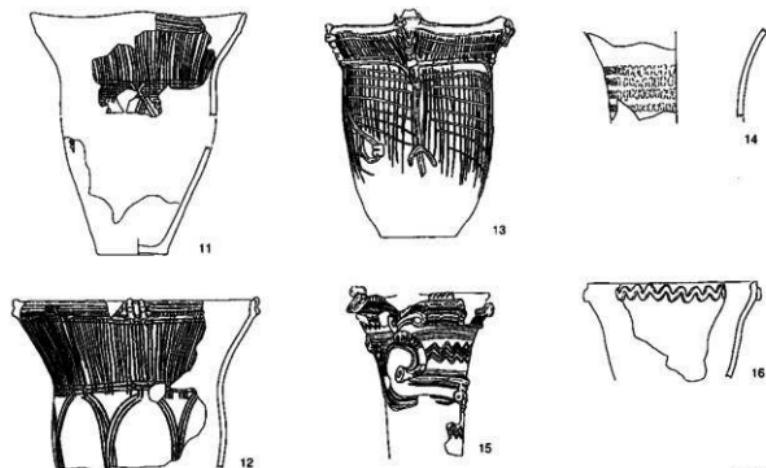
松本盆地南端に位置する塩尻市平出遺跡J-24号住（32～34）からは、1類の33、3類の32、さらに4類に比定される34が出土している。33の平出ⅢA土器は地文縄文がみられず、熊久保2号住5に共通している。32は口縁部に基点となる渦巻モ



塙幸41号住

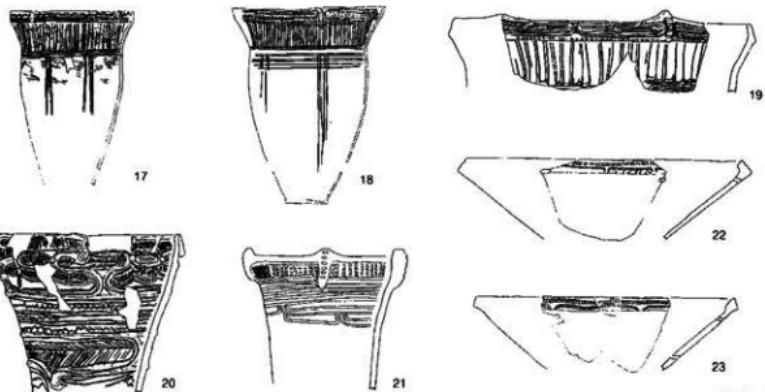


矢作5号住

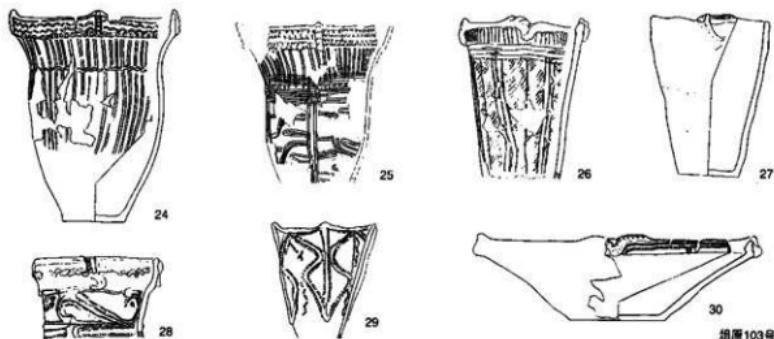


一ツ家56号住

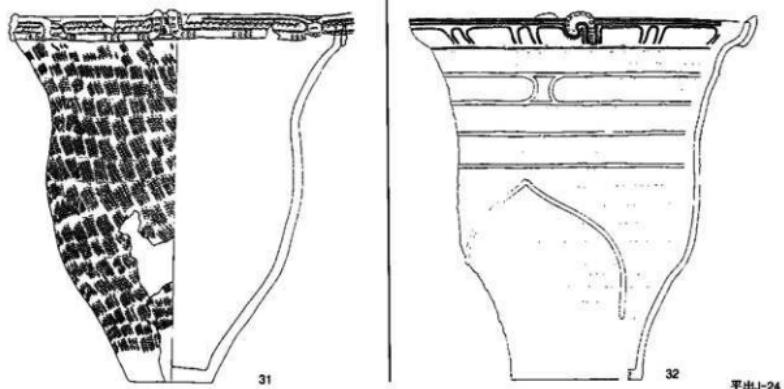
図1 松本盆地出土土器 (S=1/8)



宮の前11号住



組原103号住



平出J-24

図2 松本盆地出土土器 (S=1/8)

チーフを貼付し、逆U字状押引文が施文される。胴部には1帯の楕円区画文が形成され、さらにその下段に2条の隆線が横走する。34は幅狭な楕円区画を形成し、沈線が充填される斜行沈線文土器であり新段階として捉えられよう。

西山山麓では、山形村殿村遺跡6・39号住から当該期資料が得られている(35~42)。6号住からは1類の36、さらに横帯楕円区画文を形成する円筒形の37、さらに有孔鉗付土器の38が出土している。36の胴部文様はB字文が懸垂文とともに描かれている。39号住ではやや古手の結節縄文を有する39が注目される。先端が割れた波状口縁を有し、押引による横線や縱位短沈線が口縁部に施文されている。40は横帯楕円区画が多段化し、区画内には沈線下端に入れる刺突文や波状文がみられることがから4類に該当しよう。41は平出ⅢAである。さらに造構外ではあるが、3類に該当する35は口縁部に交互刺突が施され、ヘラ沈線によるY字文、角押文による渦巻文などが描かれている。胴部には幅狭な楕円区画とクランク文が垂下している。これは、大石タイプの範疇に入るものとして捉えることができよう。

#### <諏訪盆地の様相> (図3~5)

岡谷市花上寺33号住(43~47)は、五領ヶ台Ⅱ式の最終段階に帰属する37号住と重複して当該期土器が出土している。43は1類の平出ⅢA土器である。口縁部には棒状貼付文が貼付され、その間隙に平行沈線がめぐっている。胴中位に楕円区画文が簡略化した平行沈線がめぐって上下に分帯を行い、上半には縦位沈線、下半には逆U字文が細沈線で描かれている。

これに伴って波状沈線とクランク文が懸垂する44がある。観察項目には整形として指頭圧痕が残存しているとあるが、波状文の存在から4類に該当する。45は口縁部に交互刺突文がめぐり、幅狭な横帯楕円区画文が4段重疊している。区画内には波状沈線や刺突文が充填され、さらに胴部には懸垂文がみられ、その間隙にB字文や波状沈線が描

かれている。横帯区画文の形成や胴部のモチーフなどから2類と4類の折衷タイプといえよう。46~47は浅鉢であり、内折した口縁部に角押文による逆U字文が施文されている。

岡谷市梨久保遺跡では、当該期に帰属する14・113・117号住出土土器をみていく。14号住覆土上部からは大量の土器が出土しているが、その時期幅も長く、ここではその前後のものを除外した。55は1類の平出ⅢA土器である。この変形タイプとして56があり、口縁部文様帶が上下隆線によって画され斜格子目文が充填される。58・59は2類の胴部に縦位区画文を有する一群である。58の口縁部突起は第Ⅲ章第9図4の平出ⅢAに類似した構成になっている。いずれも新崎式の変容形態として捉えることができよう。65~68は指頭圧痕を有する一群であり、65は口縁部に4単位の棒状貼付文がみられ、そこから渦巻状モチーフが垂下する。この懸垂文脇に角押文が併走していることが特徴であろう。66は寺内隆夫氏によって提唱されている斜行沈線文土器(寺内1996)に該当する。4単位の円形突起が基点となって、横帯楕円区画文が3段形成され、区画内には斜行沈線や波状沈線が充填されている。以上の土器群はいわゆる大石タイプが認められないことが重要であり、熊久保遺跡2号住新段階として捉えられよう。

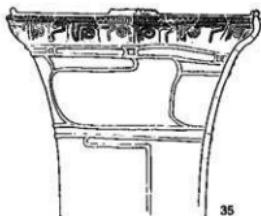
茅野市棚畠遺跡では、117・147・152・156・157号住から当該期資料が得られている(76~85)。117号住では、口縁部に方形区画が形成し、区画内に縦位の角押文が充填、胴部にはクランク文が垂下している76が認められる。152号住からは1類の81とともに2・3・5類が破片資料として得られている。156号住(82~85)からは、5類の82、さらに埋甕炉である85の平出ⅢAなどが認められる。147号住(77~80)では、桶形の器形を呈し横帯区画と角押文が多用される80、いわゆる「深沢タイプ」(寺内2000)とされる78、77は簡略化された平出ⅢAであり、156号住85よりも新しい。147号住は156号住と重複関係を有し、156号住が古く



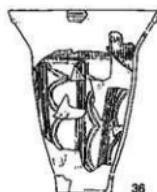
33



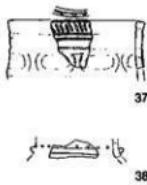
34



35



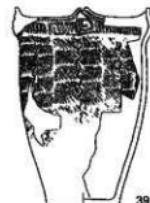
36



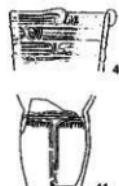
37



38



39

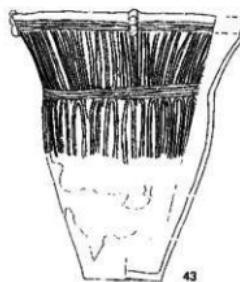


40

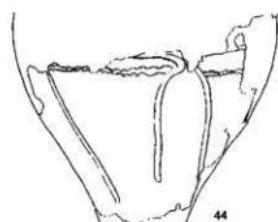


42

殿村6-39号住



43



44



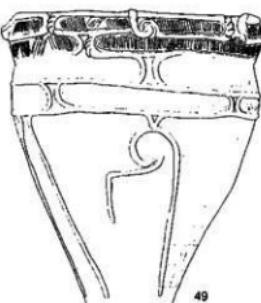
46



花上寺33号住



45



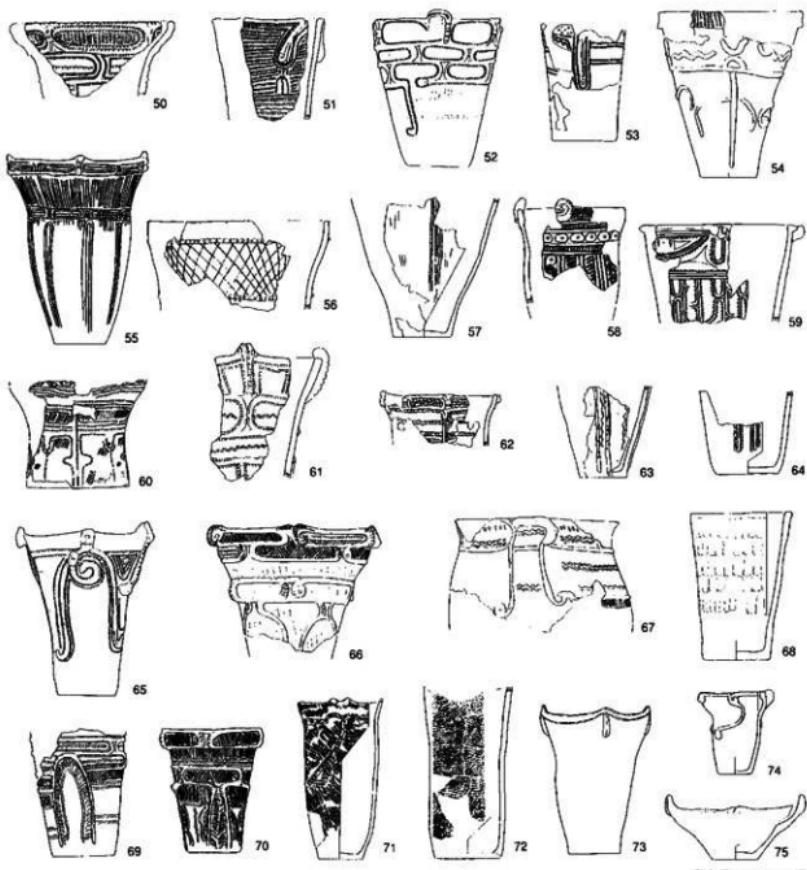
49



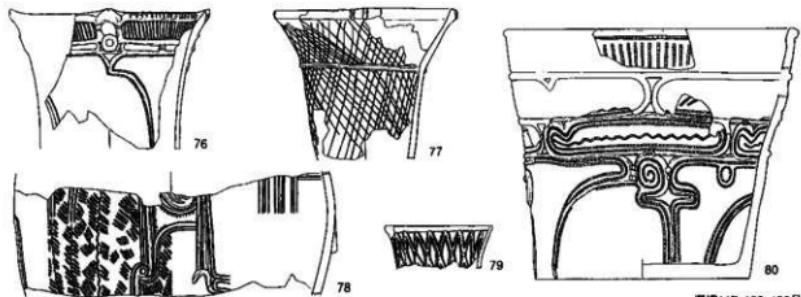
48

製久保113号住

図3 松本・諏訪盆地出土土器 (S=1/8)



横山14-113-117号住



横山117-152-156号住

図4 調査盆地出土土器 (S=1/8)

147号住が新しいことからも、以上の土器群の変遷を裏付けている。

#### ＜八ヶ岳山麓の様相＞（図5）

八ヶ岳山麓では茅野市判ノ木山西遺跡（86～93）、原村大石遺跡において当該期資料が充実している（伴1975、百瀬1981）。判ノ木山西遺跡では貉沢式から新道式期における居住跡がまとまって検出され、その中でも当該期の一括資料が得られている3・4号住をみていきたい。3号住86は平出ⅢA土器であり、87・88は角押文を多用する貉沢式である。とくに87・88は横帯構円区画が確立し、区画内に波状文や斜沈線を充填するなど、新段階に位置付けられよう。4号住では89～91の平出ⅢA、92・93の貉沢式が認められる。以上の土器群は、熊保2号住新段階に並行するものと考えられる。

その他、八ヶ岳山麓では大石遺跡16・22・23号住から1類と3類が良好な一括資料として出土している。1類が主体を占めるものの、それに伴い口縁部の方形区画文内に継文・斜行押引文が充填され、胴部に構円区画文を2段配した3類a種や阿玉台Ib式が共伴している。22号住では、胴部に継区画文を有する新道式がみられることも注目される。

#### ＜甲府盆地の様相＞（図5～7）

やや距離を置くが甲府盆地における当該期の良好な一括資料が報告されている（小林2001）。勝沼町宮之上遺跡6号住であり、五領ヶ台式直後の貉沢式最古段階から中段階と位置付けられている。ここでは、大石タイプの存在を指摘した上で、それと類縁的なサブタイプである「宮之上タイプ」が設定される。口縁部に波状文とY字状印刻文などを有する「宮之上タイプ」は胴部が無文であることも大きな特徴となっており、この点は松本盆地において指頭圧痕文が多い状況と大きく異なるようである。また、何よりも興味深いのは同時期と考えられるこれらの土器群の中で、「平出ⅢA土器」がみられないことであろう。一方、宮之上遺跡では、111～113にみられる横帯構円区画文と

クランク文を指標とする貉沢式が認められるが、これは熊保2号住9と類似している。つまり、八ヶ岳山麓を中心とする大石タイプと甲府盆地にみられる宮之上タイプ、さらに後続する狭義の貉沢式が組成の主体となることが本地域の特色であることが指摘できるのである。

### 3 2号住出土土器の型式学的位相

2号住出土土器の組成の特色として、前葉期の五領ヶ台Ⅱ式（梨久保式Ⅱ段階）に隆盛する縄文系土器の弧線文を有する一群が伴わないことであろう。多くの遺跡で両者が共伴関係を示し、これまで型式学的な検討による細分が多かった。例えば、岡谷市船塚遺跡11号住では縄文系土器とY字状印刻文、さらに角押文が施された土器群が共伴している（図8）。12は3類に縄文と角押文が施文され、また13は口縁部に角押文が継位に施文され、胴部にクランク文が垂下している。さらに14は地文の持たず波頂部に渦巻文とクランク文がモチーフとなったもので、これらの土器群は1～11に代表される縄文系土器より後出的である。このような土器群は、これまで五領ヶ台直後型式もしくは最終段階に含める考えが提示されてきた。代表的なものとして、三上徹也氏（1987）、小林謙一氏（1995）の編年案がある。

三上氏は梨久保式Ⅱ段階を構成する縄文・沈線文の2系統の土器群について、それぞれa～cの3段階に細分し変遷案を提示している。最終段階であるⅡc段階の特徴として、①口縁部に施文される半円弧文が沈線から沈線へ変化する、②胴部文様のY字状継位隆蒂文の上端が肥大化する、③口縁部文様帶にT字状文が密に入り、胴部文様帶にクランク状隆蒂文が入る、④技法的に若干の連続押引文が使われる、に大きくまとめている。この③・④の特徴については本段階のバタティーと捉え③のいわゆる「大石式」についてはⅡc段階に比定し梨久保式の範疇のなかに含めて捉えている。

一方、小林謙一氏は五領ヶ台最終段階をCSⅡb

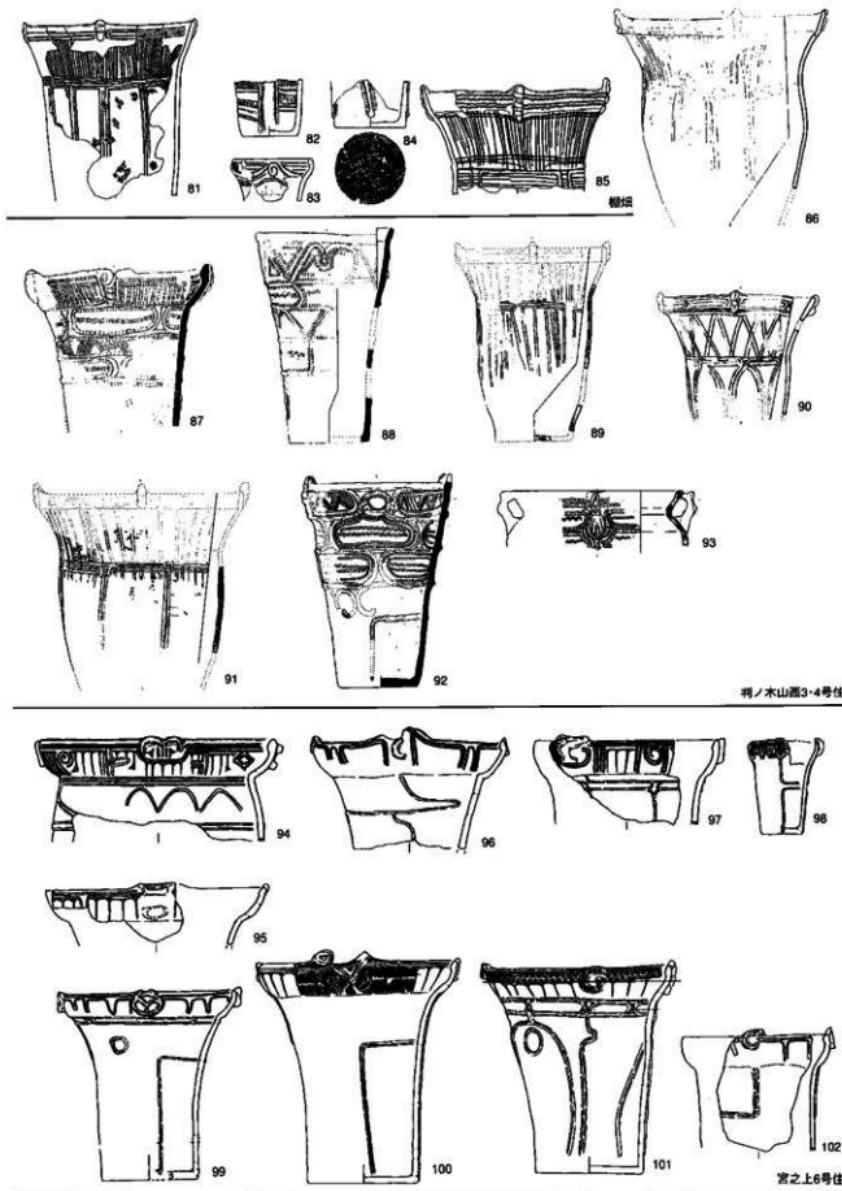


図5 諏訪盆地・ハケ岳山麓・甲府盆地出土土器 (S=1/8)

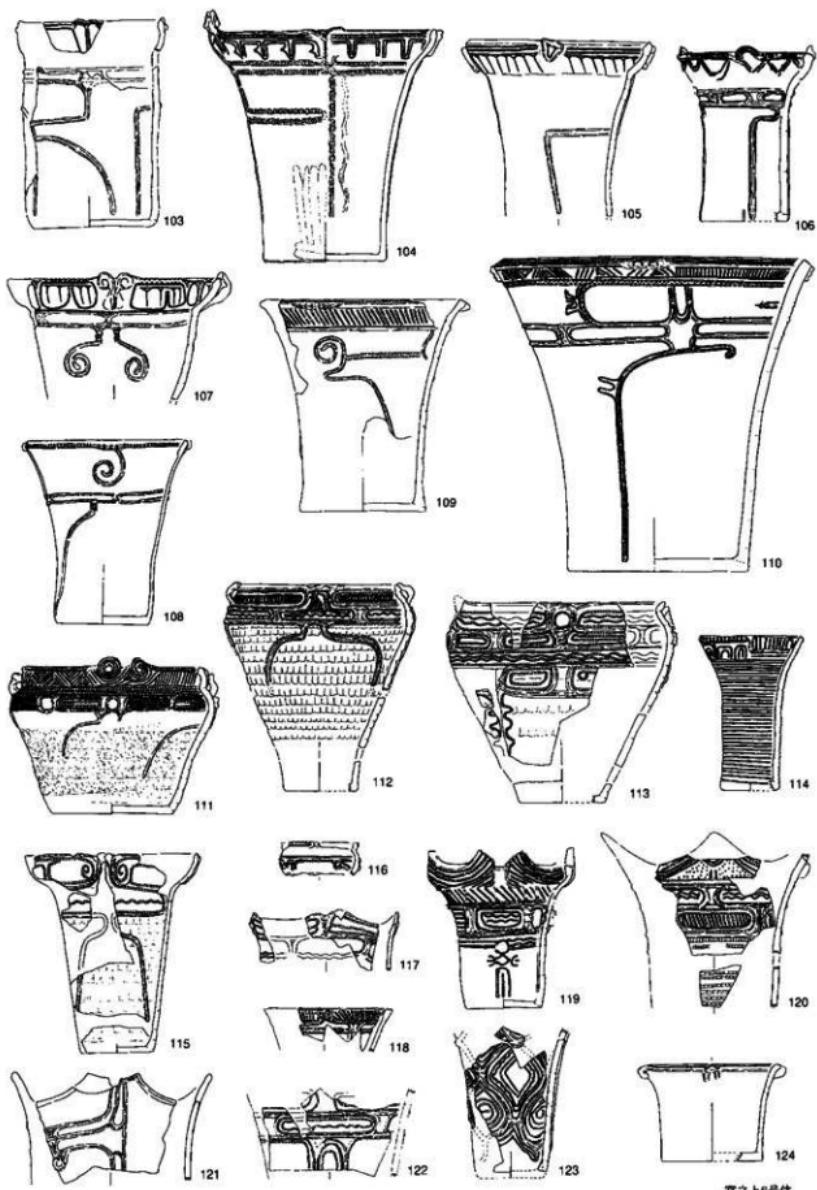
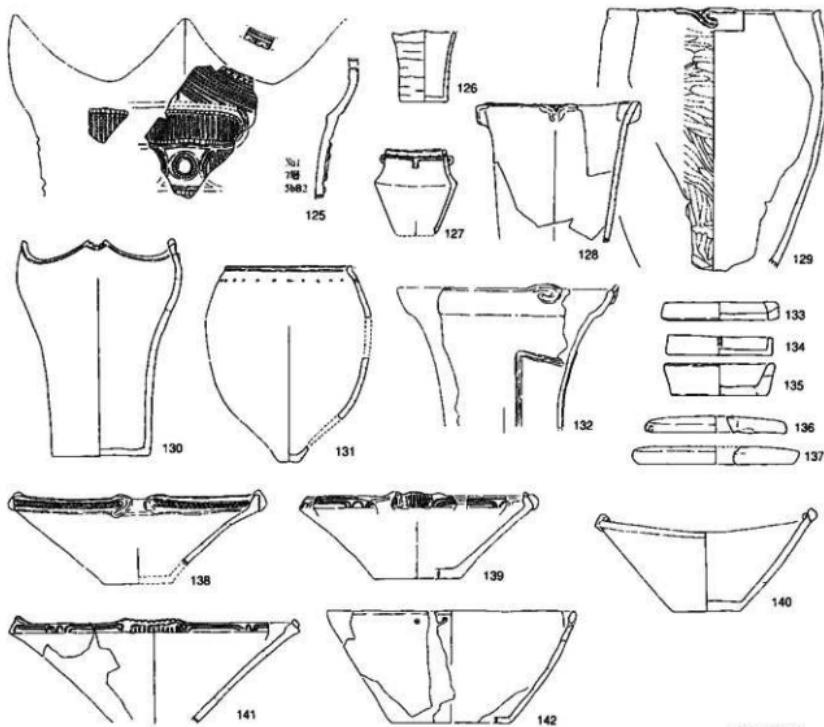


図6 甲府盆地出土土器 ( $S=1/8$ )



宮之上6号住

図7 甲府盆地出土土器 (S-1/8)

期、次期をCZ I a期として設定し、宮之上6号住資料を貉沢式最古段階(CZ I a期)から中段階(CZ I b期)に位置付け、五領ヶ台式から切り離していく。これは「連続刺突文

#### 技法」の成立(小林1995)

を指標として段階区分を行っていることが大きな理由と考えられる。

熊久保遺跡2号住出土土器については、3類b種を五領ヶ台式に含めるか貉沢式最古段階に含めるかは別として、弧線文

を有する縄文系土器とは切り離して独立した段階として設定が可能である。さらに貉沢式である3類a種と在地の系統である平出ⅢA、さらに北陸

表1 熊久保遺跡2号住段階出土土器遺構一覧表

	松本盆地	頭訪盆地	八ヶ岳山麓	甲府盆地
古段階	内田雨堀B号住	花上寺33号住	大石7・16・18・22号住	宮之上6号住
	駒村6号住	梨久保14号住		
	矢作5号住	棚塚152号住		
新段階	塩辛41号住	梨久保113・117号住	大石21・23号住	宮之上6号住
	一ツ家66号住	梨久保390p	判ノ木山西3・4号住	
	塩原103号住	棚塚156・157号住		
	堂の前11号住			
	平出J-24号住			

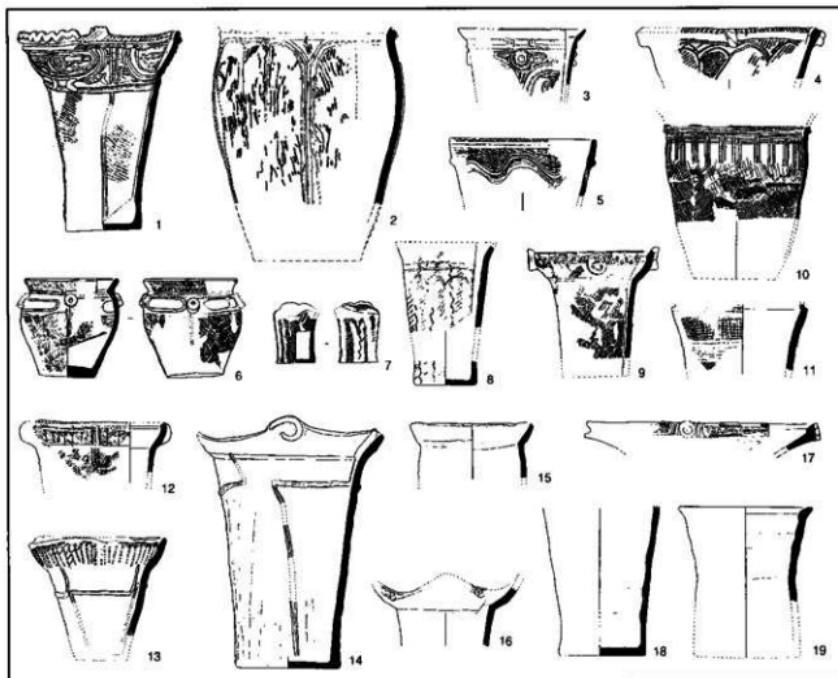


図8 岡谷市船靈社遺跡11号住出土土器 (S=1/8)

系の変容タイプの2類が共伴関係を示していることから、既成の編年案に基づけば猪沢式の古～中段階に位置付けられよう（表2）。ただし、これらの類型が猪沢式ではなく、独立した系統を有する土器群としての位置づけが必要であるが、型式として昇華できるまでには、さらに資料の増加を待たなければならない。その際に重視しなければならない点は、深鉢のみの器種から構成される平出ⅢAに浅鉢などの他の器種が存在するかであろう。各地域の資料を概観したように、平出ⅢAに伴う浅鉢は、角押文を施したものが圧倒的に多いのである。2号住では、口縁部に楕円状の隆線がめぐって、縄文が施文される浅鉢が1点出土している。本来この隆線間に波状文が施されるものが一般的であるが、本例はそれが省略化されてしまつ

ている。この浅鉢が在地の系統を有するものかは今後の課題としたい。

松本盆地における当該期の系統別組成として、1類と2類、さらに3類a種、4類が加わってくる特徴を有する。しかしながら、八ヶ岳山麓から甲府盆地においては3類a種が主体型式として安定的な組成となっていく状況が読み取れ、横帯楕円区画文の重複化と角押文の多様という共通要素が広域的な拡がりをみせるのである。本遺跡の特性として、2類の北陸系土器とその変容タイプの存在を挙げることができるが、この背景には西山山麓という地理的な条件も見逃すことはできない。北陸方面との繋がりは、糸魚川ルートとともに木曾谷を介した飛騨山脈を越えてのルートも想定され、今後は飛騨地方との関わりを検討する必要があ

表2 中期前葉編年案の対比表

本 稿							2号住				
	CM		CS				古段階		新段階		
小林(1995)	I	II	Ia	Ib	Ic	IIa	IIb	Ia	Ib	IIa	IIb
	梨久保I段階				梨久保II段階				猪沢		
三上(1987)											
今村(1985)	五領ヶ台I式			五領ヶ台II式			神谷原 大石		猪沢		
	Ia	Ib	IIa	IIb	IIc						

あろう。さらに、松本盆地は佐久地方との繋がりが強く、北関東経由での土器伝播のあり方が地域的特性の解明に重要な意味をもつと考えられる。

### おわりに

2号住出土土器は、松本盆地における中期前葉末から中葉前半に至る明瞭でなかった本段階の資料を新たに補充することになった。そして、型式

の転換期である当該期の複雑な様相を追認するものともなった。そのような意味では、熊久保遺跡における人・モノ・情報の交流が他地域にもれず広域的に大きく反映されたものといえよう。筆者の力量不足により、本論が当該期土器群の集合成側面に偏ってしまった点を反省し、今後も松本盆地における地域的特性を明らかにしていきたい。

### 引用・参考文献

- 今福利恵 1999 「山梨県内の五領ヶ台式土器」『山梨県考古学論集』IV
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」『東京大学考古学研究室紀要』4
- 数野雅彦 1984 「角押文土器の研究」『丘陵』10
- 加藤三千雄 1995 「北陸における中期前葉の土器群について—新保・新崎式土器—」『第8回縄文セミナー中期初頭の諸様相』
- 小林謙一 1995 「南関東地方の五領ヶ台式土器群」『第8回縄文セミナー中期初頭の諸様相』
- 2001 「勝沼町宮之上遺跡6号住居跡出土の中期前葉土器について—猪沢式土器成立期における地域的タイプとしての宮之上タイプの仮説—」『山梨県考古学協会誌』12
- 寺内隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』8
- 1987 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ—型式変遷における一視点—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- 1988 「祖原遺跡出土土器の検討—松本深志高校地歴会発掘資料の再実測を通して—」『平出遺跡考古博物館紀要』5
- 1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究—「後沖式土器」の設定は可能か?—」『長野県の考古学』(信長野県埋蔵文化財センター研究論集)I
- 2000 「1中期前葉の土器」『上信越自動車道埋蔵文化財報告書24 更埴条里遺跡・屋代遺跡群—縄文時代編—』
- 伴信夫 1975 「大石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告—茅野市・原村その1・富士見町その2—』
- 三上徹也 1987 「梨久保式土器再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- 百瀬長秀 1981 「判の木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告—茅野市・原村その3—』
- 山下勝年 1998 「知多半島における中期前半東海系土器—山田平遺跡出土土器の分類と編年を中心として—」『第5回東海考古フォーラム・静岡県考古学会シンポジウム97 縄文時代中期前半の東海系土器群 北屋敷式土器の成立と展開』

## 第2節 熊久保遺跡出土土器の光学顕微鏡による胎土分析

水沢 教子

## はじめに

土器の胎土は、文様や技法とともに土器を媒体として縄文社会を復元するための重要な属性の一つである。そこで、本章では熊久保遺跡出土土器の動きを客観的に裏付けるための一手段として行ってきた胎土分析結果を報告する。本来胎土分析によって土器の素地土に関する確かな情報を得るためにには、岩石や鉱物など胎土の中の粗粒部分の光学顕微鏡観察と、微細な粘土部分の元素分析とを組み合わせる必要がある。なぜなら、素地土獲得のための人間活動は複雑で、単に同じ場所で混和材ごと粘土を探集するだけでなく、粘土の移動や混和材の移動などあらゆる可能性が考えられ

るからである。そこで今回の報告は胎土分析のあくまでも第一段階としての光学顕微鏡による薄片観察であることを予めお断りして本論に入りたい。

## 1 分析の目的

熊久保遺跡第10次調査では2号住から、中期初頭から中葉にかけて多くの土器が出土したが、その中に系統を異にするものが見られた。報告書担当者の小口英一郎氏は、これらを器形、文様、文様描出・整形技法といった型式学的な基準によって1~5類に分類し、さらに胎土の肉眼観察からa・bに大別した(第Ⅲ章第1節参照)。これらの型式による類と胎土分類はある程度の相関関係をもつが、肉眼観察には自ずと限界がある。

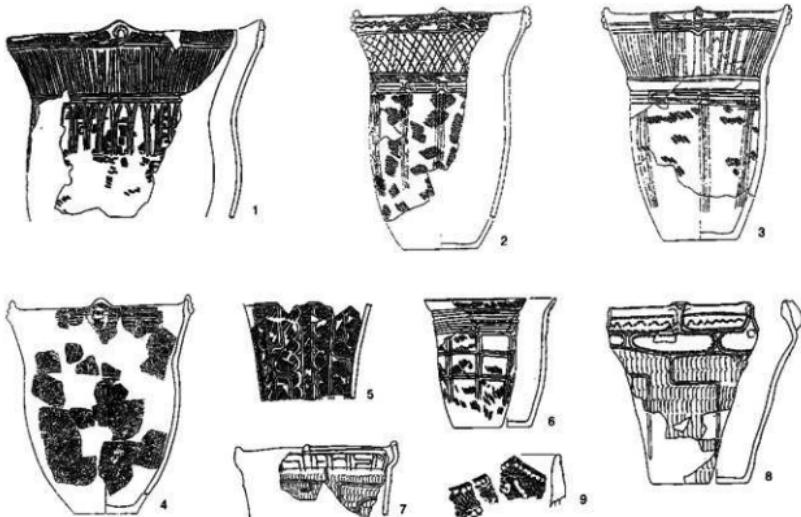


図1 胎土分析試料

表1 分析試料の属性

試料No	出土位置・注記	型式学的分類	肉眼胎土分類	部 位	備 考	光学顕微鏡分類
1	2住Na2	I群1類a種(平出ⅢA)	a	胴上半	平行沈線	1類
2	2住Na12	I群1類a種(平出ⅢA)	a	胴下半	繩文	1類
3	2住Na15	I群1類a種(平出ⅢA)	a	口縁部	波状文	1類
4	2住Na4	I群1類b種(平出ⅢA)	a	胴上半	斜格子目文	1類
5	2住ESPT	I群2類a種(北陸系)	a	胴上半	炉体土器・B字文	3類
6	2住SWI	I群2類a種(北陸系)	a	胴上半	バネル状文(B字文)	1類
7	2住SEI	I群3類b種(指頭圧痕)	b	口縁部	T字文	4類
8	2住覆土	I群3類a種(角押文・指頭圧痕)	b	胴上半	クランク文	2類
9	2住復土	I群5類(西日本系)	a	口縁部	円形刺突文	1類

そこで今回、小口氏の類・系統別に数点ずつ土器を選び(図1)・(表1)、胎土のより詳細な調査を行うこととした。

## 2 分析の方法

### (1) 光学顕微鏡観察

まず各土器を口縁に垂直方向に2~5mm程度の幅に切断し、全体をエボキシ樹脂に埋め込んで厚さ8mm程度のチップを作る。各土器の切断位置は図1にスクリーンショットで示した。このチップを研磨後にスライドグラスに貼り付ける。さらに二次切断・研磨し、厚さ0.02mm程度の薄片を作成した。充填や各種貼り付けに用いた樹脂は何れもベトロボキシ154である。なお薄片作成は岩本鉱産物商會に依頼し、各薄片には土器の内面・外面・口縁部方向・底部方向の情報を記載した。これらをオリンパス製の偏光顕微鏡BHS(長野県立歴史館所管)で観察した。観察方法は基本的にオルソスコープで無色鉱物の認定の際にコノスコープを用いた。また、鉱物種決定の根拠は、単ニコル観察では多色性・劈開の状況、ベッケ線を用いた屈折率の推定で、直交ニコルでは干涉色・双晶・累帯構造、消光角、伸長の正負とした。

## 3 光学顕微鏡による分析の結果

### (1) 全体の特徴

各試料の組成を把握するために薄片を鏡下に置き、メカニカルステージを用いて縦軸方向に0.7mm、

横軸方向に0.5mmずつ動かしながらポイントカウントを行った。この場合各薄片とともに鉱物が抜け落ちた部分を除いて合計250ポイントカウントした。次にもう一度資料を隅々まで観察し、カウントから外れた鉱物名の欄に+印を記入した。この作業によって資料全体の表面積に比して、移動幅が幾分大きいために生ずる遺漏を緩和できる。カウント結果を表2に示し、さらにこの一部をグラフ化して図2~図4を追加した。まず、岩石・鉱物類とマトリックスの量比をみると、おむね1:1だが、No.7とNo.9はマトリックスが4割未満と少ない。また、No.5は同定できた岩石が鉱物に比べてかなり少ない(図2)。次に岩石組成では、深成岩類主体のNo.1~4・6・9と火山岩類が卓越するNo.5・7・8に明確に2大別される。さらに後者は変成岩や深成岩の量によって異なる様相を示す(図3)。最後に鉱物の組成はかなりばらつくが、どちらかといえば岩石からみた組成に類似し、No.5や8が分離される(図4)。

### (2) 個別試料の状況

以下薄片ごとに特徴の説明を行う。ただし薄片の特徴記載は本来個別に行う必要があるが、今回は紙面の都合から類似した特徴のものをまとめて記載した。

#### No.1~4

**鉱物** 無色鉱物の分類は以下の特徴に基づいて行った。灰色の干涉色を示し、一軸性正号が認定できるものを石英とした。波動消光を示すものが

多い。小型でコノスコープ像が見えにくいものは「不明」に分類した。アルバイト双晶や累帯構造がみられ、しばしば内部に網雲母が見られる長石を斜長石とした。二軸性が認定され、表面が汚染されていて、しばしばバーサイト構造や微斜長石構造(図版1-2)がみられ、屈折率が接着剤であるペトロボキシ154(屈折率1.54)未満であるものをアルカリ長石とした。有色鉱物では、小型の黒雲母がマトリックス全体に散乱し、少数の白雲母も認められる。No.1は大型の角閃石を含む。

**変質鉱物** 変質した鉱物については、本来の形がわかるものは、既存の鉱物名に沿って記載し、変質が進んだものは「変質鉱物」としてひとくくりにした。この中に所謂粘土鉱物も含める。以下の試料も同様である。

**岩石** 大型の岩石の多くは花崗岩質岩である(図版1-1・4・5)。上記の鉱物単体とほぼ同じ特徴のアルカリ長石・斜長石と石英から成り、No.1はりん灰石を、No.3には黒雲母や白雲母を含むものがある。その他少数の石英片岩(図版1-3)、堆積岩類、チャートなどが認められる。

#### No.5

**鉱物** 火山ガラスが変質したと推測される小型の鉱物(図版2-9)が大量にかつまんべんなく含まれる点で際立つ特異である。また黒色不透明鉄物も他の薄片に比べてかなり多い。石英は非常に少ないが、顯著な波動消光を示すものがあり、著しい融食形を呈するものも目立つ。斜長石にはアルバイト双晶・累帯構造が明確であるものが多い。単斜輝石・斜方輝石・角閃石ともに少數みられる。

**岩石** 石英片岩やチャートなど、石英をモザイク状に含む岩片が目立つ。酸化して赤色化した火山岩とみられる岩片はあるが、明確な火山岩は含まない。

#### No.6

**鉱物** 無色鉱物の特色と認定基準はNo.1~4に同じである。ただし斜長石には明確なアルバイト双晶のものが目立つ。また変質した黒雲母が多い。

**岩石** 花崗岩が多く、微斜長石や白雲母(図版1-6)を含む。ややCaに富む斜長石を含む花崗岩片もある。微細な鉱物が少なく、粒子が比較的揃っている。

#### No.7

**鉱物** 真珠岩構造を示す流紋岩質ピッチストーンが小型~中型までかなり多い(図版2-10~12)。また、発泡した火山ガラスやガラス質の石基をもった火山岩のガラス部分が脱ハリ化したもののが目立つ。これらの小型のものを表2では便宜的に全て「火山ガラス」に含めている。黒雲母は小から中、比較的大きなものまでまんべんなく入り、湾曲したものも多い。岩石片は総じて少ない。

表2 カウント基礎データ

試料番号	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9
石英	12	16	25	10	2	11	19	0	7
斜長石	19	12	18	13	24	24	29	41	18
アルカリ長石	11	22	18	12	10	9	11	2	26
黒雲母	11	20	17	32	9	17	45	+ 38	
白雲母	5	2	4	+	0	3	0	0	15
角閃石	7	0	+	0	10	0	+	5	+
酸化角閃石	0	0	0	0	0	0	0	+	0
単斜輝石	0	0	0	0	2	0	1	7	0
斜方輝石	0	0	0	+	1	0	0	+	0
綠簾石	+	1	+	+	0	+	0	0	+
ジルコン	1	0	0	+	+	0	+	0	+
電気石	0	0	0	0	0	0	0	1	0
直閃石	0	0	0	0	0	0	+	0	0
黑色不透明 鉱物	0	+	+	+	4	+	+	2	1
火山岩類	安山岩	0	0	0	0	0	0	0	25
	火山ガラス類	0	1	1	+	0	1	31	4
	輝灰岩	2	0	0	1	0	0	0	1
	酸化火山 岩	0	0	0	0	2	0	0	0
	その他	+	0	0	0	0	0	0	24
変成岩類	花崗岩	22	16	26	40	0	26	1	0
	石英片岩	1	2	+	1	2	+	0	+
	その他	1	0	0	0	0	0	0	0
堆積岩類	+	0	1	3	1	0	4	+	0
チャート・石英多結晶	2	0	+	1	+	0	0	0	1
粘土鉱物・変質鉱物	3	3	0	4	45	1	4	2	2
褐色鉱物	7	8	2	2	4	6	14	6	0
不明	14	39	22	19	10	27	17	7	34
マトリックス	132	108	116	112	124	125	74	122	92
合計	250	250	250	250	250	250	250	250	250

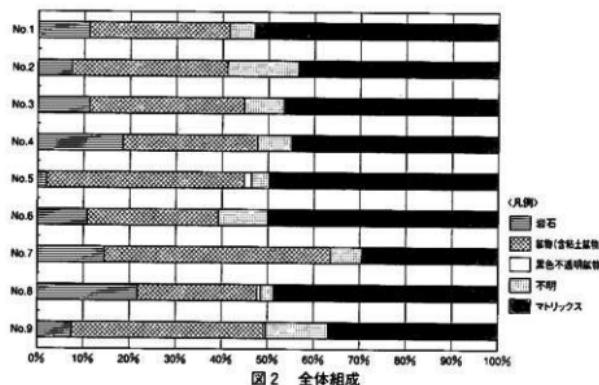


図 2 全体組成

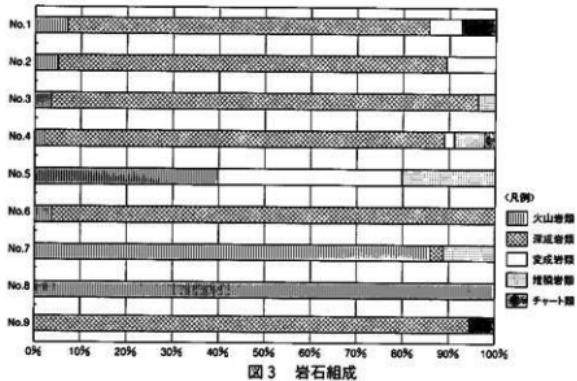


図 3 岩石組成

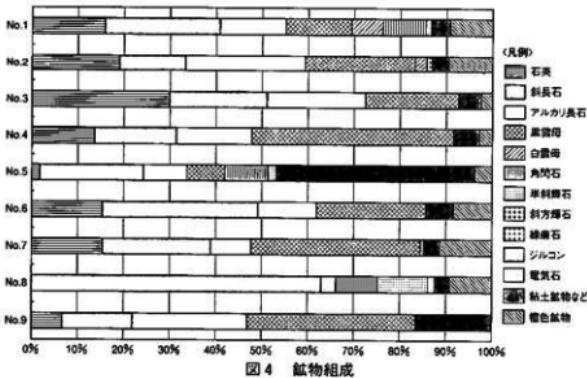


図 4 鉱物組成

## No. 8

鉱物 石英はコノスコーピ像で確認可能な大きさの中には無い。斜長石の殆どにアルバイト式双晶がみられ、火山岩起源の特徴である累帯構造のものも多数ある。アルカリ長石も少量含まれる。

岩石 石基と斑晶の区別の明確な岩片で斑晶鉱物が斜長石を主体とし、単斜輝石・斜方輝石などの組み合わせからなる岩片で石基の鉱物の形が棒状や角状のものを安山岩とし(図版2-8)、石基部分だけのものなどを火山岩とした。安山岩にはこの他に黒雲母、緑泥石、角閃石、酸化角閃石、などが含まれる。斑晶の斜方輝石には赤褐色の反応縁が見られるものがある。火山岩の中には全体が赤色に酸化されている所謂酸化火山岩も含めた。

## No. 9

鉱物 無色鉱物の種類と認定方法はNo.1～4に同じ。アルカリ長石にはセリーサイトが生じていたり表面が汚れているものが多い。黒雲母はかなり多く大

型のものがある。白雲母には細長いものその他、板状のものもある。

**岩石** 鉱物と同様の特色的斜長石やアルカリ長石からなる深成岩が多く、黒雲母を含むものもある。両雲母花崗岩の細粒な岩片が1点同定された(図版2-7)。

#### 4 胎土のグルーピング

前項での検討の結果、9点の土器の胎土には大きく深成岩の特徴を有するものと火山岩の特徴を有するものがあり、それらの性格から以下の4つのグループに分類できる。

1類: 斜長石、アルカリ長石、石英、黒雲母が主体で、やや少ない白雲母を含む。岩石片は花崗岩(質岩)が中心で、斜長石・アルカリ長石・石英からなるが黒雲母や白雲母が含まれるものもある。その他少量の石英片岩やチャートなどを含む。

No 1・2・3・4・6・9が相当する。

ただしこのうちNo 1・6は0.25mm未満の微細な鉱物が少ないため、マトリックスの比率が高くなっている(図2)。また黒雲母は全体に散っておらず、まとまっている。これに対しNo 2・No 3・No 4は全体にまんべんなく0.25mm未満の無色鉱物や黒雲母が散在している。また石英片岩が含まれる。さらにNo 9は白雲母を特に多く含み、黒雲母の比率もかなり高く、これらの起源と考えられる細粒の両雲母花崗岩が単独で含まれている。このように1類の中には若干傾向を異にする2か3のグループが存在する。

2類: 安山岩を中心とした火山岩を多く含み、斜長石も火山岩起源の特徴を示す。

No 8が相当する。

3類: 火山ガラスが変質したと推測される小型の鉱物が大量に含まれる。岩石片は少ない。

No 5が相当する。

4類: 流紋岩質のピッチストーンや火山ガラス、細かな黒雲母を多量に含む。

No 7が相当する。

#### 5 胎土分析から導かれる土器の動き

分析の結果、対象資料は4つの類に分類されたが、ここではこれらが縄文中期の人々のどのような行動と結びつけられるのか、まず遺跡周辺の地質を確認し、次に類型ごとに、各要素に起因する地質状況を見渡しながら土器型式との対比を行っていくことにする。

**熊久保遺跡の周辺の地質** 熊久保遺跡は鎮川の形成する第四紀の段丘堆積層上に立地する。松本・塩尻方面へと広がる鎮川、奈良井川、田川が形成する盆地の西側の最奥部に相当する。周辺の山地は針尾層(チャート・珪質粘板岩および粘土岩)・味噌川層(粘板岩および砂岩)など、美濃帯に属する古生代後期の各層からなる(片田・磯見1964)。とくに岩相・構造・年代などの対比からこの味噌川層一帯は味噌川コンプレックスとされ、遺跡の北側と対岸一帯のユニットBには、泥岩を中心とし、チャートと泥岩、珪質粘土岩・砂岩・玄武岩を伴うとされている。またその南側の櫻俣沢・中俣沢から高遠山にいたる地域はユニットCとされ、おもに砂岩・泥岩によって構成され、一部に少量の泥岩やチャート・礫岩をともなうとされる。このうち礫岩には直径5mm程度のチャート・花崗岩類・塩基性火山岩などの亜円礫と泥岩クラストを含み、様々な粒度の粒子によって構成されている(岩木・大塚2001)。ここでは便宜的に以上のような特色のある素地土で作られた土器胎土を有する土器を「在地」製作のものとして論を進める。

**花崗岩に起因する鉱物と岩石** 1類は花崗岩と花崗岩に由来する鉱物で特徴づけられ、堆積岩は殆ど入らない。先に述べたように遺跡周辺には花崗岩の礫が存在する可能性があるが、砂岩や泥岩が殆ど入らない薄片内の砂の組成は味噌川コンプレックスと合致するとは言い難い。<sup>(1)</sup> 従ってこれらは「在地」の素地土で作られたとは積極的にはいえない。そこで周辺の地質を概観すると、一番近いものは、遺跡西方の鉢盛山西麓を中心に広

がる奈川花崗岩である。これは、美濃帯堆積岩コンプレックスに貫入した白亜紀末のもので、境峰断層を挟んで幅広い分布を示し、約38km<sup>2</sup>の露外面積を示す岩帶である（原山・足立1995）。このうち遺跡に比較的近い、小鉢盛山以北に分布するのが、①中一細粒等粒状白雲母黒雲母花崗岩と②斑状黒雲母花崗岩、その南に分布するのが③角閃石黒雲母花崗岩—花崗閃綠岩である。このうち①の白雲母黒雲母花崗岩は、主成分鉱物：カリ長石>斜長石>石英>白雲母>黒雲母、副成分鉱物：イルメナイト・矽灰石・ジルコン・モナズ石・萤石とされる。また、②は斑状結晶：斜長石>石英>黒雲母で、基質構成鉱物：カリ長石>石英>斜長石>黒雲母、副成分鉱物としてイルメナイト・褐れん石・矽灰石・ジルコンが確認されている。このような花崗岩の造岩鉱物のモードと胎土中の鉱物の割合を比較すると、細部の違いがあるものの、試料No 1・2・3・4・6は②の組成に近く、かつ①の特徴である白雲母を含むことが解る。ただし1と3に含まれる角閃石や4の多量の黒雲母はこれとやや異なる。むしろ風化により容易にマサ化する性質のある③角閃石黒雲母花崗岩に対比される。さらに奈川花崗岩中の白雲母は二次的に生じたものが多く、No 1～4に含まれる少數で小型の白雲母はこれらに相当する可能性がある。（<sup>2</sup>）また、No 1～4が平出Ⅲ類A土器であり、在地の土器類型である可能性が高い点は、この土器が遺跡からそう遠くない地域の素地土で作られたことと矛盾しない。この点と先に述べた花崗岩の特徴が奈川花崗岩と大きくは違わない点から、ここではNo 1～4・6の素地土は約8～10km西方の鉢盛山付近に由来する可能性が高いと結論づけたい。

さて、白雲母を含む花崗岩は中南信地域では、この他では領家帯の中に多く産することが知られている。その北限は高遠を中心に分布する高遠花崗岩で熊保遺跡からは最短で24kmの地点にある。また駒ヶ根市東部の落合花崗岩や木曾駒ヶ岳の東麓に分布する太田切花崗岩、その他武節花崗岩な

どこれらよりもさらに遠隔地に分布するものもある。特に今回の試料のNo 9は、両雲母花崗岩やNo 1～4・6よりもかなり多く単独で存在する白雲母（図4）を含み、その形態からは奈川花崗岩というよりもどちらかというと大田切花崗岩により近い起源が推測される。<sup>(3)</sup>

**火山岩に起因する鉱物と岩石** 2～4類は明らかに火山岩に由来する鉱物や岩石を主体的に含む。

中でも安山岩を多く含む2類は安山岩地帯に由来すると考えられる。斑晶鉱物の組み合わせから、輝石安山岩と角閃石安山岩が推測され、特に後者は玄武角閃石を有する。遺跡周辺では頸川対岸約1km尾根を覆って露出する安山岩に斜長石・紫蘇輝石・鉄鉱および少量の普通輝石が確認されている（片田・磯見1964）。また、遺跡の東方約12kmの善知鳥岬以東には先第四系の塩嶺累層とその相当層が広がり、斜長石・紫蘇輝石・普通輝石および鉄鉱を斑晶にもつ安山岩が産する。また乗鞍岳にも同輝石安山岩や角閃石輝石安山岩が産する。本類の胎土は薄片内の火山岩の量からは、少なくとも先に述べた「在地」胎土とは異なるものであるが、このような火山岩を含む周辺の状況からは、胎土の由来する地域を限定することは現時点では難しい。

3類は火山岩自体は少ないが、火山ガラスが変質した鉱物を多量に含む。この鉱物は粘土全体に均質に含まれていて、高密度を占めるため、粘土に元々混在していた可能性があり、他の類と比べるとかなり異質である。ただしこのような粘土が遺跡周辺に存在するか否かは現状では判断できないため、本試料が「在地」で作成されたものかどうかは保留せざるをえない。

4類は新鮮な火山ガラス類を多く含むことから、火山灰と粘土を混ぜたか、粘土層に降下した火山灰ごと粘土を採取したものと考えられる。おそらく多数含まれている黒雲母もこの火山灰に含まれていたのではないだろうか。問題は「在地」の中に部分的にこのような火山灰を挟む地層があるの

か、全く別の地域に由来するのかであるが、この地域には乗鞍岳や御岳、焼岳周辺からの火山灰が厚く堆積しているといわれる。特にこのような黒雲母を含む火山灰のうち梨の木平ローム層に相当する可能性もあり<sup>(4)</sup>、今後これらの火山灰との対比を進めた上で結論を出す必要があろう。

**土器型式と胎土の関係** 以上今回分類した縄文中期初頭から中葉の土器の類別と胎土の類型との関係をみると、遺跡にはほど近い奈川花崗岩に由来すると考えられる胎土の1類にNo 1~4の平出皿類A土器が属し、広義の同じグループにNo 6の北陸系土器とNo 9の西日本系土器が加わる。ただし、少なくともNo 9は奈川花崗岩から外れる可能性があり、今後太田切花崗岩を含む西日本へ繋がる領家帯の花崗岩全体との比較や粘土部分の化学分析結果との対比を行いながらその起源を追求すべきであろう。またNo 6の北陸系土器が奈川花崗岩のグループに含まれる点は注目すべきであり、模倣の可能性をにらみつつ、類例を増やしていく必要があろう。しかしもう一方の北陸系土器であるNo 5はこれらとは全く違う変質した火山ガラスを多量に含む3類に分類された。また指頭圧痕を有する広義の貉沢式のNo 7と指頭圧痕を残し角押文を有する同No 8は、火山岩に由来する要素がみえる点では共通するが、前者は火山灰を起源とする4類、後者は安山岩そのものを起源とする2類に分かれた。このように細別した4つの類は由来を明確に異にしており、同一遺構に捨てられた土器の胎土の違いとしては異例の状況である。1類の素地土の採取地域は遺跡の10km圏に求められる可能性を先に述べたが、この他も含めて既存の文献で確認できる範囲での「在地」胎土そのものは無い。想像を逞しくすれば、2~4類は類毎にそれぞれ異なる地域から搬入されたということになるが、その確定のためには、降灰した火山灰や周辺の小露頭も含めて在地の素地土になる可能性のあるものをさらに詳しく検討する必要があろう。また本遺跡の他の時期の土器や周辺遺跡の例との比較も

含めて「在地」胎土の傾向を調査する必要があることは言うまでもない。

### おわりに

胎土分析の多くは、分析した土器の胎土を既存の地質図と比較して、土器の製作地を推測するというものが多いため。このような方法では大まかな傾向はつかめるとしても、より細かな土器の動きを論ずることは難しい。今回の分析結果でもそうであったように、特に本県のように東西の地質の交差点にあたる地域では、より精密な解釈の根拠が求められる。そこで長野県立歴史館では平成13年度から全県におよぶ通時的な土器の胎土情報を収集している。仮に各地の主体となる土器の胎土が各地の在地胎土とすれば、それは在地の素地土を示唆することになり、地質学的な地域区分をさらに補強することになる。このような各地の在地胎土が通時に明らかになれば、今後もし未知の一点の土器を検鏡しただけでも今よりもより高い蓋然性をもってそれが在地のものかそうでないかを判断することができるようになるであろう。そのためにも全県における、同一の方法で作成された薄片とデータの収集が欠かせない。

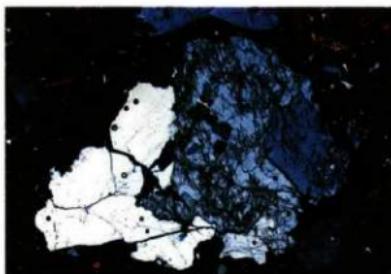
今回の熊久保遺跡出土土器の光学顕微鏡観察の結果は、先に述べたような土器型式と胎土の部分的な相関関係という点で注目されるに止まらず、中信地域の情報が初めて本館にもたらされたという点でも記念すべきものとなった。そこでおわりにあたり、分析の機会を与えてくださった樋口昇一・小口英一郎・上條恵子の諸氏をはじめとする朝日村教育委員会、熊久保遺跡調査団の皆さんに心からの感謝を申し上げたい。なお、岩石鉱物の同定を中心に宮島宏・山岸猪久馬の両先生に、地質学的な解釈を中心に大塚勉・原山智・山口佳昭・由井邦三の諸先生に多大なご教示をいただいた。また以下の方には様々なご援助をいただいている。白沢勝彦・寺内隆夫・宮脇正実・長野県立歴史館考古資料課一同 (2002. 10. 18 脱稿)

註

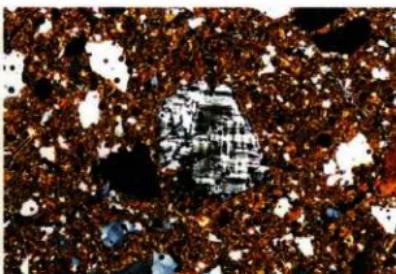
- (1) 大塚勉氏のご教示による。
- (2) 原山智氏のご教示による。
- (3) 山口佳昭氏のご教示による。
- (4) 原山智氏のご教示による。

引用・参考文献

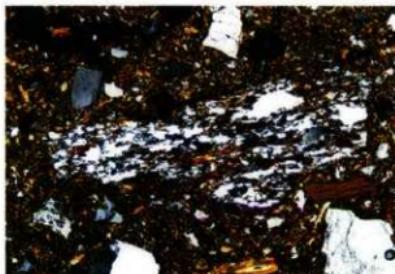
- 岩木雅史・大塚勉 2001 「美濃東部－長野県朝日村・木祖村地域における味噌川コンプレックスの地質と放散虫化石」大阪微化石研究会会誌、特別号、第12号
- 大塚勉・永吉哲也・酒井順 2002 「松本盆地西方の山間生活圏における梓川断層帯と崩壊」『信州大学環境科学論集』第24号
- 小口英一郎 2003 「第四章第1節 縄文中期土器の分類ー」本書
- 片田正人・磯見博 1964 『地域地質研究報告5万分の1地質図幅 塩尻』 地質調査所
- 中野俊・足立守・大塚勉ほか 「II.地質概説」「地域地質研究報告5万分の1地質図幅 衆鞍岳地域の地質」地質調査所
- 原山智・足立守 1995 「IV.貫入岩類」 同上 日本の地質「中部地方I」編集委員会編  
1988 「日本の地質4 中部地方I」
- 賛田 明ほか 2002 「川合遺跡」 木曾広域連合ほか
- 水沢教子 1992 「縄文社会復元の手続きとしての胎土分析」『信濃』44-4 信濃史学会  
1994 「塙田遺跡出土土器の胎土について」『塙田遺跡』御代田町教育委員会



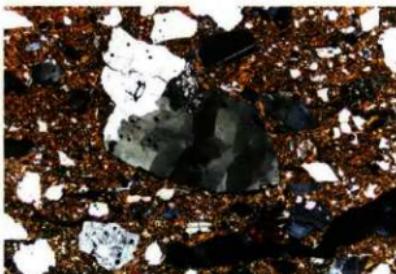
1. 1類 No.1 (平出Ⅲ類A土器)  
花崗岩 十ニコル



2. 1類 No.4 (平出Ⅲ類A土器)  
微斜長石 十ニコル



3. 1類 No.3 (平出Ⅲ類A土器)  
石英片岩 十ニコル



4. 1類 No.3 (平出Ⅲ類A土器)  
花崗岩 十ニコル



5. 1類 No.4 (平出Ⅲ類A土器)  
変質岩片を含む深成岩 十ニコル



6. 1類 No.6 (北陸系土器)  
花崗岩 十ニコル